

市川市国府台遺跡第13地点(4)

—独立行政法人国立国際医療研究センター—
国府台病院埋蔵文化財調査報告書2—

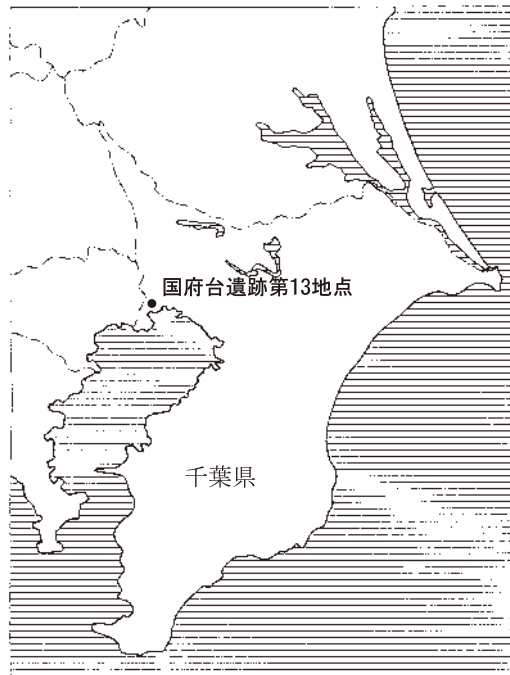
平成25年3月

独立行政法人 国立国際医療研究センター国府台病院

公益財団法人 千葉県教育振興財団

こうのだい
市川市国府台遺跡第13地点(4)

—独立行政法人国立国際医療研究センター—
国府台病院埋蔵文化財調査報告書2—



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、千葉県教育振興財団調査報告第702集として、国立国際医療研究センターによる国府台病院建て替えに伴って実施した市川市国府台遺跡第13地点（4）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

国府台遺跡は下総国府関連の遺跡としてこれまでに幾度も調査が実施され、多くの調査成果があがっています。今回の調査でも奈良・平安時代の集落跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られました。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成25年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 渡 邊 清 秋

凡 例

- 1 本書は、独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院改築事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県市川市国府台1丁目7番地の1の一部に所在する国府台遺跡第13地点(4)(遺跡コード203-003(4))である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団(平成24年3月31日まで財団法人千葉県教育振興財団)が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は、第1章第1節に記載した。
- 5 本書の執筆は、主任上席文化財主事 今泉 潔が担当し、編集した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、文化庁文化財部記念物課、千葉県教育庁教育振興部文化財課、市川市教育委員会生涯学習部生涯学習振興課、独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院、荒井健治、加藤貴之、郷堀英司、武井紀子、鶴間正昭、平川 南ほか多くの機関、多くの方々から御指導、御協力を得た(敬称略。以下も敬称は省略。個人名は50音順)。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第4図 国土地理院発行 25,000分の1地形図「松戸」N I -54-25- 2-1(東京2号-1)・「船橋」N I -54-25- 2- 2(東京2号-2)を合成して、原寸のまま使用した。
 - 第5図 市川市発行白図 2,500分の1地形図「8」を原寸のまま使用した。
 - 第54図 地図資料編纂会編集 柏書房株式会社発行1989『明治前期 関東平野地誌図集成』の「126 松戸」・「127 船橋」を20,000分の1に拡大して使用した。
- 8 調査地周辺の航空写真は、1947年在日極東米軍撮影写真のデジタルデータ(空中写真整理番号UM390、コース番号A、写真番号17)を約5,000分の1の縮尺に調整して使用した。
- 9 本書で使用した座標はすべて世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北を示す。主要な地点の日本測地系への変換値については、第1章第2節に掲載した。
- 10 遺物類の色調等の表記に当たっては、第一合成株式会社製「土色計SCR-1」を使用して計測し、適宜、小山忠・竹原秀雄 1999『新版標準土色帖』(財)日本色彩研究所を参考にした。なお機器計測では直視による色調に比べて2段階ほど暗くなる傾向があるが、とくにそれに関して補正等はしていない。
- 11 挿図等に使用した用例は以下のとおりである。

砂目のトーン 遺構：焼土 遺物：灰釉陶器

斜線のトーン 遺物：擦痕の痕跡範囲

遺物出土状況図で使用した記号

・：土器 ▲：石製品 ○：土製品 □：瓦類 ■：金属製品

目 次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の方法と基本層序	3
1. 調査の方法	3
2. 基本層序	6
第3節 遺跡の位置と歴史的環境	7
1. 遺跡の位置	7
2. 歴史的環境	9
3. 国府台遺跡の調査経過	11
第2章 遺 構	17
第1節 概要	17
第2節 A調査区	17
1. 竪穴住居	17
2. 陥穴	33
3. 土坑	35
4. 第5トレンチ	36
第3節 B調査区	37
1. 竪穴住居	37
第4節 C調査区	41
1. 竪穴住居	43
第5節 D調査区	44
1. 竪穴住居	44
2. 土坑	58
第3章 遺 物	61
第1節 土器類	61
1. 奈良・平安時代	61
2. 縄文時代	81
3. 墨書土器	82
第2節 石製品	85
1. 彫刻刀形石器	85
2. 紡輪	85
3. 砥石	87
4. 軽石	87
第3節 土製品	87

1. 土錘	87
2. 舌状土製品	87
3. 土製支脚	88
第4節 瓦類	89
1. 丸瓦	89
2. 平瓦	89
第5節 金属製品	91
1. 刀子	91
2. 鎌	93
3. 鉄鏝	93
4. 棒状鉄製品	93
5. その他の金属製品	93
6. 鉄滓	93
第6節 自然遺物	94
1. 分析方法	94
2. 貝種組成	94
3. 計測値	94
4. 小結	95
第4章 結語	98
第1節 遺構の変遷	98
第2節 国府集落としての国府台遺跡	100
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1図 遺構位置図	1	第9図 S I 003	22
第2図 確認トレンチ	4	第10図 S I 004	23
第3図 下層グリッドの位置と下層の基本層序	6	第11図 S I 005・S I 006	25
第4図 調査地と周辺の遺跡	8	第12図 S I 007	27
第5図 国府台遺跡第13地点内の調査地点と周辺のおもな調査地	12	第13図 S I 008	29
第6図 国府台遺跡第13地点 - 1・3・4の成果図	13	第14図 S I 009・S I 010	30
第7図 S I 001・S I 013	18	第15図 S I 011・S I 012	32
第8図 S I 002	20	第16図 陥穴 (S K005・S K009・S K002)	34
		第17図 土坑 (S K001・S H001・S K006・S K008・S K004・S K003・S K007)	35
		第18図 S I 014	38

第19図	S I 015	40	第37図	S I 015・021出土土器	69
第20図	S I 016・S I 017	42	第38図	S I 016～019・024・025出土土器	71
第21図	S I 018・S I 019・S I 020	43	第39図	S I 022 (1) 出土土器	73
第22図	S I 021	45	第40図	S I 022 (2) 出土土器	75
第23図	S I 022 (1)	46	第41図	S I 022 (3) 出土土器	76
第24図	S I 022 (2)	48	第42図	S I 023 (1) 出土土器	77
第25図	S I 023 (1)	49	第43図	S I 023 (2)・026・027・030出土土器	80
第26図	S I 023 (2)	50	第44図	S K007・013, 第1トレンチ出土土器, 縄文土器	81
第27図	S I 024	51	第45図	墨書土器 (1)	83
第28図	S I 025	53	第46図	墨書土器 (2)	84
第29図	S I 026	55	第47図	石製品	86
第30図	S I 027	56	第48図	土製品	88
第31図	S I 028・S I 029	57	第49図	瓦類	90
第32図	S I 030	58	第50図	金属製品	93
第33図	土坑 (S K011・S K010・S K012・ S K013)	59	第51図	貝種組成	96
第34図	S I 001～003・006出土土器	62	第52図	ハマグリ殻長計測値分布	96
第35図	S I 004・007 (1) 出土土器	64	第53図	ハマグリ推定殻長計測値分布	96
第36図	S I 007 (2)・008・009・011・014出土 土器	66	第54図	調査地と周辺の下総国府関連遺跡	100

表 目 次

第1表	基点とおもな地点の日本測地系と世界測地系の座標値と経緯度	3	第5表	鉄滓一覧表	93
第2表	下総国府における土器編年の時期区分	15	第6表	貝類種名一覧表	94
第3表	瓦類出土集計表	91	第7表	貝類別集計表	95
第4表	刀子計測表	91	第8表	貝類計測値	96
			第9表	貝類計測値分布	96
			第10表	ハマグリ推定殻長計測値分布	96

別 表 目 次

別表1	出土土器 (奈良・平安時代) 観察表	別表2	墨書土器観察表
-----	--------------------	-----	---------

本文写真目次

写真1	建築廃材の集積	5	写真3	B調査区調査風景 (西から)	60
写真2	電子平板による実測風景 (A調査区)	5			

図版目次

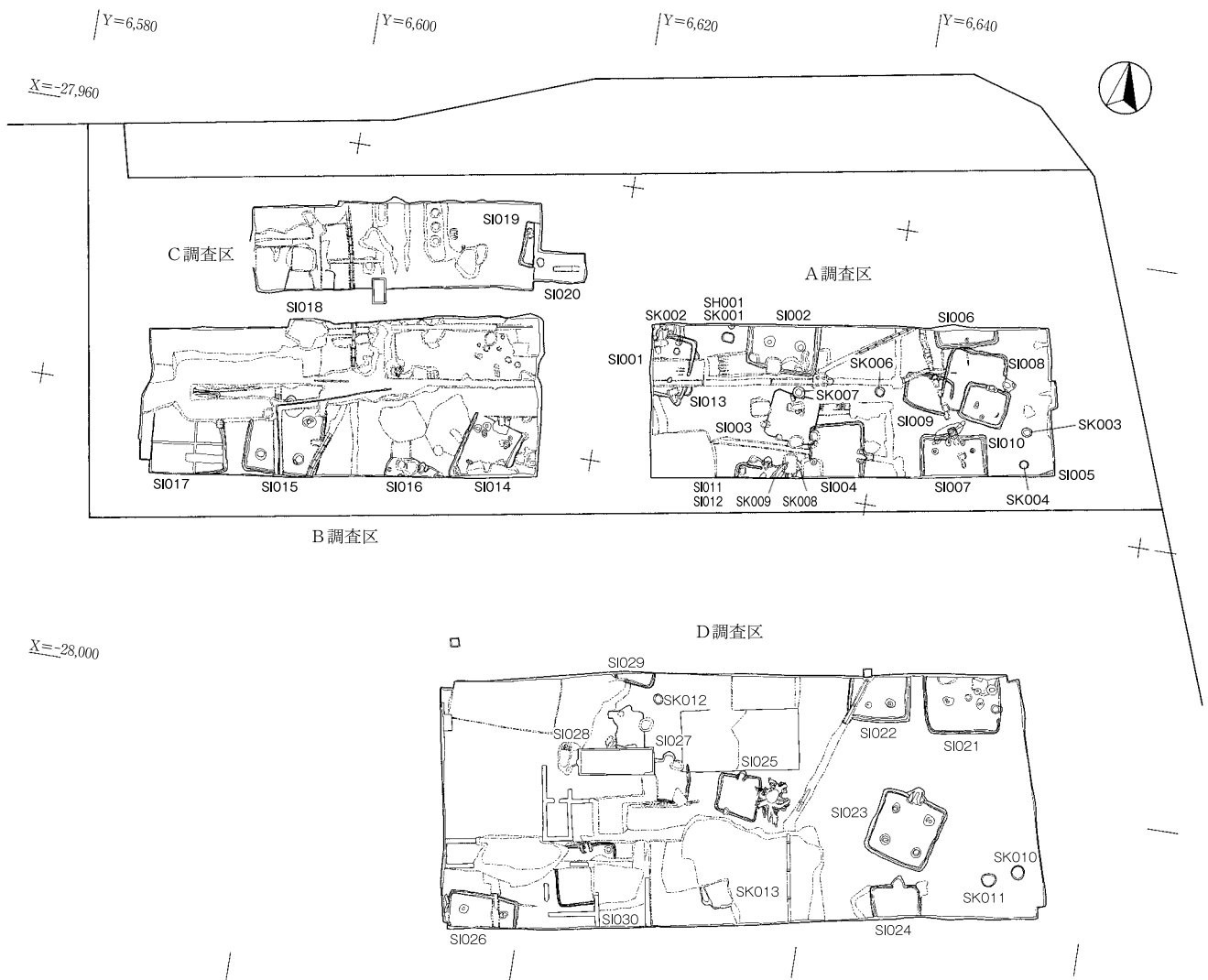
図版 1	調査地周辺の航空写真（1947年在日極東米軍撮影）	2	SI022全景（西から）
図版 2	1 北半部調査前近景（西南から）	3	SI023全景（南西から）
	2 A調査区確認調査近景（西から）	4	SI025全景（南西から）
	3 D調査区調査前近景（北東から）	図版 9	1 SI024全景（東から）
図版 3	1 SI001全景（北から）	2	SI029全景（南西から）
	2 SI002全景（東から）	3	SI026全景（東から）
	3 SI003全景（西から）	4	SI027全景（南から）
図版 4	1 SI006全景（南東から）	5	SI028全景（西から）
	2 SI008・SI010全景（南から）	6	SI030全景（東から）
	3 SI004全景（北から）	図版10	1 SK013全景（北から）
	4 SI004カマド全景（西から）	2	SK013焼土堆積状況（北から）
	5 SI005全景（北西から）	3	SK001全景（北から）
図版 5	1 SI009全景（南から）	4	SK003全景（西から）
	2 SI010・SI008全景（南から）	5	SK006全景（南西から）
	3 SI007全景（東から）	6	SK007全景（南から）
	4 SI007カマド全景（南から）	7	SK010全景（北から）
	5 SI007遺物出土状況（北西から）	8	SK012全景（北西から）
図版 6	1 SI014全景（東から）	9	SK002全景（南から）
	2 SI015全景（東から）	10	SK005全景（南西から）
	3 SI011・SI012全景（西から）	11	SK009全景（北東から）
	4 SI011カマド全景（南から）	図版11	奈良・平安時代の土器（1）
	5 SI011遺物出土状況（北西から）	図版12	奈良・平安時代の土器（2）
図版 7	1 SI016全景（北西から）	図版13	奈良・平安時代の土器（3）
	2 SI016遺物出土状況（南東から）	図版14	奈良・平安時代の土器（4）
	3 SI017全景（西から）	図版15	奈良・平安時代の土器（5），墨書土器，線刻土器
	4 SI018全景（南東から）	図版16	石製品・土製品
	5 SI019・SI020全景（西から）	図版17	瓦類
図版 8	1 SI021全景（南から）	図版18	金属製品

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院（以下、「国府台病院」と略す。）は、一般病床218床、精神病床が135床ある、総合病院として地域医療や救急医療を担う重要な病院である。災害時における災害時協力病院としての役割も担い、千葉県西部をしめる東葛地域の拠点的な病院の一つである。また千葉県民の27.5%（平成24年4月1日現在）が住む、6市にまたがる東葛南部二次医療圏に属し、包括的な保健医療サービスを提供していくために広域な患者の診療・治療に当たっている。

昭和62（1987）年に、前年に設立された国立精神・神経センターに統合され、国立精神・神経センター国府台病院となって、国立精神・神経センター病院（旧武蔵病院）などともに、精神・神経疾患等に関する高度かつ専門的な医療及び精神保健の向上に関して、調査・研究及び技術の開発並びにこれらの業務に密接に関連する医療の提供、技術者の研修等を行うことを目的として新たに発足した。平成20（2008）年



第1図 遺構位置図

1 : 500

には国立国際医療研究センターへ組織移管され、平成22（2010）年4月には国立国際医療研究センター国府台病院に改称され、地域に開かれた総合的機能をもつ病院として、高度総合医療の推進を図るとともに、感染症・免疫疾患並びに糖尿病・代謝性疾患に関する研究・診療を推進し、これらの疾患や医療分野における国際協力に関し、調査研究及び人材の育成を総合的に行う高度専門医療研究センターの一翼を担うことになった。しかし施設のほとんどが昭和30年代後半～40年代前半に建設され、国が施策の方針を変更したことなどの影響により施設全体が老朽化したままで（佐々木 2011）、低層建物ということもあって狭隘も著しく、政策的な医療・研究・研修を行っていくための医療環境の再整備が急務となっていた。

そこで国府台病院は施設の整備計画に基づいて、千葉県教育委員会へ事業地内に所在する埋蔵文化財の有無及びその取扱いについて照会した。これに対し千葉県教育委員会は、事業地の全域が周知の埋蔵文化財包蔵地である国府台遺跡第13地点にあたる旨を回答した。これを受けてその後の取扱いについて関係機関で慎重な協議を重ねてきた。その結果、事業計画の変更が不可能な部分については、記録保存の措置を講ずることとなり、調査を財団法人千葉県教育振興財団（平成24年4月1日より公益財団法人千葉県教育振興財団）が実施することとなった。

調査地が国府台病院敷地内の駐車場にあたることから、事業者側でアスファルト舗装と路盤碎石の撤去をした後の9月12日から現地調査を開始した。調査は工事区が2地点（Ⅰ期工事区・Ⅱ期工事区）にわかれている都合上、Ⅰ期工事区から調査に着手した。Ⅱ期工事区の調査着手は、事業者による植栽・アスファルト舗装・路盤碎石の撤去工事等など、環境整備の遅れから調査期間の移行に空隙が生じたために、その間を利用して出土遺物の水洗・注記の一部と基礎整理を実施し、年明けの1月5日から現地調査を再開することになった。

なお11月16日には、東京電力福島第一原発事故に係る放射能問題に関連して、調査地における大気中の放射線量を把握するため、簡易型空間放射線量測定器で地表面付近の線量を測定した。測定結果にとくに異常がなかったためにそのまま調査を継続した。

本書に関わる発掘調査から報告書刊行に至るまでの調査組織および担当者は以下のとおりである。

(発掘調査)

平成23年度

期 間 平成23年9月1日～平成24年2月14日

組 織 調査研究部長 及川淳一，西部調査事務所長 橋本勝雄

担当職員 主席研究員 今泉 潔

内 容 上層確認調査（998m²／対象面積 2,598m²）

下層確認調査（44m²／対象面積 2,598m²）

上層本調査 1,717m²

下層本調査 0 m²

(整理作業)

平成24年度

期 間 平成24年4月1日～平成24年11月30日

組 織 調査研究部長 関口達彦，整理課長 高田 博

担当職員 主任上席文化財主事 今泉 潔

第2節 調査の方法と基本層序

1. 調査の方法（第1～3図，図版1・2，第1表，写真1・2）

国府台遺跡第13地点では，当財団はこれまで今回の調査も含めて5次の調査を実施してきた。第1次調査から国府台病院の敷地をすべて網羅するように，国土方眼座標（国家標準直角座標第Ⅸ系）に基づいてグリッドを設定してきたが，第2次調査以降は世界測地系に準拠した方眼座標を改めて設定している⁽¹⁾。その基点はX = -27,940.000，Y = 6,420.000になり，そこから東に向かって20mごとにアルファベットでA，B，C，南へは算用数字で1，2，3とし，これを組み合わせて大グリッド名としている。今回の調査地はI～L-1～4に該当することになる。

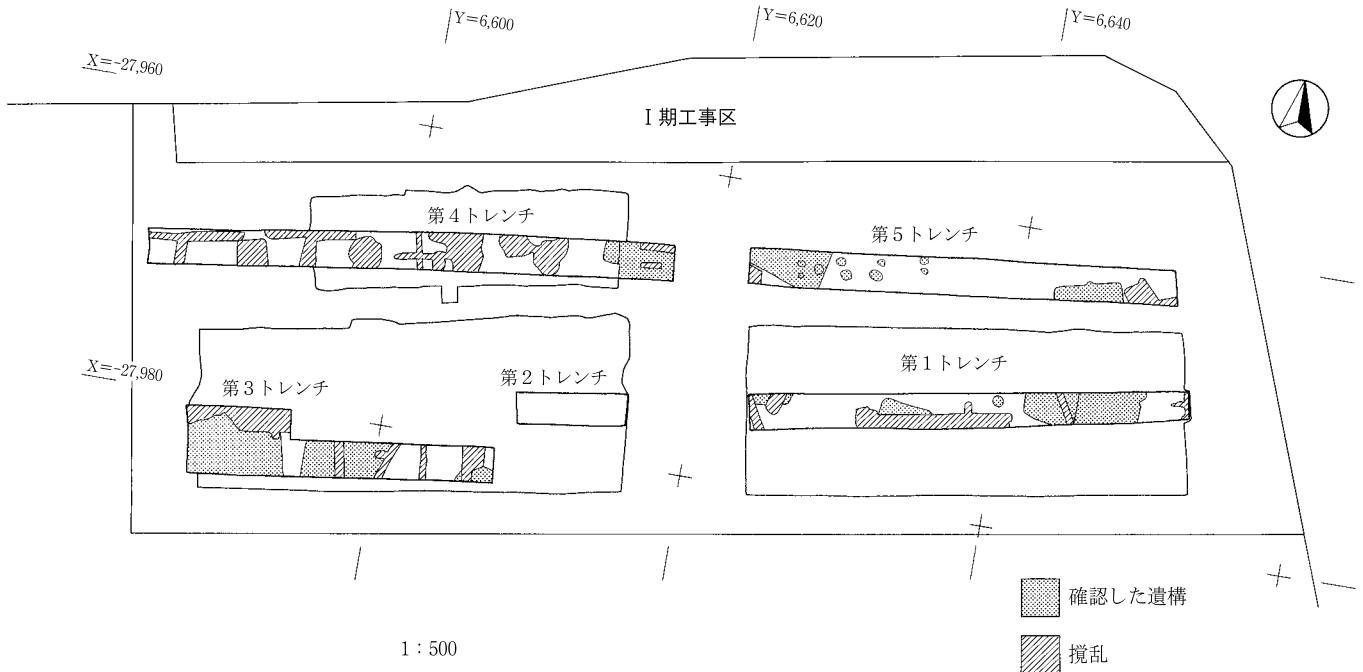
なお今回の調査は後で説明するように，電子平板を採用してデジタルで作図したために，通常の国土法眼座標に基づく基準点杭打ち測量は実施せずに，電子平板による観測で有効に利用できるように，任意で打設した木杭・鋌を単路線方式によって測量した成果を利用している。そのためグリッド名の呼称を利用した記録作成は行っていない。打設した木杭・鋌については，本調査区が数百㎡ごとに個々に独立するので，各調査区を調査着手順にアルファベットでA～Dまでふり，Ⅰ期工事区ではA～C調査区，Ⅱ期工事区はその範囲をそのままD調査区とし，各調査区ごとに数本の木杭・測量用コンクリート鋌を打設し，それに通し番号を付け，それと調査区名を組み合わせてA-1などと呼称した。木杭と鋌の別は，表土掘削範囲には木杭を使用し，駐車場のアスファルトが残る部分には鋌を使用した。ちなみにA・B調査区は看護師用共同住宅2棟，C調査区は貯留槽，Ⅱ期工事区にあたるD調査区は教育研修棟1棟にあたる。

おもな地点における座標値・経緯度について，世界測地系と日本測地系とを第1表に示しておいた⁽²⁾。基準点測量の点網図には，両者を区別したティックマーク（分目盛）を併記することとした。なお「平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震」（気象庁2011）により大規模な地殻変動が広域に生じ，千葉県もその対象エリアに含まれ，座標値については国土地理院がWeb上で公開している「地域毎の座標補正パラメータPatchJGD」によって街区多角点の数値を補正した。その結果，震災の前後で計算上では南東へ40.5cm，地殻変動によるずれが生じている。

		A 1-00 (基点)	A - 3 (SI004 付近)	D - 1 (S I023 付近)
世界測地系	X座標	-27,940.000 m	-27,972.181 m	-28,000.283 m
	Y座標	6,420.000 m	6,638.903 m	6,651.794 m
	北緯	35° 44'53.31791"	35° 44'52.26844"	35° 44'51.35624"
	東経	139° 54'15.54934"	139° 54'24.26184"	139° 54'24.77413"
日本測地系	X座標	-28,295.3329 m	-28,327.5063 m	-28,355.6096 m
	Y座標	6,713.1759 m	6,932.0765 m	6,944.9680 m
	北緯	35° 44'41.68314"	35° 44'40.63357"	35° 44'39.72122"
	東経	139° 54'27.24036"	139° 54'35.95342"	139° 54'36.46573"

第1表 基点とおもな地点の日本測地系と世界測地系の座標値と経緯度

確認調査の方法 Ⅰ期工事区分の確認調査については，バケットの先端に平爪を装着したバックホウを使用して，溝掘りしながらトレンチを掘削し，その後，人力でトレンチ内を精査した。掘削深度は遺物包含層・遺構確認面を見極めながら確定した。確認調査面積は調査対象面積の10%を目安に行い，トレンチの



第2図 確認トレンチ

幅は作業効率や重機の切り回し等を考えて、原則2mとした。またトレンチの設定にあたっては、調査地の形状にあわせて東西に長いトレンチを設定した。台地縁辺部が多いこともあって、基本的には等高線にたいして直交するトレンチを設定し、土層の堆積状況を確認するように努めた。

II期工事区分については対象面積が1,000m²未満で、I期工事区分の調査成果から、確認調査を実施せずに調査着手段階から調査地全域について表土除去を行って、上層の本調査に移行した。

下層の確認調査については、遺構密度が濃く、大規模な攪乱坑も無数にあったために、それらを避けながら、2m四方のグリッドを任意に設定し、最終的に調査対象面積の約2%に相当する11か所(44m²)で確認調査を行った。その結果、遺物等の出土はなく本調査には移行しなかった。

なお事業者が地下埋設物に関する古い記録類を保管していなかったために、重機による掘削には格段と慎重な作業を必要とした。とくにB調査区では、調査着手前に事業者が委託した工事業者が路盤採石を除去する際に、給水中の上水道の塩ビ管を破損して調査区外で閉栓できなかつたために、発掘調査中も水道管をそのまま残して調査を継続することになった。これはB調査区のS I 015にかかる細管がそれで、埋戻し時には相応の養生をして埋め戻した。

本調査の方法 表土除去は確認調査と同様の重機を使用して実施した。排土は場内で処理したために、I期工事区では先行したA調査区の場合、調査未着手のB・C調査区を中心に排土を積み上げた。B・C調査区の調査では、調査を完了したA調査区を埋戻し、そこに排土を運搬して処理した。D調査区では、本調査区周囲の空閑地を利用して排土処理したが、排土の山が高くなりすぎたために、調査完了した遺構から順次埋め戻して、山の高さを低くするように努めた。なおD調査区のほぼ中央にあった銀杏の大きい切り株は、遺構にかかる部分の根を極力人力で除去して、根の本体はそのまま残して調査を実施した。

作図の方法 今回の図面の図化にあたっては、測量法の「作業規定の準則」第90条3(細部測量)に規定されたオンライン方式による、電子平板システムを採用した⁽⁴⁾。機器のおもな構成は、モータードライブを搭載して自動追尾ができるトータルステーション(光波測距儀と経緯儀を兼ね備えた測量機器で、以

下「TS」という。), 360°プリズムを装着したリモートキャッチャー, 描画編集するソフトをインストールした屋外での使用に適したノートパソコンの3機種である。各機種はブルートゥース(無線)で接続して数値データの受け渡しを行う。実際の作業は測点においた反射プリズムに向けてレーザー光を発射し, 関係点間の水平角, 鉛直角, 距離等を観測し, TSが順次プリズムを自動視準してそのデータを蓄積していく。コンピューターのデータ処理技術により, それらのデータを現場で図化対象物を確認しながら観測と図化を同時に行っていくものである。

具体的には, はじめ画面上に観測点が順次表示され, 観測した線ごとにリアルタイムで結線することでビジュアル化し, その確認を繰り返しながら図化していく。確認作業はノートパソコンのディスプレイ上で行うので, オフライン方式に比べて視認性という点で格段と勝っている。測点の数は, 通常の手実測に比べて1.5倍~2倍を一つの目安とし, 曲率の強い部分については, 描画ソフトの特性上さらに細かい測点が必要となる。

実際の現場作業では, パソコンを操作する補助員1名とリモートキャッチャーをもつ補助員1名の, 計2名をおもな人的構成とした。そして機械の使用頻度が高く, 時間的余裕のないときには, もう1名を加えた。観測内容を逐一用紙に記録して, 蓄積したデータを後に検索したり, データの誤入力を確認できるようにしていた。通常それはパソコンの操作と同時に行うが, 繁忙期には専当する人間がいたほうが作業はスムーズに進捗するので, 状況を見計らってそうした対処もした。したがって今回の調査では平面図等の作図に関わる補助員は基本的に2名, 適宜, 3名体制も採用したことになる。

このシステムを導入することで, 広域にわたって同じ精度で図化することができ, 個々に作図したものがすべて全体図の一部となるところに大きな利点がある。とりわけ今回のように調査対象地に満遍なく作図対象物がある場合には, とくに有効だったように思う。ただし通信障害によって断線する頻度がやや高く, 病院棟に近いD調査区の調査になるとそれが顕著になったので, 障害のおもな原因が周辺からの電磁波が干渉して断線した可能性がある。

なおデジタル化を志向した作図作業を導入しても, 手実測の作業が少なからず残った。土層断面図, そして遺物出土状況の微細図などがそれで, それらに関してはすべて手実測で行った。横・縦断面図については, 図化に必要な測点のみを単点として適宜, 観測し, 描画編集ソフトで図化することとした。またオーバーハングしている部分については, 直接観測が不可能なので, 間接的な方法で図化した。



写真1 建築廃材の集積



写真2 電子平板による実測風景 (A調査区)

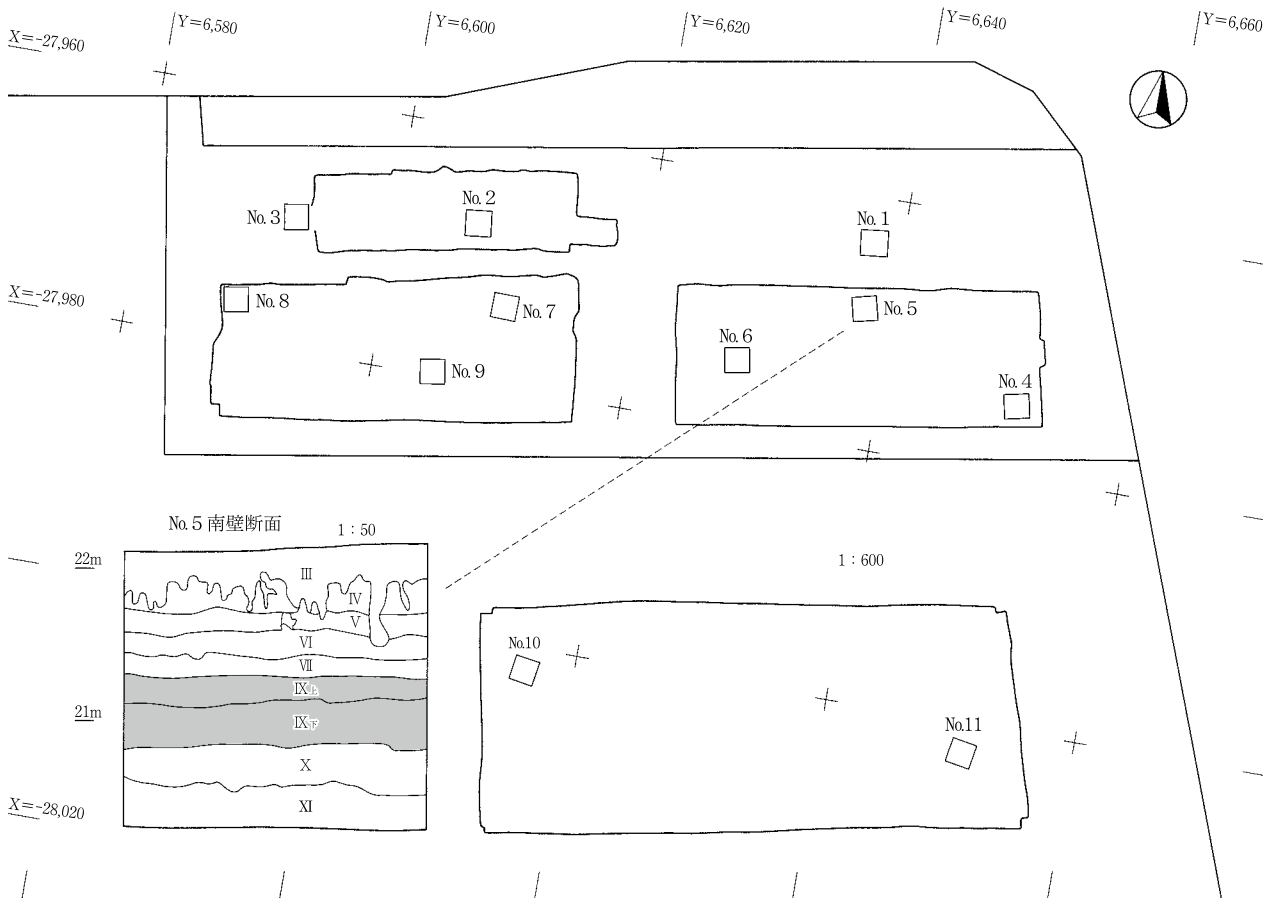
調査回数と遺構番号 遺跡コードの末尾にある（ ）内の番号が調査回数になり、今回報告するのは第4次調査ということで（4）となる⁽³⁾。遺構番号については、第4次調査分のすべての遺構に連続する3桁の通し番号を付した。また現地作業の段階から順次、遺構の種別を略号を付けて区別した。使用した略号は、次のとおりである。竪穴住居：S I，土坑：S K，ピット：S Hになり、縄文時代の陥穴についてもS Kに含めた。

また本書に掲載した図面中で、攪乱、近・現代の掘込み等については、遺構と区別するために2点破線を用いて図示した。攪乱等の掘削痕跡で、掘削深度が深くすべて掘り切らなかったものについては、原図ではそれを区別して表示したが、今回の報告にあたっては煩雑になるのでその表記は省略した。なお本調査区が狭小だったこともあって、遺構の輪郭線が完結した場合が少なく、遺構の全容を理解しやすいように、データの編集作業を進めるなかで推定線を書き足した。

2. 基本層序（第3図）

下層の確認調査は武蔵野ローム層上部まで掘り抜いて調査した。土地改変の頻度が高かったこともあって、整地・盛土の形跡が顕著でⅢ層中位まで削平されていた。なお調査地の東部が緩斜面の肩部に位置することから、層序もそれに応じて傾斜していることが観察でき、層厚もやや厚くなる傾向があった。いずれも基本的な堆積状況には大きな相異はなく、第3図に示したA調査区中央のNo.5グリッドで作成した土層断面図にしたがって、基本的な層序について説明しておく。

立川ローム最上層に相当するⅢ層は、明・黄褐色の軟質なローム土である。Ⅵ層に達するほどのクラッ



第3図 下層グリッドの位置と下層の基本層序

クが発達している地点もある。下部のIV層は硬質ローム土の最上層で、二次的な性状をもつIII層の軟質化が進行するなかで部分的に取り込まれてしまうが、調査地全体で確認できる。赤色スコリアがわずかに混じる。V層以下が安定した堆積層になる。V層は第1黒色帯に相当し、全体に黒みが強く、黒・赤色スコリアを含む暗褐色の硬質ローム土である。層厚は15cm程度である。VI層はいわゆるAT(始良丹沢火山灰)層で白色パミスを多量に含有する明黄褐色のハードローム層である。層厚は20cm程度になる。VII層は暗黄褐色ローム土で第2黒色帯上部に相当する漸移層である。ATの白色パミスは、この層までブロック状に拡散する。VI層よりもやや軟質になる傾向がある。層厚は10cm程度とやや薄くなる。VIII層は下総台地の一般的な特性で確認できないが、市川市内では拠点的に確認されている例もある(今泉ほか 2011)。

その下部には第2黒色帯下部に相当するIX層が堆積する。色調は全体にVI層よりは暗い暗黄褐色である。明度と含有物から2層に分層し、上層は赤色スコリアを含み、層厚が30cmほどある。下層は暗度が強く、赤・黒色スコリアを多く含み、層厚は25cm前後になる。2層のあいだにはとくに間層に相当する層は確認できなかった。X層は明褐色で、立川ローム層の最下層になり、やや軟質で粘性が強くなる。層厚は約25cmある。XI層以下が武蔵野ロームで、灰褐色で粘性がさらに強くなる。粒径5mm以下の炭化粒を多く含む。

第3節 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置(第4図)

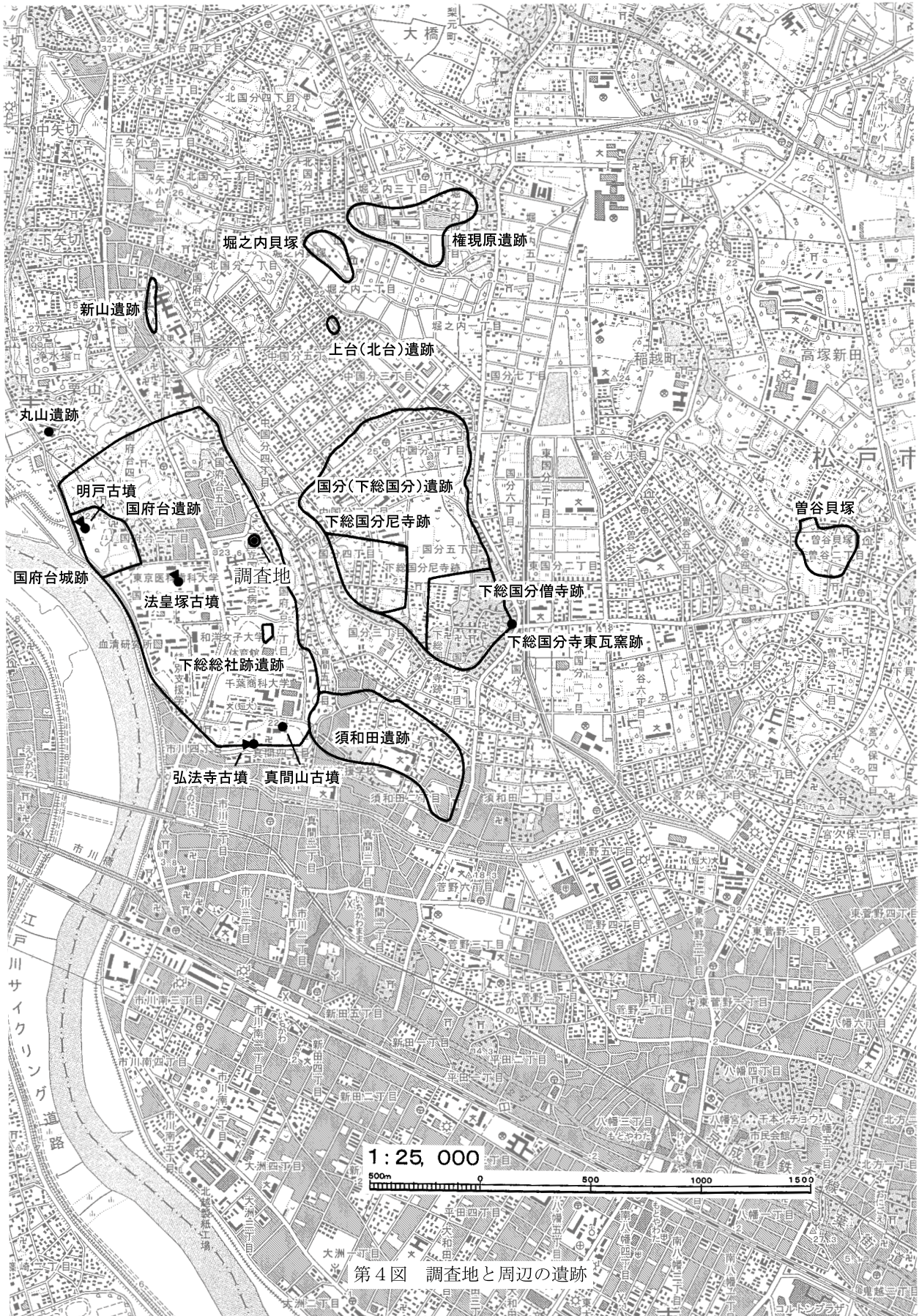
市川市は千葉県の西部に位置し、京葉臨海北部地区の一角を占め、東京湾のもっとも奥まった湾奥部に面している。都心から20km圏内に位置し、都心部と県内各地域を結ぶ公共交通が集中し、交通の便がよいことから、早くから首都圏近郊の住宅地、そして文教地区として目覚ましい発展を遂げてきた。

国府台地区は、南流して東京湾に注ぐ江戸川を望む、下総台地の先端部を形成する台地の一角をしめる。ただし江戸川は現代でこそ東京都との県境も兼ねるが、現墨田区に両国の地名が残ることからもわかるように、古代にあっては隅田川が武蔵国と下総国の国境となっており、国境はさらに西にあったことになる。

調査地は市域北西部にあり、JR市川駅から北へ約2kmの地点に位置する。市域北部は東葛飾台地とも呼ばれる、下総台地の西南部にあたり、国分谷と大柏谷によって、「V」字状に大きく開析され、標高20m前後になる下総台地特有の平坦な台地が発達している(杉原1971)。この二つの谷の浸食によって形成された沖積平野は、現JR線に平行してのび、柏井台の南西から発達した市川砂州によって、一旦、堰き止められる。市域南部はそこからかつての汀線までさらに沖積低地が広がり、その先に干拓地と埋立て地が連なって現海岸線になる。

国分谷を東に望む台地を国分台と呼び、支谷によってさらに支台にわかれる。まず台地奥部まで細長く開析した六反田支谷を挟んで、西側の支台が国府台支台、東側が中国分支台になる。国府台遺跡はその国府台支台に位置し、対岸の中国分支台の先端部には国分二寺が位置する。六反田支谷の谷頭には溜池があり、今は「じゅん菜池緑地」として遊歩道が整備され、池の周囲を緑豊かな木々が囲んで、市民の憩いの場となっている。

国府台支台が沖積平野を望む台地の眼下には、江戸川の分流である真間川が流れる。現在の沖積低地を中心に東京湾が深く湾入し、かつては広く湿地帯を形成していた。その一帯が「真間の入江」にあたり、山部赤人らが詠んだ歌や東歌が『万葉集』に採録され、真間の手児(古)奈伝説にも登場する。入江の口にはいくつもの洲があり、そこに掛け渡されたのが『万葉集』にみえる「真間の継ぎ橋」のようなものに



第4図 調査地と周辺の遺跡

なるのであろう。また近世には「浮嶋弁財天」の社もあり、そうした地形が長く保たれていたことを物語っている。ちなみに「まま」は自然地形に崖などの急斜面を表すとされている（千野原 1977）。真間川は明治から大正にかけて行われた耕地整理で河道が1本になり、ほぼ現在の姿になった。

国府台遺跡は遺跡範囲が南北約1.5km、東西約0.7kmと南北に長く、1.054km²におよぶ広大な範囲になる。そのうち国府台病院の敷地範囲が第13地点となり、その遺跡面積は国府台遺跡全体の約10%をしめている。現在、遺跡範囲の中央を南北に千葉県道1号市川松戸線（通称「松戸街道」で、以下、「県道」と略す。）がとおり、遺跡範囲を東西に二分している。県道の西側には、南から和洋学園（大学・高校・中学）・県立国府台高校・東京医科歯科大学などがあり、東側には南から弘法寺・千葉商科大学・市川市スポーツセンター、そして国府台病院の敷地などがあり、北側一帯には宅地が広がっている。

2. 歴史的環境（第4図）

今回の調査成果を理解する一助とするために、国府台遺跡周辺の土地利用の変遷を簡単に振り返ってみたい。

旧石器時代 近隣では調査地から北西1.2kmの国府台4丁目に位置する丸山遺跡をあげられる（杉原ほか 1955・杉原 1971）。丸山遺跡は江戸川を眼下に望む河岸段丘上にあり、明治大学考古学研究室が昭和29（1954）年に丸山古墳を調査した折りに、その墳丘下からナイフ形石器・石核などが出土したもので、正式な考古学的な調査を経たものとしては、県内ではじめて発見された旧石器時代の遺跡になる。残念なことに調査後に土取り工事によって遺跡は消滅してしまった。また近隣では調査地の北北西1.2kmの地点で六反田支谷の最奥部に位置する国府台6丁目の新山遺跡から、ナイフ形石器・削器などがⅦ層下部からⅨa層にかけて剥片とともに出土している（田形ほか 1990・田村 2000）。

丸山遺跡の調査後、調査例は増加したものの、遺構や遺物の平面的な分布が確認された遺跡は少なく、まとまった資料が出土した調査例はナイフ形石器・彫器などが出土した堀之内1丁目の権現原遺跡（白石 1987・宇田川 2000）、ナイフ形石器を中心に出土した柏井町1丁目の今島田遺跡（熊野 1969・領塚 2000）などがある程度で、まだ少数の調査例にとどまっているのが現状である。

縄文時代 中国分支台の北縁に位置し、道免き支谷に面する上台（北台）貝塚は、堅穴住居に伴う地点貝塚からなる前期前半を中心とした馬蹄形貝塚で、市内最古の人骨が出土したことで著名である（宮崎ほか 1935・西村 1961・杉原 1971・松田 2000）。中・後期には貝塚の全盛期を迎え、遺跡数も増大する。なかでも堀之内貝塚・曾谷貝塚は国史跡に指定されている。堀之内貝塚は東京近郊に位置することから、明治時代の早い段階から識者の知るところとなった。そうしたなかで山内清男が昭和15（1940）年に後期前葉の堀之内1・2式とする土器形式を公表し、標式遺跡の一つとなった。晩期になると遺跡数は激減する。

弥生時代 市史編纂以降の最近の調査成果として、国府台遺跡で中期の方形周溝墓群とそれと同時期の環濠集落、そして後期の環濠集落がその50m西で見つかっている（松本 2003）。中期の環濠集落は東西長約240mで、後期の環濠になると規模をかなり縮小するようである。その東の段丘上には中期の標式遺跡である須和田遺跡が存在する（渡辺 2003）。国府台遺跡同様、後期の環濠の一部と考えられる「V」字状の溝がみつき、台地上の一部には環濠集落を構えていた。

古墳時代 市川市内には現存する4基の古墳はいずれもこの国府台古墳群のなかにある⁽⁵⁾。そのうち法皇塚古墳は市内最大の古墳で、東京医科歯科大の構内に位置する。6世紀中葉に築造された前方後円墳で、数度にわたる調査の結果、武具・馬具・装身具などの豊富な副葬品が出土した。墳丘には埴輪が樹立され、

埼玉県生田塚輪窯の形象埴輪と下総型の円筒埴輪が共存するのが一つの特徴である（小林ほか 1976・堀越ほか 1981）。出土資料のうち振り環頭大刀などは、畿内王権との密接な関係をうかがわせる資料でもあり、新興豪族層の首長墓と目されている。その北西約400m、里見公園の北西部には2基の箱式石棺が露呈した明戸古墳がある。全長40m前後の前方後円墳に推定され、6世紀後半に位置づけられている。石棺は太田道灌が陣を構える際に露呈したと伝えられている。

弘法寺境内には2基の古墳が残る。弘法寺古墳は全長43mの前方後円墳だが、真間山の崖に接しており崩落が著しいが、未調査のため詳細は不明である。真間山古墳は弘法寺の鐘楼となっており、円墳といわれているが、さらに盛り土の痕跡が広がるので、前方後円墳になる可能性もある。なお弘法寺を中世の文献に出てくる「市川城」とする説もあり、古墳の墳丘を改変して城郭の土塁としたのかもしれない。

これら以外にも調査によって古墳の周溝や埴輪片の出土などを確認しているので、周辺には100基以上の円墳を主体とする古墳群が存在していた可能性がある」と指摘されている（曾根ほか 2008）。これらの古墳群は、国府台支台の南縁部から西縁部にかけて分布し、六反田支谷に面する台地縁部を避ける傾向がある。

古代 国分台のうち西部の国府台支台には国府がおかれ、それが国府台という地名の由来となっていることはいままでのない。国府台1丁目には「府中」の小字名が残る。また、国司が国内の神社を参拝する義務を国衙が近くに合祀した総社で巡拝の便にかえるようになってくるが、その総社がかつて現スポーツセンターの北に鎮座していたなど、周辺を国府に推定する要件はそろっている。なお総社は明治19（1886）年に六所の森が軍用地に接収されて須和田に移転したことからもわかるように、近代になって周辺に軍の関連施設等が数多く建設されたこともあって旧地形が大きく損なわれ、下総国府の実態は現況からでは判然としない。ただ1990年代からはじまった和洋学園キャンパス内の発掘調査などで竪穴住居や掘立柱建物以外にも側溝をもつ道路や区画溝などがみつきはじめ、徐々にその姿が明らかになりつつある（山路 1998a・駒見ほか 2004・松本 2009）。また国府の一角になる、下総総社跡遺跡では出土土器の器種が偏重することから、醸造を伴う給食施設の存在も推定されている。

この国府台支台から支谷を隔てた対岸の南端部に下総国分僧寺、その北西に尼寺が造営された（山路 1994・山路 1995・山路 1998b・山路 1998c ほか）。僧寺は東に金堂、西に塔を配置した法隆寺式伽藍配置を採用している。ただ金堂・講堂と塔とでは造営方位が著しく異なり、それは塔の造営が先行したと考えられている。出土瓦類の分析から、9世紀前半に補修期を迎え、10世紀代まで創建以来の景観を維持していたようである。

この時期、日本では平安海進と呼ぶ地球規模のロットネスト海進という気候変動期を迎える（山本 1974・藤ほか 1989）。その影響は東京湾奥部では低地に海水が浸水し、集落や交通路の存廃に影響をあたえたと考えられている（田中 2003）。例えば自然堤防上及びその周辺にあった下総国葛飾郡大嶋郷では8世紀代の集落が9世紀になると忽然と消滅している。なお六反田支谷では、浅間B降灰時（12世紀初頭）にはすでに水田を営していた可能性があるという指摘もある（遠藤ほか 1994）。

中世 鎌倉幕府成立後、日蓮宗を宗旨とする土豪が市域を治め、大田氏と曾谷氏が曾谷（蘇谷）郷を拠点としていた。中世の荘園としては国府台台地一帯の国分寺と八幡荘などがあつた。戦国期になると下総の覇権をめぐる勢力争いが熾烈化し、関東の情勢を大きく左右した戦が国府台城およびその周辺を舞台として2度にわたっておこつた。北条氏が関東の大半を治めるなかで、里見氏がその対抗勢力となって再三にわたって衝突を繰り返し、永禄7（1564）年に勃発した第二次国府台合戦の交戦で再び北条氏が勝利を治

め、関東地方のほとんどをその手中に収めた。国府台城は文明10（1478）年に太田道灌が築城したと伝えられ、間に空堀をもつ二重土塁や櫓台などが現里見公園や總寧寺境内などにある（松下1980）。国府台城は別名「市河城」ともいわれるが、近隣にあった別の城郭とする見解もある。

近代 明治7（1874）年になると、この広大で平坦な国府台支台に現在の東京大学とは異なる性格をもった大学を設置する計画が持ち上がり、用地買収まで進んだ。しかし高台のために飲料水の確保が困難なことや東京からの交通の便が渡し船しかないことなどから計画は頓挫してしまっていたが、その後も土地は農民に貸し与えられていた。この土地に陸軍が注目し、土地が文部省から陸軍省に移管されて、当時の東京市内に分散していた陸軍省の下士官養成機関である陸軍教導団を、明治18（1885）年に国府台へ集結した（福地ほか1975）。その折りに環境整備の一環として道路も新設され、それが現在の県道の原形になった。その県道を挟んで西側一帯には兵舎が建てられ、東側の国府台病院を含む一帯が練兵場となった。そして弘法寺境内に仮設されていた病室が、現在の里見公園内に陸軍教導団の病院として設置され、教導団廃止後には砲兵隊が駐留することになり、医療施設も国府台衛戍病院^{えいじゅう}となった。病院は昭和11（1936）年に国府台陸軍病院と改称し、2年後に現在地に新築移転したが、里見公園内の病院は里見病室としてそのまま残された。このように国府台一帯は軍用地として広く利用され、「軍都市川」とまでいわれるようになり、その一角に軍用の医療施設が設置されていたわけである（小野ほか1992）。

戦後、国府台の軍用地はおもに大学等の文教用地となり、国府台陸軍病院は厚生省の所管となって国立国府台病院として新たに発足した。それらの施設の一部は、軍の兵舎等の施設を転用したものであった。そして平成22年4月1日から独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院として組織改編されて現在にいたるのは、前述のとおりである。

3. 国府台遺跡の調査経過（第5・6図）

国府台遺跡は前述のように広大な面積なので、国府台病院敷地（以下、「病院敷地」と略す。）内を指す、おもに第13地点の調査成果について当財団に関わる調査をまず紹介し、その後に市川市教育委員会（以下、「市教委」と略す）の調査や隣接地の調査成果についてもあわせて取りあげておく。なお調査次数等の調査地点に関する表記については、混乱を避けるために報告時のままとし、以降の説明で使用する奈良・平安時代の時期区分に関しては、宮内編年（宮内1983・宮内1997）を下地として地域編年の確立を目指した「下総国府の土器編年」（松田2001）を参考とした（第2表）⁽⁶⁾。

まず当財団の調査に関わる調査成果を取りあげておく。

第1次調査 病院敷地西側で3地点（A～C区）の調査を実施した（田島2001）。B区・C区で竪穴住居を1軒ずつ調査しており、1期と4期の資料が中心となり、S I 001は4期の竪穴住居になるであろう。1期の資料も遺存状態は比較的よいので、周辺に集落の初源期に相当する竪穴住居も存在したのであろう。

第2次調査 病院敷地のほぼ中央部にあたり、地上5階建ての新病棟新築に伴う調査で、5,830m²の調査対象面積を2カ年にわたって調査した（鳴田ほか2112）。その結果、縄文時代の陥穴2基、奈良・平安時代では竪穴住居34軒、掘立柱建物2棟などがあり、遺構群の変遷をある程度把握することができた。集落は2期を初源とし、5期に集落規模がもっとも大きくなり、6期には終焉を迎える。ただ5期・6期の様相は、これまでの国府台遺跡の趨勢とはやや異なる傾向がある。出土遺物のなかには、集落の性格の一端を窺い知れる円面硯・奈良三彩托などもあった。ただし文字資料の内容はかなり限定的である。

中世では台地整形区画が1か所あり、区画内からは掘立柱建物・地下式坑・粘土貼土坑・茶毘遺構など



国府台
児童公園

調査地

国府台丁目緑地

国立精神13-4センター

国府台

西消防署
国府台出張所

県財団調査地

市教委調査地

1 : 2,500



第5図 国府台遺跡第13地点内の調査地点と周辺のおもな調査地

国府台公園スポーツセンター

国府台女子高等学校

民体育

競技場

真

が密集してみつがっている。15世紀代に盛期を迎える、在地有力豪族層の居館に関わる遺構群とも考えられている。

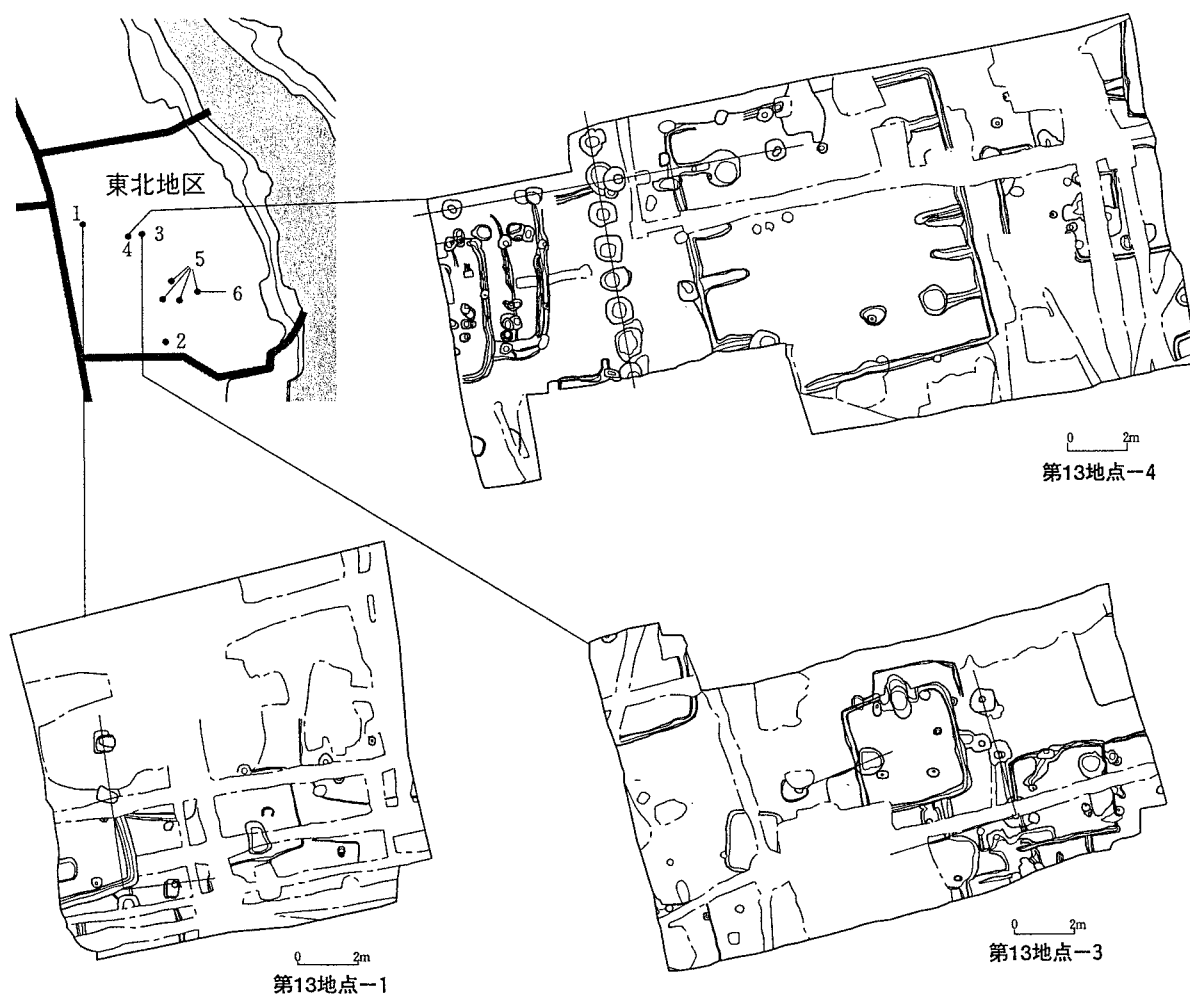
第3次調査 病院敷地内の県道拡幅に伴う調査で、調査地点がA区・B区の2か所にわかれ、調査した合計面積は512㎡しかないが、攪乱が多くあったことを考えると、遺構密度は非常に高いといえる（安井2011）。奈良・平安時代の竪穴住居14軒、掘立柱建物もしくは柵列・塀が2棟以上あり、竪穴住居は2期～4期の国府成立期から国府拡充期に帰属する。出土遺物としてはS I 003から、鑄造の丸底をした鉄鍋が出土しているのが注目される。

第5次調査 病院敷地内の県道に伴う調査で、352㎡の調査を実施し、奈良・平安時代の竪穴住居4軒・土坑数基を調査した。詳細は現在整理中のため不明である。

以下は、国府関連遺跡や市有地等の理由で市教委が調査した調査成果である⁽⁷⁾。

第13地点-1 159㎡の調査にもかかわらず、竪穴住居8軒・掘立柱建物1棟を調査し、奈良・平安時代の土器以外に灰釉陶器・紡輪・鉄滓などが出土している。

第13地点-2 病院敷地のもっとも南寄りの地点になり、調査対象面積85.9㎡で竪穴住居を確認している



※ 松本2001『下総国府跡』市川市教委より転載

第6図 国府台遺跡第13地点-1・3・4の成果図

が、その後保存となっている。

第13地点 - 3 第2次調査の北側に位置し、調査対象面積172m²で竪穴住居14軒・掘立柱建物1棟・土坑2基を確認し、遺構の密度は非常に濃い(松本ほか1999)。その後引き続いてS I 03A・Bについて、本調査を実施している。その結果、S I 03Bが3b期、S I 03Aが4期の竪穴住居になると考えられている。紡織などの工房群になる可能性があることも指摘されている。

第13地点 - 4 第13地点 - 3の西に接し、同様に密度濃く遺構群がみつまっている。竪穴住居14軒・掘立柱建物1棟・塀1条などで、奈良・平安時代の土器以外に、鉄製品・獣骨が出土した。

第13地点 - 5 次の第13地点 - 6と調査範囲が一部重複する。確認調査を主体とした調査で、竪穴住居2軒・溝2条・土坑を多数確認している(松本2001)。出土資料中に、15世紀代の古瀬戸緑釉陶器小皿の部分資料があり、みつまっている多数の土坑とともに、第2次調査で調査した中世の遺構群がさらに南方へ広がっていた可能性がある。

第13地点 - 6 約400m²について調査を実施し、竪穴住居14軒・掘立柱建物1棟、ほかに土坑・小穴等も多くみつかったが、攪乱がかなり激しかったことが全体図からうかがえる(曾根ほか2008)。竪穴住居の時期は2期～6期頃になり、総じて5期以降が多くなるようである。注目される出土遺物としてはS I 08から、新羅土器あるいは新羅系土器と考えられる口縁部が残る小さい破片が出土している。掘立柱建物は桁行2間×梁行2間以上で、柱掘方は不正円形で径が小さく、柱痕跡も細いことから、仮設的な建物と考えられている。

第13地点 - 7 病院敷地の北側に位置し、今回の調査地からは40mほど西の地点になる。208.5m²の確認調査で竪穴住居1軒・土坑2基を確認し、遺構は現状保存となった(曾根ほか2008)。

第13地点 - 8 第2次調査の東側隣接地になる。1,240m²について本調査を実施し、縄文時代陥穴5基、奈良・平安時代竪穴住居25軒、掘立柱建物2棟を、柱列1条、中・近世土坑43基などを調査している。陥穴については、これまでの調査成果を加味すると、六反田支谷を望む病院敷地の東側に分布する傾向があることがわかる。また中・近世の遺構群については、第2次調査でみつまっている中世の遺構群がさらに東へ広がっていたことがうかがえる。

以下は市教委が調査した病院敷地東側のおもな調査成果について触れておく。

第39地点 今回の調査地の北東隅から市道1168号線を挟んだ地点になる(松本ほか1999)。3本のトレンチで確認調査を実施したが、旧陸軍施設の基礎廃材と考えられるガラが大量に出土し、遺構面には達しなかった。調査地が緩斜面に位置することから、これらの廃材で台地平坦面近くまで盛土して造成したと考えられている。

第52地点 共同住宅建設に伴う約1,509 m²が調査対象範囲で、市道を挟んで調査地の東側に隣接する(松本2000)。とくに遺構等は確認していないが、表土から確認面までの深さが1m近くあり、六反田支谷を東に望む段丘斜面部に位置することを確認している。

第77地点 病院敷地東側隣接地の調査で、調査対象面積1,080m²について確認調査を主体に調査を実施したものである(曾根ほか2008)。竪穴住居9軒と掘立柱建物2棟等を確認している。竪穴住居は一部で重複する。1期～5期にわたる土器群が出土している。

第90地点 病院敷地から約35m東へ離れた地点に位置する(加藤ほか2011)。個人住宅建設に伴う調査対象面積約160m²という狭小な面積でも、竪穴住居3軒、土坑1基を確認し、遺構密度は高い。そのうちS I

03の一部について本調査を実施し、3b期の竪穴住居と考えられている。

注

- 1 第1次調査のグリッド方眼の座標値に関しては、報告書に座標値が明示されていないために、報告書から座標値はわからない(田島 2001)。今回の報告にあたって改めて同調査の基準点測量成果簿で確認したところ、日本測地系で、基点としたA 1-00の座標値は、X=-28,460.000, Y=6,760になっていた。今回の基点からは、南東へ約170mの地点になる。なお『報告書』第3図のグリッド表記に一部誤植があったので訂正しておく。それはA区の「6」を「G」とした誤植で、「6680」は正しくは「6G80」になり、以下2か所も同じである。
- 2 数値は国土地理院が公開している「Web版 TTKY 2JGD Ver1.3.79 パラメータ Ver2.1.1」による。この変換法は簡便だが高い精度を確保できないとされており(文化庁 2010)、次善の策として採用したものである。表中の「日本測地系」は「旧日本測地系(Tokyo Datum)」を指し、「世界測地系」は「日本測地系2000(Japanese Geodetic Datum2000)」を指す。ちなみに現在、市川市で発行している白図は世界測地系に準拠したものになる。
- 3 第1次調査では後続する調査を考慮していなかったため、とくに第1次調査とは標榜していない。しかしその後、この調査も含めて調査次数を重ねていった経緯に鑑みて、この調査を第1次調査とし、それ以降の調査については遺跡コードに調査次数を表す枝番を加えて調査次数と連動するようになった。
- 4 平成20年3月31日付け国土交通省告示第413号
- 5 その領域について、小林三郎は「終末期の国府台古墳群の領域は明確にし難いが、我孫子古墳群との関連において考えてみると、現在の市川・松戸・船橋を含む直径20km前後の範囲を推定してもよいかも知れない。」と、かなり広域に設定するむきもある(小林 1972)。
- 6 時期区分と暦年代の対応については、「下総国府の土器編年」(松田 2001)にしたがって下記の第2表にまとめ、出来事等については適宜加筆した。

第2表 下総国府における土器編年の時期区分

時期	区 分	小 期	おもな出来事など
1期	: 7世紀後半		古墳時代の様相が色濃く残り、官衙成立直前の様相。
2期	: 7世紀末～ 8世紀中頃	a : 7世紀末～8世紀第1四半期	国府成立期にあたり、遺構数が増加する。
		b : 8世紀第2四半期～8世紀中葉	国府が本格的に機能しはじめた段階。
3期	: 8世紀中頃～ 9世紀第1四半期前半	a : 8世紀中頃～8世紀末	国府機能の充実期。 国分寺造営。
		b : 8世紀末～ 9世紀第1四半期前半	武蔵国が東海道に編入される(宝亀2(771)年)。 長岡京遷都・平安京遷都。
4期	: 9世紀第1四半期後半 ～9世紀中葉		中央政治の安定期。 「弘仁の大地震」発生(弘仁9(818)年)。 国分寺の修造期。
5期	: 9世紀後葉～ 10世紀はじめ		遺構数の減少。 群盗の活動が活発化し、治安が悪化。 (下総俘囚の乱:貞観17(875)年)。
6期	: 10世紀はじめ～ 11世紀中葉	a : 10世紀はじめ～中葉	人口の回復期で、中世への過渡期。
		b : 10世紀後葉～11世紀中葉	承平の乱をはじめとする東国動乱期。

- 7 調査成果のうち、1・2・4・8については未報告のため、市教委提供の資料による。なお第13地点-1・-3・-4については、松田 2001に全体図が掲載されている。

参考文献

宇田川浩一 2000「権現原遺跡」『千葉県歴史資料編 考古1(旧石器・縄文)』千葉県
 遠藤邦彦ほか 1994『縄文時代以降の松戸の海と森の復元』松戸市立博物館調査報告書2 松戸市立博物館
 小山正忠ほか 2002『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社
 加藤貴之ほか 2011『平成12～18年度 市川市内遺跡発掘調査報告書』市川市教育委員会
 川尻秋生 2008『日本の歴史第4巻 揺れ動く貴族社会』小学館
 気象庁 2011『平成23年3月11日14時46分頃の三陸沖の地震について(第2報)』報道発表資料
 熊野正也 1969『今島田遺跡』市川市教育委員会
 小林三郎 1972「土師時代集落把握への小考」『駿台史学』第31号 駿台史学会
 小林三郎ほか 1976『市立市川博物館研究調査報告第三冊 法皇塚古墳』市立市川博物館

- 駒見和夫ほか 2004『下総国府台』学校法人和洋学園
- 佐々木仁史 2011「工事の進捗状況」『国府台』平成23年02月号
- 白石典之ほか 1987『堀之内』市川市教育委員会
- 杉原荘介ほか 1955「常総台地における関東ローム層中の石器文化—市川市丸山遺跡について—」『駿台史学』第5号 駿台史学会
- 杉原荘介 1971「先土器時代の遺跡」『市川市史』第1巻 原始・古代 吉川弘文館
- 曾根俊雄ほか 2008「国府台」『平成12—15年度市内遺跡遺跡発掘調査報告』市川市教育委員会
- 滝口 宏 1971「国分寺造立の発掘」『市川市史』第2巻 古代・中世・近世 吉川弘文館
- 田形孝一ほか 1990『市川市新山遺跡—北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—』(財)千葉県文化財センター
- 田島 新 2001『市川市国府台遺跡第13地点—国立精神・神経センター国府台病院施設増築埋蔵文化財調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- 田中広明 2003「古代集落の再編と終焉」『中世東国の世界 1 北関東』高志書店
- 田村 隆 2000「新山遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1 (旧石器・縄文)』千葉県
- 千野原靖方 1977『手児奈伝説—万葉に歌われた真間の娘子—』崙書房
- 千葉県教育委員会 1997『千葉県埋蔵文化財分布地図 (1) —東葛飾・印旛地区 (改訂版)』千葉県教育委員会
- 鳴田浩司ほか 2012『市川市国府台遺跡第13地点 (2) —国立国際医療研究センター国府台病院埋蔵文化財発掘調査報告書1』(公財)千葉県教育振興財団 文化財センター
- 福地重孝ほか 1975「明治・大正期の市川」『市川市史』第3巻 近代 吉川弘文館
- 堀越正行ほか 1981『図録法皇塚古墳』市立市川博物館
- 藤 則雄ほか 1989「寺家遺跡における平安時代中期の砂丘形成とその意義—“平安海進”の発見と新提唱—」『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会々誌 第32号 石川考古学研究会
- 文化庁文化財部記念物課 2010「世界測地系への移行」『発掘調査のてびき—集落遺跡発掘編—』文化庁文化財部記念物課・独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 株式会社同成社
- 松田礼子 2001「下総国府の土器編年」『下総国府跡—国府台遺跡緊急確認調査報告書』市川市教育委員会
- 松下邦夫 1980「国府台城・曾谷城」『日本城郭大系』第6巻 千葉・神奈川 新人物往来社
- 松本太郎 1998「市川市国府台遺跡の環濠集落」『史館』第30号 史館同人
- 松本太郎ほか 1996『市川出土遺物の分析—古代の鉄・土器について—』平成7年度市川市埋蔵文化財調査・研究報告 市川市教育委員会
- 松本太郎ほか 1999「国府台遺跡」『平成10年度市川市内遺跡発掘調査報告—国府台遺跡第38地点ほか』市川市教育委員会
- 松本太郎 2000「国府台遺跡」『平成11年度市内遺跡発掘調査報告—国府台遺跡第46地点ほか』市川市教育委員会
- 松本太郎ほか 2001『下総国府跡—国府台遺跡緊急確認調査報告書—』市川市教育委員会
- 松本太郎 2009「国庁とその周辺」『市川の国府と国分寺』市川市政施行75周年記念・市川市史編さん講演会資料 市川市
- 宮内勝巳 1983「東京湾沿岸における奈良・平安時代土器の様相」『房総における奈良・平安時代の土器』—シンポジウム資料 史館同人
- 宮内勝巳 1997「下総西部の土器編年について—下総国府・国分寺を中心にして」『古代末期の葛飾郡』崙書房
- 安井健一 2011『市川市国府台遺跡第13地点 (3) —地域活力基盤創造交付金委託埋蔵文化財調査報告書』(財)千葉県教育振興財団 文化財センター
- 山路直充ほか 1994『下総国分寺跡 平成元年～5年度発掘調査報告書』市川市教育委員会・市立市川考古博物館
- 山路直充 1995『下総国分寺—いま見つめなおす下総の天平文化』市立市川考古博物館図録17 市立市川考古博物館
- 山路直充 1998a「下総国府関連遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3 (奈良・平安時代)』千葉県
- 山路直充 1998b「下総国分僧寺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3 (奈良・平安時代)』千葉県
- 山路直充 1998c「下総国分尼寺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3 (奈良・平安時代)』千葉県
- 山本武夫 1974「日本の気候変動と沖積世の寒冷気候」『第四紀研究』日本第四紀学会
- 領塚正浩 2000「今島田遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1 (旧石器・縄文)』千葉県
- 渡辺修一 2003「須和田遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古2 (弥生・古墳時代)』千葉県

第2章 遺 構

第1節 概要

今回の報告する地点では、既述したように調査区を調査着手順にA区～D区に区切って本調査を実施した。いずれも東西に長い調査区になる。以下の遺構に関する記述に関しても、その調査区ごとに調査した遺構について説明しておくことにする。

竪穴住居の個々の計測値については、カマドを確認できる場合には、カマドのある壁とその対向壁の、カマドを除いた上端間の長さを主軸長とし、それと中央でほぼ直交する上端間の長さを副軸長とし、それらを計測した数値を記載した。カマドを確認できない場合などには、4方位を基準として、壁に平行または直交する方向で、たとえば東西長などと記載した。深さは描画ソフトのデジタルデータの計算結果に基づく。本来であれば掘削面から床面までの深さになるが（文化庁 2010）、描画ソフトの特性上、住居上端のもっとも高い点から住居床面のもっとも低い地点との比高が高さとなる。したがって、通常よりは深めの数値になってしまうきらいがある。深さに関しては柱穴や陥穴を除く土坑についても同様である。壁溝の深さに関しては、実態とあまりにもかけ離れた数値が出る場合があった。その場合には断面図等から算出した。壁溝の幅については、現地調査では床面の高さでの幅はとくに計測していないので、住居の深さが深いものほど壁溝の幅は広くなるということを自明の理として、平面図から読み取れる数値を幅とした。また住居の面積については床面積を基本とし、壁溝・カマドのあるものについてはその部分は除外した面積をプランメーターで計測した。求積範囲が1本の線で閉合していれば、描画ソフトには面積を算出する機能があるが、今回のように攪乱等が多く、線の構成が複雑になる場合には有効ではない。また遺構の遺存状況をいう場合には、よほど大きな攪乱でない限り、攪乱は考慮に入れず、推定線があれば推定線と住居上端に囲まれた範囲を分母とし、遺存範囲を分子として算出した。

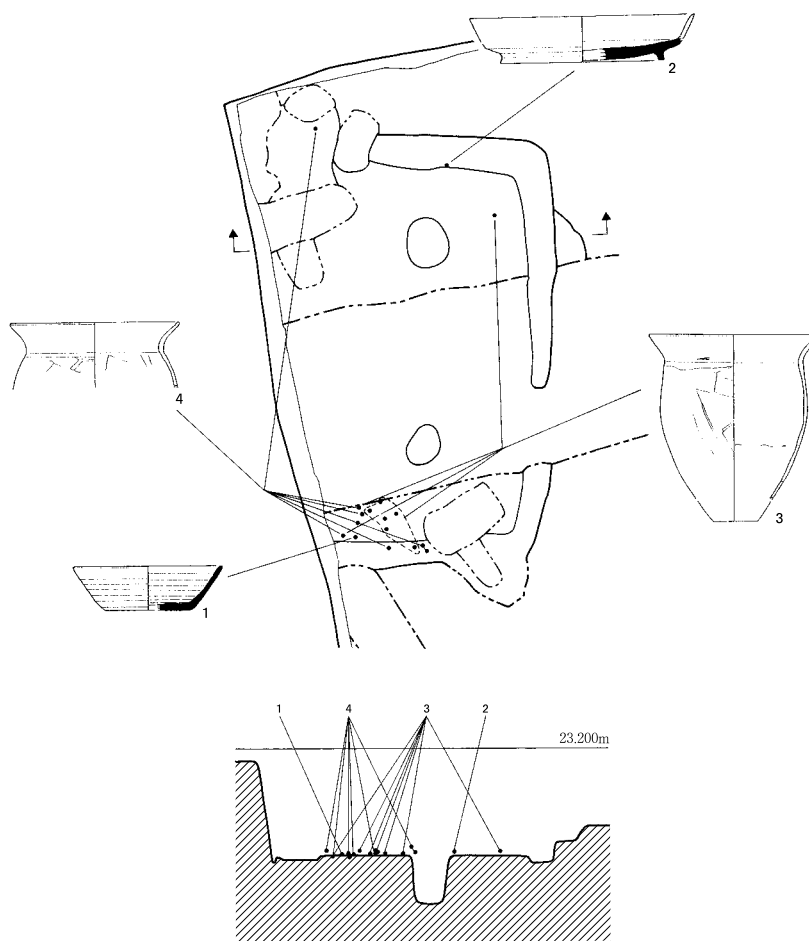
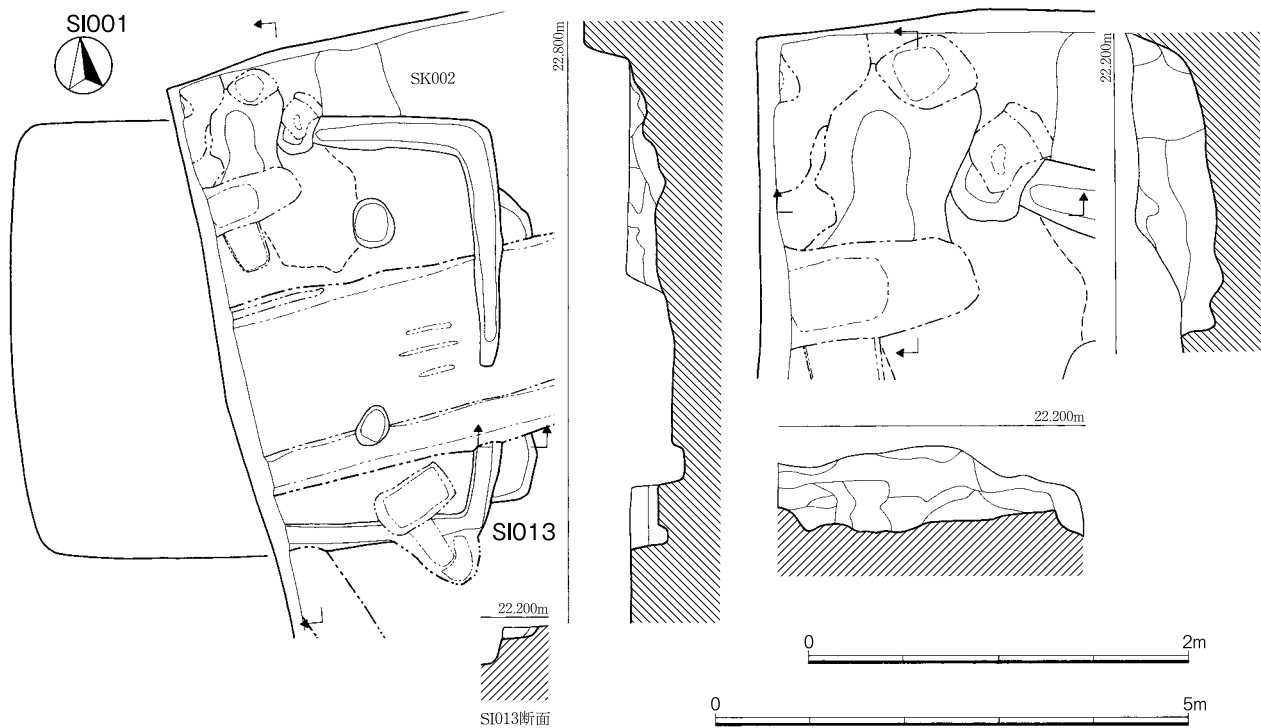
第2節 A調査区

本調査面積は317.2m²になる⁽¹⁾。調査区東部は緩斜面の肩部に位置するために、確認面の標高はやや低くなる。したがって駐車場造成の際の輻圧は、東部ほどその影響が少なかったが、西部は盛り土が低い分、掘削土が堅くなる傾向があった。盛土中からは大谷石の切石列やヒューム管などの廃材が大量に出土し、すでに取り壊してしまった前身施設の存在をうかがわせた。また確認面近くにはゴミ穴や、重機で地山まで掘り抜いた掘削痕跡が無数にあり、遺構精査にあたっては少なからず影響を及ぼした。

1. 竪穴住居

S I 001（第7図，図版3）

調査区の西端に位置し、住居のほぼ西半分が調査区外になる。住居中央部はヒューム管の埋設溝があったり、バックホーによって幅約2mで溝状に大きく抉られるなど、大きく削平されていた。また住居内とその周辺、とくにカマド周辺が顕著だったが、不定型なゴミ穴のような攪乱坑が数多くあり、遺存状態はよくない。なお住居東壁にはS I 013が重複するが、S I 013の掘込みが浅いこともあって、調査時には両者の新旧関係についてははっきりしなかった。なお住居北壁の外側から中央に向かって、縄文時代陥穴のS K 001が重複する。



第7图 SI001 · SI013

住居の平面形態は方形が基本で、主軸長は4.52m、副軸長は北壁のカマドを中心に西側へ折り返すと、主軸長よりやや長い5.12mになって、やや矩形の平面形態に推定できる。それに従えば、推定床面積は23.2㎡になり、53%が調査区内で、調査できた床面積は10㎡程度になる。深さは44cmで、主軸方向はN-6°-Eにとる。埋土は黒褐色土を主体に、ブロック状の茶褐色土を含み、カマド周辺では焼土・砂質土を多く含むようになる。北壁のほぼ中央にあるカマド周辺は攪乱が随所にあり、調査時には焼土が広範囲に散乱し、遺存状況はよくなかった。カマドの袖の構築材は暗灰黄色の砂質土を使用しているが、ほとんど袖の下部構造しか残していない。袖の基底面に粘性がやや強い黒色土を、1cm程度の厚さで敷いて基礎としている。袖の内側や燃焼部の被熱痕跡はさほど顕著ではなく、灰等の堆積もなく、その部分の埋土は白色砂質土・黒色土・焼土の混合土であった。カマド内からはとくに出土遺物はなく、支脚も抜かれていた。以上の状況から勘案すると、カマドは住居廃絶にあたって、ある程度カマドを破壊した上で整理したことをうかがわせる。

住居床面の硬化範囲はカマド前面を中心に広がる。壁溝は幅25cm～30cmとやや広く、深さは10cmほどになる。おそらくカマドを除いて全周するのであろう。支柱穴は住居東半分の住居対角線上に1本ずつあった。いずれも円形の掘方で、東北柱穴では断面観察の結果、柱穴掘方に立柱してから、貼床していることがわかった。柱痕跡こそ確認できなかつたが、住居廃絶時には柱は抜き取らずに切断したようである。深さは北東柱穴で53cm、南東柱穴では上部が削平されて23cmの深さしかなかった。

出土遺物としては須恵器杯(1)・須恵器盤(2)・土師器甕(3・4)などが出土し、ほとんど床面直上から出土した。

S I 013 (第7図)

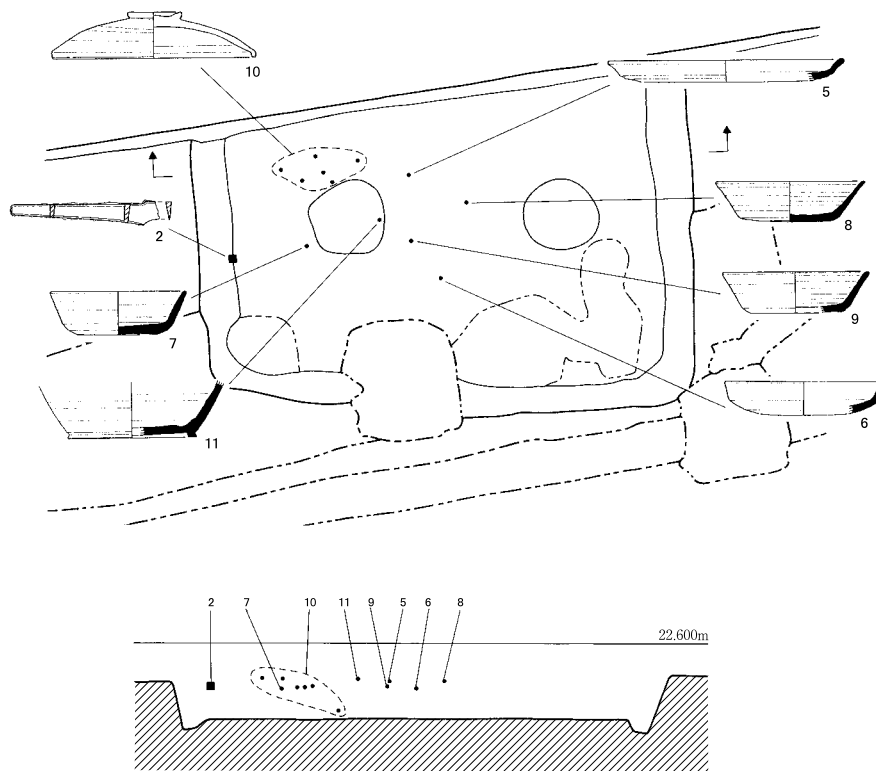
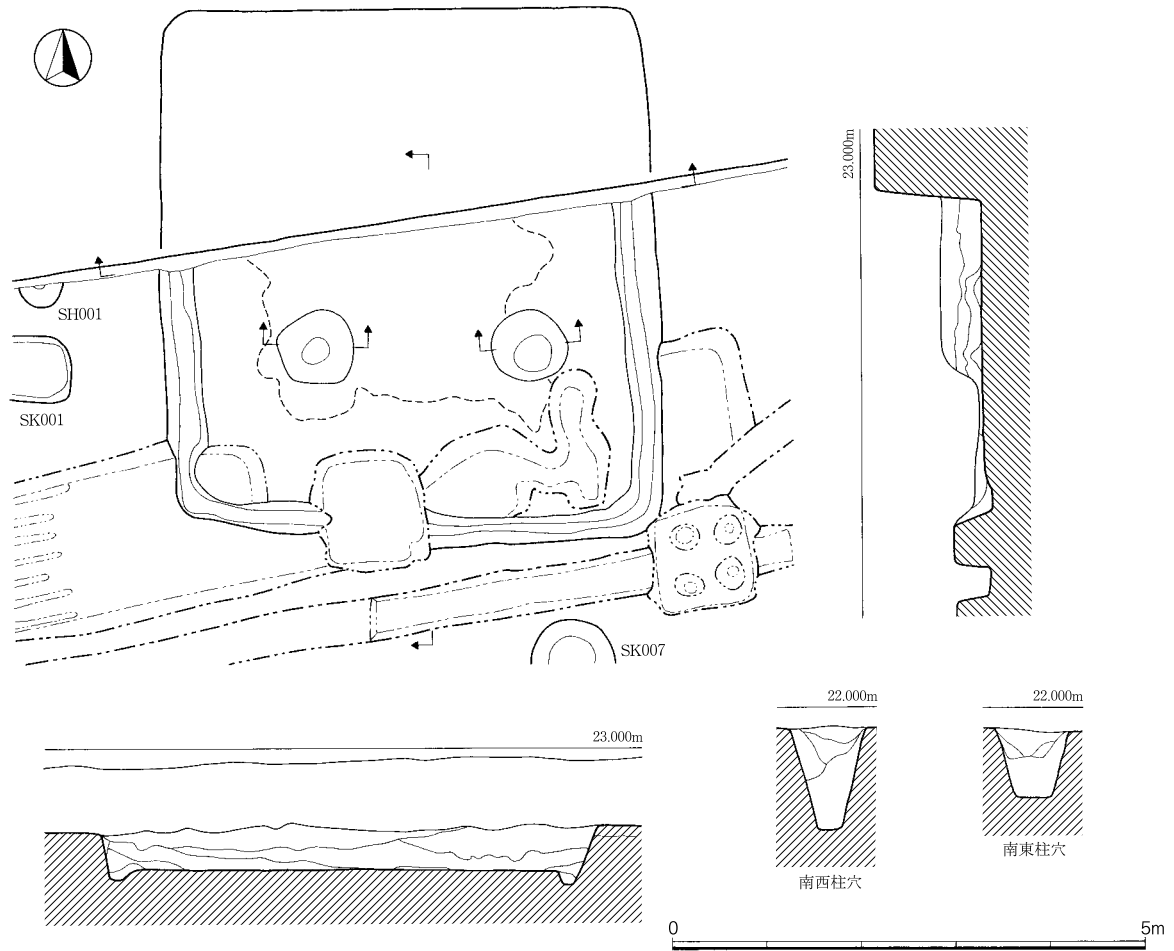
遺存している部分も少なく、深さも10cmほどで、詳しいことはわからない。埋土はロームブロックを含む黒褐色土を主体とする。壁溝等は確認できなかつた。重複するS I 001の埋土上面にはカマドの痕跡もなかつたので、S I 001よりも古い段階の住居になるのであろう。出土遺物はとくにない。

S I 002 (第8図、図版3)

調査区中央のやや西寄りの北側に位置する。住居のほぼ北半分が調査区外になる。住居南半部はS I 001と同様、バックホーによる幅約2mの溝状掘削によって大きく削平され、住居南半部の遺存状態はよくない。なお調査した範囲では単独の遺構になる。

住居の平面形態は方形で、東・西壁ともにカマドの痕跡はなかつたので、カマドは北壁に敷設されたと考えられ、主軸方向は南北方向になるであろう。第5トレンチでは住居の輪郭は確認していないので、それを超えることはない。そうすると副軸長は5.24mで、主軸長については支柱穴の位置等から推定すると5.7mほどになって、平面形態は主軸長方向に長い矩形に復元できる。それをもとに床面積を推定すると29.0㎡になり、調査したのはそのうちの58%に相当する。深さは50cm～56cmで、主軸方向はN-2°-Wになる。埋土は暗茶褐色土を主体とし、上層では焼土塊・白色砂質土を含み、径2,3cmのロームブロックや黒色土塊を含む。南北の断面で南東柱穴の周辺で、床面から盛り上がるように堆積する埋土を2か所で確認した。ローム粒・ロームブロックを主体とし、床面精査時にはとくに留意することなく除去してしまったために、平面的な広がりについては確認できなかつた。

住居床面は支柱穴に囲まれた範囲を中心に硬化範囲が広がる。壁溝は幅広く40cmほどあり、深さは10cm～16cmある。支柱穴は南壁に平行するように東西に1本ずつみつかった。柱穴埋土の断ち割りの結果、



第8図 SI002

埋土はぼそぼそした締まりのないローム土で、柱痕跡もなかったことから、いずれも柱を抜き取ったものと考えられる。そうすると住居断面で確認した、床面上に盛り上がり堆積していたローム土を柱抜き取りと関連させて理解すると、柱抜き取り時に掘り返した土を柱穴周囲に排土したと考えることもできる(水ノ江ほか2002)。南東柱穴は深さ76cmで、円筒状の掘方で底面を平坦にならしている。南西柱穴は深さ109cmあり、底面が小さい逆円錐状の掘方になっている。なお梯子穴については、想定される位置が攪乱されているものの、攪乱坑がさほど深くはないにもかかわらずその痕跡を確認できないので、もともとなかったのであろう。

出土遺物は土師器甕を中心にテン箱⁽²⁾で約2分の1出土し、須恵器盤(5)・須恵器杯(6~9)・土師器蓋(10)・須恵器長頸瓶(11)などが出土し、接合資料の多くが埋土上層に集中する傾向があった。

S I 003 (第9図, 図版3)

調査区中央のやや西寄りに位置する。南東隅にはS I 004が重複し、埋土の重複状況や出土資料から、S I 003が新しい。北壁中央のカマドの一部にはS K 007が重複する。西壁から南壁にかけて攪乱坑がいくつかあり、大半は板ガラスや焼却灰を捨てたゴミ穴で、掘込みの深いものはコンクリート製の電柱を立てていたものである。また北半部には重機による浅い溝状の攪乱が東西に走り、遺存状態はよくはない。

住居の主軸長・副軸長とも3.4mになり、隅にかなり丸みをもった正方形の平面形態になる。壁溝がなく、床面積は11.0m²で、深さは25cm~31cmになる。今回報告するなかでは、住居の全体像が明らかになった数少ない例になる。主軸方向はN-4°-Eにとる。埋土は大きく2層に分層した。上層は粗いローム粒を多く含む、やや黒みがかかった暗茶褐色土で、下層は粗いローム粒とロームブロックを含む、茶味の強い暗褐色土になる。

カマドはほぼ中央部がS K 007によって壊され、煙道部は確実に削平されていた。「ハ」の字状に開く両袖がかるうじて残る程度で、遺存状態はよくなかった。両袖は白色砂質土を構築材とする。燃焼部は被熱痕跡が顕著で、灰の堆積も確認できた。燃焼部手前にはカマドの基礎としていた厚さ5cmの黒褐色土を確認した。カマド内からは支脚や土器類などの出土遺物はとくになかった。

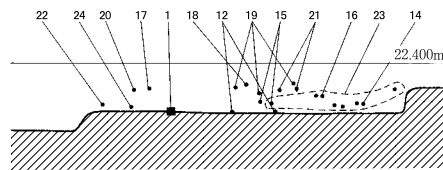
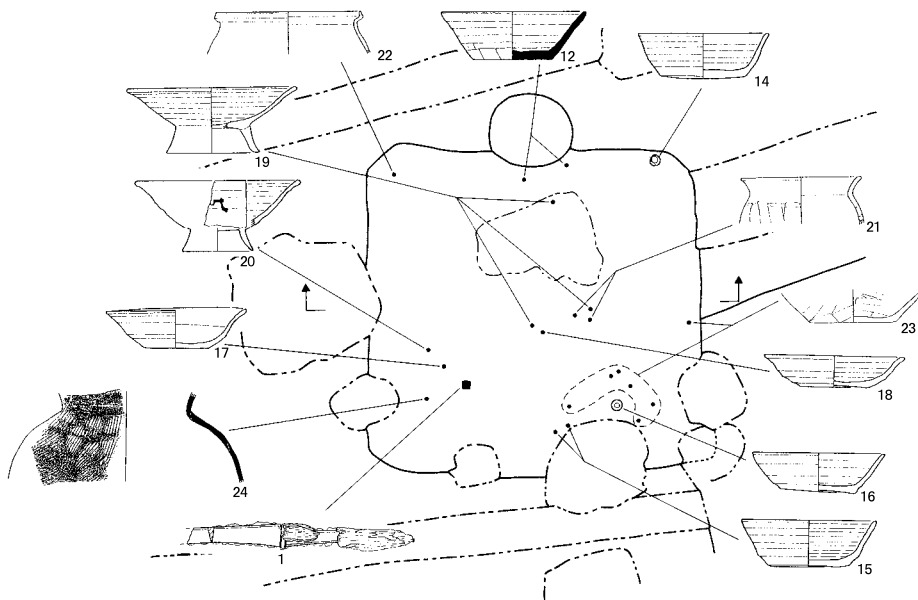
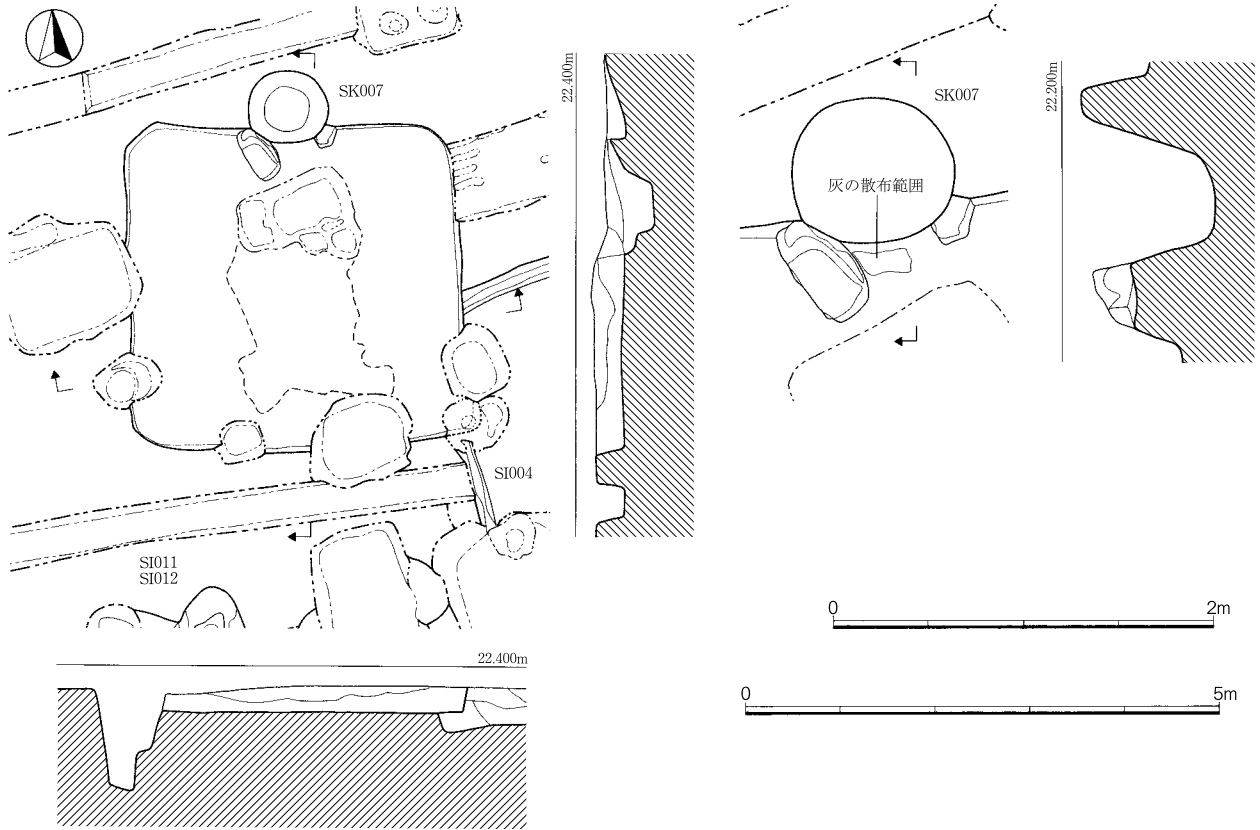
住居床面の硬化範囲は住居中央を中心に、主軸方向に広がる。柱穴は床面上には確認できなかった。また床面には柱を直接床に立てたときに生じる荷重の痕跡も残っていなかった。

出土遺物は杯類(12~20)・甕(21~23)などが出土したが、時間幅のある資料が出土しており、出土レベルはやや錯綜しているが、新しい段階のものほど上層から出土する傾向があった。上部にその時期の何らかの掘込みがあった可能性があり、それは層位の上層と下層の分層とも対応するのかもしれない。ただ断面で観察する限りでは、仮に層位の境界が掘込みの掘方だとしても、明瞭な立ち上がりはないので、竪穴住居の壁のような垂直に掘込む痕跡にはならないであろう。

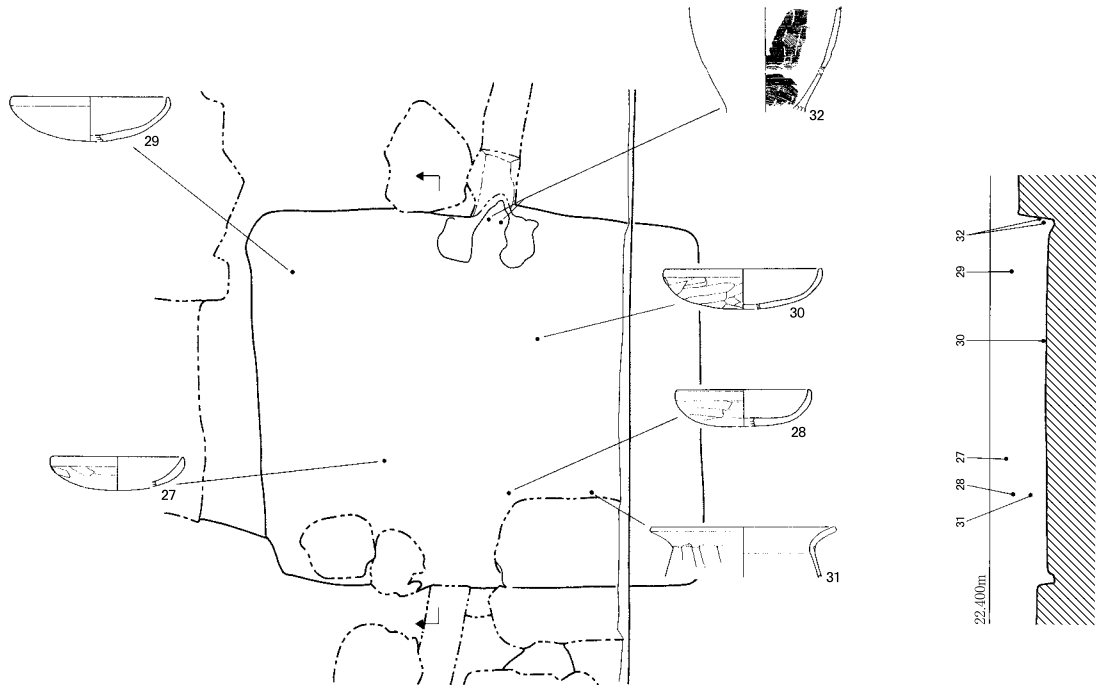
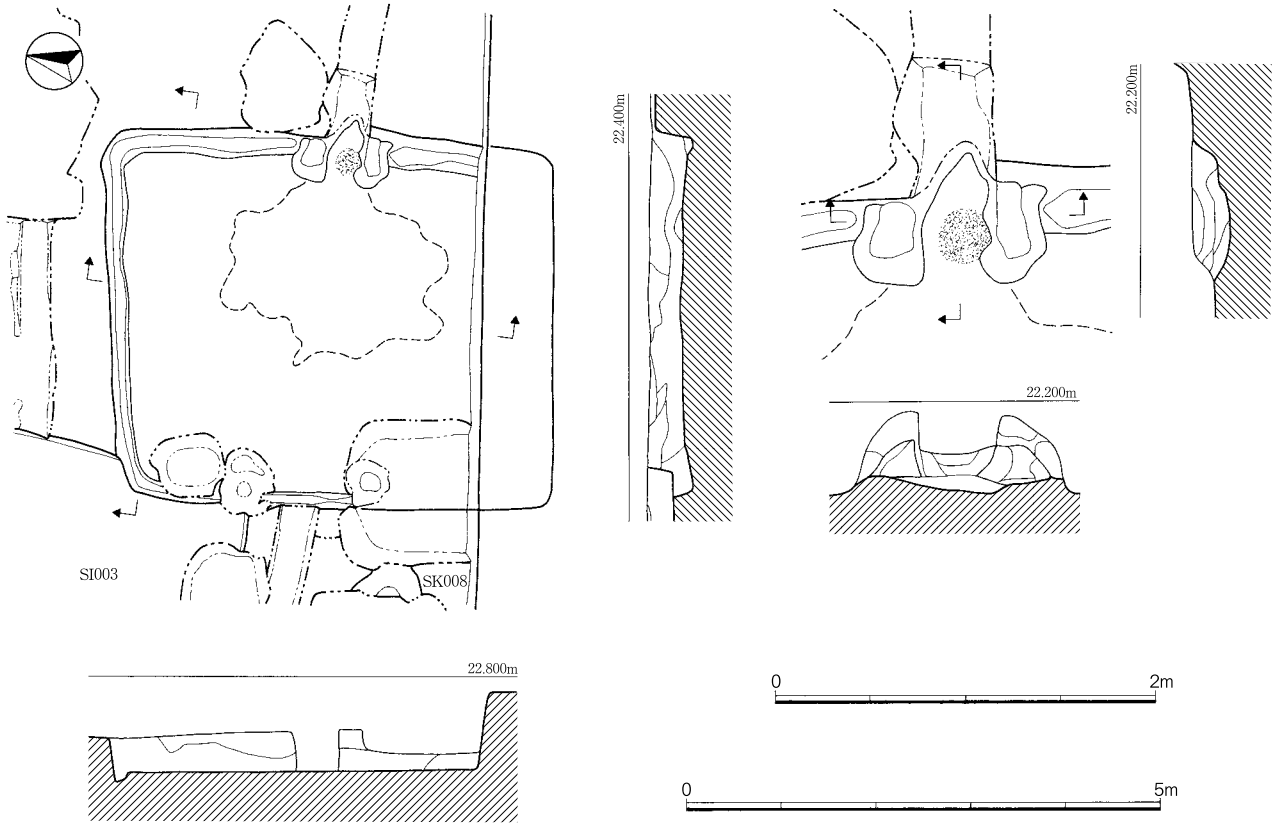
S I 004 (第10図, 図版4)

調査区中央の南端に位置し、住居の南半部が調査区外になる。S I 003が北西隅で重複する。住居中央には東壁に敷設されたカマドの中心を通過するように、東西にヒューム管の埋設溝が床面に届くほどの深さで掘削されていた。また西壁には板ガラス等を廃棄したゴミ穴があり、遺存状態はよくない。

住居の北東隅が鋭角になり、北西隅が鈍角になる。平面形態は方形を規範としながらも、台形もしくは菱形に推定できるが、東壁はカマドを境にして、壁の延長線がやや屈曲するので、定型的な平面形態には落ち着かないのかもしれない。ここでは台形を想定して復原した。主軸長は3.9m、副軸長は4.7mに推定



第9図 SI003



第10図 SI004

した。それに基づくと床面積は18.2m²になり、そのうち17%が調査区外になると推定した。調査できた床面積は12.4m²になる。主軸方向はN-14°-Wになる。埋土は床面直上に堆積する暗黄褐色土は、ローム粒・ロームブロックを多く含み、黒褐色土を少し含むためにやや黒みをおびるものの、その性状から埋戻し土と考えられる。上層の一部にも径3cmほどのロームブロックを多く含む層もあり、住居上層まで一気に埋め戻した可能性がある。深さは44cm～45cmになる。

カマドは埋設溝によって削平され、煙道部はそれによって完全に壊されている。袖は精査の結果、袖の芯は床面から25cmほどの高さしか残っていなかったが、灰黄褐色の砂質土を構築材としていることがわかった。袖の内側は被熱によって赤化し、硬化していた。両袖から燃焼部の基底面には、粘性の強い黒色土を最大厚8cmほどで敷いている。燃焼部には砂質土を含む黒褐色土・暗茶褐色土などが堆積するだけで、灰等はなく、支脚も抜かれ、おそらく住居廃棄時にある程度の片付けが行われたのであろう。カマド内からは土師器甕片(32)が出土した。

住居床面はカマド前面から中心部にかけて、かなり堅く締まった硬化範囲が広がるが、通常、住居の出入り口と考えられる、カマド対向壁近くまで及んでいないのが特徴である。壁溝は幅20cm～30cmとやや出入りがあり、深さは10cmほどになる。調査した範囲では、カマド部分を除いて全周する。柱穴はなく、床面に柱の加重を受けた痕跡もなかった。

出土遺物としては土師器杯(27～30)・土師器甕(31・32)などが出土し、27～29は埋土上層から出土し、32はカマド燃焼部から出土した。

S I 005 (第11図, 図版4)

調査区南東隅に位置し、住居の北壁ごく一部を調査しただけなので詳しいことはわからない。北壁はN-26°-W方向を示す。深さは約40cmあり、黒褐色土の埋土が堆積していた。最下層では焼土粒と白色砂質土を含むので、他の多くの住居がそうであるように、カマドは北壁にあったのであろう。床面は壁際ということもあってか軟弱で、明らかな壁溝も確認できなかった。

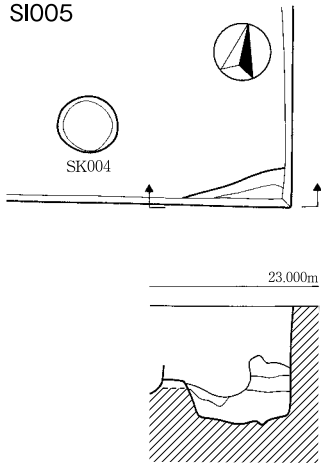
出土遺物としては須恵器・土師器杯、土師器甕などの小片が9点(52g)出土しただけで、とくに図示できるものはなかった。

S I 006 (第11図, 図版4)

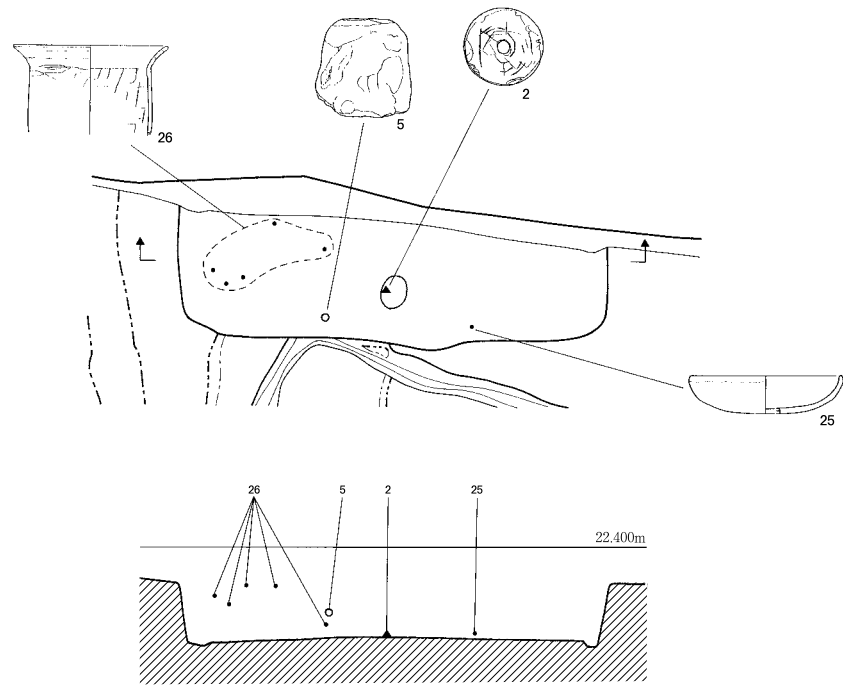
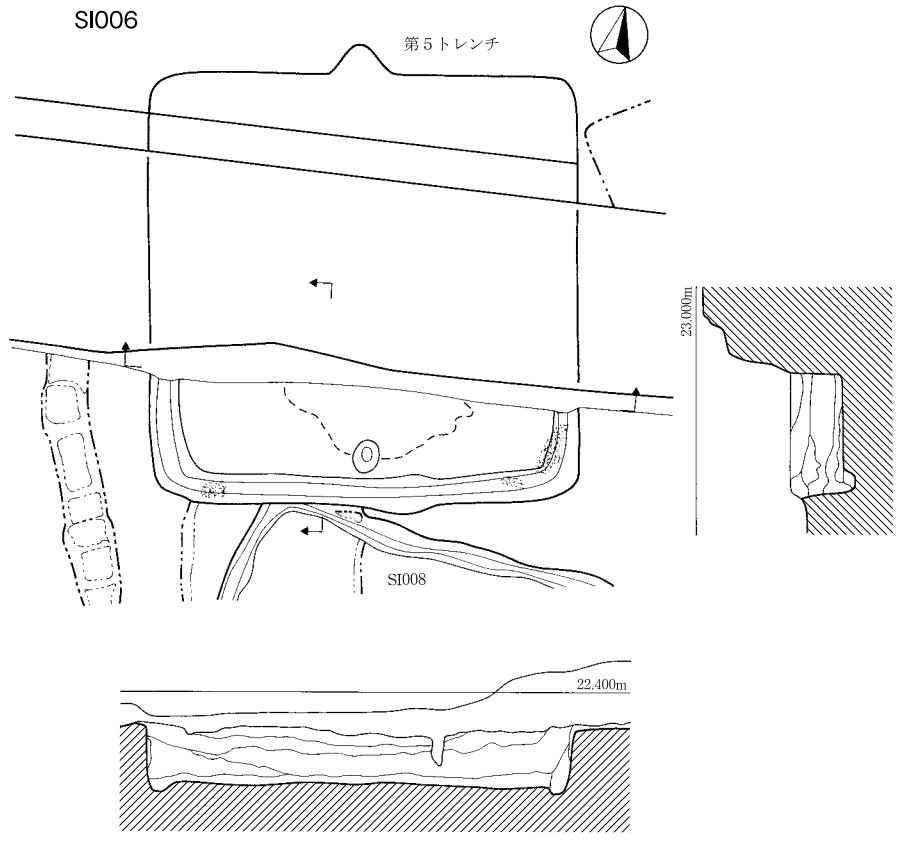
調査区東部の北端に位置する。住居北半の大半は調査区外になるが、その一部については確認調査の第5トレンチで確認できたが、周囲がシミ状に変色して住居の輪郭をすべて捉えきれなかったので、幅30cmほどのサブトレンチを設定して、住居埋土を床面まで掘りあげて、遺構の立ち上がり等を精査した。住居南壁の一部が浅く攪乱されている以外は、トレンチ部分も含めて遺存状態は良好であった。なお南壁の一部がS I 008と接する。

以下の遺構の規模に関しては、できるだけ住居の全体像が把握できるように、トレンチ部分の調査成果も加味した。主軸長・副軸長とも4.54mで、平面形態は隅丸の正方形になる。床面積は20.6m²になり、そのうちの3.4m²、26%を調査したことになる。深さは67cmあった。主軸方向はN-13°-Wにとる。埋土は上層が暗褐色土で、その性状からでは生成要因を説明できないが、中層の層厚20cm～30cmの暗黄褐色土は、径5cmほどのロームブロックと粗いローム粒を多く含み、埋戻し土と考えるのが妥当であろう。壁はほぼ垂直に立ち上がるにもかかわらず、壁際の埋土には、壁の崩壊土を確認できなかったため、これも住居の埋戻しを肯定する証左になるかもしれない。床面直上の暗茶褐色土は焼土粒とともに、黒色土塊も

SI005



SI006



第11図 SI005・SI006

含み、住居廃絶に伴って何らかの焼却行為があったことをうかがわせる。壁溝上面でも3か所で、焼土がまとまって堆積しているのを確認した。

カマドはサブトレンチで確認しただけなので詳しいことはわからないが、北壁のほぼ中央につくりつけ、袖の構築材に暗灰黄色の砂質土を使用している。住居が比較的深いこともあって、遺存状態は良好な部類になるであろう。なおサブトレンチ精査時に、完全な状態の土製支脚（7）が1点出土した。

住居床面は、本調査を実施した範囲では、住居中央部に硬化範囲が広がるようである。壁溝は幅32cm～35cmとやや広く、深さは2cm～8cmであった。サブトレンチ部分ではトレンチの幅が狭かったこともあって、壁溝までは精査できなかったが、おそらくカマド部分を除いて全周するのであろう。支柱穴については、位置的に南西柱穴が床面上でみつかったもよかったがなかったため、仮に住居の対角線上に支柱穴が配置されていたのであれば、住居の内寄りに配置されていたのかもしれない。それ以外の柱穴としては南壁中央の床面際に深さ17cmの梯子穴と考えられる、南北にやや長い掘込みがあった。掘方は住居外側に向かって少し傾斜する。

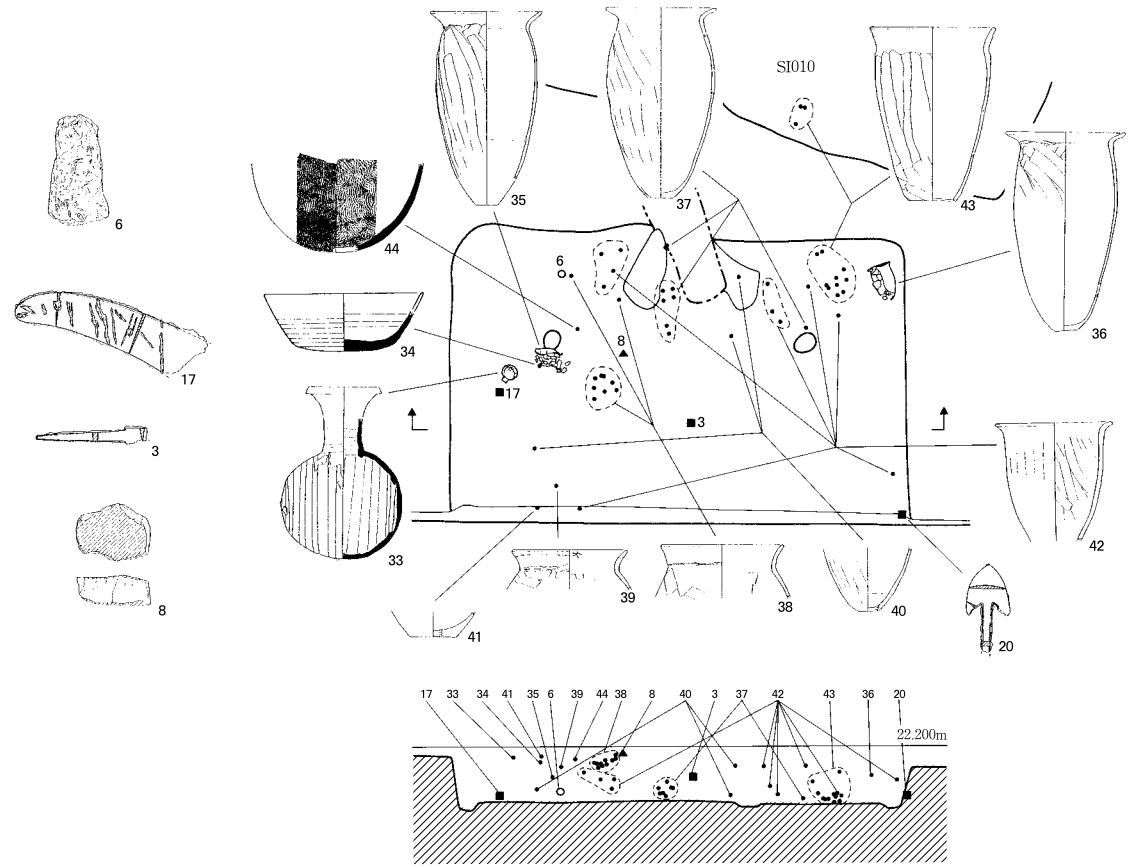
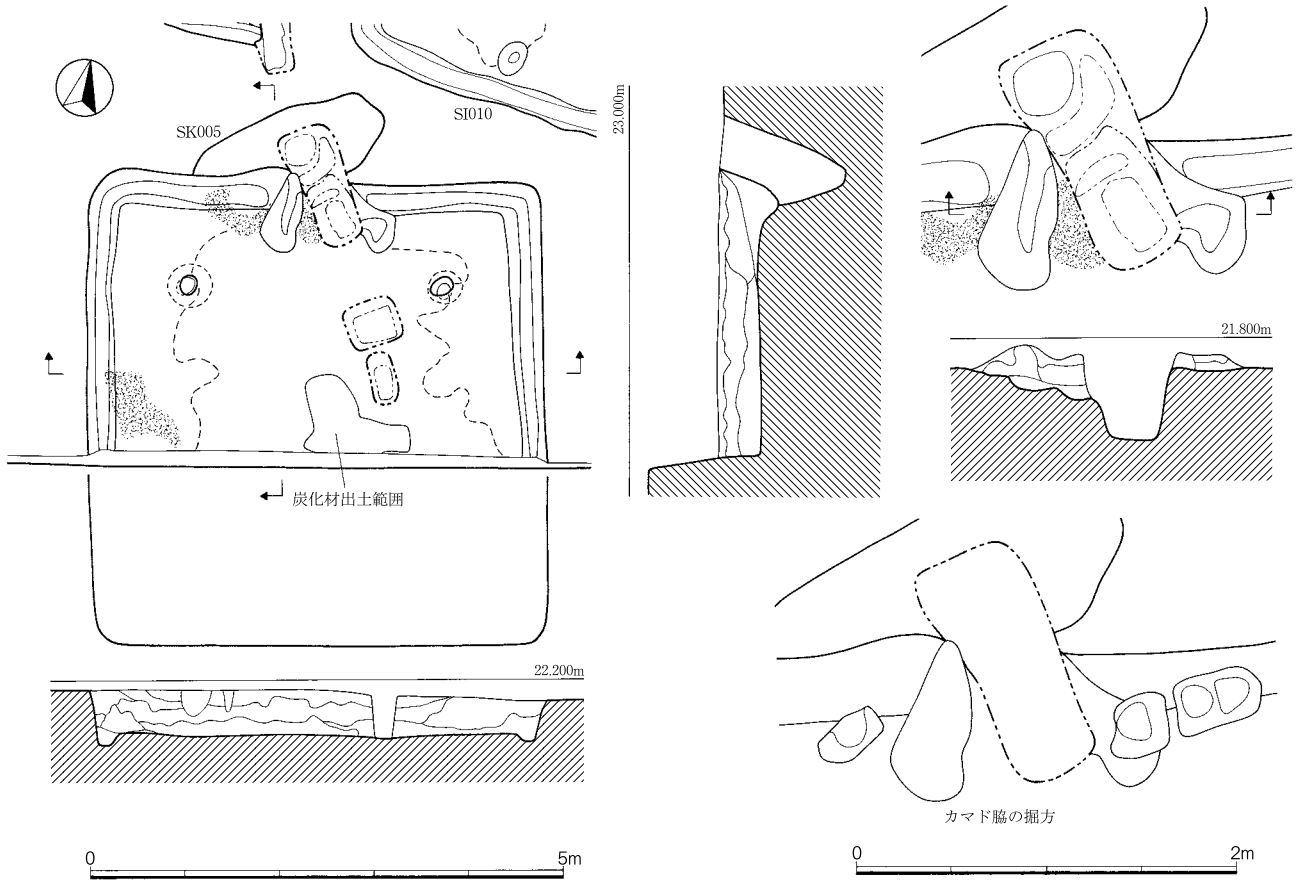
出土遺物は調査面積が狭いこともあって少なかったが、土師器杯（25）は南壁の壁溝上面から出土した。土師器甕（26）は住居南西部で上層から下層にかけて、高低差をもって破片が散乱しており、住居の埋戻しと同時に廃棄されたことをうかがわせる。

S I 007（第12図、図版5）

調査区東部の南端に位置し、住居の約南半分が調査区外になる。S I 010の南に隣接し、住居北部に縄文時代の陥穴S K 005が重複する。なお住居北側から連続する、一辺数十cmで深い方形の攪乱が、北壁中央のカマド部分から住居中央に向かって存在する。カマド部分を除いては遺構の損傷度合いは比較的少ないといえよう。

住居の平面形態は方形を基本とし、副軸長は4.87m、主軸長は支柱穴の配置状態等から勘案して、副軸長とほぼ同じ長さを想定した。それに従って床面積を推定すると24㎡になり、約40%が調査区外ということになる。深さは54cmあり、比較的深い部類になる。主軸方向はN-11°-Wにとる。埋土は最上層に粗いローム粒を含む暗褐色土が層厚10cmほどで住居中央部に堆積し、その下部に炭化粒・焼土粒を含み、粗いローム粒と径2cmほどのロームブロックを主体とする暗褐色土がやや厚く堆積し、その下の床面直上の暗褐色土ではカマド崩壊土の砂質土や焼土を含むようになる。全体にロームブロックの含有率が高く、埋戻し土と考えて差し支えないであろう。

カマドは燃焼部の中央から右袖の一部にかけて攪乱坑で大きく抉り取られ、カマドの遺存状態はよくなかった。両袖は灰黄色の砂質土を構築材とするが、残っていた左袖の内側は部分的に赤化する程度で、顕著な被熱痕跡はなかった。燃焼部には灰と焼土が10cmほどの厚さで堆積し、住居の廃絶に伴ってカマドの焼却灰は掻き出してないようである。ただし土製支脚（6）はカマドから抜かれた位置で出土している。カマドの基底部には径1cmほどのロームブロックを含む暗茶褐色土を使用していた。なおカマド掘方として、袖の左右の位置で3か所、締まりのないロームブロックと黒色土の混合土を埋土とする円形の掘込みがあった。右が深さ44cmで、平面規模は29cm×46cmと、東西に長い。右袖の下面の掘込みは、径32cmほどの不正円形で、深さは47cmあった。左の掘込みはS K 005の埋土に紛れて重複部分については不明になってしまったが、深さ56cmで、やや東西に長い掘込みになる。これらの掘込みは最終的なカマドより以前に、カマド上面に設えた棚等を支えるための柱穴などの可能性がある。



第12図 SI007

住居床面の硬化範囲は、カマド前面から住居中央に向かって広がる。住居中央には110cm×83cmの範囲で、炭化材を主とした散布範囲があった。壁溝は幅26cm～36cmと広く、深さは14cm～15cmになる。カマド部分を除いて全周するのであろう。支柱穴は住居北半分に、東西1本ずつみつかった。いずれも掘方は円形を基本とし、床面での径は24cm前後と小さいが、精査の結果、柱穴掘方に立柱してから貼床しているためと判断した。したがって柱痕跡は確認できなかったが、柱穴部分に柱を残したまま住居を廃絶したのであろう。深さは北東柱穴で55cm、北西柱穴で72cmあった。

出土遺物は土器類がテン箱1箱分出土し、須恵器フラスコ形提瓶(33)・須恵器杯(34)・須恵器甕(44)・土師器甕(35～43)・土製支脚(6)などがあり、上下層をまたいで接合していたり、破片がかなり広範囲に散乱するものなどがあった。なかでも土師器甕(43)は、隣接するS I 010出土資料との接合資料で、近距離ではあるが、今回報告するなかでは唯一の遺構間接合の資料になる。なお自然遺物としてハマグリを主体に数点出土したが、チョーク化して遺存状態が悪く、とくに分析等はしなかった。

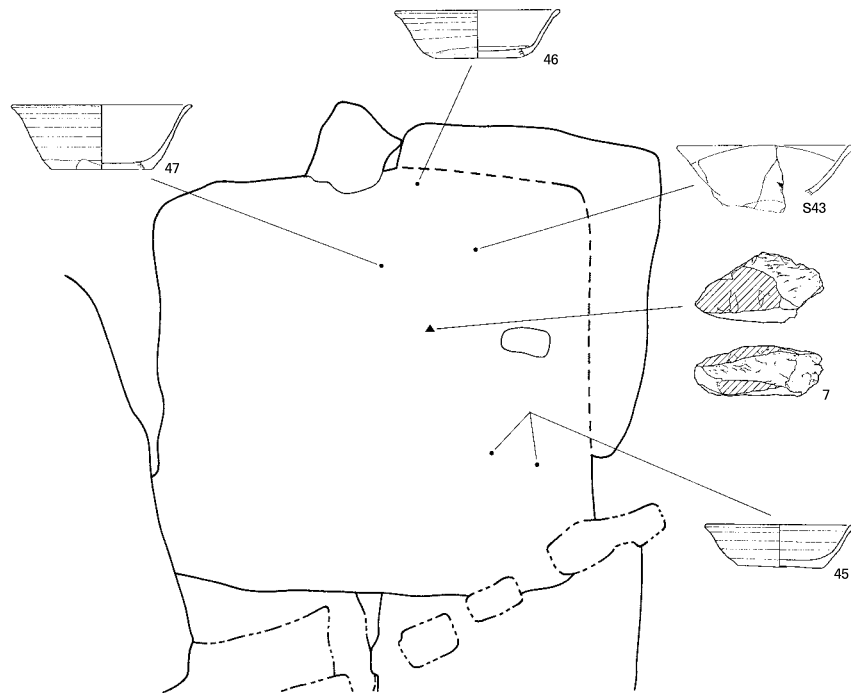
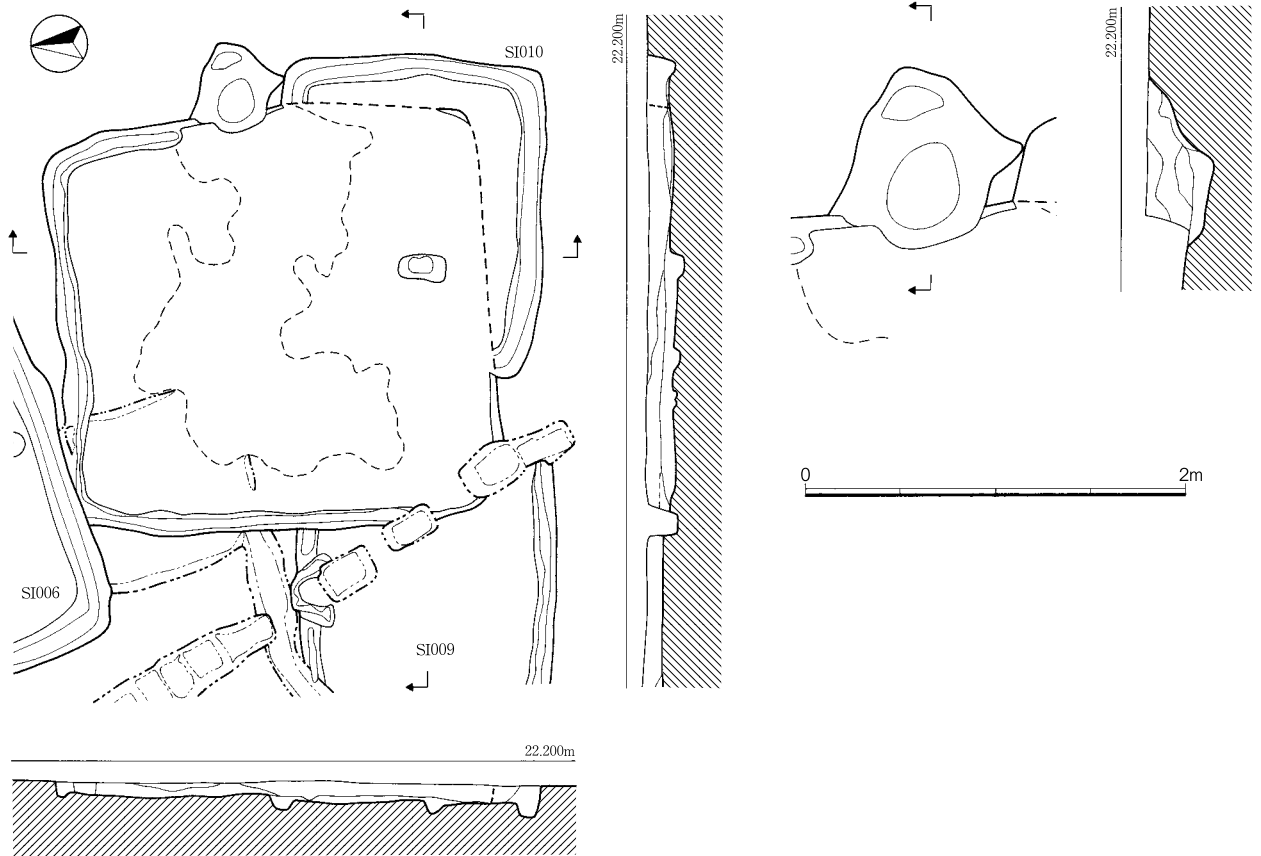
S I 008 (第13図, 図版4・5)

調査区東部で、S I 006とS I 007に挟まれ、3軒の竪穴住居が重複するなかでもっとも規模の大きい住居である。南西でS I 009と、南東でS I 010と重複する。S I 006とは北西隅で接する。北西隅には2m四方の浅い攪乱がある程度で、全体に大きくは攪乱されていなかった。ただ住居が比較的浅く、重複部分を平面や断面で確認しても、遺構上面が整地した際の輻圧の影響でかなり堅く締まっており、色相等の変化から遺構重複状況を確認することができなかった。そのため重複部分から外に出る遺構輪郭線をたよりに重複状況を観察した結果、S I 010のカマドの痕跡がどこにも見当たらないことから、S I 010のほうが古いと想定して調査にとりかかった。S I 010のなかではS I 008の立ち上がりを把握できず、断面でも明瞭な立ち上がりがなく、結果としてS I 008とS I 010を同時に調査せざるを得なくなった。ただS I 008の埋土下面でS I 010のカマド痕跡を確認でき、S I 008の床面の硬化範囲がS I 010の上面に及んでいたことから、当初の想定どおりS I 010のほうが古いと判断するに至った。

推定も含めれば、ほぼ住居全体の輪郭を把握することができた。住居は方形を基本とし、主軸長は4.32m、副軸長は4.57mで、正方形に近い方形の平面形態になる。南東隅については、S I 010の埋土になる部分で、隅部を形成するように小さな三日月形の硬化部分があったので、その部分を住居南東隅と考え、図示した。床面積は20㎡になり、深さは21cm～27cmになる。主軸方向はN-91°-Wになる。埋土は大きく上下2層に分層したが、上層は粗いローム粒・焼土粒を含む暗茶褐色土で、下層はロームブロックを少し含む暗茶褐色土であった、

カマドは東壁の中央よりやや北寄りに位置する。煙道部は壁を73cmほど掘込む。住居内に袖等は確認できず、カマドの埋土中にも砂質土の散乱もなく、カマドの掛け口をどのように工作していたのか不明である。最下底面にはロームブロックを主体とする黄褐色土が堆積するが、被熱痕跡は顕著ではなかった。その直上には部分的に灰を含む、焼土塊を主体とした赤褐色土が堆積していた。カマド内からはとくに出土遺物はなく、使用痕跡をほとんど留めていなかった。

住居床面はカマド前面から、対向壁に向かって硬化範囲が広がる。壁溝はカマド左脇から南西隅にかけて省略されているが、それ以外の部分では幅20cm～28cm、深さ16cmの壁溝が敷設されていた。柱穴はなく、床面に柱の荷重を受けた形跡もなく、屋根の架構方法については不明である。なお南壁中央近くに26cm×48cmで、深さ21cmの掘込みがあり、位置的に南壁はカマドの対向壁にはならないが、梯子穴になる可能性



第13図 SI008

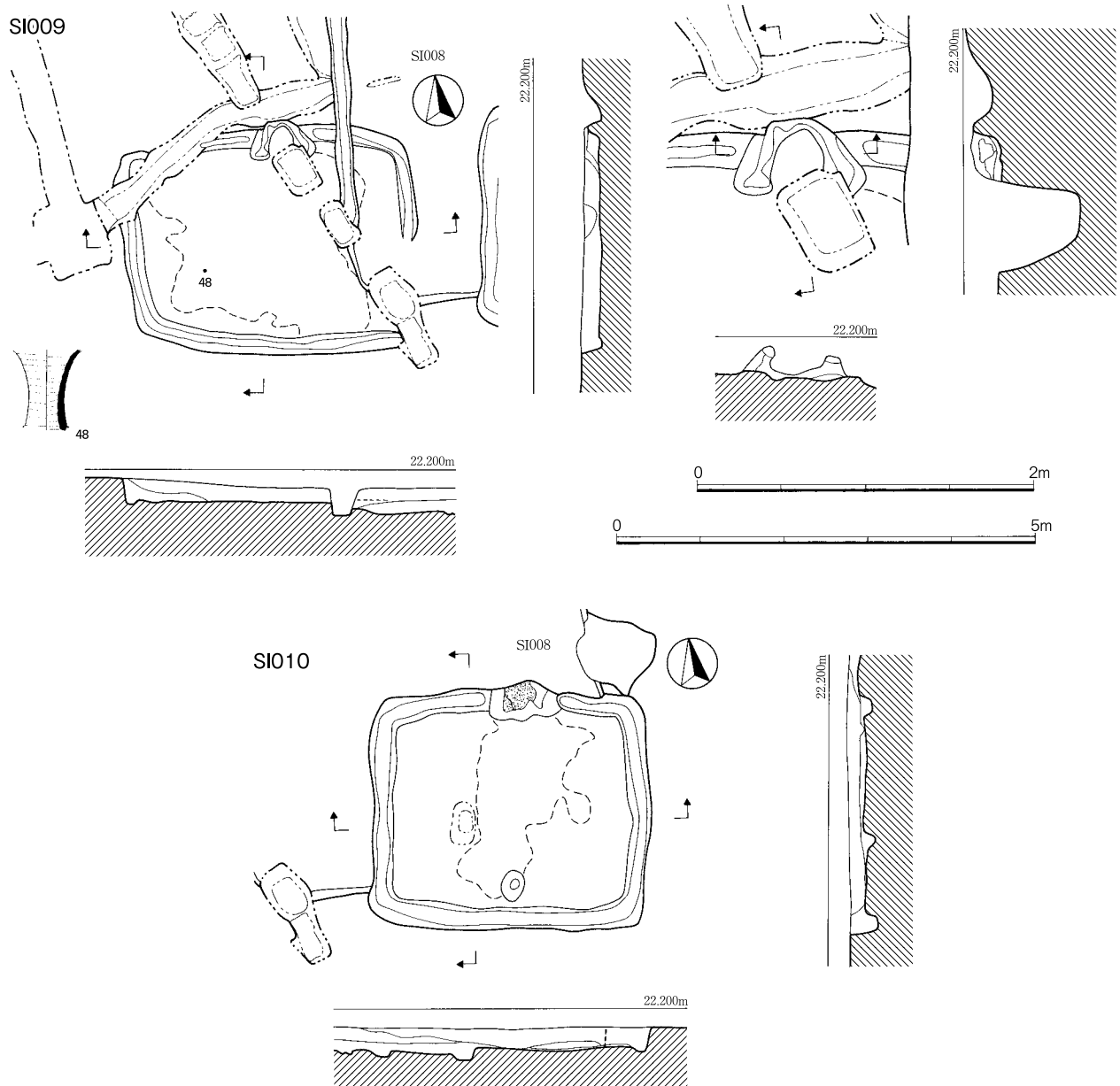
がある。

土器類はテン箱3分の1ほどあり、土師器杯(45~47)を主体に出土したが、量的には少ない。

S I 009 (第14図, 図版5)

調査区東部でS I 008の南西隅に重複し、それによって住居東部の上面は削平されている。またS I 007から連続する、深い方形の攪乱が、北壁中央から住居南東隅に向かって存在する。北西隅には管の埋設溝が東西に走行するなど、遺存状態はよくない。なおS I 010とは80cmほどの間隔をおいて、東西に並列する。

住居の平面形態は長軸方向に長い矩形で、主軸長は2.74m、副軸長は3.50mになり、深さは34cmある。床面積は8.9m²で、今回報告するなかではS I 010と並んで小規模な部類に属す。主軸方向はN-6°-Eになる。埋土はS I 008と同質の粗いローム粒・焼土粒を含む暗茶褐色土で、壁際には焼土粒・炭化粒を含む、暗茶褐色土が堆積していた。カマドは北壁のほぼ中央にあり、壁を10cmほど掘込んで煙道部とし、そこから左右に半円形の袖部分が延びる。袖は暗灰黄色の砂質土を構築材とするが、下部構造しか残って



第14図 SI009・SI010

いない。袖の内側に相当する部分は被熱で赤化していた。カマド内には灰等はなく、支脚も抜かれ、住居廃絶に伴って整理されたのであろう。

住居床面はプライマリーに残った部分を覆うように硬化範囲が広がる。壁溝は幅約20cmで、深さは8cm～15cmあり、カマドを除いて全周する。なおS I 008に重複する部分の壁溝は、S I 008の掘方部分からみつかったものである。床面上に柱穴等の掘込みは確認できなかった。

出土遺物としては須恵器長頸瓶頸部(48)などが出土したが、全体量は少なかった。ほかに土師器の小片が56点(426g)出土したが、杯には非ロクロ成形とロクロ成形の2者が混在していた。

S I 010 (第14図, 図版4・5)

調査区東部でS I 008の南東部で住居の大半が重複するが、攪乱によって大きく乱されてはいない。今回報告するなかでは、比較的全容のわかった数少ない例になる。

住居の平面形態はS I 009に似て、副軸長方向に長い矩形で、主軸長は2.72m、副軸長は3.30mになる。床面積は9.2㎡になり、その大半がS I 008の床面下ということになる。主軸方向はN-9°-Eになる。埋土はS I 008の貼床土として遺存していた層位が、本来の埋土下層に相当することになり、数cm大のロームブロックを多く含む暗茶褐色土になる。深さは30cmある。

カマドは北壁のほぼ中央に位置するが、カマド基底部分S I 008の床面として使用されていたために、基底部分が貼床状に堅く締まっていた。袖構築材は灰白色の砂質土で、燃焼部あたりに焼土粒・砂質土粒などが混在していた。煙道部は壁を少し掘込む程度だったようである。

住居床面はカマド周囲からカマド対向壁に向かって、主軸方向に細長く硬化範囲が広がる。その周辺に限定される。壁溝は幅27cm～31cmと比較的広く、深さは7cm～9cmある。カマド部分を除いて全周する。支柱穴はとくに確認できなかったが、南壁中央付近で、不正円形の掘込みを1か所確認した。長軸38cmで、深さは19cmあり、位置的に梯子穴と考えられる。

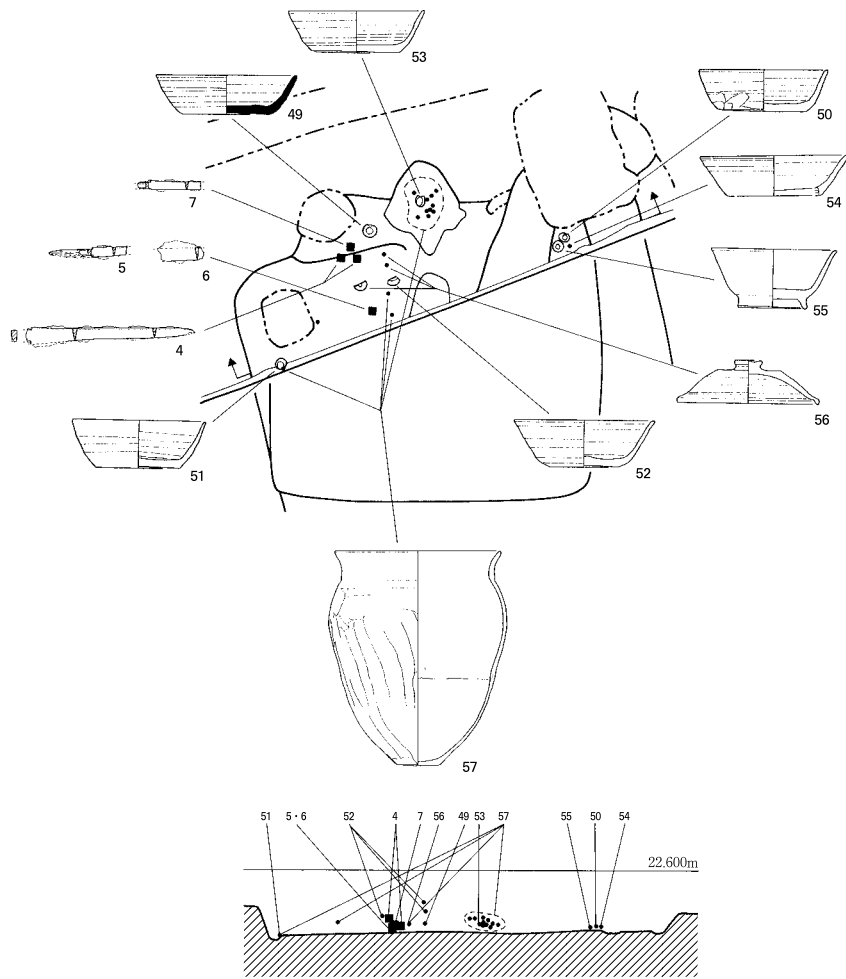
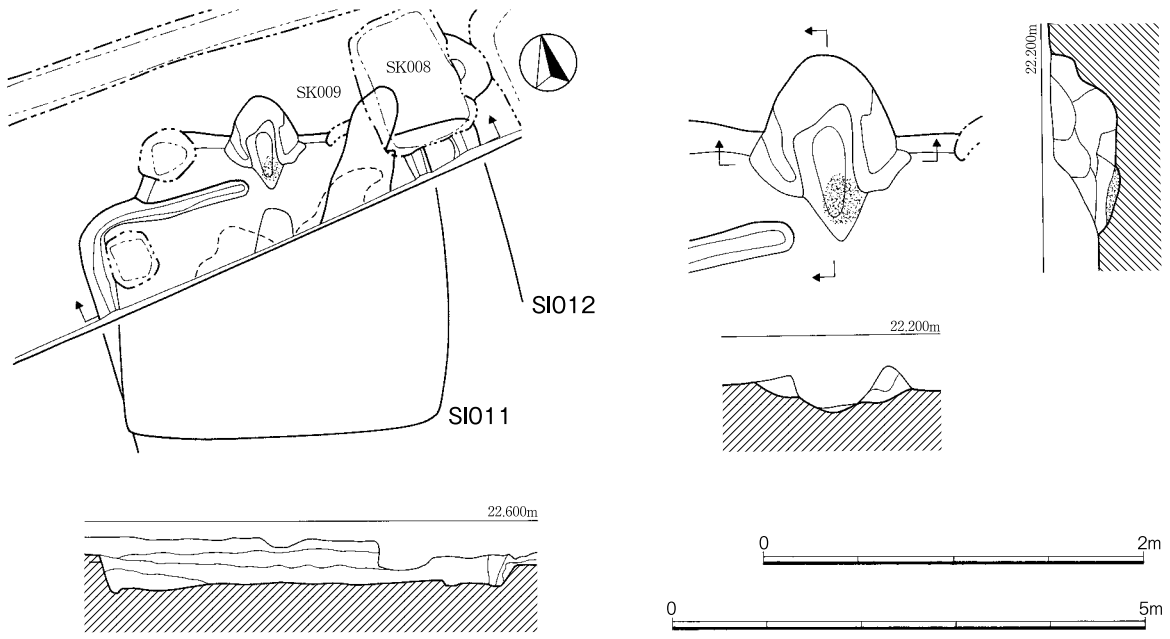
埋土の残る部分が少なかったために出土遺物は非常に少なく、図示できる資料はなかった。

S I 011 (第15図, 図版6)

調査区中央でやや西寄りの南端に位置し、南半分は調査区外になる。S I 012とほとんど重複し、住居東部では縄文時代陥穴のS K 009が重複し、その部分の壁については、S K 009の埋土に紛れてやや不明になってしまった。やや離れて東側にS I 004が位置する。そしてその間には1.43m×1.03mで、深さ67cmの、板ガラス・アンブルなどを大量に廃棄したゴミ穴が掘られており、それによって住居北東部が壊される。また北西隅には径55cmほどの攪乱坑もあり、遺存状態はよくない。

住居の副軸長は3.07mで、主軸長もほぼそれに近い数値になって、正方形に近い平面形態になるのであろう。調査した床面積は3.5㎡になり、深さは23cm～27cmになる。主軸方向はN-16°-Eにとる。埋土は大きく2層に分層し、上層は径5cmほどの焼土塊と黄白色の砂質土ブロックを多く含む暗茶褐色土で、下層は径2cmほどの焼土塊を含む暗茶褐色土であった。このように焼土を多く含むにもかかわらず、完全燃焼してしまったのか、炭化材等の燃料材の痕跡はみつからなかった。

カマドは北壁のほぼ中央にあり、壁を50cmほど大きく掘込んである。袖よりもさらに住居中央寄りまで燃焼部としている。袖は暗灰黄色の砂質土を構築材とするが、燃焼部の基底部分には粘性の強い黒褐色土を最大10cmほどの厚さで敷いている。袖の内側には明らかな被熱痕跡は確認できなかった。また燃焼部の被熱痕跡もさほど顕著ではなく、灰等の堆積や出土遺物もなく、支脚も抜かれて存在しなかった。住居廃絶



第15图 SI011 · SI012

にあたって、カマドはある程度破壊されたのであろう。カマド前面の狭い範囲に床面の硬化範囲が広がる。壁溝はカマド周辺では確認できなかったが、東壁では幅21cm、深さ7cmの壁溝を確認した。柱穴等の施設は確認できなかった。

出土遺物は完形に近い資料が多く、須恵器杯(49)・土師器杯(50・51・53・55)・土師器蓋(56)などはいずれも90%前後遺存する資料である。また土師器甕(57)はカマド内から住居床面に広く破片が散乱していたものである。

S I 012 (第15図, 図版6)

S I 011と重複するが、重複状況を確認できる部分が住居北西隅にしかないにもかかわらず、そこには57cm×48cmの攪乱坑があり、埋土断面で重複を確認することができなかった。ただS I 011の床面上に焼土の堆積範囲があり、それがカマドの痕跡と考えられ、カマドは北壁にあったのであろう。そうした痕跡や遺物の出土状況等から、S I 012が古く、S I 011が新しいと理解した。したがって住居の様相はS I 011の輪郭からはみ出した部分でしかわからないことになる。

副軸長は4.38mあり、深さは34cmになる。主軸方向はN-3°-Eにとり、S I 011とは微妙に方向を違える。壁溝は部分的に確認でき、幅は28cm前後あり、深さは5cm~8cmあった。

出土遺物はとくになかった。

2. 陥穴

3基の陥穴はいずれも堅穴住居と重複してみつかった。位置関係にとくに規則性は認められない。なお第2次調査でも、同形態の陥穴を2基調査している(鳴田ほか 2012)。

S K 005 (第16図, 図版10)

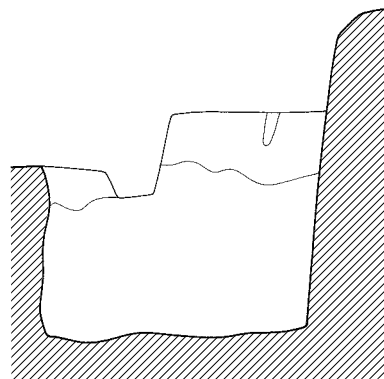
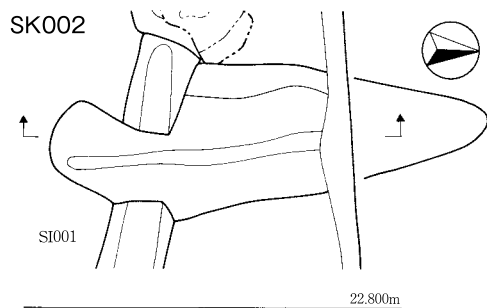
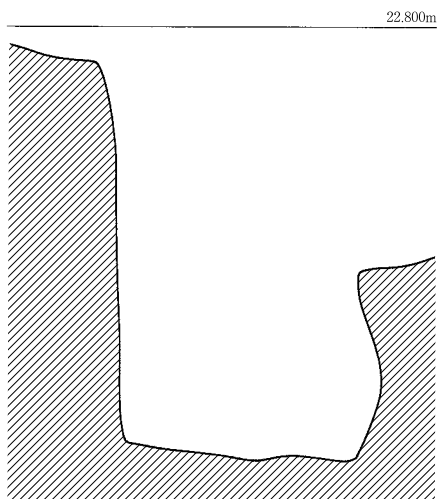
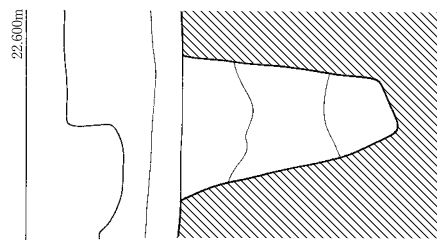
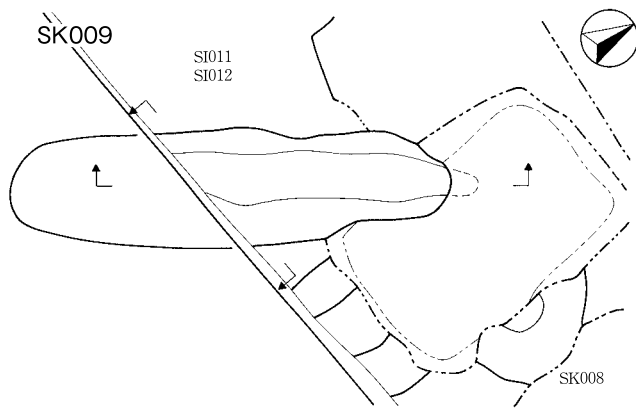
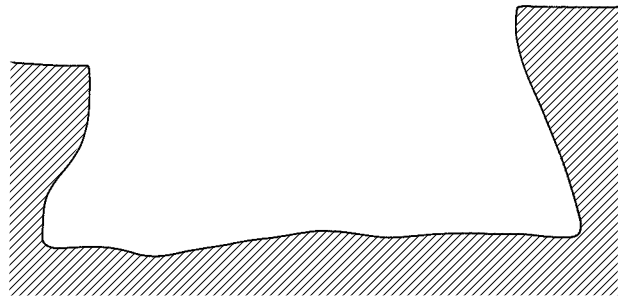
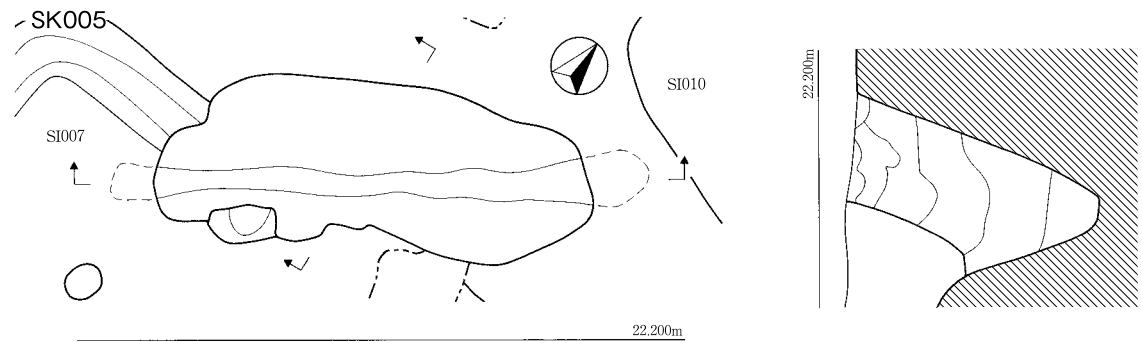
調査区東部に位置するS I 007の北壁カマド部分に重複し、陥穴の南半分の上部は住居によって削平されている。主軸は台地縁辺の線にたいして直交し、主軸方向はN-49°-Eにとる。平面形態は主軸方向に長い長楕円形になる。長軸最大長2.85m、最大幅79cmで、深さは2.12mある。底面の幅は10cm程度でかなり狭くなるが、底面には小穴等の工作はとくに確認できなかった。主軸方向の両端部は23cm~33cmオーバーハングし、球状船首形になっているのが特徴である。横断面は先端部で少し開く「U」字状である。埋土は壁の崩壊土となるロームブロックを含む暗茶褐色土がほぼ水平に堆積し、自然堆積と考えられる。出土遺物はとくになかった。

S K 009 (第16図, 図版10)

調査区西部に位置するS I 011・S I 012の東部の床下からみつかった。南半分は調査区外になる。また東端部の上部はゴミ穴の攪乱によって削平されている。主軸方向はN-33°-Eになる。平面形態は主軸方向にやや間延びした紡錘形である。現存長1.53m、最大幅61cmになり、現存の深さは1.13mだが、住居の深さを加えると1.75mになる。底面の幅は26cm程度でやや広めになるが、底面には小穴等の工作はなかった。北端部は14cm、緩やかにオーバーハングする。横断面は底面が幅広いだけあって逆台形になる。埋土は壁の崩壊土となるロームブロックを含む暗茶褐色土と黒褐色土がほぼ水平に堆積し、自然堆積と考えられる。上面の堆積土はS I 011の貼床土になる。出土遺物はとくになかった。

S K 002 (第16図, 図版10)

調査区西端に位置するS I 001のカマドの東脇でみつかった。北半分ほどが調査区外になる。主軸方向はN-9°-Wになる。調査した範囲での平面形態は、中央部が膨んで、主軸方向にやや間延びした紡錘



0 2m

第16図 陥穴 (SK005・SK009・SK002)

形になるであろう。現存長1.43m，最大幅73cmで，底面の幅は7cm程度と非常に狭い。底面には小穴等の
 工作は確認できなかった。端部はほぼ垂直に掘込んでいる。横断面は緩やかな「V」字状になるが，西壁
 の中位に段を設けている。埋土は上層には壁の崩壊土となるロームブロックを含む暗黄褐色土が堆積し，
 下層はロームブロックを含まない暗黄褐色土が堆積していた。ほぼ水平に堆積し，締まりも弱く，自然堆
 積と考えられる。出土遺物はとくになかった。

3. 土坑

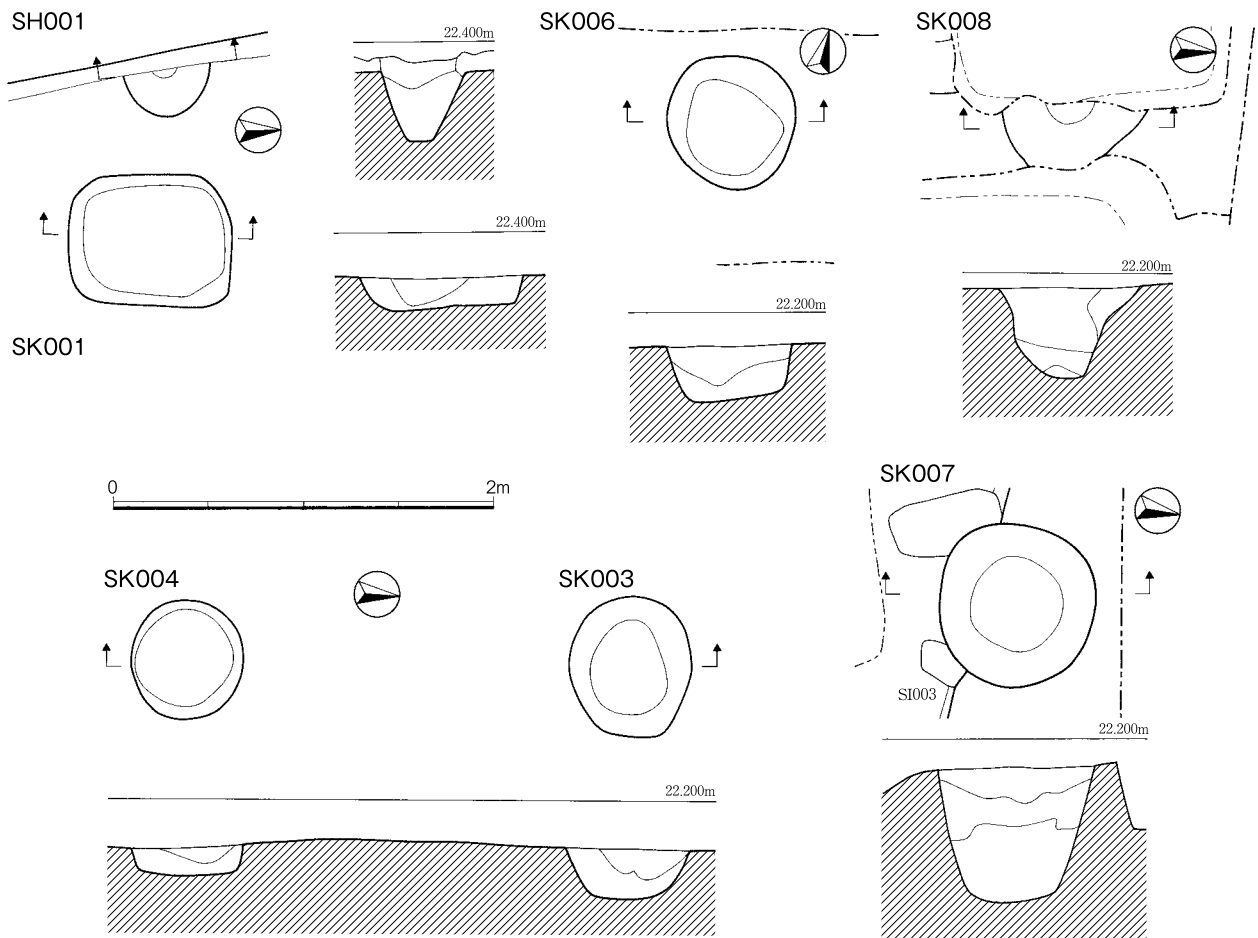
SK001 (第17図，図版10)

調査区西部のS I 001とS I 002に挟まれた地点に位置する。70cm×87cmの隅丸方形の平面形態で，深さは17cmになる。底面は比較的平坦で，壁は緩やかに立ち上がる。埋土はロームブロックを含む暗茶褐色土であった。出土遺物は奈良・平安時代の土師器・須恵器の小片が9点(43g)出土した。

SH001 (第17図)

SK001の北に位置し，北半分は調査区外になる。北側に設定した第5トレンチの西部で掘立柱建物の柱穴らしき痕跡があったので，その関連で精査した。平面形態は円形で，径45cm，深さは43cmになり，やや深めの鉢状になる掘方である。埋土はローム粒を含む暗茶褐色土で，とくに新しい時期の埋土という印象はなかった。ただ柱痕跡はなく，柱穴を構成する掘込みではないであろう。

SK003 (第17図，図版10)



第17図 土坑 (SK001・SH001・SK006・SK008・SK004・SK003・SK007)

調査区東部にあり、S I 010の東に位置する。長径74cm、短径64cmの不正円形である。深さは16cmで、比較的平坦な底面で、壁は垂直に近く立ち上がる。埋土はローム粒を含む暗茶褐色土で、下層には壁崩壊土を多く含む。埋土の性状は竪穴住居のそれと変わらない。出土遺物は土師器甕の小片が2点（15g）出土しただけである。

S K 004（第17図）

調査区東部にあり、S K 003の南1.8mの地点に位置する。長径63cm、短径58cmのやや歪な円形である。深さは25cmで、壁はやや斜めに立ち上がる。埋土はローム粒を含む暗茶褐色土で、下層にはロームブロックを多く含んでいた。S K 003同様、埋土の性状は竪穴住居のそれと変わらない。出土遺物はとくになかった。

S K 006（第17図，図版10）

調査区中央部にあり、S I 009の西1.3mの地点に位置する。径70cm前後の、円形に近い平面形態である。深さは28cmあり、底面は比較的平坦で、壁はやや外傾して立ち上がる。埋土は径1cm～3cmのロームブロックを含む暗茶褐色土で、下層にはロームブロックの粒径が5cm程度と大きくなる。埋土の性状は竪穴住居のそれととくに変わるところはない。出土遺物はとくになかった。

S K 007（第17図，図版10）

調査区中央のやや西寄りの、S I 003のカマドに重複する土坑である。遺構上面にはS I 003のカマドを敷設した痕跡がなかったので、S I 003よりも新しいと判断した。径84cmになる、ほぼ円形の平面形態である。深さは50cmあり、比較的平坦な底面から、緩やかに外傾しながら立ち上がる。埋土は上層と下層がロームブロックを含む暗茶褐色土で、中層は粗いローム粒と焼土粒を含む黒褐色土が堆積していた。埋土の性状は竪穴住居のそれとさほど変わらない。出土遺物は図示できるものはなく、土師器杯はロクロ成形の杯が大半だが、1点だけ放射状暗文を施文した、北武蔵型暗文土器の杯の小片があった（田中 1991）。甕類とあわせても14点（37g）で、須恵器は杯の小片が1点（10g）が出土した。

S K 008（第17図）

調査区中央の南寄りの、S I 004とS I 011・S I 012の間にある。西半分は方形のゴミ穴によって壊されている。径は78cm程度になるであろう。深さは47cmあり、小さな底面から挿鉢状に開く。埋土は上層にはロームブロックと炭化材を含む暗茶褐色土で、下層はロームブロックを主体とする暗黄褐色土になる。出土遺物はとくになかった。

4. 第5トレンチ（第2・11図）

第1～第4トレンチまでは、いずれも本調査を実施しているが、第5トレンチについてはその一帯が工事の掘削が及ばないことから、確認調査後そのまま埋め戻して保存している。ここでその概要について触れておく。

トレンチは幅約2mで、約28mの長さで設定した。掘削深度は比較的深く、東部で約90cm、西部では約70cmあった。トレンチ東部は台地の斜面を望むため、緩やかに東側へ傾斜するのであろう。トレンチ西部では、竪穴住居を1軒確認し、それに重複する状態で、南北棟と考えられる掘立柱建物の柱穴を3本確認した。竪穴住居からはとくに出土遺物等はなく、帰属時期等については不明だが、周辺の調査状況から奈良・平安時代と考えて差し支えないであろう。またトレンチ東部は、この一帯にローム漸移層が厚く堆積しており、それがシミ状に広がり、遺構確認をむずかしくしていたので、サブトレンチを設定して、その立ち上がりから遺構の輪郭を捉えることとした。その結果、A調査区で本調査することになった、竪穴住

居 S I 006の北半部を確認した。S I 006部分については既述のとおりである。

第3節 B調査区

本調査面積は317.5m²になる。遺構確認面までが浅いために、駐車場を造成した際の輻圧の影響で遺構調査面以下がかなり堅く締まり、掘削面には光沢すら出ている。遺構の掘りあげにあたっては、移植ゴテなどの掘削用具は先の部分が曲がるほどの堅さがあった。また調査区中央にはヒューム管の埋設溝や水流のある水道管が布設されていたり、深かったために掘りきっていないが、東西方向には幅1.3mほどの溝状の掘削痕跡があった。それによって遺構の一部が損壊を被るなど、遺構の遺存状況はよくない。調査したのは堅穴住居のみであった。

1. 堅穴住居

S I 014 (第18図, 図版6)

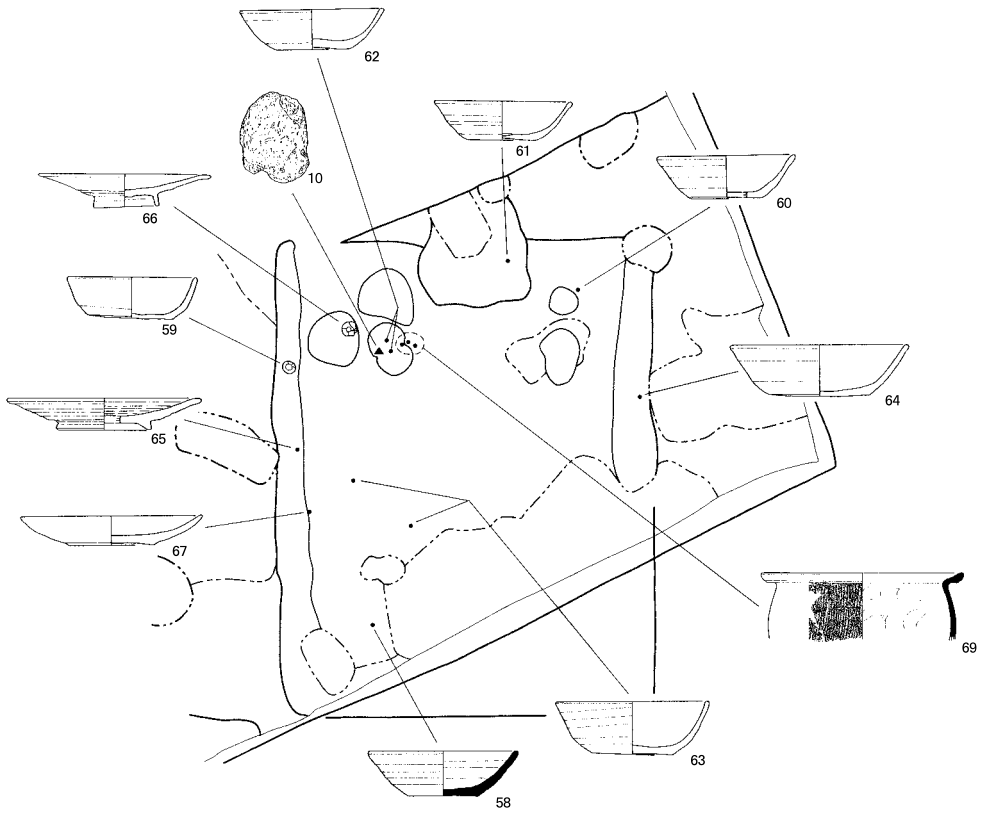
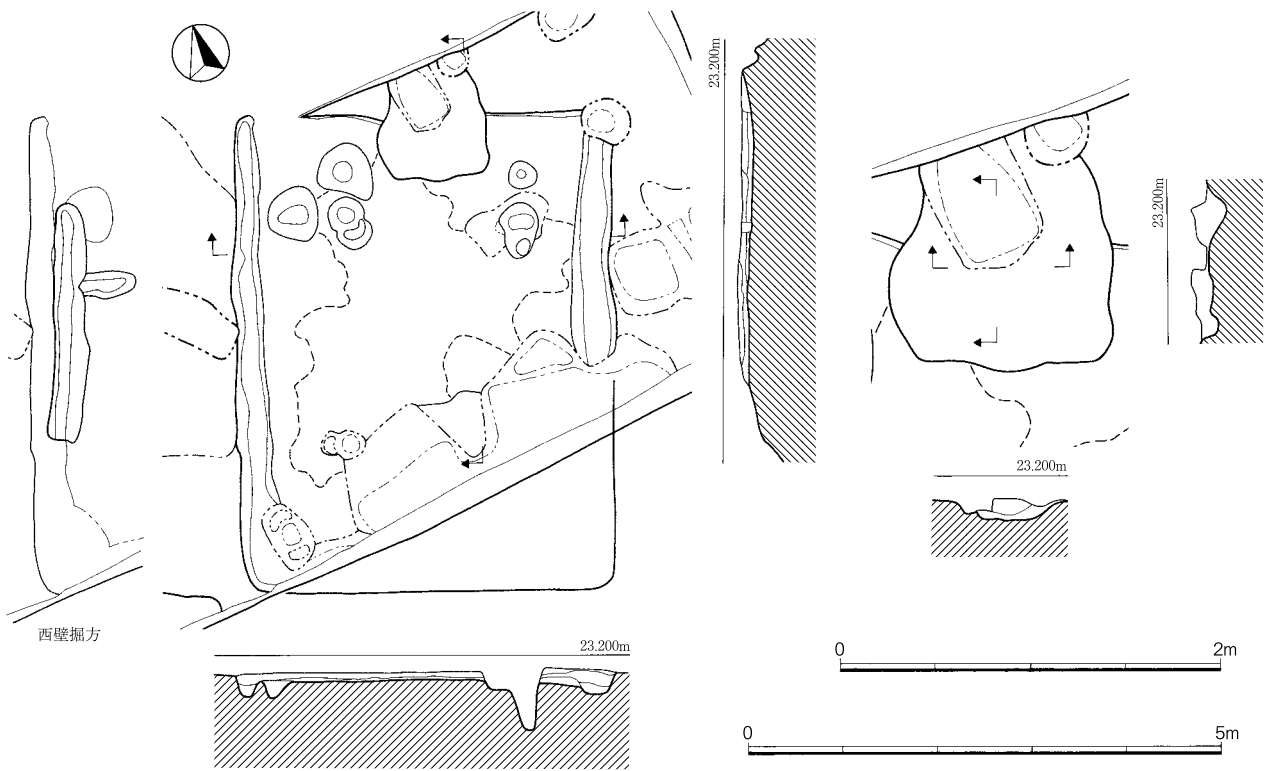
調査区の東端に位置し、住居の南東部がゴミ穴による攪乱を受けているが、攪乱がなければ住居南東隅は調査区外になる。なお住居西側には長径約4.5mの風倒木痕がある。

住居の規模は、南西隅がかりうじて残っていたので、その全容を知ることができた。主軸長は5.01m、副軸長は3.88mになり、その比は1 : 0.8になって、主軸方向にかなり長い長方形の平面形態になる。床面積は推定で20.2m²になり、そのうちの83%を調査したことになる。深さは比較的浅く13cm～22cmであった。主軸方向はN-15°-Eになる。

住居は浅かったが、埋土は上下2層に分層した。上層は粗いローム粒を含む暗茶褐色土だったが、下層は黒色土と黄白色砂質土が薄い縞状に互層を形成していたので、上層とは明らかにその性状が異なっていた。縞状の堆積はあるいは整地の輻圧等による土圧が関係しているのかもしれない。カマドは中心部の上面に攪乱坑があって、遺存状況は悪かったが、カマド部分の切開土もやはり黄白色砂質土・焼土粒・黒色土が縞状になっていた。煙道部は壁外に60cm以上掘り込んでおり、その形態から袖部分は住居内になかった可能性がある。カマドは構造部分を残さないものの、このように黄白色砂質土が散乱していたので、袖等の構築材に黄白色砂質土色を使用していたことがわかる。カマド内からはとくに出土遺物もなく、住居廃絶に伴ってカマドを片付けた可能性がある。

住居床面にはカマド前面から支柱穴に囲まれた範囲に硬化範囲が広がる。壁溝は北側の2隅を境に敷設部分を区切っている。壁溝は幅が広いのが特徴で、東壁溝は幅32cm～48cmあり、深さ17cmになる。西・南壁溝は幅28cm～34cmあり、深さは19cmあった。支柱穴は住居対角線上に南東を除いて規則的に3本確認でき、南東柱穴も攪乱部分に存在したのであろう。床面精査の段階では柱穴掘方上面は単純な円形であったが、埋土を除去したところ、さらに円形の輪郭が重なっていることが判明し、柱の建て替えが行われていると判断するに至った。以下、柱穴の深さに関しては、新しい柱穴・古い柱穴の順に併記する。北東柱穴は新旧の柱穴が一体化しているが、深さは63cm・55cmになる。北西柱穴は2本の柱穴が輪違い状に重複し、深さは46cm・35cmになる。南西柱穴も柱掘方が輪違い状に連続するものの、深さは他の柱穴よりも浅く、43cm・15cmになる。またカマド全面の左右には、支柱穴と遜色ない深さのある柱穴が1本ずつみつかった。西の柱穴は掘方がやや大きく、長径62cmあり、深さは60cmあった。東の柱穴は長径15cmほどで、深さは52cmある。配置位置がカマド全面の左右になることから、カマドの上の棚等を支える柱の柱穴であろうか。

なお最終的に床面を精査した結果、西壁の内側に壁溝状の掘込みが1条みつかった。住居の西部を30cm



第18図 SI014

ほど拡張した可能性もあるが、その掘込みは西壁すべての長さがあるわけではなく、2.5mの長さで途切れてしまう。長さが長途半端で、拡張方向が柱穴の建て替え位置とも連動しないことから、住居構築の計画段階に掘削した溝の可能性はある。それに直角に取り付く根太溝のような短い溝も確認した。

出土遺物としては須恵器杯（58）・土師器杯（59～64）・土師器皿（65～68）・須恵器甕（69）などが、住居西半分を中心に出土した。

S I 015（第19図，図版6）

調査区中央やや西寄りの南側にあり、S I 017の東1mほどに位置する。住居全体はほぼ調査区のなかにおさまるが、土管の埋設溝が住居東南隅をかすめ、水道管の布設溝が住居内を「L」字状に横切り、その延長には幅1.7mほどの掘削溝があるなど遺存状態はよくない。とくに水道管は止水できなかつたために管を養生しながら調査することとなった。なお管の布設溝によってカマドは寸断されてしまった。

住居の平面形態は方形だが、北壁がまったく遺存していないために正確な主軸長は不明である。副軸長は5.50mになり、その長さを主軸長にあてはめると、ほぼカマドの壁への掘込み部分に相当するので、主軸長についても同様の長さを想定できるであろう。そうするとほぼ正方形の平面形態となる。推定床面積は29.2㎡になり、その74%を調査したことになる。深さは出入りがあつて、26cm～42cmになる。主軸方向はN-3°-Eにとる。

埋土は大きく上下2層に分層したが、上層は黒みの強い暗茶褐色土で、ロームブロック・炭化粒・焼土粒を含み、部分的に炭化粒・焼土粒が縞状の互層になる。下層は上層よりやや明るく、粗いローム粒と焼土粒を多く含む。北壁ほぼ中央にあるカマドは、中央部が水道管布設溝によって東西に大きく分断され、両袖の構築材は残していなかつた。カマドは南北に断ち割つた結果、煙道部は地山を掘込んだ部分に黄白色砂質土を厚さ数cmで貼り付け、その上に焼土を主体とする赤褐色土が堆積していた。燃焼部付近の底面には黒色土と焼土塊を含む暗黄褐色土が堆積し、これがおそらくカマド構築の基盤層になるのであろう。煙道部からは土師器甕片（83）がまとまって出土し、その接合資料が北東柱穴から周辺から出土した。

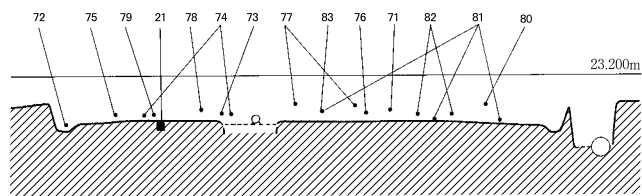
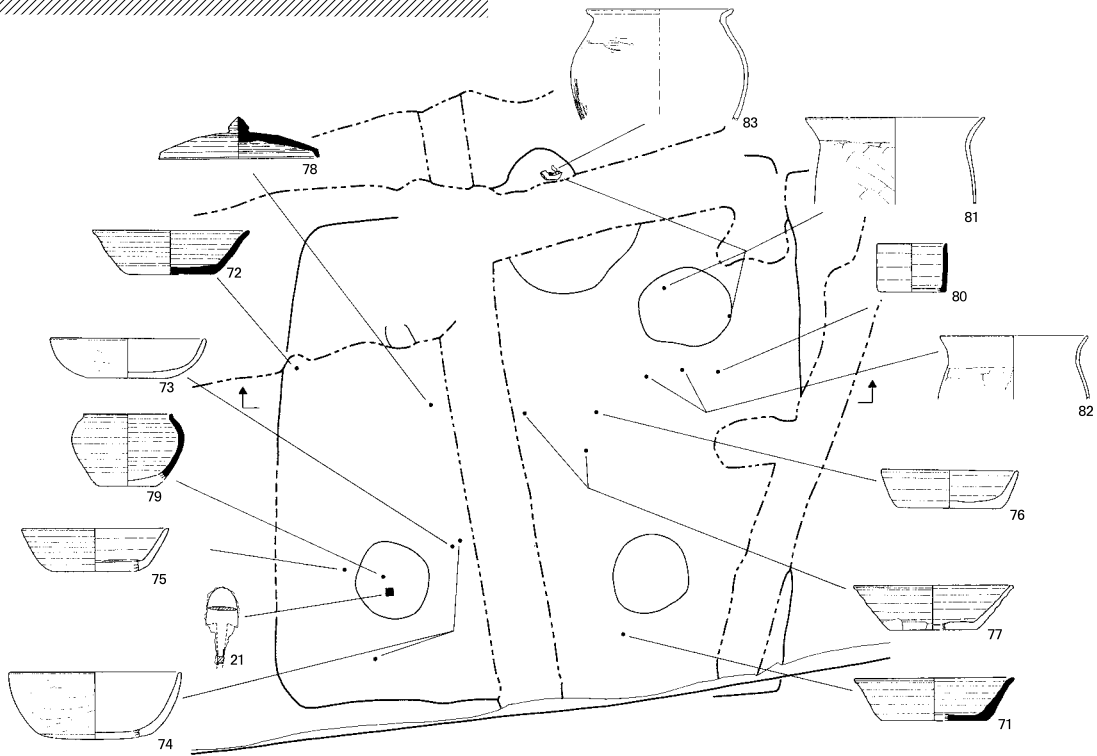
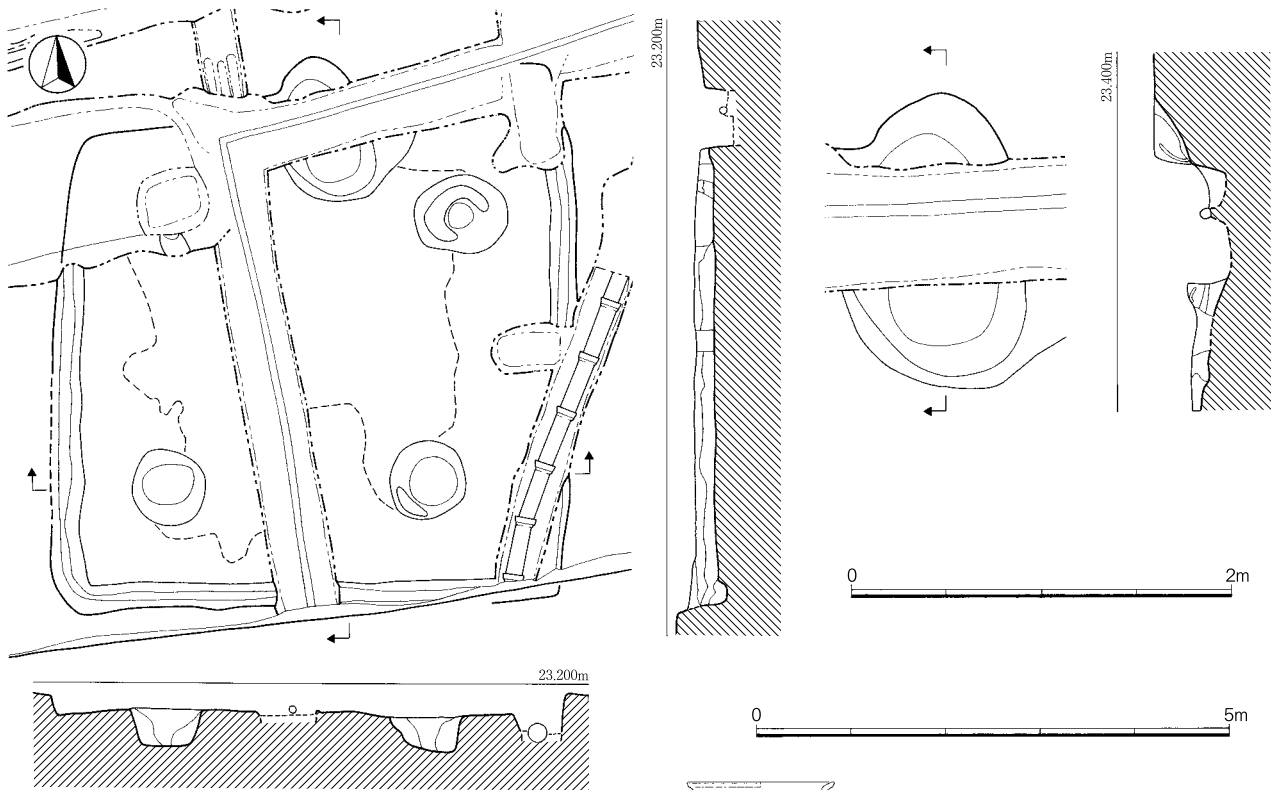
住居床面はカマド前面から支柱穴に囲まれた範囲に硬化範囲が広がる。壁溝は幅25cm～29cmと広く、深さ7cm～8cmある。カマド部分を除いて全周するようである。支柱穴は住居対角線上に1本ずつみつかつたが、北西柱穴は攪乱の壁にかろうじてその一部が残っていた。南東柱穴の位置は住居の内寄りになり、4本の支柱穴を平面的に結んだ線は、台形になって住居の輪郭線とはそぐわなくなっている。いずれも掘方は円形を基本とするが、埋土を観察できた3本の支柱穴では、いずれも柱据え位置の埋土は朝顔状に堆積し、粗いローム粒を多く含む暗茶褐色土なので、柱抜き取り後の堆積土と考えられる。なお裏込め土はロームブロックを主体とする黄褐色土であつた。深さは北東柱穴で48cm、南東柱穴・南西柱穴で43cm、北西柱穴は53cmになる。

出土遺物としては須恵器杯（70～72）、土師器杯（73～77）、土師器甕（81～83）などが、住居全体から散漫な状態で出土した。

S I 016（第20図，図版7）

調査区東部で、S I 014の西にほとんど接するように位置する。住居の半分以上が調査区外になり、住居内には長径1.6mの攪乱坑があり、遺存状態はよくない。

住居の平面形態は、西壁などはやや丸みをもつので、隅丸になるのであろう。北壁にはカマドがあり、それを北壁の中央とすれば、副軸長は4.5m前後になり、主軸長もほぼ同規模になって正方形に近い平面



第19図 SI015

形態になるのであろう。主軸方向はN-16°-E程度になるであろう。

埋土は粗い焼土粒とローム粒を含む暗茶褐色土である。カマドは左袖の一部から西側に攪乱坑があり削平されている。煙道部は壁を16cmほど掘込んでいる。燃焼部には砂質土・焼土粒を多く含む暗茶褐色土が堆積しており、被熱痕跡は不明瞭で、灰等の堆積も確認できなかった。カマドの袖本体は切開しても容易に判断はできなかったが、黄白色砂質土を構築材としたようである。カマド内からはとくに出土遺物はなく、支脚も抜かれていた。住居床面にはとくに硬化範囲となるような範囲は確認できず、また壁溝・柱穴とも確認できなかった。

出土遺物としては完形に近い須恵器杯（101）・土師器蓋（102）がカマドの右前面から出土し、それ以外には須恵器高盤の脚部分の資料（103）、土師器甕（104）などがあつた。

S I 017（第20図、図版7）

調査区の南西端にあり、S I 015の西1mの地点に位置する、住居西部は調査区外になり、北部は東西に走行する攪乱溝によって大きく分断され、北壁の一部が東西方向に長い島状に残った一角に残っていた。確認調査段階で確認していた遺構だが、その段階では遺構の状況が把握できなかったため、確認トレンチを拡張し、さらにサブトレンチをいれて精査し、堅穴住居の可能性を確認したものである。

カマドを確認できなかったが、住居北部の攪乱に削平された際の床面上に2か所で黄褐色砂質土がブロック状に堆積していたので、カマドをその近くに想定して、仮に南北方向を主軸とすると、主軸長は5.94mになり、副軸長もほぼ同規模と考えて、正方形の平面形態と想定しておきたい。そうすると推定床面積は23.3m²になり、そのうちの67%を調査したことになる。深さは23cmで、比較的浅い。主軸方向はN-14°-Wになる。

住居断面図は断ち割りしたサブトレンチから図化しているために、上下2層になっているが、上層が本来の埋土になり、下層が貼床土になる。上層は径2cm～5cmのロームブロックを非常に多く含む黒褐色土で、焼土粒・炭化粒などは確認できなかった。下層の貼床土は黒色土が少し混じるロームブロックを主体とする黄褐色土になる。

住居床面には硬化面はなく、床面として使用した痕跡を確認できなかった。壁溝は幅24cm～34cmと比較的広いのが特徴である。深さ9cmになる。支柱穴は床面上にはまったく確認できなかった。

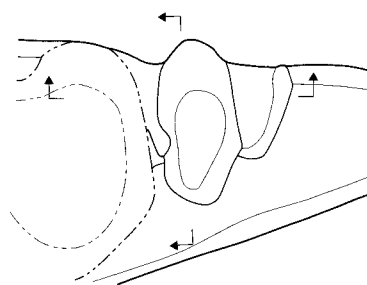
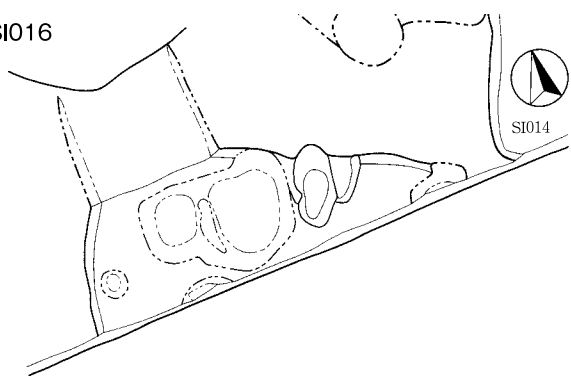
以上の状況から判断すると、使用した形跡が希薄なことから、住居の計画段階で廃棄した住居と考えたい。つまり住居掘方を掘って、その上に貼床し、壁溝まで掘削して、床面を堅く締めない段階で、何らかの理由でそれ以降の作業を放棄したと考えるのである。床面上の砂質土の堆積は、カマド設置の準備段階をうかがわせる。仮にカマドを少しでも使用しているのであれば、住居内に焼土の散乱を確認できてよいであろう。柱穴は貼床してから柱掘方を掘削する段取りだったと考えられる。

出土遺物としては土師器杯（105）1点を図示し、ほかには土師器杯・須恵器杯・土師器甕などの小片が36点（319g）出土した。土師器杯には図示した以外に放射状暗文の丸底杯もあるいっぽうで、ロクロ成形のものはなかったため、そうした土器組成がある程度、住居の帰属時期を示唆しているといえよう。

第4節 C調査区

本調査面積は136.6m²になる。B調査区同様、遺構確認面までが浅く、駐車場造成の際の輾圧の影響で遺構調査面以下が非常に堅く締まっていた。調査区には大きいコンクリートの建築廃材やぐり石などが大

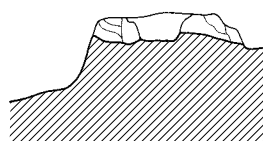
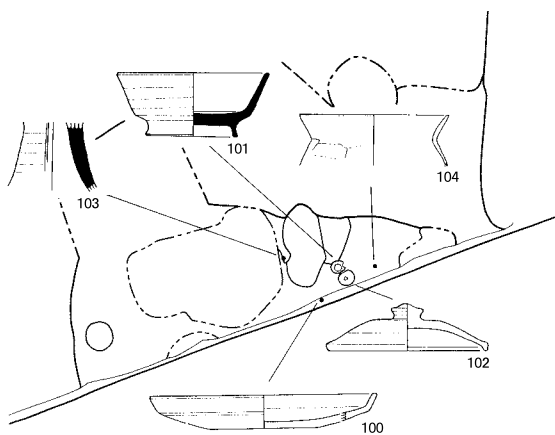
SI016



23.200m



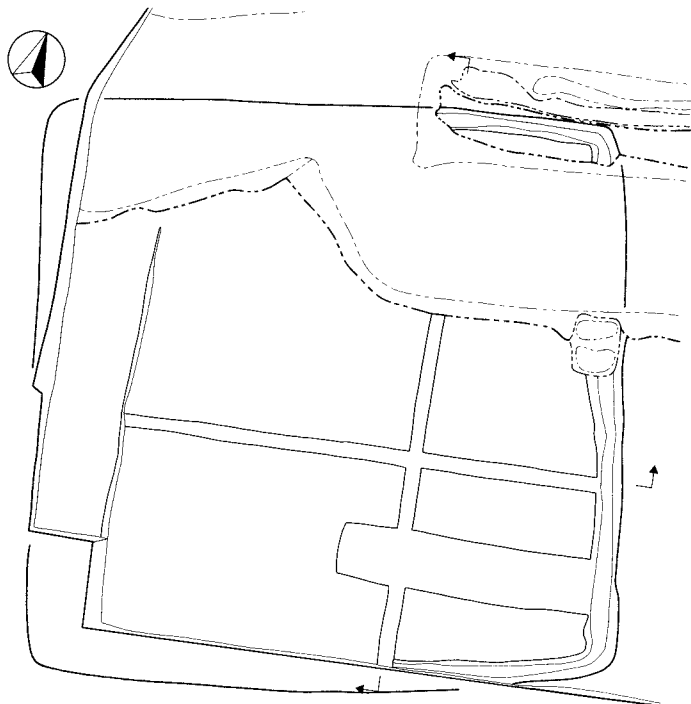
23.200m



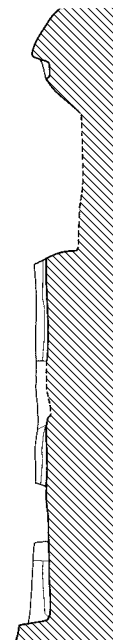
0 2m

0 5m

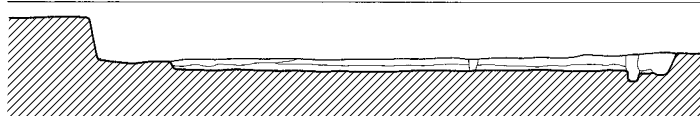
SI017



23.400m



23.400m



第20図 SI016・SI017

量に廃棄されていて、掘削痕跡も無数にあり、表土除去にはかなり手こずった。最終的に3軒の竪穴住居を確認し、それ以外の遺構は確認できなかった。

1. 竪穴住居

S I 018 (第21図, 図版7)

調査区西部に位置し、住居の南半分が調査区外になるが、隣接するB調査区まではまたがっていなかった。住居西北部は一辺1.8mほどのゴミ穴によって削平され、住居中央部も約1mの幅で溝状に削平されていた。また住居が12cm程度の深さしかなかったために、整地の際の輾圧の影響をまともに受けており、埋土は非常に堅く締まっていた。

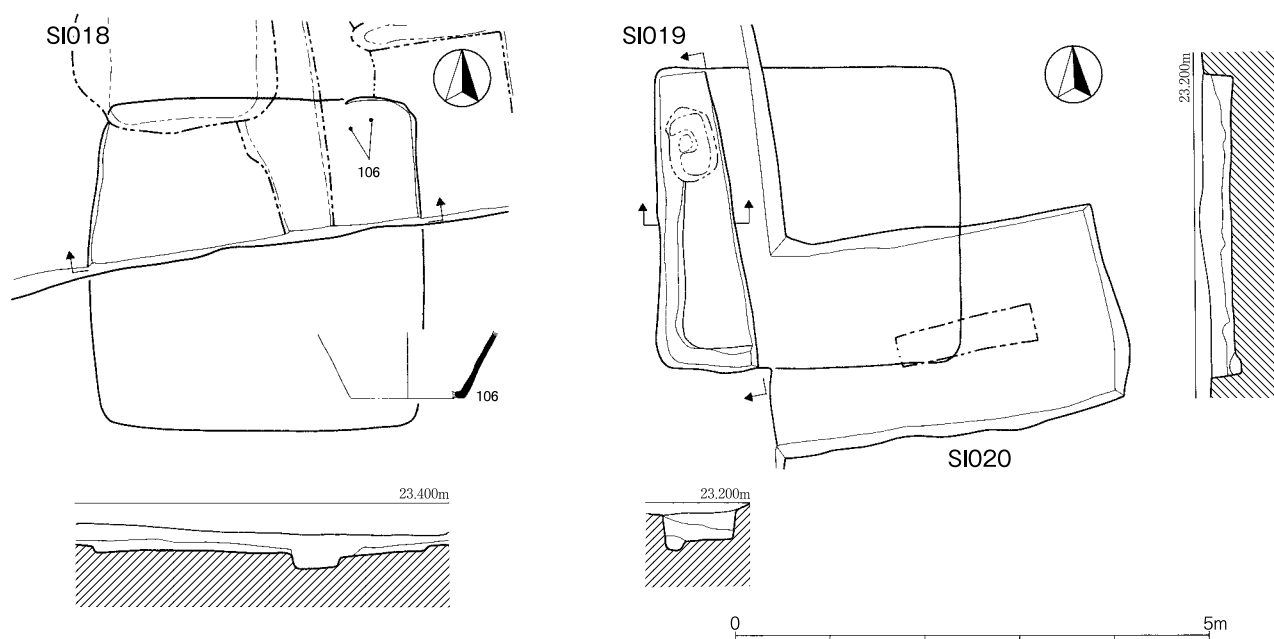
住居の東西長は3.52mで、北東隅が鈍角になって、平面形態は隅丸のやや台形になるようである。南北長もおよそ同じ長さを想定して、床面積を推定するとおよそ12m²になり、そのうちの42%を調査したことになる。主軸方向はN-2°-Wにとる。埋土は径1cm~2cm大のロームブロックと焼土を含む暗茶褐色土である。カマドは位置的には北壁に敷設されたのであろうが、埋土の精査中にはカマド構築材である砂質土粒等は確認できなかった。

出土遺物としては、北東隅から須恵器甕(106)が出土し、それ以外では甕を中心に土師器が41点(176g)、須恵器が4点(107g)の小片が出土した。

S I 019 (第21図, 図版7)

調査区東端に位置し、S I 020と重複する。住居の東側大半が調査区外になり、調査区壁を養生するために広めに緩衝帯を設定したために、実際に調査できた範囲はかなり限られる。

住居の南北長は3.18mで、南北の2隅はほぼ直角に折れ曲がるので、方形の平面形態になるであろう。深さは39cmある。主軸を南北に想定すれば、主軸方向はN-2°-Eになる。埋土は上層が径2cm~5cmのロームブロックを多く含み、下層は径5cm大のロームブロックを多く含む。これらの性状から住居は廃絶後に埋め戻されたと考えられる。埋土中に砂質土の存在を確認できなかったので、カマドの敷設位置等



第21図 SI018・SI019・SI020

についてはわからない。壁溝は南壁から西壁にかけて確認できたが、西北隅部分については、長径80cmの攪乱坑の埋土に紛れてはつきりしなくなってしまうが、他の部分の状況から推し量ると、北西隅にも壁溝はめぐっていたと考えるのが自然であろう。壁溝は幅28cmほどあり、深さは9cm程度になる。

出土遺物はなかった。

S I 020 (第21図, 図版7)

調査区東端に位置し、S I 019と重複するが、住居の西壁がほぼ調査区の境界線上にあるために、住居そのものは掘っていない。そのために詳細は不明である。S I 019との新旧関係についても確認できなかった。出土遺物として取りあげたものはない。

第5節 D調査区

今回報告するなかでは、調査区の面積がもっとも大きい調査区で、本調査したのは762.2㎡になる。遺構確認面までが比較的深いこともあって、整地の際の輾圧による影響はあまり受けていなかった。調査区東部は攪乱の痕跡は少なかったが、それ以外の部分では重機による掘削痕跡が広範囲に認められた。また南西部には幅30cmほどのコンクリートの建物基礎が区画を構成するように残り、中央部には5m×12mのコンクリートのベタ基礎や2m×4mのコンクリート製の枡などが残っていたりしたが、遺構と重複しないものについてはとくにコンクリートは除去しなかった。というのも表土除去にあたって事業者から排土と建築廃材を分別するよう要請があり、排土場所が限られていたこともあって廃材の除去を必要最小限にしたからである。また調査区中央の、S I 025の東にはイチョウの大木があり、調査時に幹は切断されていたものの、根回りは伐根せずに残っていた。調査の進捗にあわせて必要に応じて根を切断したが、主根は根元径で1.5m近くあったので、枝根だけを処理して主根は残した。

D調査区は最終盤の調査だったこともあって、調査期間が厳冬期にかかり、調査区南側には2階建ての看護学校棟があったせいで調査区南半部は晴天でも日光が遮られ、そこに位置するS I 021・S I 026・S I 030などの調査では、昼間でも霜がとけないことが多々あった。また降雪の折には数日にわたって雪が残るという事態にも遭遇した。

この調査区では竪穴住居10軒と土坑4基を調査した。

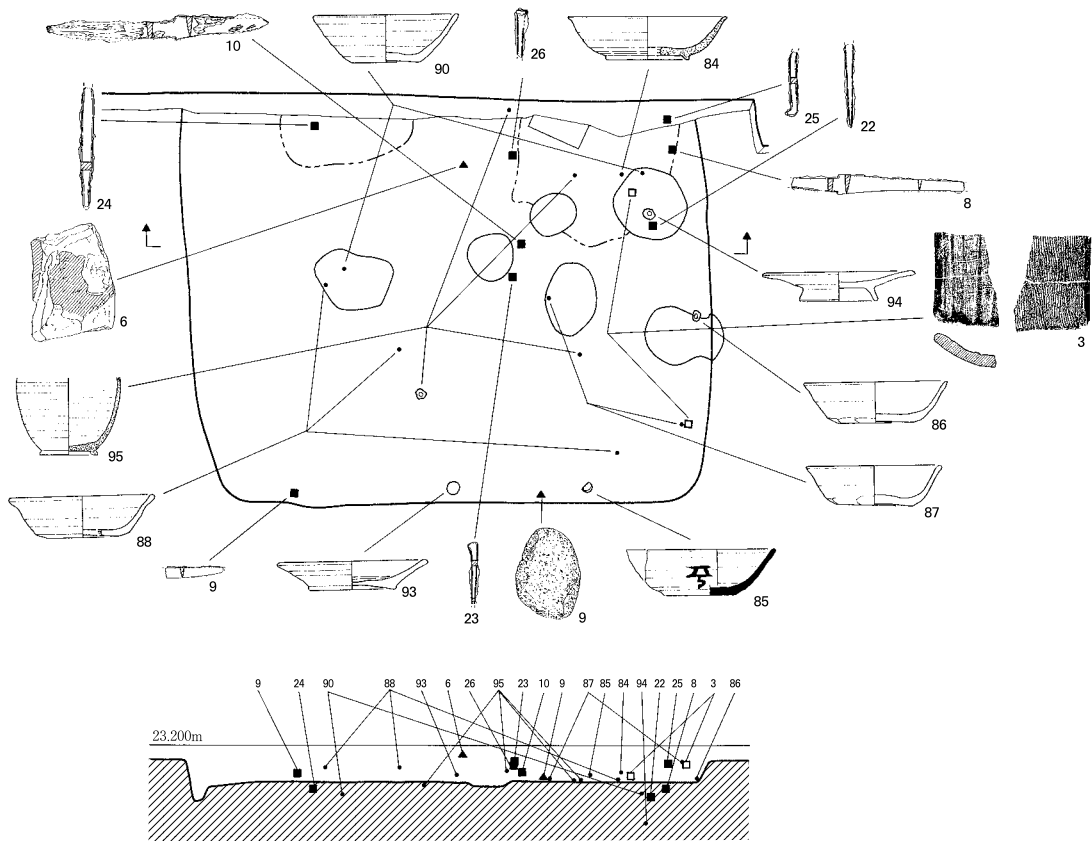
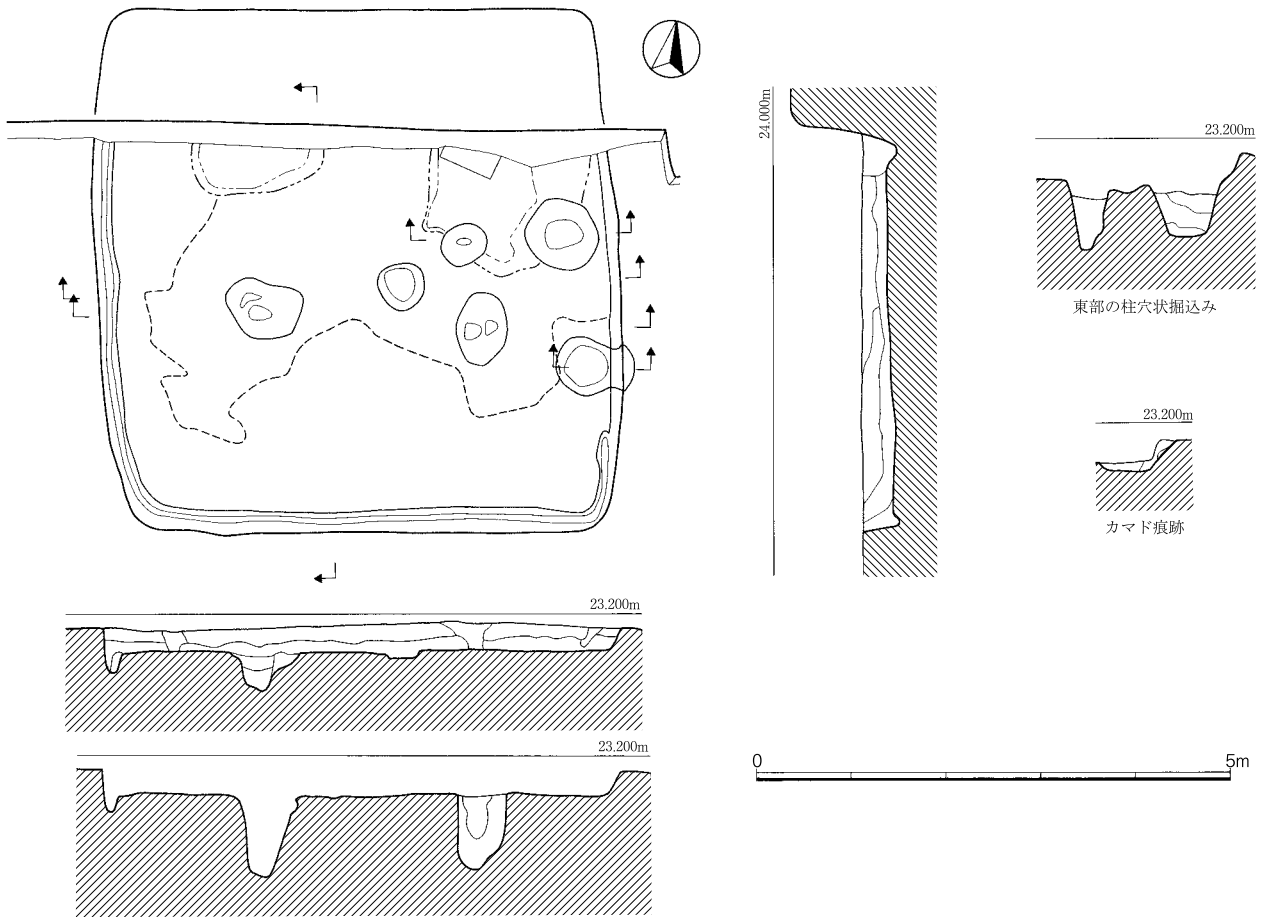
1. 竪穴住居

S I 021 (第22図, 図版8)

調査区の北東端に位置し、S I 022の東1.0mに軸方向をあわせて位置する。住居北半部は調査区外になる。住居北部は不定形な攪乱坑があり、とくに調査区外から住居内に延びる鉄板については、調査区の壁を養生する必要からそのままにして調査した。

住居の平面形態は方形で、東西長は5.47m、南北長もほぼそれと同じ長さになるのであろう。副軸長は北壁のカマドを中心に西側へ折り返すと、主軸長よりやや長い5.12mになって、床面積は30㎡程度に推定でき、そのうち74%程度を調査したことになる。深さは36cmで、主軸方向はN-12°-Wになる。埋土は上層が径3cm～5cmのロームブロックを含む暗茶褐色土で、下層は粗いローム粒を少し含み、黒みをおびた暗茶褐色土である。

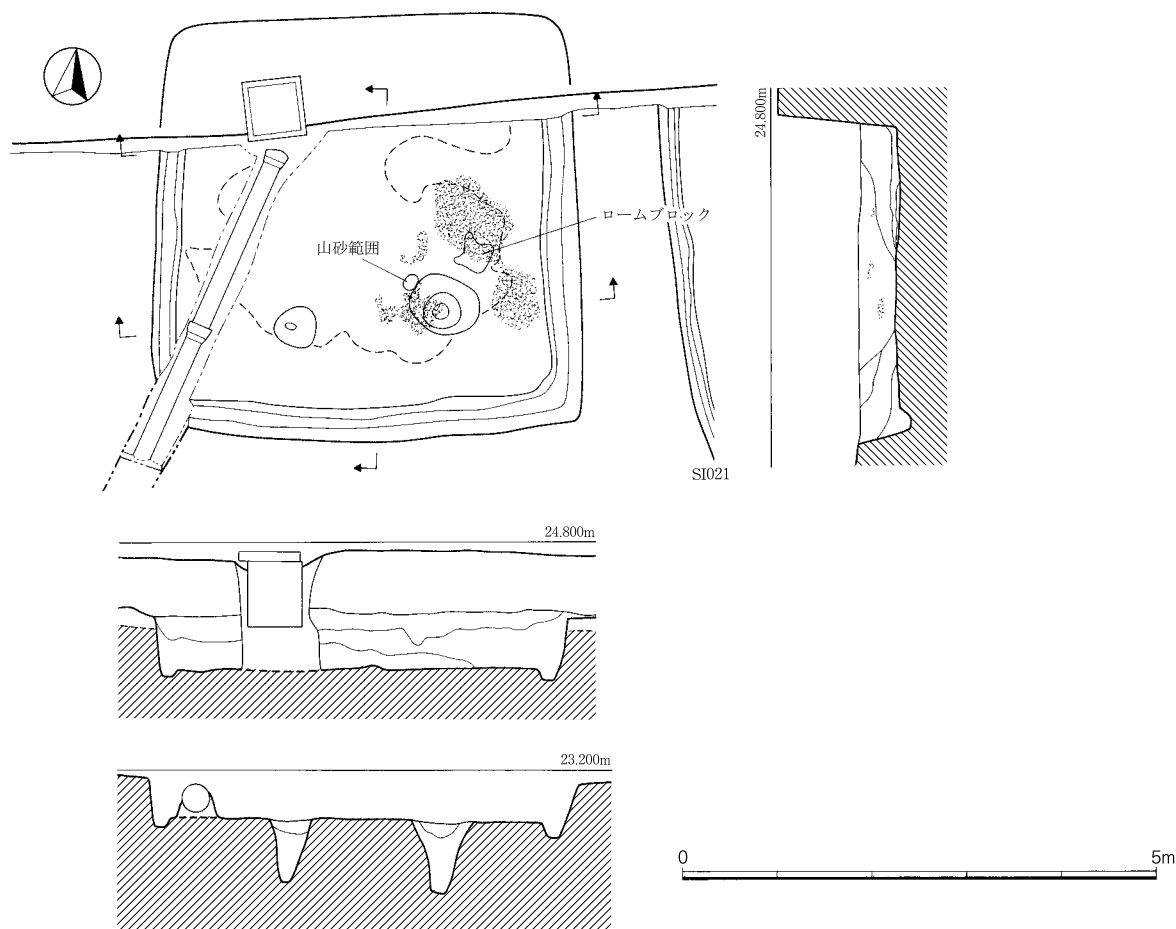
東壁の中央よりかなり南寄りにカマドの痕跡があった。壁を10cmほど半円形に掘込んで煙道部としていた。断ち割りの結果、掘方に黒褐色土を貼り付け、その上には径1cm～2cmの焼土塊と黒褐色土が混在し



第22図 SI021

て堆積し、煙道部が東壁と接する部分に被熱痕跡を残していた。燃焼部相当か所には焼土粒を少し含む暗茶褐色土が堆積していただけで、顕著な被熱痕跡は確認できなかった。被熱痕跡が使用痕跡として残っているので何らかの形で使用したのであろうが、敷設位置が通常の壁の中央という状態からかなり逸脱しているため、カマドを移設する前のものなのか、副次的に使用したものなのか、現状では判断できなかった。なお床面中央の調査区境界付近に2か所、焼土を含む黄白色砂質土がブロック状に堆積していたので、本来のカマドは他の例にならって北壁にあったと想定したい。

住居床面は東壁から南西柱穴にかけて硬化範囲が広がるが、床面自体はかなり凹凸があり、やや不明瞭である。壁溝は西壁から東壁の一部、カマド痕跡の手前までである。幅は20cm～29cmになり、深さは6cm～8cmになる。支柱穴は住居南半分に東西に1本ずつみつかった。住居の平面形態を正方形とした場合には、その位置はかなり住居の内寄りになる。その位置を住居の対角線上に想定するのであれば、住居の平面形態を南北にやや長い矩形に想定する必要がある。2本の柱穴掘方にはいずれも下端から住居外側に向かった位置に中端がある。深さはいずれも85cmになる。南東柱穴の断面観察の結果では、芯部に粗いローム粒を多く含む黒褐色土が堆積しており、その性状からだけでは柱の抜き取りなのか柱痕跡なのか、にわかには判断できなかった。ただいずれにしても柱の先端は柱穴の下端には届いていない。埋土は粗いローム粒・ロームブロックが混じる黄褐色土であった。また2本の支柱穴の間の北寄りに、径50cmの不正円形で、深さ9cmのくぼみがあった。底面は比較的平坦で、貼床の硬化面のような硬度があり、柱の当たりの



第23図 SI022 (1)

ようだったので、あるいは床面に直接柱を建てた痕跡なのかもしれない。またその東側にも攪乱土の下から2か所の掘込みを確認したが、掘込み自体は一定の深さがあったが、性格は不明である。梯子穴は確認できなかった。

出土遺物としては灰釉陶器杯(84)・須恵器杯(85)・土師器杯(86～92)・土師器皿(93・94)などが出土したが、一部の接合資料はかなり広範囲に拡散する傾向がある。

S I 022 (第23・24図, 図版8)

調査区東部に位置し、住居の北半分が調査区外になる。住居西部の調査区境に浸透枡があり、そこから住居の南西隅を横切ってヒューム管が布設され、管の下の土はそのまま残して管の連結を保全した状態で調査を実施した。

調査した範囲ではカマドは確認できなかったので、おそらく北壁にあったと推定し、主軸長が南北方向になって、副軸長は4.45mで、ほぼ正方形に近い平面形態であろう。推定床面積は19.7㎡になり、その約4分の3を調査したことになる。深さは54cmあり、比較的深い。主軸方向はN-7°-Wになる。埋土は住居中央が挿鉢状に大きくくぼみ、焼土塊・炭化粒を多く含む黒褐色土が堆積していた。また床面直上にはローム粒を主体とする暗黄褐色土が堆積し、その上には粗いローム粒を多く含む暗茶褐色土が堆積し、上層の黒褐色土が堆積する前にある程度住居を埋め戻していたことをうかがわせる。

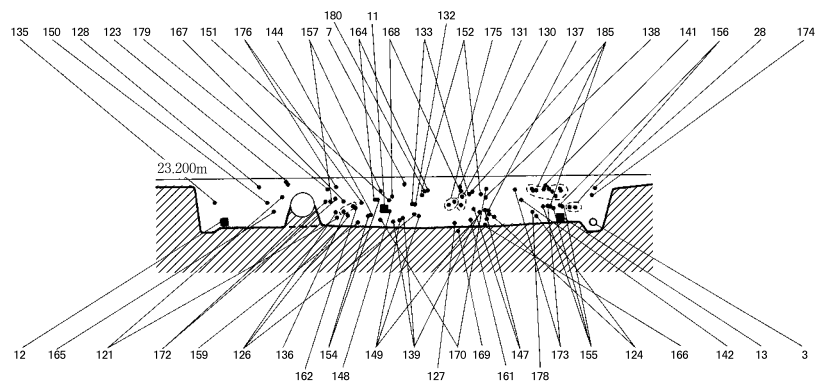
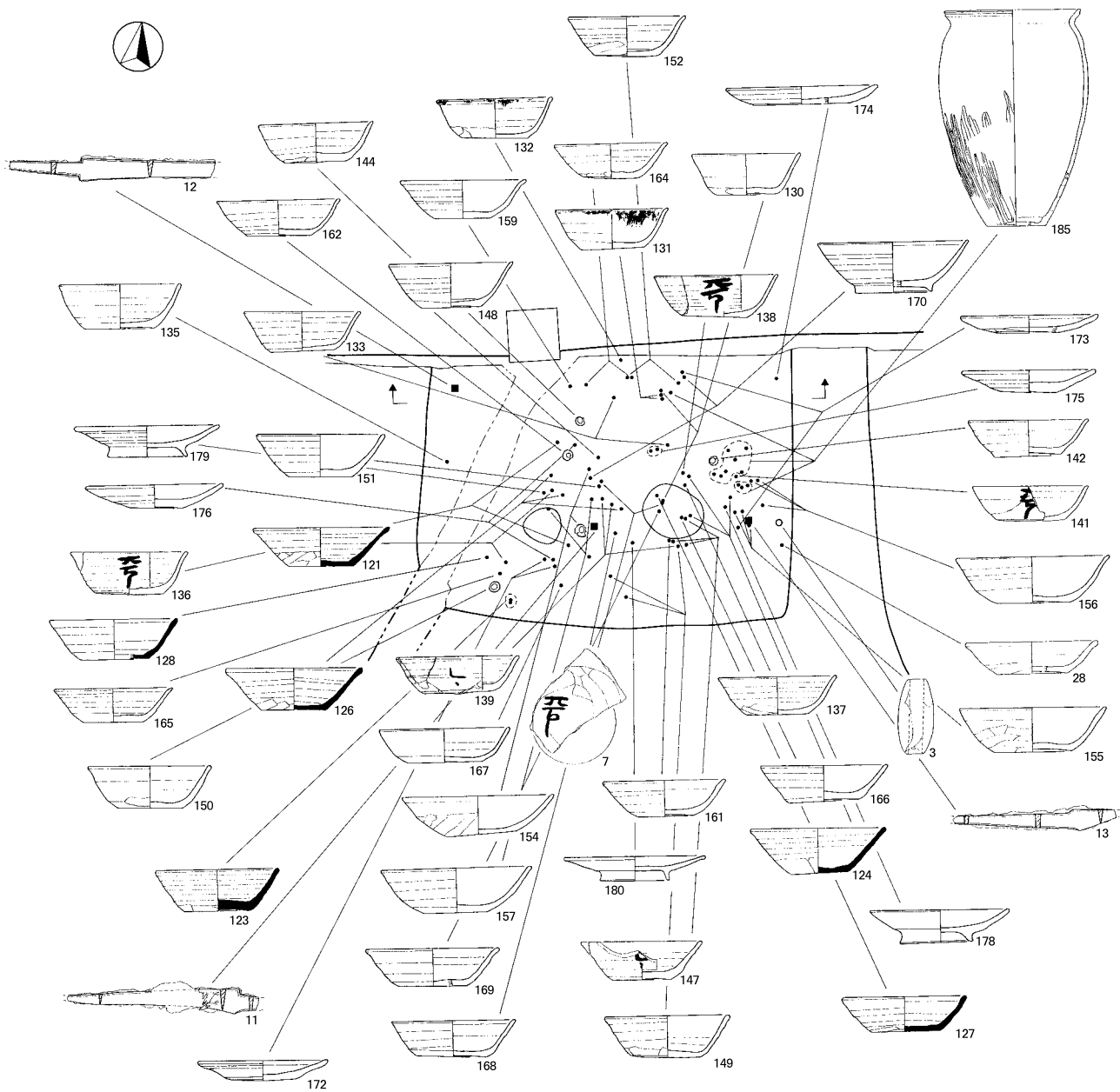
住居床面の硬化範囲は主柱穴に囲まれた範囲を中心に広がる。床面は比較的平坦である。壁溝は幅28cm～37cmと比較的広く、深さは6cm～8cmある。主柱穴は住居の南側に東西に1本ずつみつかった。ただ住居の平面形態を正方形に想定すると、その位置は対角線上からはややずれている。いずれも掘方は不正な円形で、南東柱穴の最大径は73cmあり、深さは70cmある。南西柱穴は径43cmで、深さはやはり70cmになる。断ち割りの結果、南東柱穴はその埋土にカマド構築材の黄白色砂質土を含み、とくに柱痕跡も確認できなかった。柱は抜かれているのであろう。柱穴北東の床面には、45cm四方の範囲で床面上にロームブロックが固まっており、これも柱の抜き取りと関連する痕跡かもしれない。南西柱穴も柱痕跡が確認できず、やはり柱は抜かれているのであろう。梯子穴は確認できなかった。

出土遺物としては供膳具を中心に大量の土器類が出土し、テン箱で3箱強あった。土器の個体としての復原率もかなりよく、さながら廃棄土器の集積遺構のような状況であった。やや広範囲に散乱した接合資料もあったが、全体には比較的コンパクトに接合していた。土器の器種等に関わる偏在性までは確認できなかったが、上層に窪地状に堆積していた焼土塊を伴う黒褐色土の堆積と関連するかもしれない。

S I 023 (第25・26図, 図版8)

調査区東部に位置する。遺構の重複はなく、攪乱も少なく、深さも78cmと深いこともあって遺存状態はよく、今回報告するなかでは、住居の全容がわかる唯一の住居になる。ただ遺構上部には、調査区南側にあるイチョウの大木の根がここまではびこっており、なかには径20cmに近い根もあり、それによってカマドの上部は損壊を被っている。1m南にはS I 024が位置する。

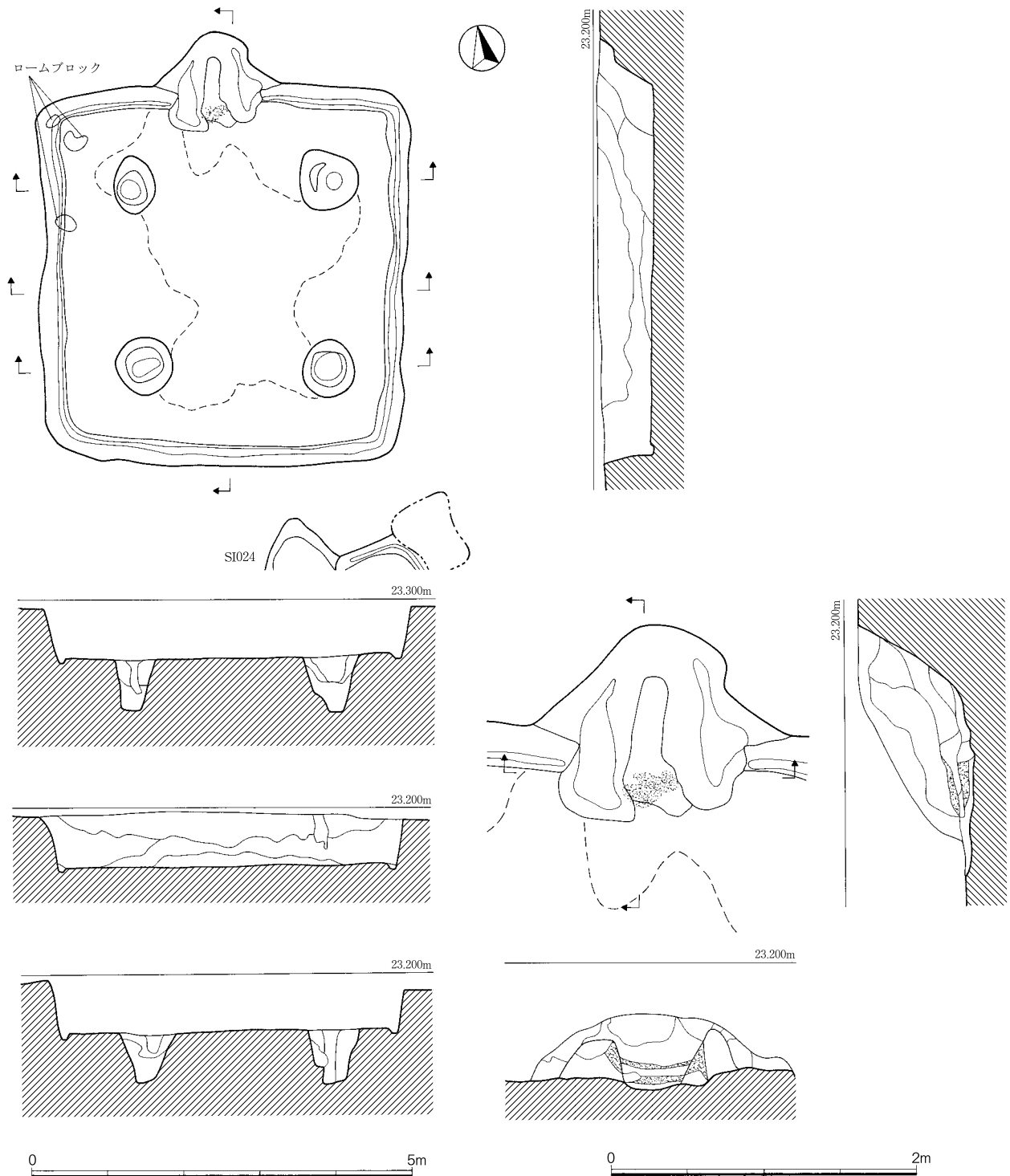
住居の主軸長は4.94m、副軸長は4.80mで、ほぼ正方形の平面形態になる。床面積は23.6㎡で、主軸方向はN-12°-Eになる。埋土の状況については、住居中央部の状況で説明しておく。上層は径2cmほどのロームブロックを含む、黒みのある暗茶褐色土になる。中層は粗いローム粒を多く含む暗茶褐色土になる。下層は3cm～5cmのロームブロックを少し含む暗茶褐色土になり、全体にローム土の含有が多く、埋戻し土と考えるのが妥当であろう。なおカマド周辺ではカマドの崩壊土となる黄白色砂質土や焼土を多



第24図 SI022 (2)

く含むようになる。

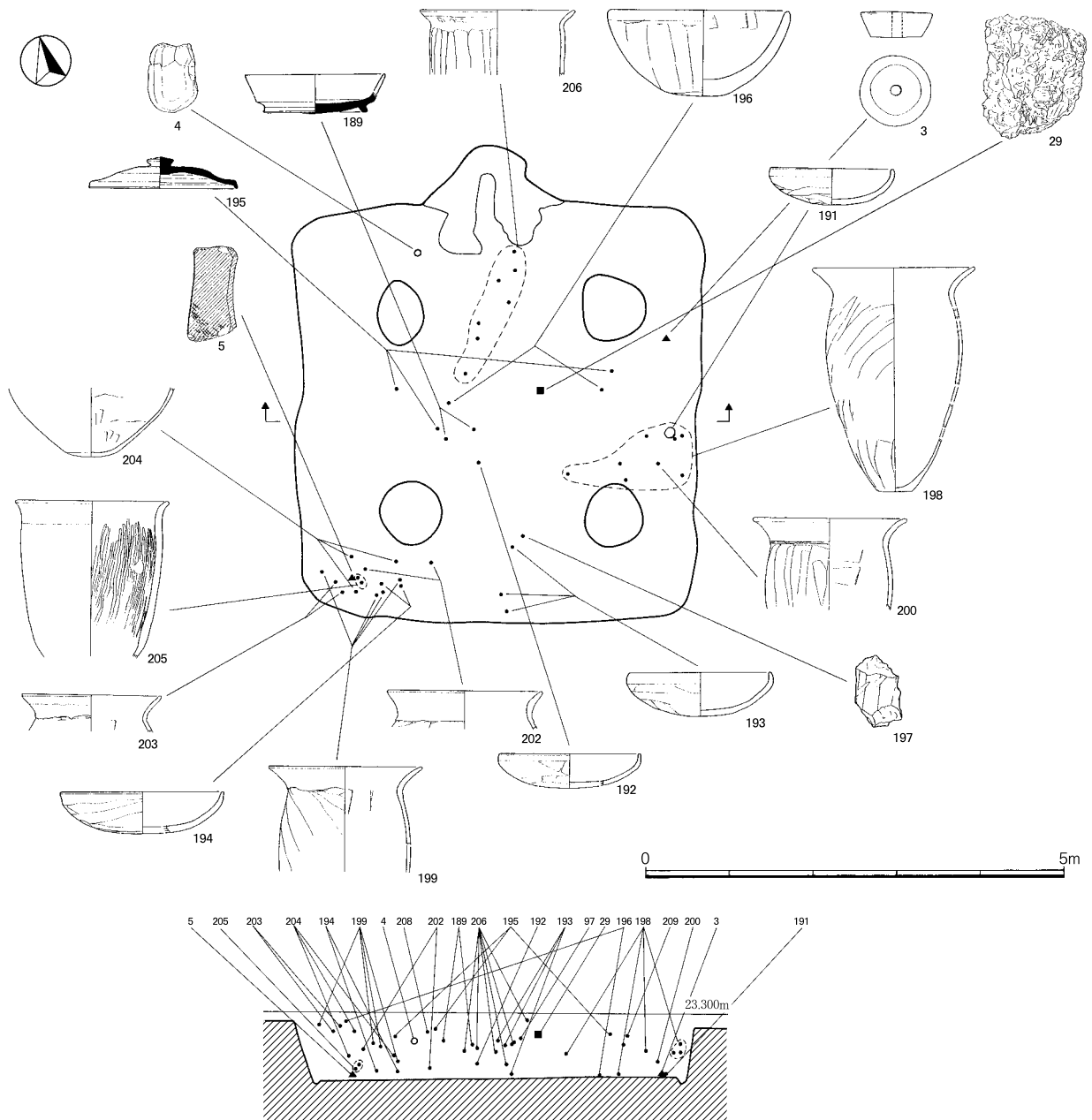
北壁のほぼ中央にあるカマドは壁を64cmほど円形に大きく掘込んで煙道部としているが、煙道部にはとくに被熱痕跡はなかった。カマドの袖は暗灰黄色の砂質土を構築材として、縦長の「ハ」の字にしたような形に成形している。袖の基底面の幅は40cm～50cmあり、右袖の基底面には部分的に粘性の強い黒褐色土を10cmほどの厚さで敷き、それが燃焼部まで続く。左右の袖の内側には顕著な被熱痕跡が残り、その痕跡は袖の芯部にまで及んでいた。燃焼部にはカリカリになった焼土塊が大量に堆積し、カマドの使用頻度



第25図 SI023 (1)

の高さを物語っていた。カマド内からはとくに出土遺物はなく、支脚も抜かれ、灰層等の堆積もなく、住居廃絶に伴ってカマドはある程度片付けられたと考えられる。

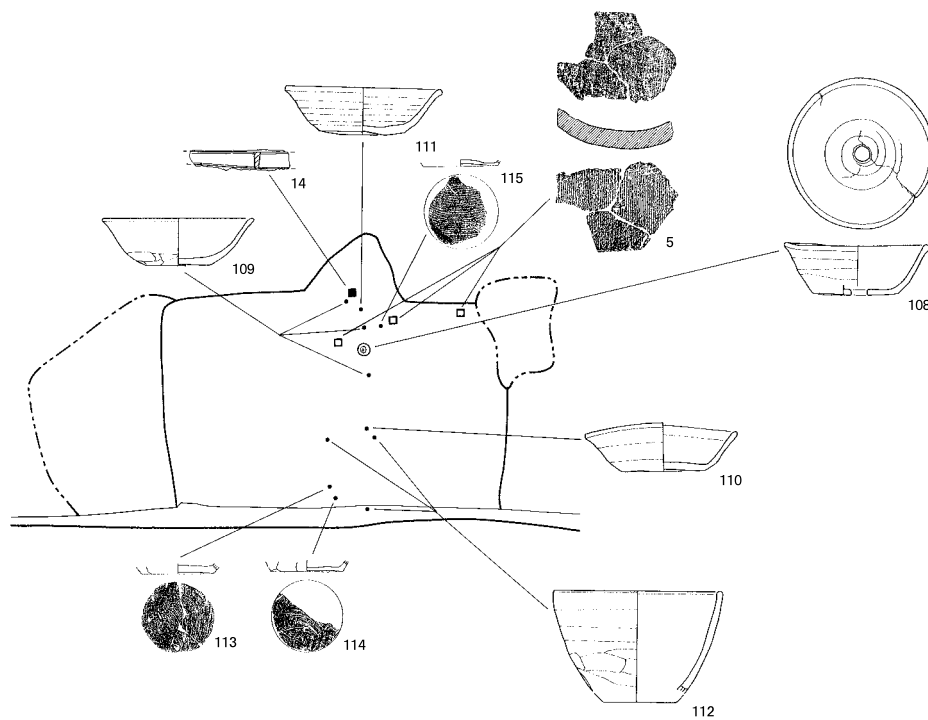
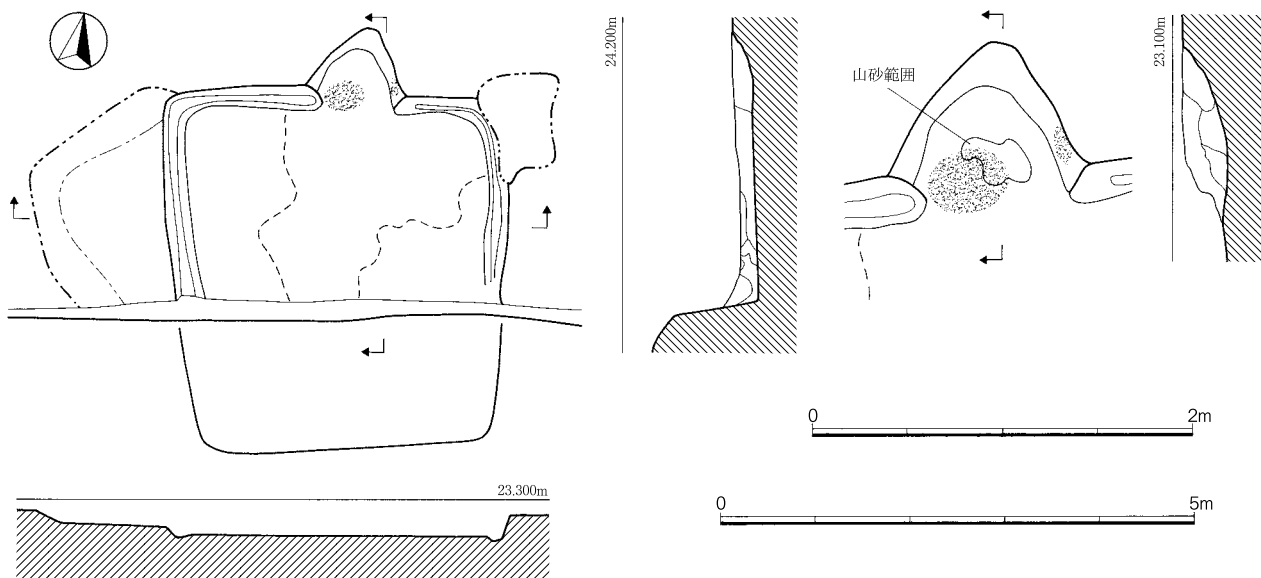
住居床面はカマド前面から支柱穴に囲まれた範囲を中心に硬化範囲が広がるが、硬化の度合いはさほど強くない。壁はほぼ垂直に切り立ち、壁溝は幅28cm～30cmと広く、深さ6cm～8cmほどになる。図示しきれなかったが、壁溝は底面から床の高さまでは外側へ抉って幅を広げているのが特徴で、壁溝の下端幅が狭くみえるのもそうした造作が影響しているのであろう。支柱穴は住居対角線上に1本ずつあり、掘方はいずれも円形を基本としながらも、北西柱穴は寸詰まりの紡錘形に近く、北東柱穴はソラマメ形に近い。すべての柱穴を断ち割ったところ、南西柱穴を除いて、断面で柱痕跡に相当する土層を確認できたので、住居が廃絶後に埋め戻されていることを前提にすれば、柱は抜き取らずに切断したと考えられる。ただこ



第26図 SI023 (2)

の場合は、貼床後に柱穴掘方を掘って立柱したという工程を復原できる。深さは南東柱穴・北東柱穴が79cm、南西柱穴が69cm、北西柱穴が70cmで、深さは比較的一定している。

出土遺物は住居全体から満遍なく出土したが、住居の南西隅の一角に甕類が集中する傾向がある。須恵器杯 (189・190)・蓋 (195)、非ロクロ成形の土師器杯 (191～194)、土師器の長胴甕 (198～200)、土師器甕 (205・206) などが出土し、接合状況を見ると、195・198はかなり広範囲に破片が散乱していた状況が看取でき、高低差をもって接合しているものもある。こうした接合状況も住居の埋戻しと関連するのであろう。



第27図 SI024

S I 024 (第27図, 図版9)

調査区東部の南端に位置し、住居の南半分が調査区外になる。住居のすぐ南の調査区外のところにイチョウの巨木があり、その根が住居全体を覆っており、遺存状況はよくなかった。また西壁には浅い掘削痕があって、壁の上部が削り取られていた。

副軸長は3.61mあるが、住居の北西隅が少し鈍角になるので、台形に近い平面形態であろうか。そこで主軸長を3.9m程度に想定して、床面積を13m²と推定した。それに従えば60%程度を調査したことになる。床面は北側が少し高くなって、深さは17cmになる。主軸方向はN-6°-Eにとる。埋土は全体にローム粒・ロームブロックを含む暗茶褐色土で、上層になるほど黒みが強くなる。北壁中央の東寄りにカマドがある。壁を70cmほど半円形に掘込み、そこにブロック状の黄白色砂質土と焼土が堆積していた。おそらくこの掘込み部分は燃焼部の掘込みで、煙道部としての掘込みはなかったであろう。また袖についても、黄白色砂質土を構築材としていたと考えられるが、構築した状態では残っていなかった。これがカマド本来の構造に由来するのか、住居廃絶に伴うカマドの破壊によるものなのか不明である。

住居床面はカマド前面と住居北東隅から中央部に向かって広がるが、床面上にイチョウの根がはびこっていて、じゅうぶんな観察はできなかった。壁溝は幅20cm～25cmで、深さは6cmになる。カマド部分で途切れるが、それ以外では全周するのであろう。柱穴は確認できなかった。

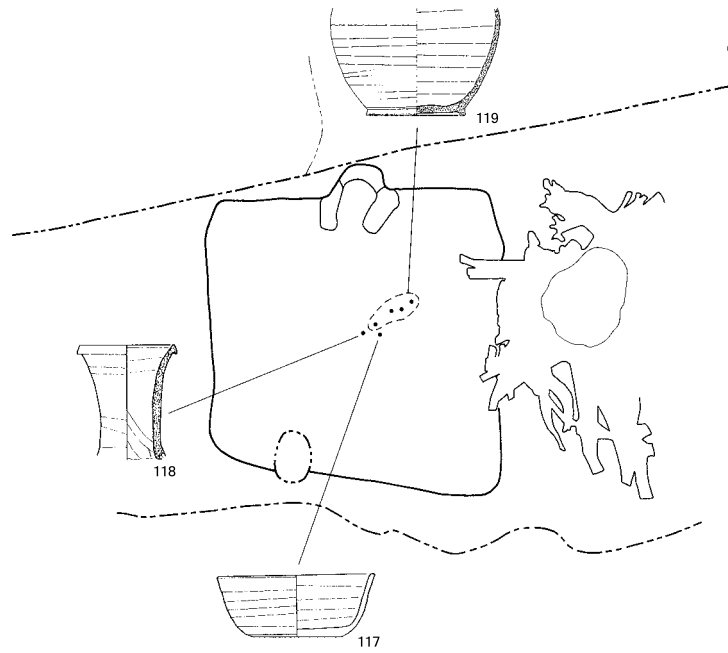
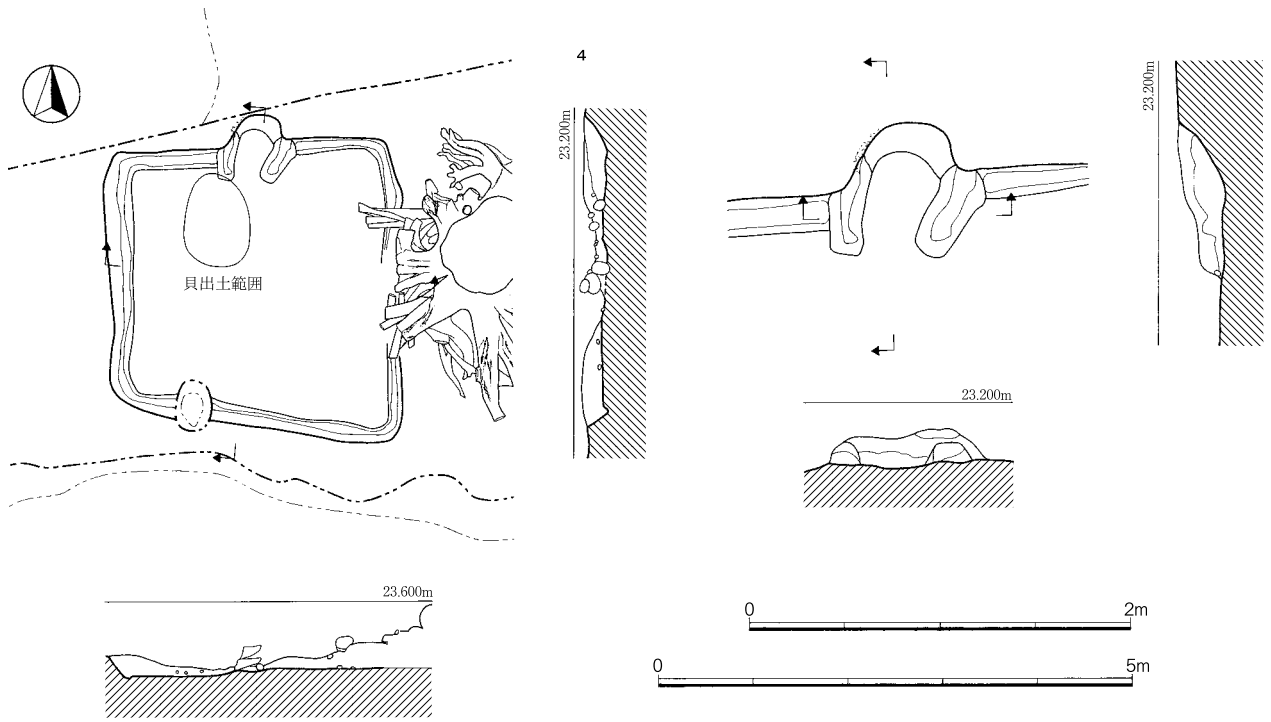
出土遺物はカマド内から住居中央にかけて散漫な状況で出土した。土師器杯(108～111)・鉢(112)・甕(113～115)などが出土したが、底部中央に穿孔のある土師器杯(108)は、カマド前面から伏せた状態で出土した。また刀子片(14)はカマド内から出土したもので、108の出土状況などを加味して考えると、カマド廃絶に伴って何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。

S I 025 (第28図, 図版8)

調査区の中央で、S I 027の東2mの地点に位置する。住居のすぐ東側にはイチョウの大木があり、その根が縦横にはびこり、根の処理にかなり手こずり調査は難航した。結果として伐根できなかったので、東壁の一部は壁を露呈させることを断念した。それでも住居全体の状況はほぼ把握できて、全容が把握できた数少ない例になった。

住居の北東隅が鈍角で、南東隅が鋭角になって、全体では台形の平面形態になる。主軸長は2.79m～3.21m、副軸長は3.12mで、床面積は9.1m²になる。深さは26cm～27cmで、主軸方向はN-0°-Eになる。埋土はほとんどが根によって攪乱され、プライマリーな状態での観察はむずかしかったが、およそ径1cm～3cmのロームブロックを多く含む暗茶褐色土であった。カマドは北壁中央にあり、壁を34cmほど半円形に掘込んで煙道部を形成していた。煙道部の奥まった1か所に焼土がまとまる範囲があった。袖は暗灰黄色砂質土を構築材として、住居床面に直接、砂質土で構築していたが、下部の10cm～12cmの高さしか残っていなかった。袖の内側には顕著な被熱痕跡がなく、燃焼部にはまとまった焼土の堆積もなく、使用した形跡はほとんど残していなかった。燃焼部はその最下部に焼土粒を多く含む黒褐色土が堆積しており、あるいはこれをカマド構築の基層としていた可能性がある。カマド内からはとくに出土遺物はなく、支脚も抜かれていた。

住居床面は比較的平坦だったが、硬化範囲は根による攪乱のためにほとんど確認できなかった。壁溝は幅11cm～23cmと出入りがあり、深さは8cmほどになる。カマド部分を除いて全周する。主柱穴は確認できなかった。



第28図 SI025

出土遺物としては土師器杯（117）・灰釉陶器長頸瓶（118・119）などがおもに床面中央部から散漫な状態で出土した。長頸瓶はイチョウの太い根にからまって出土したものである。またカマドの前面にはハマグリを主体とする貝が1.0m×0.7mの範囲で、床面よりは少し浮いた状態で出土した。これについてはすべてを土ごとサンプルとして一括採取し、分析結果を第3章第6節に掲載した。

S I 026（第29図，図版9）

調査区の南西端にあり，北東にはS I 030が位置する。住居の南半分近くが調査区外になる。住居中央の西にはコンクリートの布基礎があり，西壁周辺は板状のコンクリートが壁面に埋まっていたためにその周辺は精査できなかった。なお住居埋土はかなり堅く締まっており，駐車場を整地した際の輾圧の結果と考えられる。

住居の平面形態はほぼ方形になると考えられるが、住居北東隅が鈍角なので、やや歪なのであろう。東西長は5.16mで、ほぼ正方形に近い平面形態を想定すると、推定床面積は26m²ほどになり、その約2分の1を調査した。深さは31cm～35cmで、主軸方向はN-2°-Wになる。埋土は上層に細かいローム粒を含む黒褐色土が堆積し、その直下には焼土粒を非常に多く含む暗茶褐色土が堆積し、床面直上には粗いローム粒と粘性の強い黒色土を含む暗茶褐色土が堆積する。全体に焼土粒を含むが、炭化粒の存在は確認できず、床面上に焼土塊等の堆積も確認できなかった。なお南壁も埋土の断面観察をする面と考えていたが、調査中は随時壁面が凍結していて、観察は不可能であった。

住居床面は比較的平坦で、支柱穴に囲まれた範囲を中心に硬化範囲が広がる。壁溝は幅24cm～30cmと幅広く、深さは11cmほどになる。なお北壁からめぐってきた壁溝は、東壁の調査区境の手前で確実に立ち上がって途切れてしまい、床面上には薄く黄白色砂質土と焼土粒が堆積するのを確認した。今回の調査では北壁にカマドを敷設する例が多かったが、北壁以外にカマドを敷設していたのは確実なので、壁溝や床面の堆積物の状況を見ると、東壁中央付近にカマドを敷設していた可能性がある。

支柱穴は住居対角線上に1本ずつみつかった。いずれも掘方は不正な円形だが、深さが極端に異なるのは気にかかる。北西柱穴は深さ85cmあり、北東柱穴はその約半分の41cmしかなく、西部に浅い掘込みを伴う。北西柱穴は断面観察の結果、上面に焼土粒を多く含む暗茶褐色土が堆積し、土師器杯(222)がその上面から出土し、それ以下の下層にはロームブロックを多く含む暗茶褐色土が堆積していた。埋土は全体に締まりが悪く、柱痕跡も確認できないことから、柱は抜き取られていると考えられる。

出土遺物は床面近くから相当量出土し、土師器杯・皿類は比較的遺存状態のよいものが多い。土師器杯(218)・須恵器鉢(237)のように、散乱した状態で接合したものもあるが、多くは比較的個体ごとにまとまって出土した。また丸瓦の小片が1点出土した。

S I 027 (第30図, 図版9)

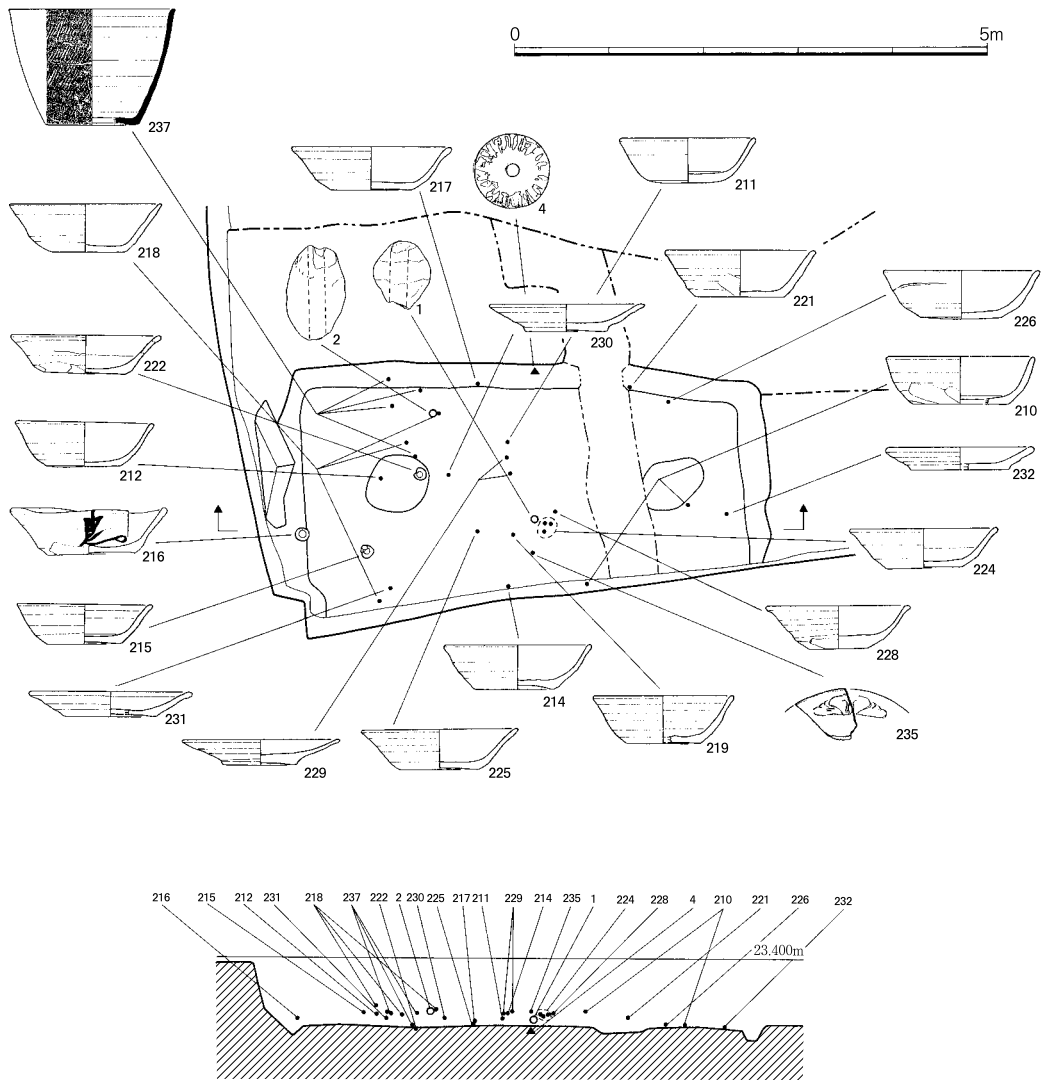
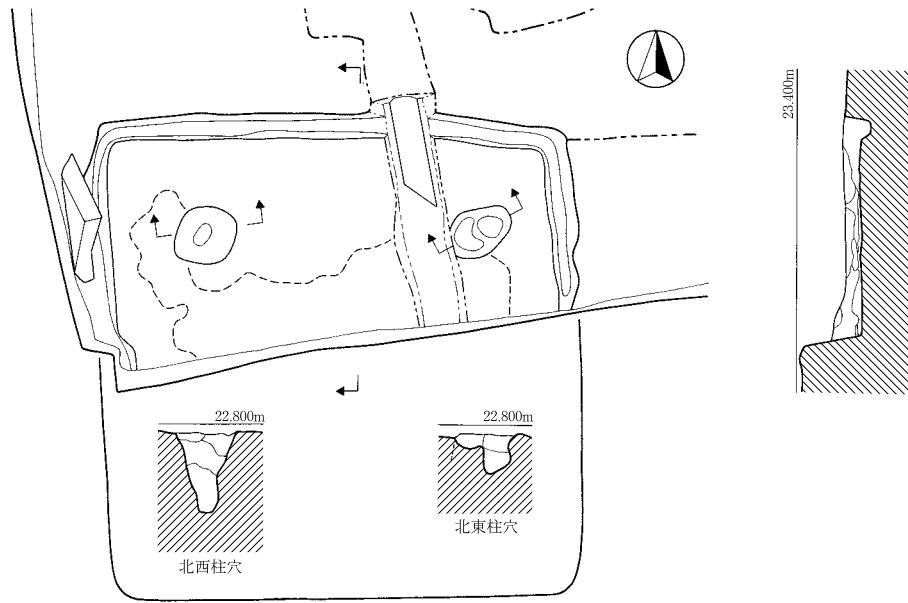
調査区の中央で、S I 025の西2mの地点に位置する。住居西北部はコンクリートの枘によって削平され、さらにそこへ取り付く掘込みによって住居西部が削平されている。住居東北隅もコンクリートのベタ基礎を施工した際に浅く削平され、南東隅には植栽痕があるなど、遺存状態はよくなかった。

カマドの位置が北壁中央とすると、住居は東西方向にやや長い長方形の平面形態と考えられる。主軸長は2.94m、副軸長を3.51mに想定すると、床面積は10m²程度になる。深さは13cm程度である。主軸方向はN-6°-Wになる。埋土は粗いローム粒と1cm大のロームブロックを含む暗茶褐色土で、部分的に焼土粒が散っている。カマドは北壁にあり、壁を60cmほど半円形に大きく掘りくぼめて煙道部を形成していた。煙道部の先端を覆うように焼土が堆積していた。その上から土師器甕(240)の上半部を口縁を下にして、なかに斜格子叩き目の平瓦片(4)をいれた状態で出土した。甕は被熱でかなり脆弱になっていたので、支脚に転用していた可能性もある。また床面上にははっきりした袖の構築材は確認できず、周辺にも構築材の散乱が認められず、煙道部と考えている部分を燃焼部としていたのかもしれない。

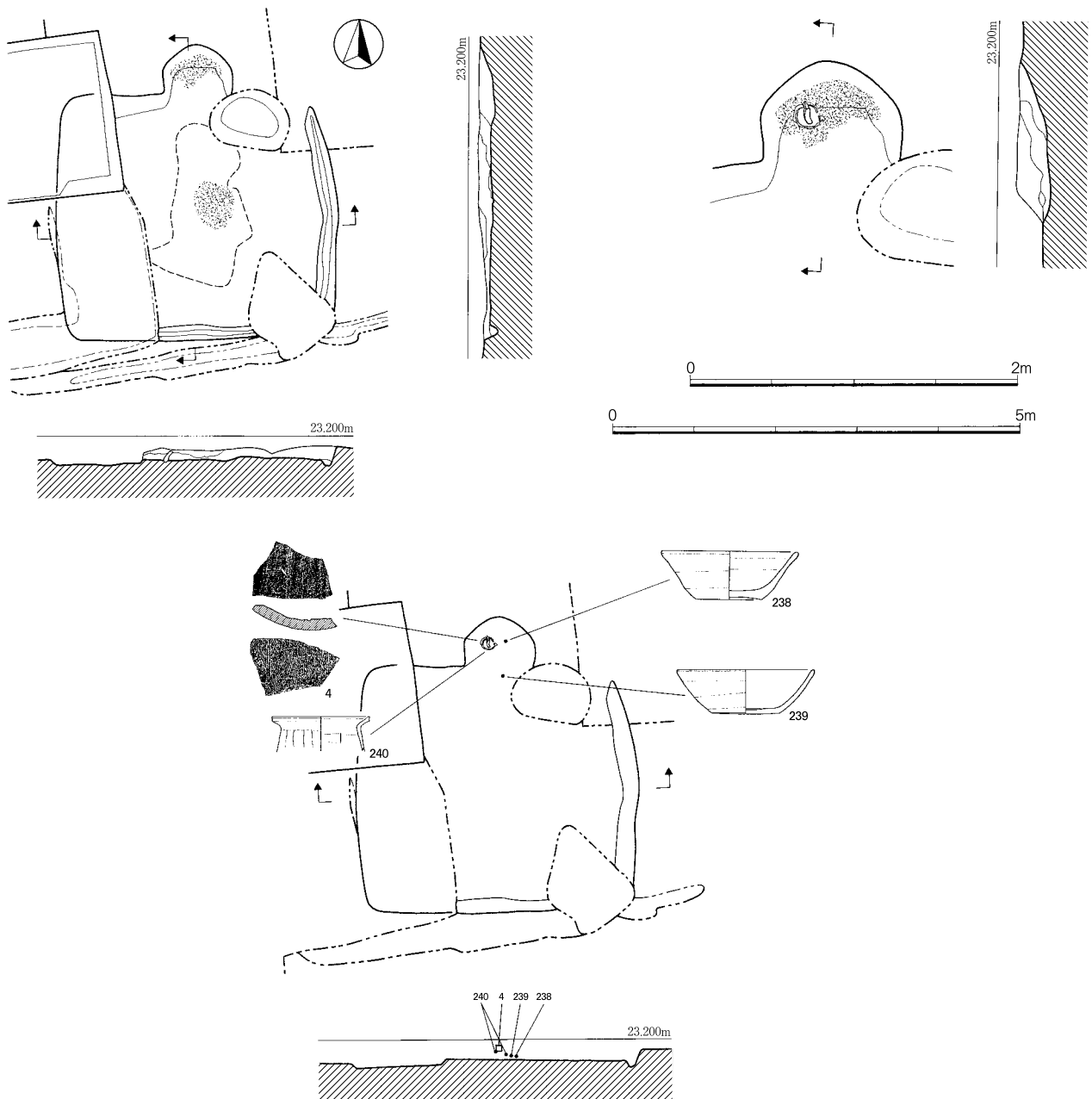
住居床面は凹凸があり、住居中央の床がくぼんだ部分には焼土が堆積していた。床面の硬化範囲は住居中央の縦長の狭い範囲で確認できた。壁溝は幅11cm～23cmと出入りがあり、深さは8cmほどになる。カマド部分を除いて全周する。支柱穴は確認できなかった。

出土遺物としては土師器杯(238・239)・土師器甕(240・241)などがカマド内を中心に出土した。

S I 028 (第31図, 図版9)



第29図 SI026



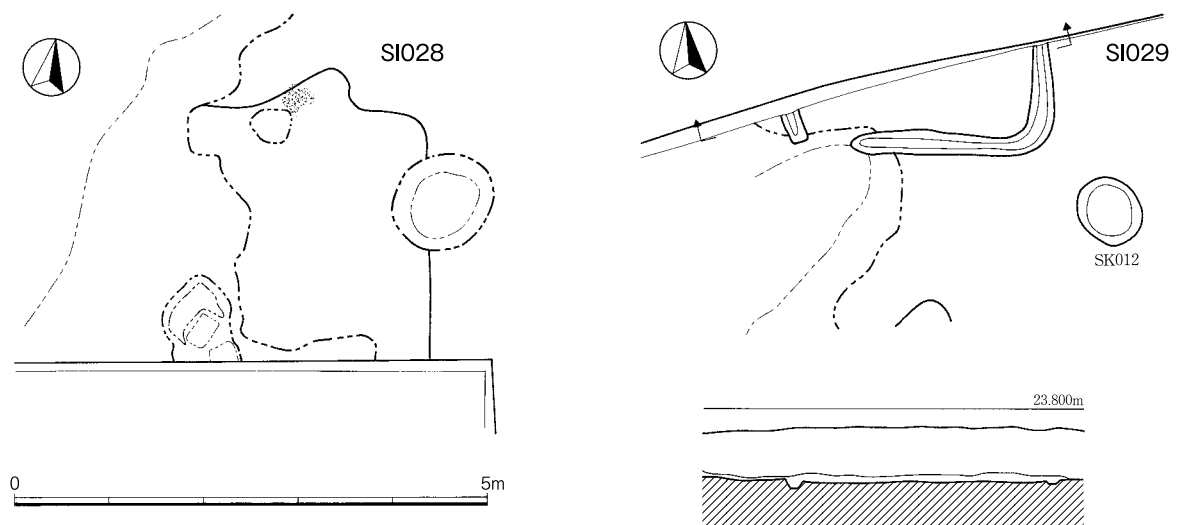
第30図 SI027

調査区中央よりやや西寄り、S I 027の北西、S I 029の南に位置する。上部が削平され、掘方部分しか残っていなかった。またコンクリート柁によって削平されるなど、遺存状態は極めて悪かった。

カマドの位置を北壁中央として左右を折り返すと、住居は南北方向に長い長方形の平面形態と考えられる。主軸長は2.6m以上、副軸長を2.0m以上と推定できる。主軸方向はN-10°-Wになる。北壁にあるカマドは、壁を25cmほど山状に掘りくぼめて煙道部を形成していたようで、その部分に焼土の散布範囲があった。出土遺物は掘方にめり込むような状態で、土師器杯類を中心に12点(60g)出土しただけで、とくに図示できるような資料はなかった。

S I 029 (第31図, 図版9)

調査区中央よりやや西寄り北端部に位置し、住居の南の2隅がかろうじて調査区内におさまる、大半は調査区外になる。また上面が削平されているために、ほとんど掘方しか残していなかった。南西隅で壁溝



第31図 SI028・SI029

が攪乱によって一部途切れるが、その隅角が鈍角になる可能性があるので、全体ではやや歪んだ方形の平面形態になるのであろう。東西長は2.9mで、主軸方向はN-6°-Eになる。壁溝の幅は20cm~27cmになって多少出入りがある。深さは現存で8cm程度である。

出土遺物は土師器杯・皿類、そして県内須恵器甕等の破片資料が7点(40g)出土しただけで、図示できる資料は出土しなかった。

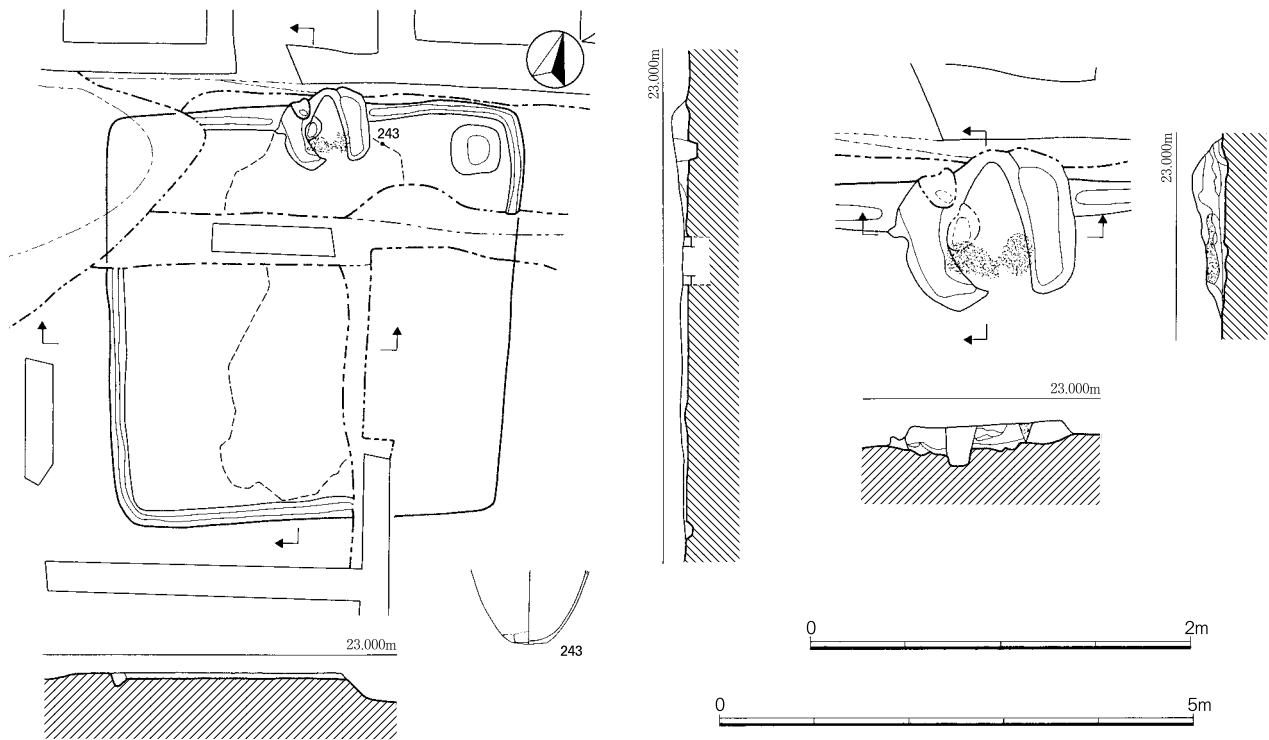
SI030 (第32図, 図版9)

調査区東部で、SI026の北東約3mの地点に位置する。住居の輪郭全体は調査区内におさまるが、住居周囲も含めてコンクリートの基礎が縦横に残っていた。また平面的にぐり石基礎の痕跡も広がっており、表土除去の際にそれらを重機で取り除いたために、住居周囲が皿状に削り取られたような状態になった。

住居の主軸長は4.35m、副軸長の最大値は4.36mになるが、住居北東隅が鈍角になるので、実際にはやや台形の平面形態になるのであろう。推定床面積は18.4㎡になり、そのうち調査できたのはその58%になる。深さは遺構上面が大きく削平されていたこともあって8cm程度しかなかった。主軸方向はN-14°-Wになる。埋土は径2cm~3cmのロームブロックを少し含む暗茶褐色土で、部分的に焼土塊を含む。カマドは北壁のほぼ中央にあり、北壁を少し掘込んでいる。カマドの袖は暗灰黄色の砂質土を構築材として、左右の袖が住居内に40cmほど延びる。右袖の内側は袖の基底面の幅は最大で30cmほどある。燃焼部から左袖の基底部にかけて、粘性の強い黒褐色土を数cmの厚さで敷いていた。燃焼部にはブロック状に灰層が堆積し、その直上には焼土塊が7cmほどの厚さで堆積していた。カマド内からはとくに出土遺物はなく、支脚も抜かれ、住居廃絶に伴ってある程度、住居内を片付けたと考えられる。

住居床面は比較的平坦で、カマド前面からカマド対向壁にかけて硬化範囲が広がるが、やや軟弱であった。壁溝は幅15cm~25cmで、深さは12cm~14cmになる。壁溝はカマド部分を除いて全周するのであろう。支柱穴は確認できなかった。ただ住居北東隅に50cm四方の掘込みがあった。壁はかなり斜めに掘っていて、深さは17cmであった。出土遺物もなく性格は不明だが、カマド近くということもあって、貯蔵穴のような機能だったのかもしれない。

出土遺物は土師器甕(243)がカマド付近の床面から出土した以外、土師器甕を中心に25点(262g)が



第32図 SI030

出土しただけで、まとまった出土資料はなかった。

2. 土坑

SK010 (第33図, 図版10)

調査区の南東部に位置し、西に位置するSK011とは1.16m離れる。長径1.06m、短径0.95mの、寸詰まりの卵形である。深さは10cmと浅く、底面にはやや凹凸がある。埋土は細かいローム粒を含む暗茶褐色土であった。出土遺物はとくになかった。

SK011 (第33図)

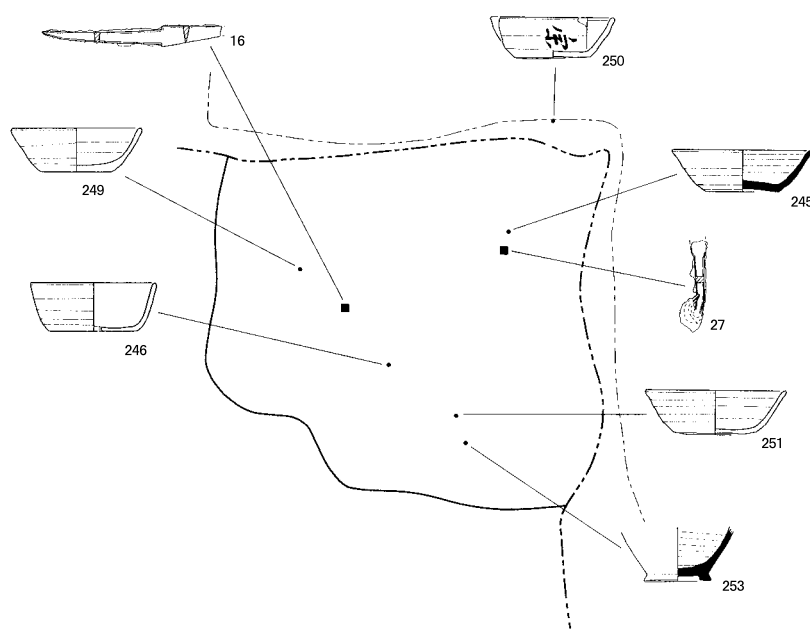
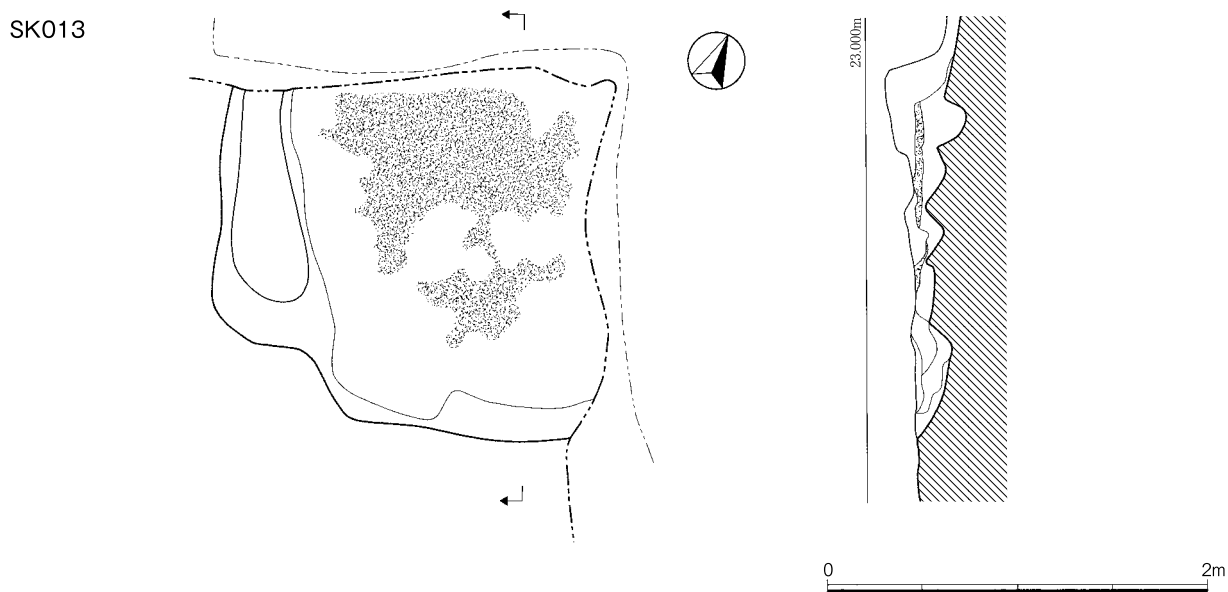
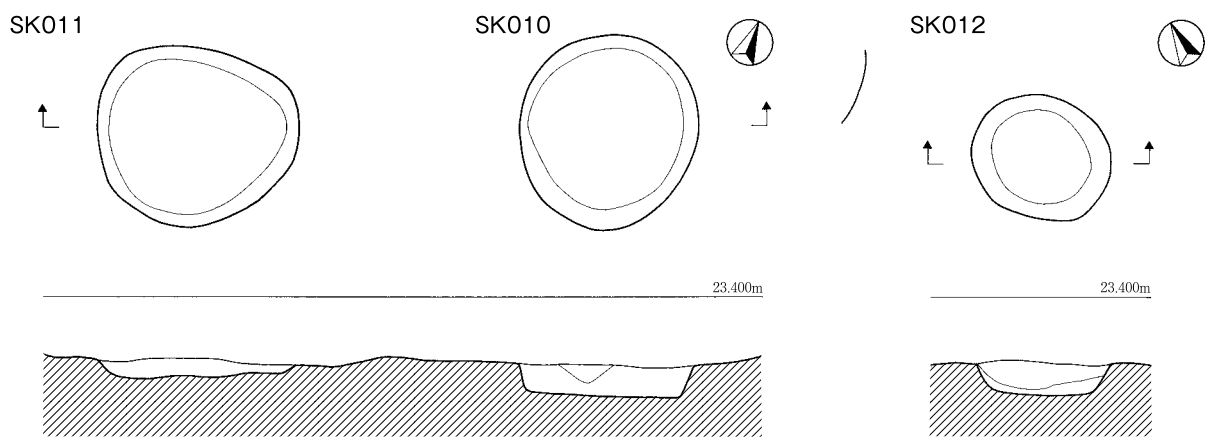
調査区の南東部に位置する。長径1.04m、短径0.94mで、ほぼ円形の平面形態である。深さは15cmで浅い。底面は比較的平坦で、壁は垂直に近く立ち上がる。埋土は粗いローム粒を多く含む暗茶褐色土であった。出土遺物はとくになかった。

SK012 (第33図, 図版10)

調査区中央の北西、SI029の南東に位置する。長径0.74m、短径0.64mで、やや長円形になる平面形態である。深さは16cmで、底面は比較的平坦で、壁は逆「ハ」の字状に開く。埋土は上層には粗いローム粒を主体とした暗黄褐色土が堆積し、下層には粗いローム粒とロームブロックが混在する、やや黒みのある暗茶褐色土が堆積していた。出土遺物は、体部外面に平行叩き目がある、9世紀代の在産須恵器の口縁部片が1点(150g)出土しただけである。

SK013 (第33図, 図版10)

調査区中央の南寄りに位置する。南西部の一角が遺存する。この一帯は非常に堅く締まっており、重機の掘削面が反射して遺構の輪郭を見極めにくかったために、重機で徐々に掘り下げながら遺構面を確定していった。その結果、東・北側はコンクリート基礎のぐり石が広範囲に散布しており、それによって遺構の大半が削平されたことが判明した。現存長1.80m×1.95mで、方形に近い平面形態を想像させる。底面



第33図 土坑 (SK011・SK010・SK012・SK013)

はかなり凹凸のある掘方で、最深部では26cmの深さがある。壁の立ち上がりはだらだらとし、掘方自体は浅い皿状になるようである。埋土は上層に焼土を主体とする赤褐色土が数cmの厚さで水平を保ちながら堆積していたが、なかに炭化物等は確認できなかった。その下面には床を構築したような形跡はなく、それ以外の部分では黒色土を含む暗茶褐色土が堆積していた。

出土遺物は遺存状態のよい資料も多かったが、埋土中に赤褐色の焼土がかなり堆積していたにもかかわらず、出土土器には被熱痕跡は確認できなかった。土師器杯6点(245～251)・須恵器甕(252)と刀子(16)・棒状鉄製品(27)を図示したが、それ以外に土師器杯36点(265g)・皿2点(38g)・甕82点(340g)、須恵器杯9点(60g)・甕8点(105g)があった。

注

- 1 調査区の面積は描画ソフトから算出したもので、第1章第1節の数値とは算出方法が異なるために、数値はやや異なる。
- 2 以下、遺物の出土量を示すときの目安としてテン箱の箱数をいう場合には、54cm×33cm×15cm容量のテン箱に換算したものを基本とする。

参考文献

田中広明 1991「東国の在産暗文土師器」『埼玉考古』第28号 埼玉考古学会

鳴田浩司ほか 2012『市川市国府台遺跡第13地点(2)―国立国際医療研究センター国府台病院埋蔵文化財発掘調査報告書』(公財)千葉県教育振興財団

文化庁文化財部記念物課 2010「遺構の発掘」『発掘調査のてびき―集落遺跡発掘編一』文化庁文化財部記念物課・独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 同成社

水ノ江和同ほか 2002「大型竪穴式住居内における「柱抜き取り排土」について―柱穴に付帯する階段状掘り方の性格―」『福岡考古』20号 福岡考古懇話会



写真3 B調査区調査風景(西から)

第3章 遺物

第1節 土器類

出土した土器類の大半は堅穴住居から出土し、遺跡の時代性をそのまま反映して、奈良・平安時代の資料が抜きんでている。ほかに縄文土器が少量あった以外、ほかの時代に属するものでとくに報告するものはなかった。

奈良・平安時代の土器と縄文土器については、それぞれで通し番号を付した。墨書土器は同一資料を奈良・平安時代の土器のなかで取り上げることもあるので、掲載土器と区別する必要がある場合には通し番号の前に「S」の略号をつけた。なお縄文土器以外の土器の計測値・胎土等については、別表の観察表によらるたい。胎土については、砂粒の多少、そして含有物として黒・赤色スコリア、雲母、白色針状物質、黒色斑文等に関して記載し、備考には被熱痕跡の有無や赤色塗彩、黒色処理等、おもに焼成後の使用痕跡等に留意しながら記載した。なお黒色処理に関しては、炭素吸着と漆仕上げの別はとくにしていない。

1. 奈良・平安時代（第34～44図1～254，図版11～15，別表1）

S I 001出土土器（第34図1～4，別表1）

1は須恵器杯で、底面から底部外縁周囲にかけて擦ってなめらかにしている。胎土の特徴等から南比企産と考えられる。2は口径が20cmほどに推定できる、径が比較的大きい須恵器高台付盤である。体部は逆「ハ」の字状に開き、底部から体部への変換点にあたる稜が角張るのが特徴である。また底部中心部は高台から突出して、ほとんど接地するほどになる。湖西産である。3・4は武蔵型土師器甕で、口縁部は緩やかに「ハ」の字状に開き、器壁を非常に薄く作る。最大径は口縁端部にある。3では口縁部直下を横方向にヘラケズリし、それ以下を斜めにヘラケズリする。いずれも被熱痕跡を確認できるが、3ではとくに顕著で、全体に赤化し、体部下半にはタール状の付着物がこびりつく。

図示した以外に、赤色塗彩の杯の小片が2点、口縁部が屈曲する北武蔵型暗文土器の小片も1点出土した（田中1991）。

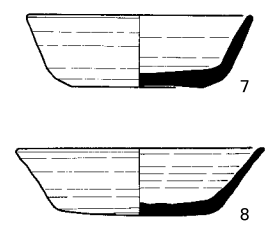
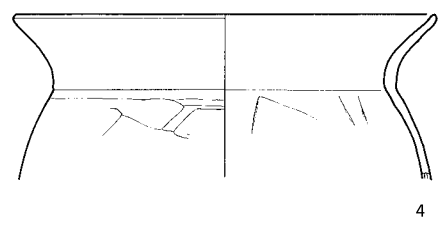
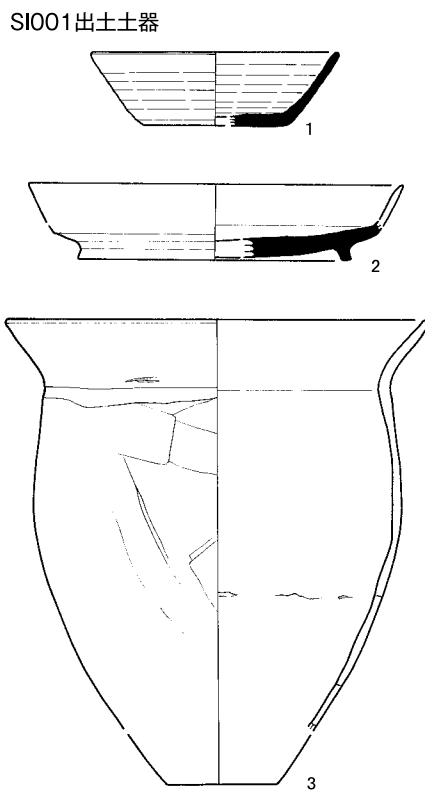
S I 002出土土器（第34図5～11，図版11，別表1）

5は口径が20cmを超える須恵器盤で、口縁端部がやや外反し、底部から体部への立ち上がりを緩やかに成形し、おそらく高台がつくのであろう。胎土に雲母を含まないが新治産と考えられる。6も須恵器盤で、底部と体部の境となる稜のつくりメリハリが欠ける。口縁端部はやや角張る。胎土に黒色斑文を含み、東海産であろう。7～9は須恵器杯で、7は径高指数が32になって、やや深みのある器形になる。胎土等は6に似ていて、東海産の製品と考えられる。体部下半で回転ヘラケズリの調整痕の直上を帯状に擦っており、その部分だけ平滑になっている。8・9は胎土に雲母を含み、8は常陸産、9は新治産と考えられる。10は土師器蓋で、天井部に低い立ち上がりの環状つまみがつく。部分的に煤けているが、器面は滑らかですべすべしている。11は須恵器瓶の下部資料で、底部内面に降灰が付着している。

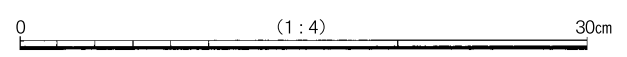
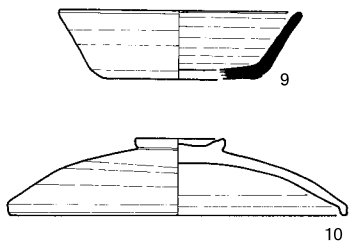
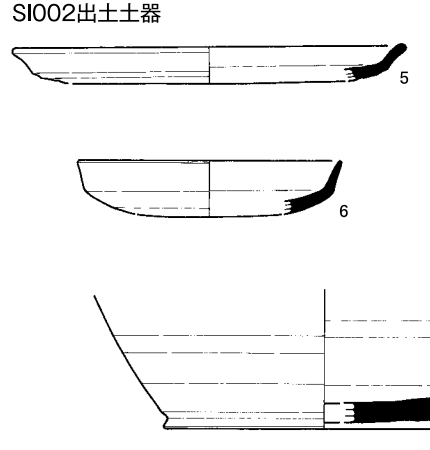
図示した以外には、緑色の発色が鮮やかな緑釉陶器皿の小片が1点、灰釉陶器の段皿と杯の小片などが1点ずつ出土した。土師器杯では北武蔵型暗文土器が1点出土し、赤色塗彩の小片が10点出土した。

S I 003出土土器（第34図12～24，図版11，別表1）

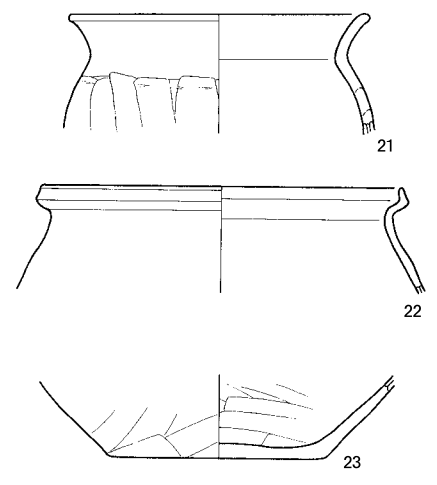
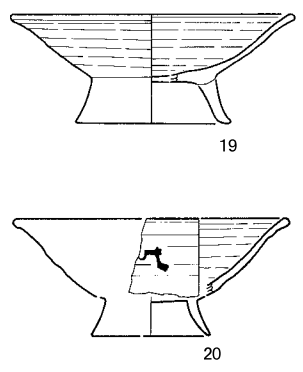
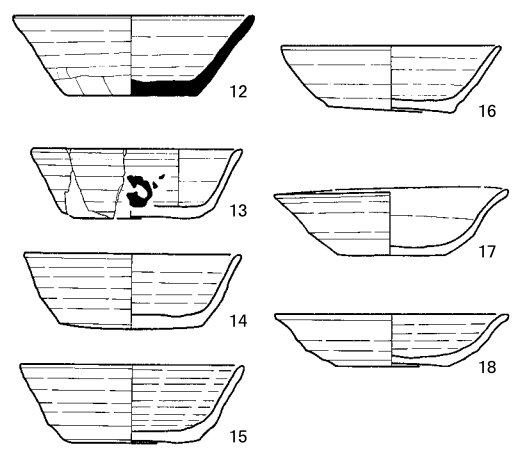
SI001出土土器



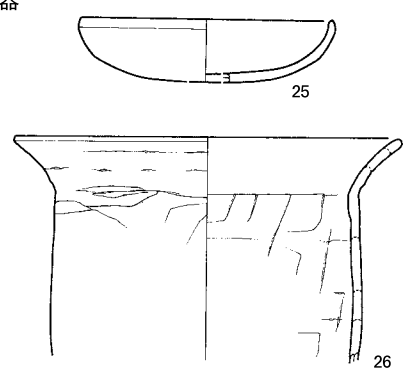
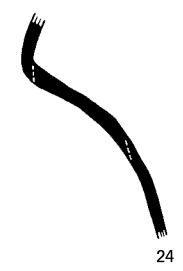
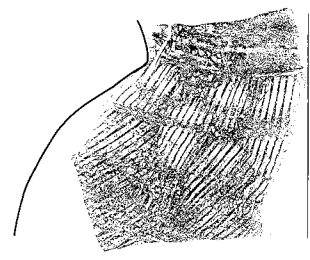
SI002出土土器



SI003出土土器



SI006出土土器



第34图 SI001~003・006出土土器

出土資料は1世紀近い開きがあり、土師器杯でいえば箱形杯の名残をとどめる段階のものと、足高高台付杯の段階とにわけることができる。ただそれほどの時期差をわけられるような出土状況ではなく、出土レベルは錯綜する部分がある。12は肌理の細かい胎土で混和物が少なく、底部を肉厚に作る須恵器杯で、東金子産の製品と考えてよいであろう。13～15は土師器箱形杯に連なる器形で、径高指数が33を超え、器高も4cm近い。13の体部外面には墨痕が残るが、判読できない(S36)。

16～18は器高が3.6cm以下の土師器杯で、径高指数30以下になり、体部が大きく開く器形になる。16の底部外面に墨痕が残るが、かすれて不鮮明である(S48)。19・20は足高高台付杯で、いずれも脚部を欠く。坏部は大きく逆「ハ」の字状に直線的に開く。20の体部外面には墨痕を確認できるが、判読できない(S35)。

21～23は土師器甕で、21は径15.6cmと小ぶりである。口縁部は「く」の字状に外反し、最大径が体部上位にある。破面には被熱で赤化した痕跡を残すが、器面にはさほど荒れた形跡は確認できない。22は胎土に白色の小礫と雲母を多く含む、常総型の甕になる。口縁端部を大きくつまみあげて、先端を内側に折り曲げている。23は胎土・調整等から武蔵型で、底径の大きい丸胴型の甕である。細かい砂粒を多く含み、器壁は4mm程度の厚さしかない。24は須恵器甕の頸部周辺が残る部分資料である。体部外面は平行叩き目で、内面には当て具痕は残っていない。胎土に粗い白色砂粒と雲母を多く含み、常陸産の可能性はある。

S I 006出土土器 (第34図25・26, 別表1)

2点だけ図示した。25は非ロクロ成形の丸底の土師器杯で、口縁端部がやや内湾する。内面は比較的平滑だが、外面は荒れている。赤色塗彩はとくに確認できない。26は体部にほとんど膨らみのない長胴甕の体部上半の資料で、最大径は口縁部にある。口縁部には体部をヘラケズリした際に、工具を深く入れて削りだした痕跡が残り、工具の動きに沿って素地が搔き取られている。数cm幅で粘土紐接合痕が残る。上部の資料ということもあってか、被熱痕跡はとくに確認できない。

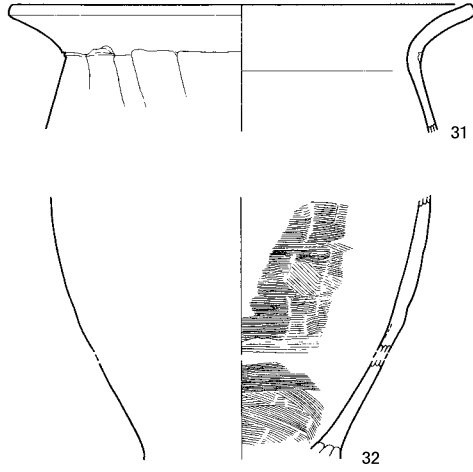
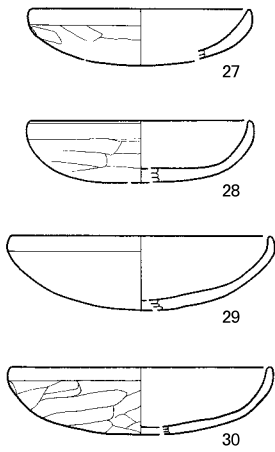
S I 004出土土器 (第35図27～32, 別表1)

27～30は丸底の土師器杯で、口径が11cm台と13cm台との大小にわかれる。赤色塗彩の痕跡はない。27・28は器面の調整を素地がある程度乾燥した状態で行っているようで、鈍い光沢がある。29は全体に摩耗が著しいが、30は内面を粗く磨いている。31は口縁部が「く」の字状に外反し立ち上がる、武蔵型長胴甕の口縁部付近の資料である。最大径が口縁部にあり、体部がやや膨らむ。口縁部のつくりはややボツリとする。やはりヘラケズリの削り出しを深く搔き取る。被熱痕跡は顕著ではないが、外面に炭素分がこびりつく。32は鉢状に体部が開く甕下半部の資料で、下端部は器壁が厚く、底部に近い。内外面をハケ目で調整しているが、被熱痕跡が顕著で、外面は器面が荒れてハケ目をほとんど残さない。同一個体と考えられる小片が、口縁部で2点、体部で1点出土した。胎土に白色砂粒・赤色スコリアを多く含み、砂っぽい。色調がにぶい橙色(7.5YR7/4)～にぶい黄橙色(10YR7/2)と全体に白っぽく、調整手法や胎土の特徴は相模型甕に近く、搬入品の可能性がある。ほかに須恵器のかえりをもつ蓋の小片1点出土した。

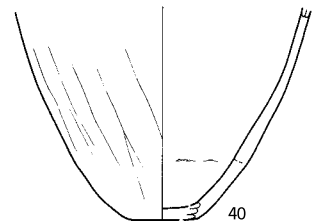
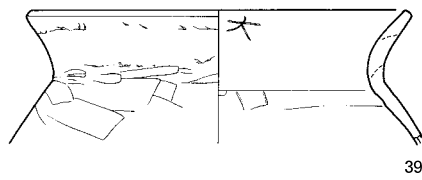
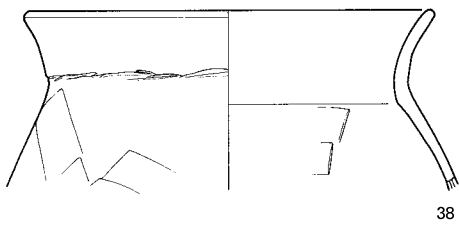
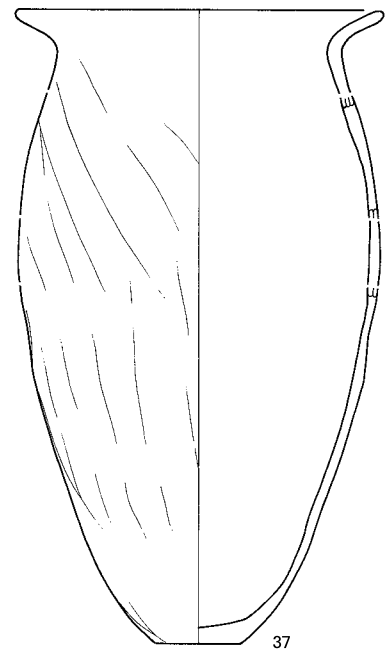
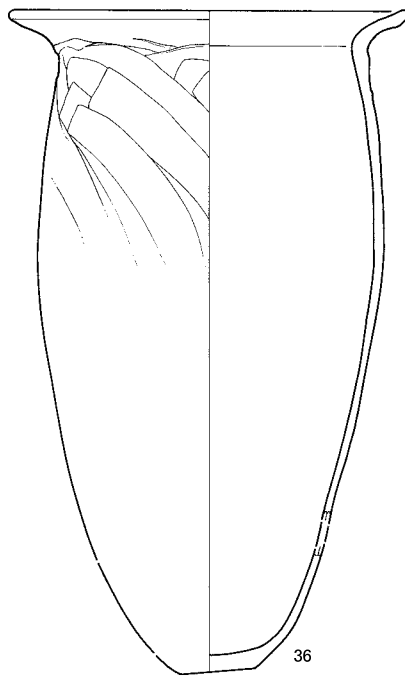
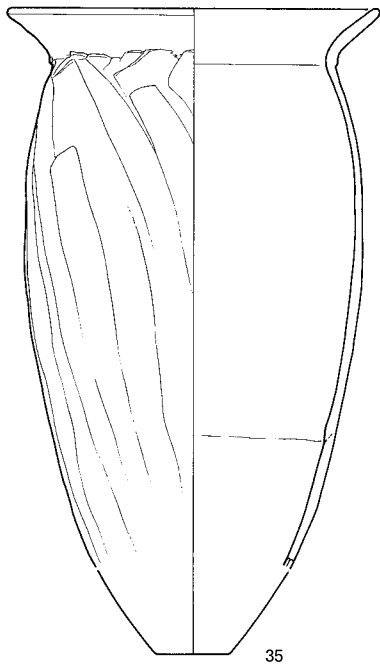
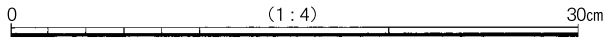
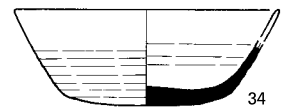
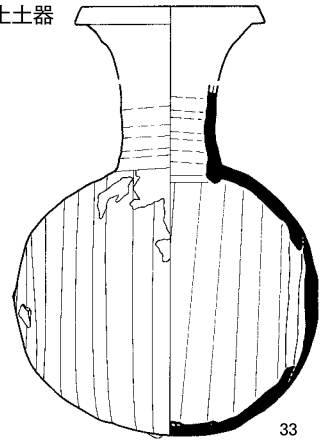
S I 007出土土器 (第35・36図33～44, 図版11・14, 別表1)

33は須恵器フラスコ形提瓶で、頸部上半部を欠損する以外はすべて遺存する。頸部の破面はほぼ水平に割れているが、打ち欠いた痕跡はとくに残していない。胴張り指数⁽¹⁾は1.08になり、球胴に近い。図の右側に円盤状の粘土板を貼り付けて片面を閉塞し、その後、上部に穴をあけて頸部を取り付けている。体部は内外面とも顕著なロクロ目が残る。体部上半は自然釉が飛沫状に覆っており、さらにロクロ目のくぼみに沿って自然釉の釉溜まりができています。なお頸部の推定にあたっては、中位には沈線はなく、口縁部

SI004出土土器



SI007(1)出土土器



第35图 SI004·007(1)出土土器

直下の段も省略したものを想定している。胎土に黒色斑文を含む湖西産の製品で、7世紀代にほぼ生産が終了すると考えられている器種である(鈴木2001)。34は体部が逆「ハ」の字状に直線的に開くが、底部と体部の境が不明瞭な須恵器杯である。深さは5cmを超えて、やや深みのある形態になる。底面はヘラ切り後無調整で、それに重なるように乾燥時に接地した板等の木理が転写されている。胎土に黒色斑文を含み、湖西産であろう。

35～41が土師器甕で、数量的にまとまって出土しており、遺存状態が良好なものが多い。35～37・40が長胴甕で、最大径は口縁部にある。体部最大径は器高の3分の2付近にあり、その部分はやや張り出す程度である。35では上下別々に成形したものを、器高の3分の1の高さで上半部を下半部にはめ込むように接合した痕跡を残す(上野ほか1972)。体部は緩やかな円弧を描くようにヘラケズリし、器壁をかなり薄く削るのが特徴で、4mm～5mmの厚みに整えている。37は被熱痕跡があまり残らないが、35・36は体部外面が煤けており、皮膜状の炭化物もこびりつく。38・39・41は体部の上位に最大径がある倒卵形をした甕の部分資料である。体部は横あるいは斜めのヘラケズリを行っている。39の口縁部内面に「大」を正位で焼成後に刻書している。使用工具は先端が尖った鉄製品などであろう。38では一部で赤変するほど被熱痕跡が顕著だが、39・41ではさほど被熱痕跡は顕著ではない。

42・43は単孔式の土師器甕で、内面は42では板の小口をなでつけて器面を整え、43ではヘラナデ後に指頭によるナデで器面を平滑にしている。体部外面はいずれも縦方向にヘラケズリし、43では下端を斜めにケズリしている。42は器壁を厚めにし、43では口縁部周辺の器壁を厚くする以外は薄く整えている。43はS I 010出土資料と遺構間接合した資料になる。44は丸底の須恵器甕の部分資料である。外面は平行叩き目で叩き締めた後に浅くカキ目を重ねる。内面は同心円当て具痕が顕著に残る。胎土に白色砂粒を多く含み、4mm程度の長石を少し含む。

S I 008出土土器(第36図45～47, 別表1)

土師器杯3点を図示した。45・46は口底径比1.8前後、径高指数30前後になる。45は底部を半分欠いているが、外面中央にやや幅の広い工具によるヘラ書きがある。部分しか残っていないので詳しいことはわからないが、逆「V」字状の痕跡が残り、漢字の用筆に共通するようにもみえる。47は径が16cm前後になって、大型で深みのある資料である。

図示した以外に、くすんだ緑色の緑釉陶器杯の小片が4点出土し、皿の小片も5点(62g)出土した。

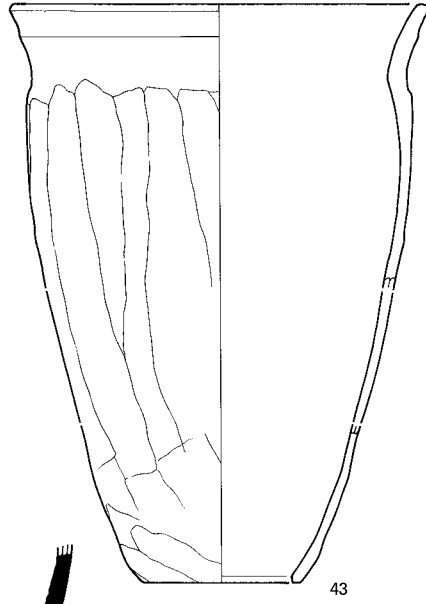
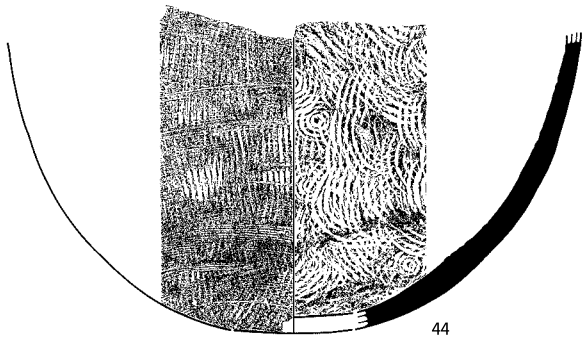
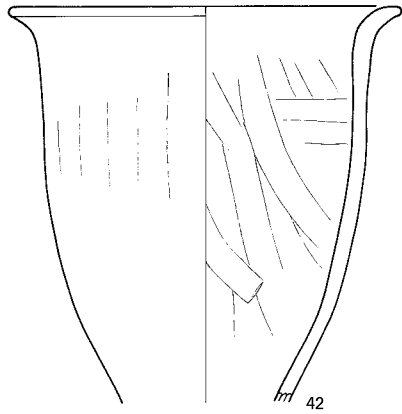
S I 009出土土器(第36図48, 図版11, 別表1)

須恵器長頸瓶の頸部が残る資料を1点図示した。口縁部は欠けており、下端も体部との接合部で破損している。内面に降灰が疎らに付着する。ほかにくすんだ緑色の緑釉陶器杯の小片が1点出土した。

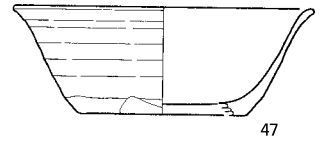
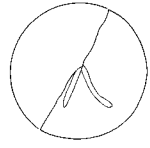
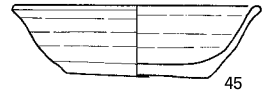
S I 011出土土器(第36図49～57, 図版11・12・14・15, 別表1)

49は回転糸切り後、無調整の須恵器杯である。胎土に小礫を少し含み、比較的肌理も細かく、栃木県三^み轟^{かも}産の可能性がある。50～55は土師器杯で、50・51・53は口底径比が1.5になり、やや箱形に近い器形である。52は径高指数が33になって、深みのある器形になる。底部の切り離しは50・52が回転糸切りによる。51・53は静止糸切り後、底部外周を回転ヘラケズリしており、胎土も共通し、同工品の可能性がある。なお50の底部外面の中央に「力」の墨書(S14)がある。また53の体部には「V」字状に大きく欠けている部分があり、打ち欠いたものかもしれない(糸川2009)。55は椀状の高台付坏で、限定的に出現する器種である。体部の厚さにたいして、底面をかなり厚くするのが特徴である。内外面を粗く磨いている。56は天井部が

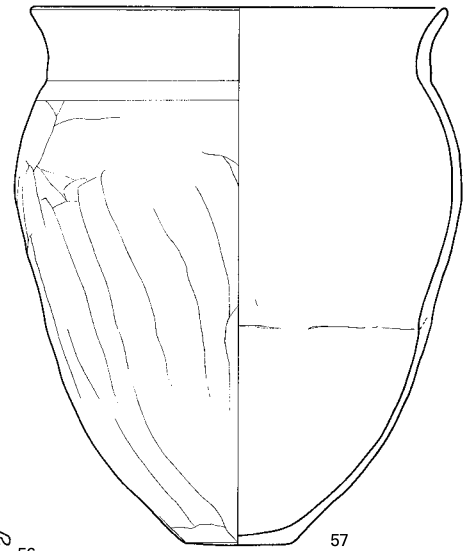
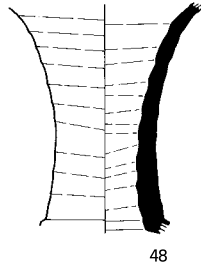
SI007(2)出土土器



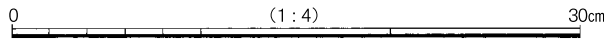
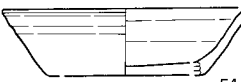
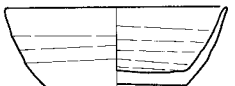
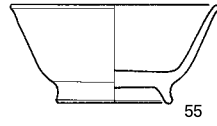
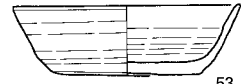
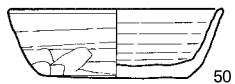
SI008出土土器



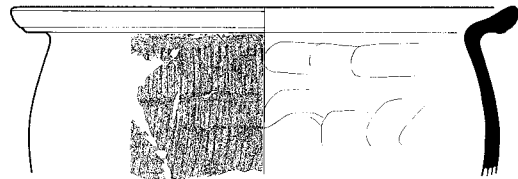
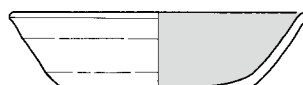
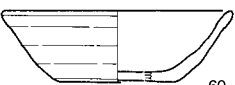
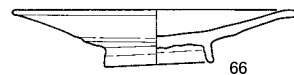
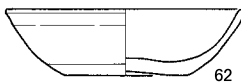
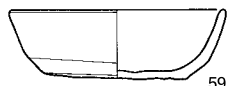
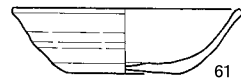
SI009出土土器



SI011出土土器



SI014出土土器



第36图 SI007 (2) · 008 · 009 · 011 · 014出土土器

高く持ち上がり、肩部が角張る土師器蓋である。つまみは扁平で、中央が突起になって、少し出っ張る。

57は武蔵型の土師器甕で、最大径が器高の3分の2あたりにある。口縁部は緩やかに外反する。体部上部は横方向にヘラケズリし、それより下を縦に削る。体部の2分の1の高さのところ、上下別々に成形した個体を接合した痕跡が内面に残る。器壁は全体に薄い作りだが、その接合部分を境に上半部では厚みが6mm程度だったのが、下半部では4mmになる。体部外面には煤が部分的に付着する。

図示した以外には、赤色塗彩の土師器杯の小片が4点出土した。

S I 014出土土器（第36図58～69、図版12、別表1）

58は胎土に白色砂粒を多く含み、器壁も厚めで、やや粗雑な作りになる、県内産の須恵器杯である。59～63は土師器杯で、59の口底径比が1.5になる以外はほぼ2.0で、63の径高指数が35になる以外は30前後になって深みのある器形になる。64は体部内面を丁寧にミガキ調整した後、黒色処理し、処理面には光沢がある。

65～68は土師器皿で、いずれも口径が15cm～17cmと大きいのが特徴である。65・66には高台があり、65の高台は断面三角形に近く、短く「ハ」の字状に開き、内面に黒色処理を施す。66の高台は厚さ4mmでほぼ垂直に取り付けている。全体にかなり薄手の作りである。67・68は無高台で、67は体部にやや丸みを持ち、底面を削り出し高台風に成形している。胎土は肌理が細かく、上総型杯にみられるような粉っぽいもので、長時間水に浸かっているととろけ出すような素地である。そのために調整痕跡はほとんど残していない。68は内面を丁寧にヘラミガキ調整して、器面を平滑にしている。

69は千葉市域産の須恵器甕で、口縁部が短く外反し、端部がポツテリしている。体部に少し膨らみを持ち、体部外面は平行叩き目で成形し、内面には円礫等による当て具痕跡が残る。器高は25cm前後になるであろう。断面の色調がサンドイッチ状になっており、芯が灰色（5Y6/1）でそれを橙色（5YR6/6）が挟んでいる。

図示した以外では赤色塗彩の杯の小片が7点（31g）出土した。

S I 015出土土器（第37図70～83、図版12、別表1）

70～72は須恵器杯で、70は体部は少し丸みを持ちながら立ち上がり、口径は16cm程度になるであろう。胎土は肌理が細かく精緻で黒色斑文を含み、湖西産の製品になる。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。71・72は胎土に粒径の大きい雲母粒を多量に含み、新治産と考えられる。71は器面が荒れていて観察できないが、72では底部を回転ヘラ切りした後、無調整である。いずれも軟質な製品である。

73・74は非ロクロ成形の土師器杯である。73は底面に木葉圧痕が残る。圧痕の主脈部分の幅は1mm程度で、側脈はさらに細い筋状で、3mm～4mm間隔で主脈から70°～85°の角度で左右にわかれていく。側脈の圧痕はかなり浅く、ホウノキやカシワのような大型の葉ではなく、土器の大きさにあわせた小さい葉が使われたことを想像させる。内面は平滑に調整している。74は平底の椀状のような器形で、口径15cm、器高10cm近くあり、やや大型である。内面は粗く磨き、外面は横位のヘラケズリ痕跡を素地がある程度乾燥した状態でナデつけて、器面に鈍い光沢がある。赤色塗彩こそしていないものの、色調は赤褐色（10R5/4）で、そうした効果を期待してこの素地を選択した可能性がある。

75・76は内外面に赤色塗彩を施した土師器杯である。75は底面をほとんど欠いて、76では手持ちヘラケズリで切り離し痕跡を消してしまっているが、他例に照らせば切り離しはいずれも静止糸切りで行われたのであろう。77は口径14cmになる、やや大型の土師器杯である。体部は直線的に逆「ハ」の字状に開く。赤色塗彩の土師器杯片は、図示した以外に12点（130g）出土した。

78は擬宝珠形つまみをもつ、須恵器蓋である。胎土に黒色斑文を含み、湖西産の製品である。79は頸部が低く立ち上がる、短頸小壺である。胎土に雲母を多く含み、黒色スコリアも混じり、常陸産であろうか。80は小型のコップ型の須恵器である。体部はほぼ垂直に立ち上がって、箱形の器形になる。底面が平かどうかわかぬが、底面には貫入のはいった緑色のガラス状の釉が厚く付着している。焼成時に上下を逆に窯詰めした可能性がある。

81～83は土師器甕で、81・82は武蔵型で、いずれも体部上半の資料だが、81の最大径は口縁部にあり、82は体部上位にある。82の口縁はやや「コ」の字状に成形している。調整はどちらも横もしくは斜めのヘラケズリを行い、器壁を薄く作っている。

83は常総型の土師器甕で、体部が球状に丸みをもち、最大径が体部上位にある。口縁部が「く」の字状に外反し、端部をつまみあげて稜を作る。体部上位にはヘラあての痕跡が残り、体部下半は縦のミガキ調整を行う。胎土には雲母や粒径の大きい白色系砂粒を多く含む。被熱痕跡は確認できない。

S I 021出土土器（第37図84～99、図版12、別表1）

84は灰釉陶器で、底部を厚く作り、断面台形の高台がとりつく。口縁端部は少し外反する。灰釉は内面のみを刷毛塗りしている。釉色は灰オリーブ色（7.5Y6/2）で、K-14でも古相の資料になるであろう。

85は南比企産の須恵器杯で、底面は回転糸切り後、無調整である。体部外面に正位で、部首「ふしづくり」の淡い墨書がある（S1）。

86～92は土師器杯で、口底径比がほぼ2.0になり、86～88が径高指数が30前後になる。87は内面に炭素が吸着し、88は全体に煤ける。89・90はS I 014出土の67の皿と似た胎土で、肌理が細かく、指でこすると指先に色移りする。両者は胎土に赤色スコリアを多く含むという点で共通し、調整痕跡も似ており、同工品であろう。91はかなり器高が高く、4.9cmもある。底面に乾燥時に転写された板目状圧痕が残る。92は内外面が摩滅している。93・94は土師器皿で、93は底部をやや絞って成形し、底面が糸切りによって少し抉れることもあって、高台のように低く立ち上がる。内面は磨いて平滑にする。94は断面「ハ」の字状の高台を貼り付けている。薄手の作りで、水分を含むと非常に脆弱になって崩壊しやすくなる。

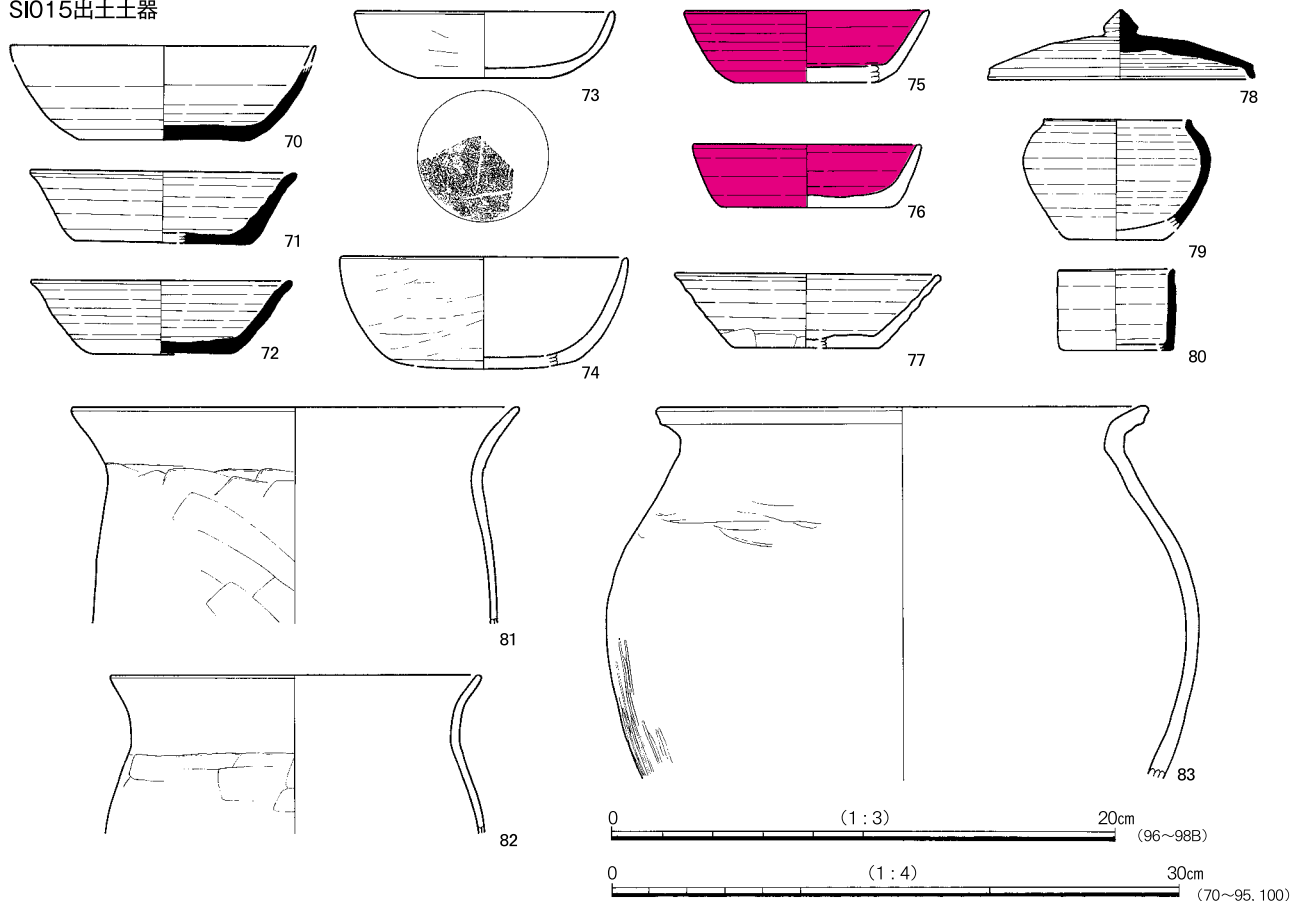
95は灰釉陶器長頸壺の頸部以下が残る資料である。上部外面にはややくすんだ緑色で、貫入がはいったガラス状の釉が残る。胎土に黒色斑文を含む。

96～98は須恵器甕の断片である。96は横・従断面に曲率がほとんどなく、かなり径の大きい甕を想像させる。外面は平行叩き目で成形し、内面には木理状の当て具痕が残るので、彫刻のない板を当て具にしたようであるが、形状までは復原できなかった。胎土に黒色斑文を含み、湖西産の製品であろう。97は外面に平行叩き目を残す。胎土は粗い。ほかに同一個体資料が39点（307g）あり、そのうち底部近くの資料では横方向にヘラケズリした痕跡を残す。98は外面に同心円叩き目を残す資料で、茨城県から千葉県北西部にかけて分布するものである（酒井 1981・川井 1988・栗田 1990）⁽²⁾。Bでは叩き目1単位の半径が少なくとも4.4cmはある。内面はAではなでた跡が残るが、Bでは木理状圧痕が残り、96同様、彫刻のない板を当て具にしたようである。いずれも胎土に雲母・白色粒を含む。ほかに同一個体資料が6点（86g）出土した。

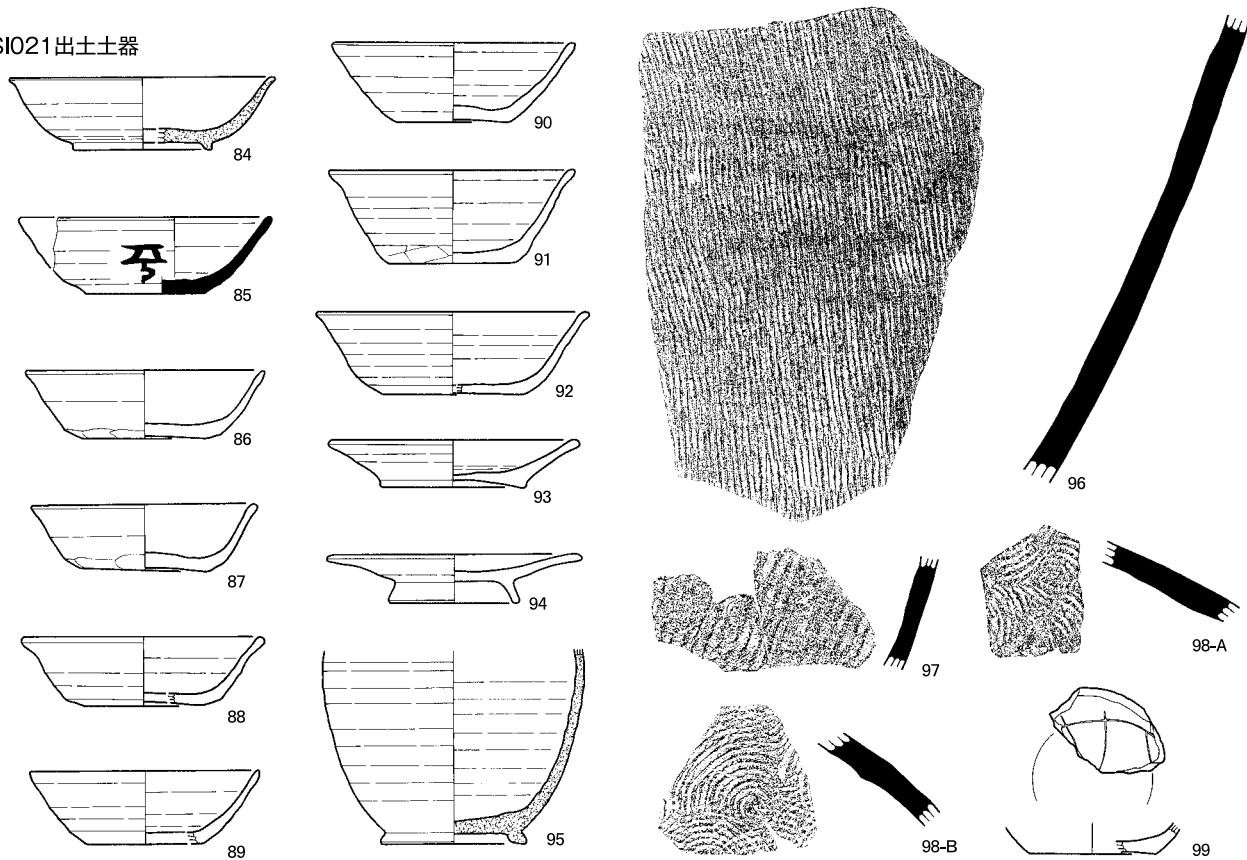
99は土師器杯の内面に、円と放射状の線を組み合わせて刻書している。刻書そのものは浅いが、焼成後の線刻なので、先端が鋭利な鉄製品などを使ったのであろう。

図示した以外では、ほかに赤色塗彩した土師器杯の小片が1点出土した。

SI015出土土器



SI021出土土器



第37图 SI015・021出土土器

S I 016出土土器（第38図100～104，図版12，別表1）

100は土師器盤で，口径は推定で20cmになり，大型の部類に属す。肌理の細かい素地に砂粒と黒・赤色スコリアを含む。底部から体部への立ち上がりの変換線は丸みをおびる。101は底部を厚くした高台付坏である。坏部の切り離しは回転糸切りである。やや軟質で器面が擦れている。内面の上半分がやや煤ける。胎土に長石と雲母を含み，新治窯の製品である。102は擬宝珠を押しつぶしたようなつまみをもつ土師器蓋で，内面全体が黒く煤ける。103は高盤脚部の部分資料である。透し孔の切り込みが2辺残り，本来透し孔が4か所あったことがわかる。胎土には雲母を多く含み，新治産と考えられる。104は武蔵型の土師器甕の口縁部が残る資料で，口縁部は「く」の字状に外反する。体部最大径は，体部の上位にある形態であろう。胎土に砂粒を非常に多く含み，赤色スコリアの含有も目立つ。口縁部直下は横方向にヘラケズリしている。図示した以外では，箱形の土師器杯で静止糸切りで切り離した小片が1点出土した。

S I 017出土土器（第38図105，別表1）

105は口径が推定で15cm近くになる，非ロクロで成形した丸底の土師器杯である。比較的薄手の作りで，もっとも薄いところで2mmの厚さしかない。胎土に粗い砂粒を少し含み，器面がややざらつく。全体に摩耗しており，調整痕跡も不明瞭である。

S I 018出土土器（第38図106，別表1）

106は県内産須恵器甕の底部近くが残る資料である。体部が逆「ハ」の字状に直線的に開く県内産須恵器である。遺存部分が底部に近いということもあって，ヘラケズリの跡しか残らず，叩き目は残っていない。胎土に白色砂粒を非常に多く含む。

土師器杯の資料としては，回転糸切りで底部外周をヘラケズリした小片が1点出土した。

S I 019出土土器（第38図107，別表1）

107は土師器杯の部分資料である。口底径比にさほど差がない，箱形の器形である。ほかには赤色塗彩した土師器杯の小片が1点出土した。

S I 024出土土器（第38図108～116，図版12，別表1）

108～111は土師器杯で，108は調整後に底面中央に径1.3cmの穿孔をしている。孔にはとくに擦れた痕跡は確認できない。口底径比が1.7で，やや箱形に近い。109は体部に丸みをもち，椀に近い形態である。110は焼け歪みが大きく，口径の最大と最小の差が1cmあり，上面観は楕円形に近い。111は回転糸切り痕の周辺を手持ちヘラケズリでかなりラフに削る。内面の底面を中心に煤けている。112は底部を欠くが，体部が逆「ハ」の字状に開く，ロクロ成形による土師器鉢である。外面の体部上半にロクロ目が残り，それ以下を横方向のヘラケズリで仕上げている。内面は横方向のミガキ調整で平滑にしている。

113～115は東京湾奥部から内陸にかけて分布する，ロクロ成形による土師器小型甕で，径10cmほどの底部の資料である。いずれも底径が比較的大きいので，器高は18cm程度にはなるであろう。113・114の底部切り離しは回転糸切りにより，115は静止糸切りによる。底面外周は手持ちヘラケズリする。いずれも被熱痕跡が顕著である。116は須恵器甕の小片で，叩き目に特徴があり，観察できる範囲では平行目が斜めに交錯する。小片のために叩き板の1単位がはっきりしないが，叩き板の方向を変えて叩いたのか，1単位が矢羽根状あるいは同心円状のいずれかであろう。

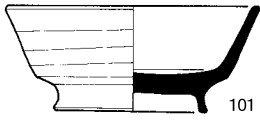
S I 025出土土器（第38図117～120，図版12，別表1）

117は箱形に近い器形の土師器杯で，器高が5.5cmある。径高指数は40になる。底面の切り離しは回転へ

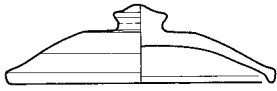
SI016出土土器



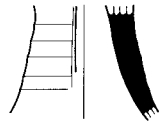
100



101

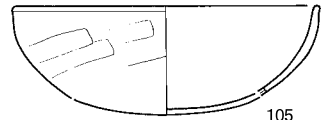


102



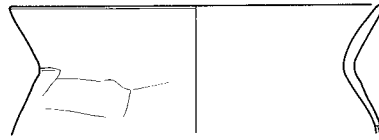
103

SI017出土土器

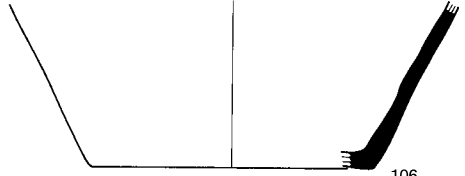


105

SI018出土土器



104

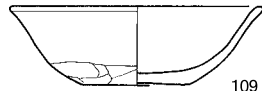


106

SI019出土土器



107



109

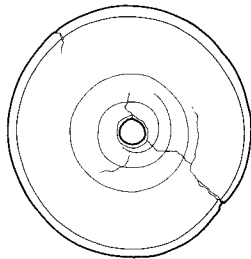


113



114

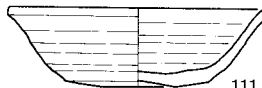
SI024出土土器



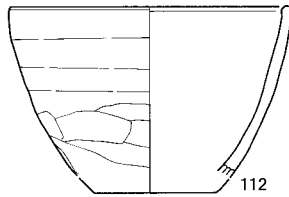
108



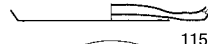
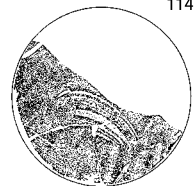
110



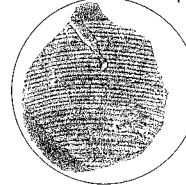
111



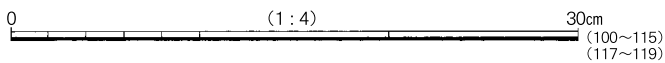
112



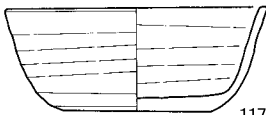
115



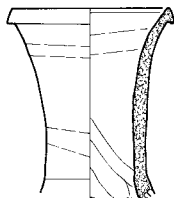
116



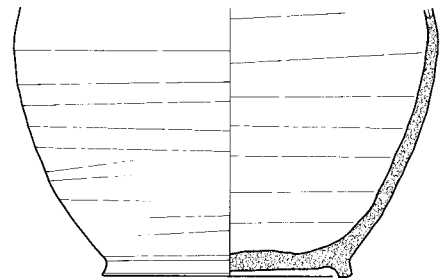
SI025出土土器



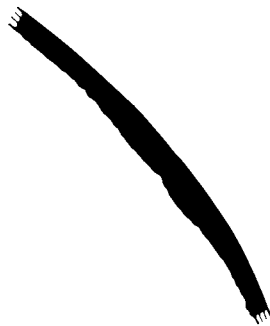
117



118



119



120



第38图 SI016~019 · 024 · 025出土土器

ラ切りによる。器面全体に鈍い光沢がある。118・119は灰釉陶器の長頸瓶の資料で、直接接合はしないが、同一個体であろう。頸部の釉葉は光沢のある釉の残る面があるが、その反対側は白色化して鬆ができ、その両側の釉は空色に変色し、焼成時における窯内の雰囲気を反映している。胎土は肌理がやや粗く、黒色斑文を多く含む。猿投窯の製品であろう。120は須恵器大甕の部分資料で、外面は細かい平行叩き目による叩き締め後にカキ目を施す。内面には同心円文当て具痕が明瞭に残る。胎土に黒色斑文を含み、静岡県西部を中心とした地域の製品であろう。

S I 022出土土器 (第39～41図121～188, 図版12～15, 別表1)

大量の土器類が出土した。とくに供膳具がその大半で、図示しただけでも60点にのぼる。出土土器の多くは使用によって手擦れをしたような痕跡が少なく、住居を廃棄して埋め戻した後の窪地に投棄するために持ち込まれた可能性がある。

121～129は無台の須恵器杯で、底面の切り離しを確認できるのでは、すべて回転ヘラ切りによる。121～123・125は新治産になり、胎土に雲母を含むもの(121・122)と含まないもの(123・125)とがある。121は色調が茶系の灰褐色(7.5YR6/2)になっている。123は見込み部分を研磨して平滑にした痕跡を残す。124は口底径比が2.4と口径にたいして底径を小さくつくるのを特徴とする。千葉市域産である。126は胎土の特徴から、三和産^{さんわ}と考えられる。127は全体に作りが厚く、部分的にいぶし銀のような発色をしている。胎土に白色針状物質を含み、南比企産であろう。128・129は県内産と考えられる資料である。口底径比が1.9で、径高指数が32前後になるが、口径が128で12.8cm, 129で14.6cmになって2cm近い開きがあり、大小の関係にあるといえよう。なお129は脆弱になっており、水分を含んだだけで膨張して崩壊していく。遺存状態はかなり悪い。

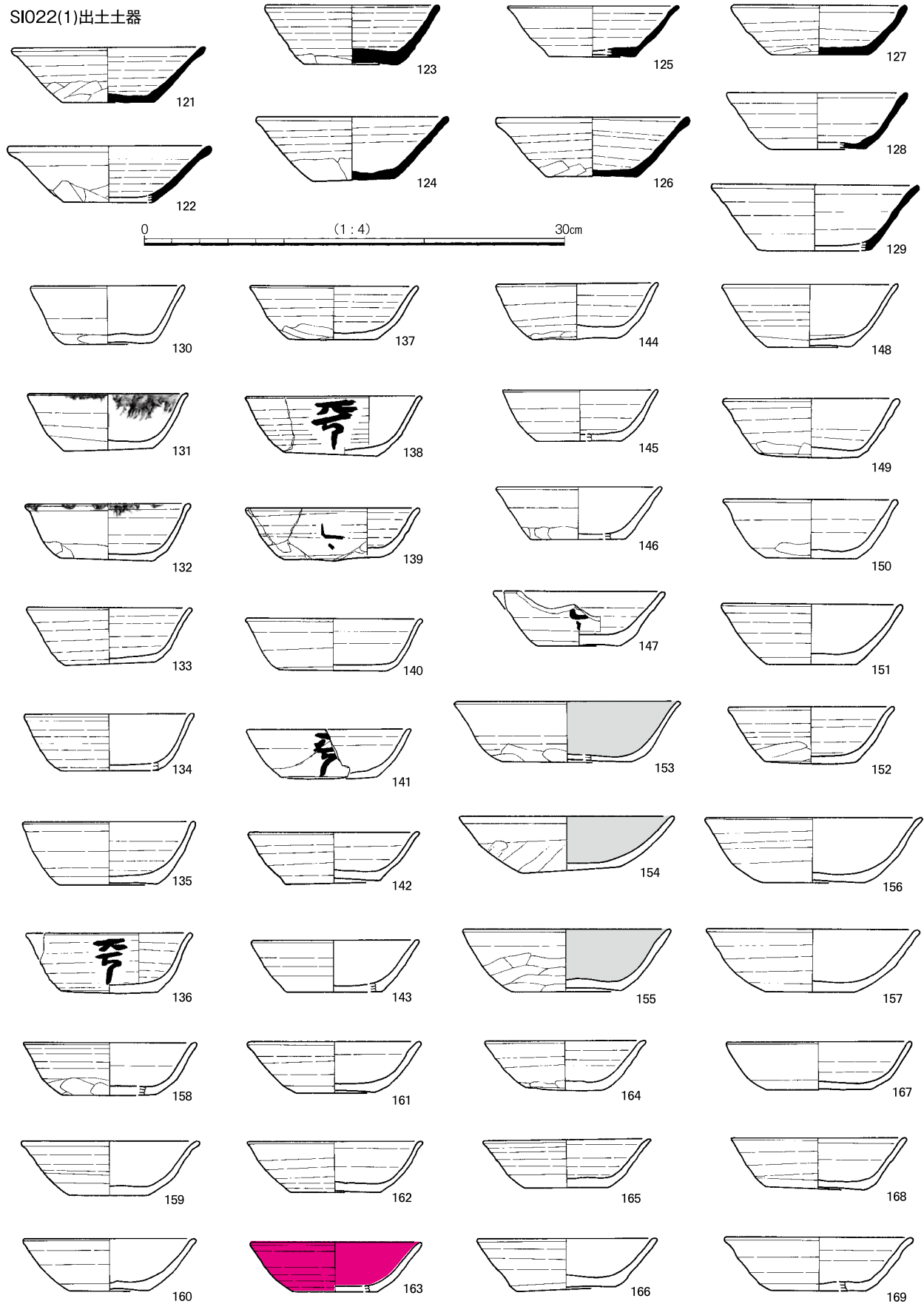
130～169が無台の土師器杯で、130～135は箱形杯の一群になって、口底径比が1.7～1.8, 径高指数がおおよそ36前後になって、やや深みのある一群である。131・132では口縁端部を中心にタール状の油煙墨が付着し、体部外面の器面が部分的に痘痕状に薄くはげている。136は体部外面に比較的鮮明な正位の墨書がある(S3)。

137～147は先の一群に似るが、器高がほとんど4cm以下になって、口底径比は1.7～2.0, 径高指数が32～34で、浅い作りになる。器形としてまとめたなかでは、もっとも個体数が多い。140は見込み部分に赤色顔料の付着を確認できる。色調はロクロ土師器の赤色塗彩のそれとかわらない。ただ140は底面を回転糸切りによって切り離し、その後底部外周を手持ちヘラケズリで調整しており、もっぱら静止糸切りで切り離す赤色塗彩のロクロ土師器とは異なるものである。138・141(S5・S4)には136と同じ墨痕が、やはり正位で残り、139・147にも墨痕の残画を確認できる(S37・S31)。

148～152は口径が12cm台で、径高指数が34前後あってやや深みのある器形になる。そういう意味では130～136の一群と共通する部分があるが、口底径比が2.0程度とやや大きくなって、こちらのほうがやや大型の部類といえる。151は内面に丁寧なヘラミガキを施し、器面に鈍い光沢が残るほどだが、ロクロ目もわずかに残る。

153～157は口径が15cmほどになる大型品で、体部に丸みをもって椀状になる。内面はいずれも丁寧なヘラミガキで調整し、153・154では黒色処理を行っている。155はかなり色調の異なる破片どうしが接合しており、極端に言えば黒と赤の破片でも接合している場合があり、おそらく本来は黒色処理してあったものが、土中に埋没した環境の影響下で部分的に脱色してしまったものと思われる。156・157もその可能

SI022(1)出土土器



第39図 SI022 (1) 出土土器

性があるが、色合いはさらに淡くなる。なお156は底部と体部の境の稜を利用して砥面にした痕跡が、細かい擦痕となって残る。おそらく金属製品の刃先を研いだ痕跡と考えられ、その当たりの一部が体部中位のもっとも膨らんだ部分に残る。

158～169は器高の低い一群で、器高4cm以下で平均では3.6cmになる。口底径比が2前後で、径高指数が30前後になり、口径は多くのが12cmを超える。なかには160～162のように体部に丸みをもつものもあり、153～157の一群を一回り小さくした大きさになる。底面の切り離しは、観察できるものでは大半が回転糸切りだが、159・164だけは回転ヘラ切りで行っている。163は内外面を赤色塗彩しているが、被熱で器面がかなり荒れている。赤色塗彩ロクロ土師器の最終段階の資料になるであろう。この資料では底面の切り離しは不明だったが、切り離し手法は興味あるところである。なおこれらは胎土に赤色スコリアを含むが、163だけ赤色スコリアを含まないという相違もある。169は最大径と最小径で1cmの差があり、上面観も楕円形になる。

170は唯一図示できた、高台をもつ土師器杯である。口径15cm、坏部の高さが4.5cm、そして体部にやや丸みをもち、内面はヘラミガキ後に黒色処理を行い、杯部のプロポーシオン・造作は160～162とかなり共通する。高台は貼り付けてから、断面三角形に整えている。外面はかなり赤く（灰赤色(2.5YR5/2)）、内面とのコントラストが際立つ。

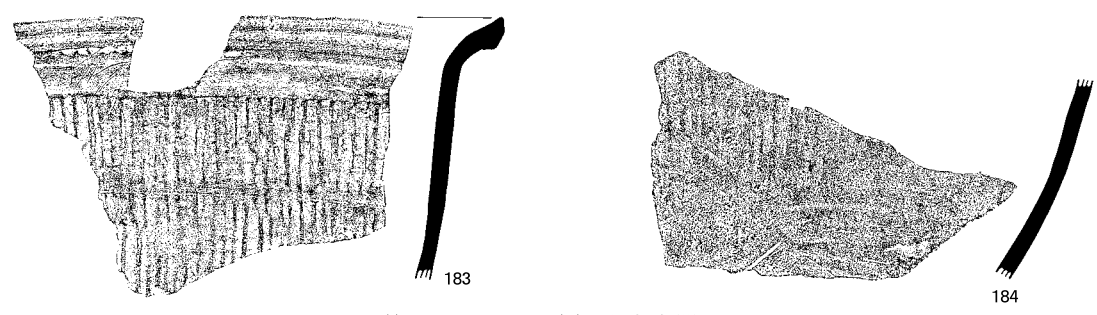
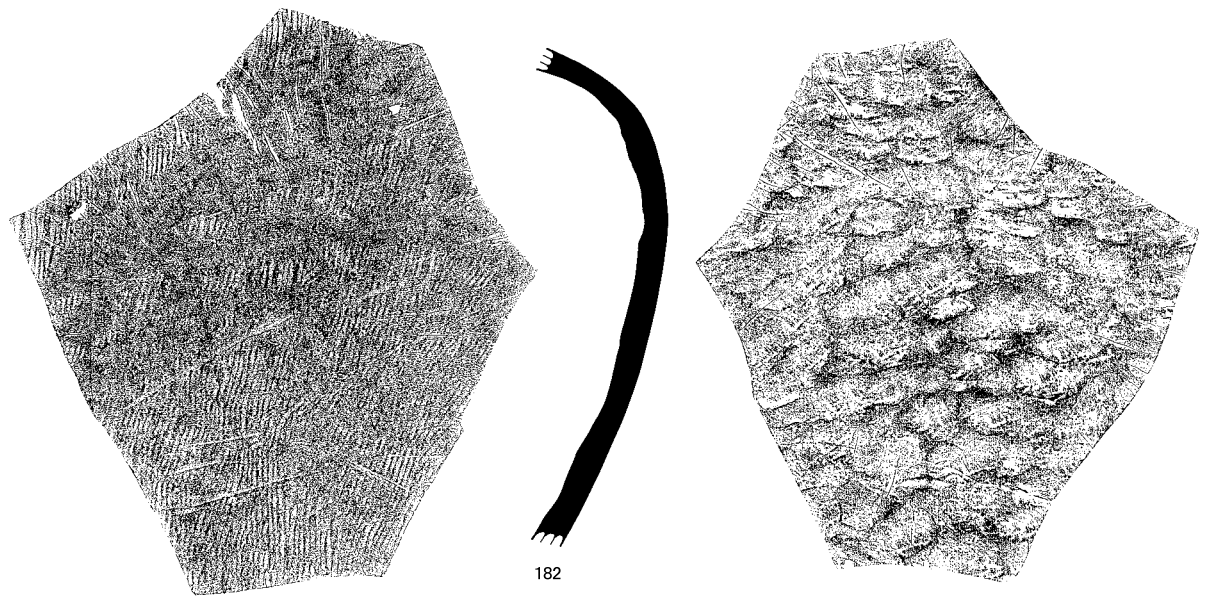
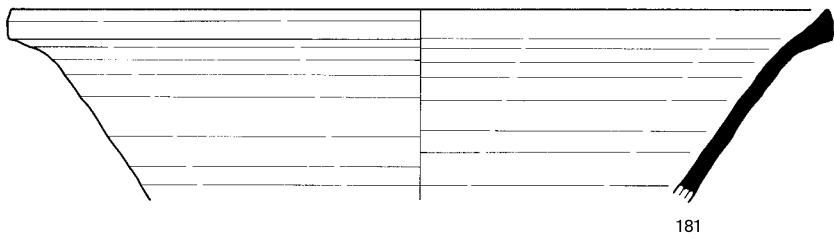
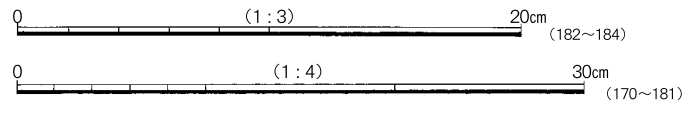
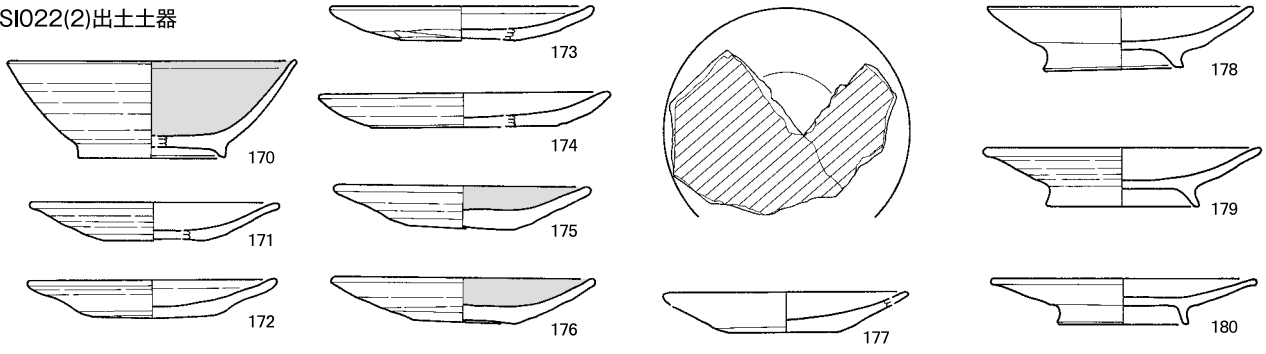
171～180が土師器皿で、そのうち171～177が無高台で、残りが有台になる。無高台の皿は口径が13cmほどで、底面の切り離しは回転糸切りによる。174は底面外周を削り出して、高台風に仕上げている。胎土に特徴があり、S I 014出土の67と似て肌理が細かく、指でこすると色移りする。これだけ口径も15.2cmと大きく、異質な存在になる。175・176では内面を丁寧に磨いてから、黒色処理をおこなう。177は砥面としたような擦痕は確認できないが、内面を研磨して滑らかに仕上げている。どのような効果を期待したのか、部分資料のため詳細は不明である。

高台付皿は、高台が「ハ」の字状に開くものと(178・179)、直立気味のもの(180)の二者がある。178・180の高台内面には皿部を回転糸切りによって切り離した痕跡を残す。口径は14cm程度で、無台皿よりもやや口径が大きくなる傾向がある。内面はいずれも磨いているが、179のミガキ調整はやや粗い。高台内面にはやや不鮮明な墨書がある(S8)。

181～188は甕類になる。181～184は須恵器で、181は口径が推定で43cmになる、口径の大きい甕の口縁部資料である。外面は無文で、口縁部内面には自然釉が霜降り状に着釉する。胎土は比較的精緻で、南比企産の可能性はあるが、白色針状物質は確認できない。182は肩がはって底部にいくにつれ径がすぼまる器形と考えられる。外面は細かい平行叩き目で叩き締め、内面には当て具痕が残る。小口にあたる部分に木理が残って、弧状の痕跡が転写されているので、当て具は円形に近い無文の板と考えられる。胎土に黒色斑文を含み、静岡県西部の製品であろうか。183・184は胎土に白色砂粒を多く含み、千葉市域産である。いずれも外面に平行叩き目を残すが、184は底部に近い資料になる。183の色調は灰褐色(5YR5/2)で、184は断面の芯がにぶい赤褐色(5YR5/4)で、還元が不十分であったことをうかがわせる。

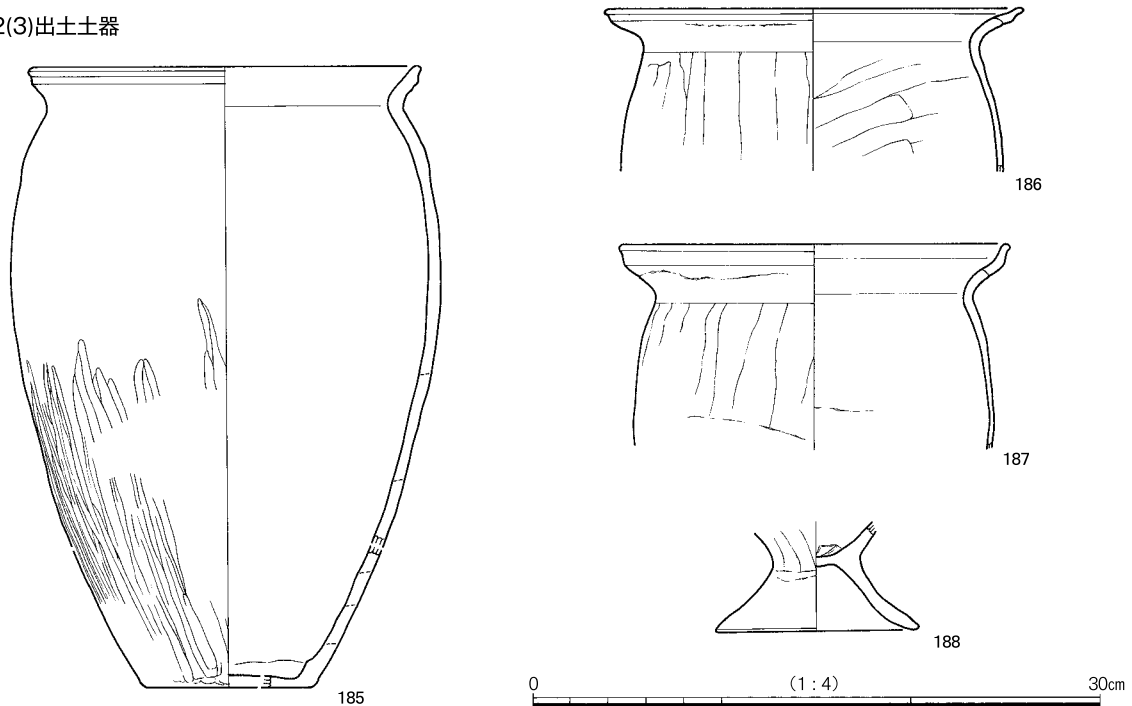
185～188は土師器甕で、185は体部下半を粗くヘラミガキした、常総型の長胴甕である。最大径は器高の約3分の2の位置にある。口縁端部を少しつまみあげて屈曲させる。器壁はやや厚めに成形し、胎土には白色の小礫と雲母粒を非常に多く含む。被熱痕跡は確認できない。186・187は上半部が残り、口縁端部の内側は受け口状にやや折り曲げる傾向がある。体部は縦のヘラケズリで器壁を薄くしている。いずれも

SI022(2)出土土器



第40图 SI022 (2) 出土土器

SI022(3)出土土器



第41図 SI022 (3) 出土土器

上部の資料ということもあってか、被熱痕跡は不明瞭である。188は台付甕の脚部を残す資料で、全体に被熱のためか、器面が荒れて変色している。

図示はしていないが、砂粒を多く含む、高杯状の坏部と脚部の接合部が残る資料が1点あった。

S I 023出土土器 (第42・43図189～209, 図版13～15, 別表1)

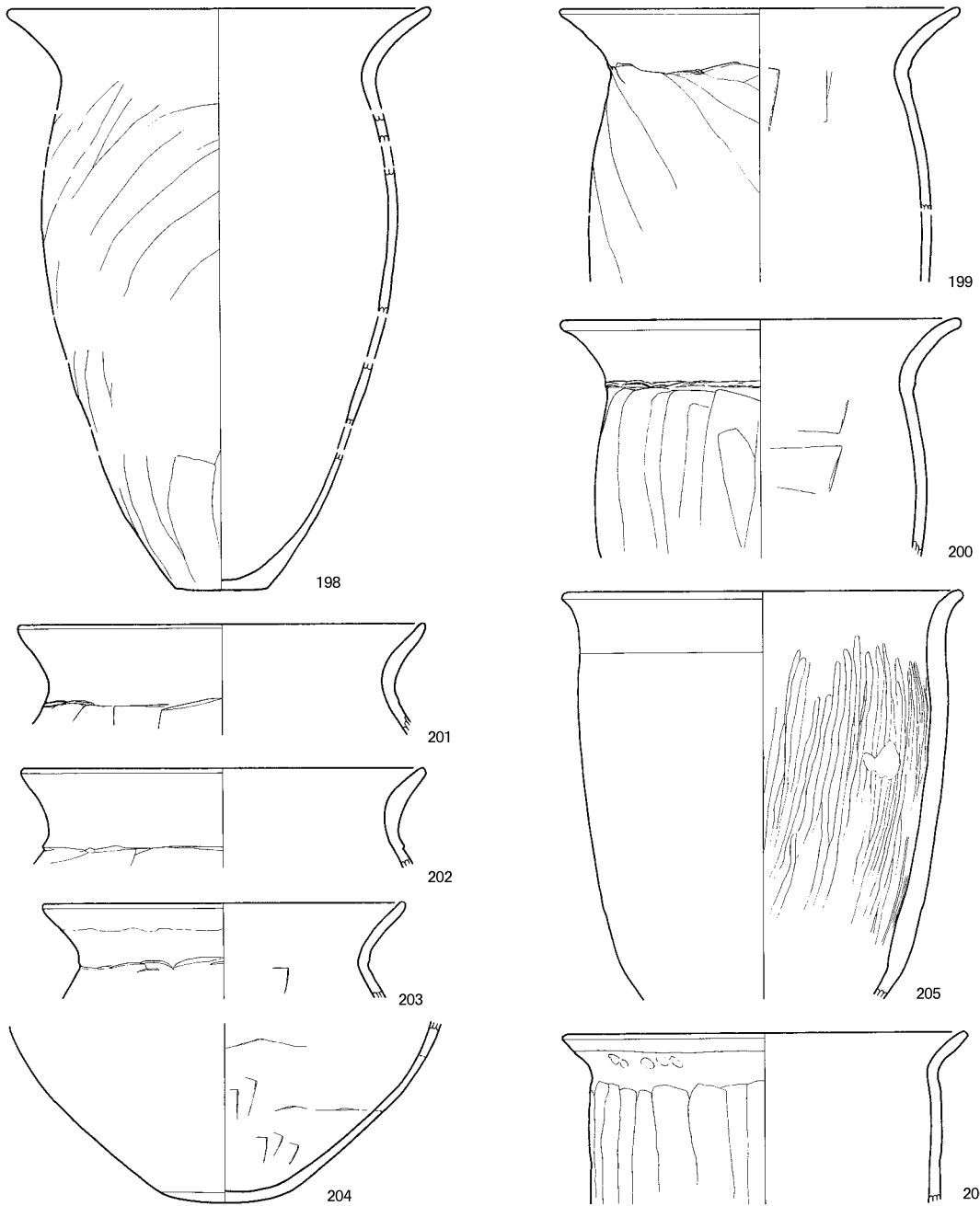
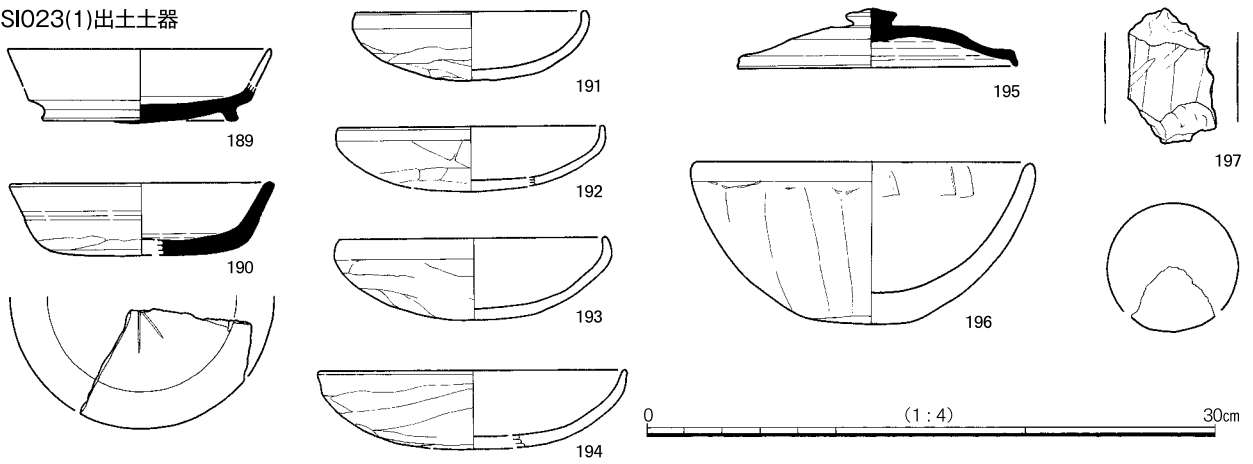
189・190は須恵器杯である。189は有台で、底部中央が高台の先端よりも少し突出する。体部への立ち上がりは心もち鋭さに欠ける。胎土に黒色斑文を多く含み、湖西産の製品である。190は底部から体部への立ち上がりが緩やかに湾曲する器形だが、焼成後にその部分を擦って滑らかにしている。全体に厚手の作りで、底部外周の厚みは1cmある、須恵器杯である。189同様、胎土に黒色斑文を含み、湖西産の製品である。なお底面にヘラ書きがあり、残画で「V」なので、おそらく本来は「X」になるのであろう。

191～194は非クロコで成形した丸底の土師器杯である。口径が12cm台のものから16cmのものまでである。192～193は口縁部が少し内弯気味に立ち上がるが、194は外へ開き気味に立ち上がる。いずれも赤色塗彩はないが、192～194の色調が、にぶい橙色(2.5YR6/4)～にぶい橙色(5YR6/3)で橙色の度合いが強く、おそらくそうした色調の発色を期待して素地が選択されたのであろう。

195は須恵器蓋で、扁平なボタン状のつまみがつくが、中心からずれた位置に貼付している。胎土には粒径の大きい長石粒を非常に多く含み、北関東西部を産地とする製品の可能性がある。

196は底部の小さい土師器鉢で、かなり肉厚に仕上げている。体部外面は縦方向にヘラケズリし、内面はヘラなどで平滑になっている。胎土に細かい砂粒を多く含み、器面がざらつく。全体に被熱痕跡が顕著で、一部赤変している。197はここではとりあえず脚部の部分資料としておく。横断面の径が推定で7cmあり、調整は縦のヘラケズリで面取り風に、エッジをたてながら調整している。高杯等の脚部の可能性が考えられるが、中空でないのが気にかかる。あるいは支脚等の可能性もあるが、胎土に砂粒をほとんど含まない精緻な素地を素材としているので、耐火性は低くなるであろう。

SI023(1)出土土器



第42図 SI023 (1) 出土土器

198～203は武蔵型の土師器長胴甕で、口縁部が「く」の字状に外反する。最大径は口縁部にある。体部最大径は器高のおよそ3分の2の位置にある。いずれも器壁を薄くつくり、体部のヘラケズリは縦方向に削るものと(200・201～203)、斜めに円弧を描くように削るもの(198・199)の2種類がある。198は被熱痕跡が顕著で、体部下半にはカマド構築材の砂質土が赤化して付着し、199は内面が部分的に煤ける。200は口縁部の内側にタール状の炭化物が皮膜になってこびりつく。201・203は被熱によって器面が荒れ、部分的に器面が痘痕状に薄く剥落している。204は胎土・焼成具合等は武蔵型の甕に共通する、大型丸胴の甕である。底部をはっきりした平底にはしていないために安定感は悪い。全体に薄手のつくりである。被熱痕跡が顕著で、器面も荒れている。

205・206は寸胴の土師器甕だが、底面を残す資料はない。205は底部近くですぼまる器形をうかがえる。内外面を縦方向のミガキ調整で整えているが、内面がより密度は高い。全体に黒く煤けている。206は甕に比べて口縁部が短い。体部外面を縦にヘラケズリし、内面にはミガキ調整を行った形跡はない。

207～209は須恵器甕の破片資料である。207は外面を平行叩き目で叩き締め、内面には青海波状の当て具痕が残る。当て具の文様は全体では同心円状になるのだろうが、彫刻の線彫りは幅広でメリハリがなく、明瞭さに欠ける。208・209は外面に同心円文叩き目を残し、208は線の間隔が狭く、209は幅広の線彫りになっている。いずれも胎土に雲母を多く含み、新治産の胎土に共通する。おそらくこの種の叩き目をもつ資料としては、初源期の資料とはいえないまでもそれに近い時期の例になるであろう。

なお図示できなかつたが、赤色塗彩した杯の小片が3点出土した。

S I 026出土土器 (第43図210～237, 図版14・15, 別表1)

210～228は土師器杯で、口径が12cm～14cm程度で、210～221は径高指数が30を超え、口底径比の平均が1.8になる。210のような器形は箱形杯の最終段階に位置づけられるかもしれないが、210自体はかなり歪んでいる。211は、手持ちヘラケズリしているにもかかわらず底部が厚く残り、ここまでにする過程で体部と底部の境の角がとれて、丸みをおびてしまったのであろう。215は底部外面に記号の墨書がある(S29)。216は内面に製作時の補修痕が残る。乾燥時にひび割れ等の亀裂が生じて、それを指頭大の粘土を貼り付けて隙間を補強したものである。218は内外面を細かく磨いて器面を緻密にしている。外面の色調は灰赤色(10R5/2)で、赤い土器を志向した結果かもしれない。なお口縁端部の内外に炭素吸着の痕跡が帯状に残る。219・220の胎土は混和物が少なく、肌理が細かい。指で強くこすると色移りする。いずれも底面を回転糸切りによって切り離し、その後、無調整である。221は被熱しており、破面が赤化している。222～225は器高が3.5cm前後で、口底径比が1.9前後になる一群で、径高指数も平均で26程度になる。

226は器高が4.3cmと深く、体部に丸みをもつ。228は底面が1.2cmと非常に厚いが、そこまでするにも相当削ったようで、それによって底径が本来の径よりもかなり小さくなって、それが口底径比2.5という数字になってあらわれているのであろう。なお蓋として図示したものはないが、剥落したつまみだけが1点出土した。形状は比較的扁平で周縁がややくぼむ形態である。

土師器杯では墨書土器が4点出土している。判読できる資料は216の体部外面に正位で「忠」とあるものになる(S11)。それ以外は「○」と「|」を組み合わせた記号で、215・223では底部外面(S29・S28)、227では体部外面に残る(S23)。なお須恵器杯は図示できる資料はなかつたが、小片が32点(226g)出土した。

229～234は径12cm～13cmの土師器皿になる。内面はいずれもなめらかだが、ミガキ痕跡は不明瞭である。

230・232は底部がやや突出して、高台を意識したような形状に整えており、229・232もそれに近い造作がみられる。229～233は底面を回転糸切りによって切り離し、その後は無調整である。234は底部の切り離しは不明だが、切り離し後に体部下端まで回転ヘラケズリ調整している。墨書土器が1点だけあり、232の底部外面に「忠」の右半分だけが残っていた(S12)。

235は緑釉陶器碗の口縁部を残す小片で、口縁端部が少し外反する。施釉は全面を刷毛塗りし、釉は透明感があって淡黄緑色に発色する。貫入はない。内面に陰刻花文を施文する。花文は半載した花卉中心を下に向ける。文様に抑揚感がなく、稚拙な印象をうける。焼き上がりは硬質で、おそらく猿投窯の製品であろう。図示していないが、ほかにも透明感のある淡黄緑色の釉色をした緑釉陶器片が1点出土した。

236は在地産甕といわれるものの、口径が推定で25.4cmになる大型品の資料になる(高橋2011)。頸部が「く」の字状に外反し、口縁端部を外側へつまみあげ、内面は浅く受け口状になる。体部外面は縦方向にヘラケズリする。胎土は緻密で砂粒が少ない。なおS I 0216の出土資料中に典型的な武蔵型・常総型甕の資料は確認できなかった。237は千葉市域産の須恵器鉢で、体部が逆「ハ」の字状に直線的に開く。体部上半に平行叩き目が残り、下部は斜め方向にヘラケズリし、甕の調整手法と共通する。胎土に白色砂粒を非常に多く含む。底面は周縁が接地し、内部は上げ底気味にくぼむ。ほかにも須恵器甕の小片が58点(1,021g)あった。土師器丸底杯の小片も1点あったが、これは住居に直接伴うものではないだろう。

S I 027出土土器 (第43図238～242, 別表1)

238・239はいずれも土師器杯で、器高が高い。238は体部が直線的にのびる。239の体部はやや丸みを持ち碗状の形態になり、内面をミガキ調整後に黒色処理している。240・241は土師器甕で、口径が14cm・15cmになる、在地産甕の小型の部類に属す。口縁端部をつまみあげ、体部には縦方向のヘラケズリを施す。被熱痕跡が顕著で、一部赤変している。形態等からロクロ成形の可能性がある。242は須恵器甕の破片資料で、従・横断面に曲率がほとんどなく、かなり大きい甕を想像させる。外面は平行叩き目で、内面には当て具痕はほとんど残らず平滑になっている。黒色斑文を含み、湖西産と考えられる。

S I 030出土土器 (第43図243, 別表1)

243は武蔵型土師器甕の底部付近が残る資料である。かなり薄手のつくりで、底部にいたるまで2mmほどの厚さしかない。被熱痕跡が顕著で、器面がかなり荒れている。

S K 007出土土器 (第44図244, 別表1)

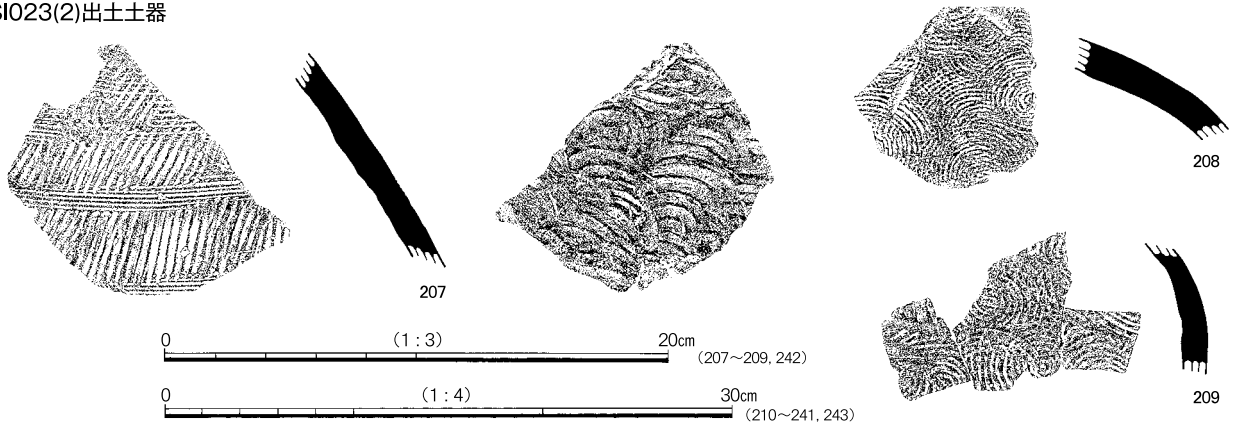
244はロクロで成形した土師器甕底部の部分資料である。回転糸切り後、底部外周をヘラケズリしている。被熱痕跡はとくに確認できない。

S K 013出土土器 (第44図245～253, 図版14・15, 別表1)

245は須恵器杯で、体部はやや膨らみながら立ち上がる。底面は回転糸切り後、無調整である。胎土に白色針状物質を多く含む、底部を厚くし、硬質の焼き上がりで南比企産になるであろう。なお口縁端部に自然釉が降灰している。

246～251は土師器杯で、口底径比が小さく、径高指数が大きくなる傾向がある。246は内面に赤色塗彩痕跡が残るが、外面にはその痕跡は確認できない。箱形で、口底径比が1.4, 径高指数が39になる。底面は残っている範囲では切り離し後に全面を手持ちヘラケズリして、切り離しは不明である。胎土には砂粒を多く含む、ややざらつく。247～250は口底径比が1.7前後で、径高指数が34前後になる。248には体部外面に記号の墨書があり(S24), 250には体部外面に倒位の「宗」の墨書がある(S9)。251は底面をかなり薄く作

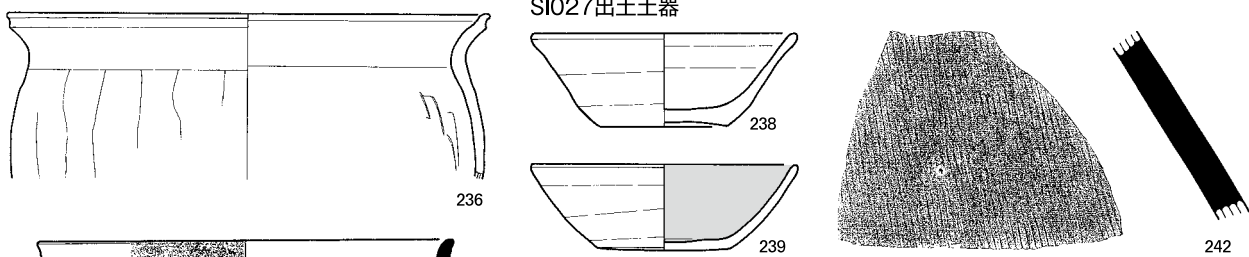
SI023(2)出土土器



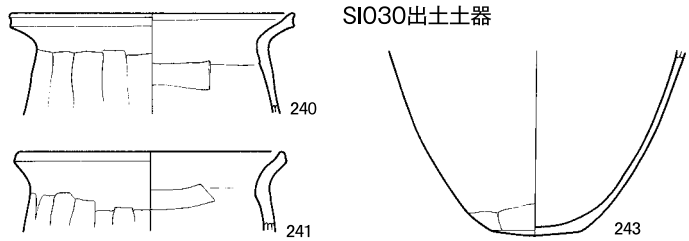
SI026出土土器



SI027出土土器



SI030出土土器



第43图 SI023 (2) · 026 · 027 · 030出土土器

りだしているのです、それによって底径が小さくなってしまった可能性がある。

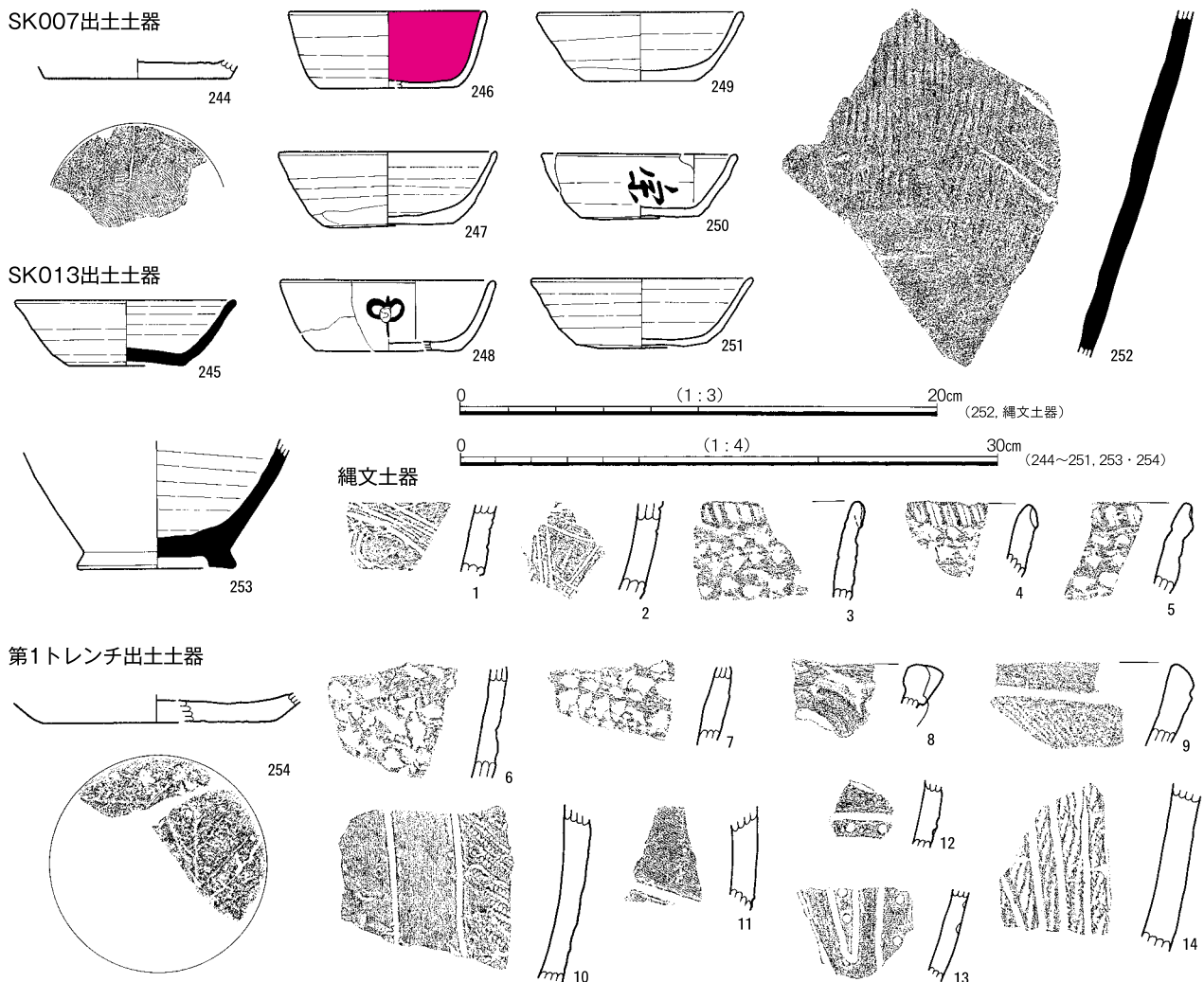
252は外面に平行叩き目のある、須恵器甕の破片資料である。図上の下3分の1をヘラケズリしている
ので、底部に近い資料になるであろう。253は須恵器瓶の底部を残す資料である。高さ8mm程度の輪高台
を貼り付けたものである。比重の重さを感じる資料である。外面は回転によるナデで調整されている。器
面はいぶされて、にぶい銀色に発色している。胎土等から、武蔵奥部の製品になる可能性がある。

第1トレンチ出土土器（第44図254，別表1）

254は胎土に粒径の大きい白色礫を多く含む、常総型土師器甕の底部が残る資料である。底面に木葉圧
痕を残す。圧痕は同種の葉を2枚重ねた痕跡で、2枚の葉は主脈でみると42°の角度で交錯している。主
脈部分の幅は2mmで、側脈は左右互い違いに分かれ、側脈間の幅は2cmあり、主脈から約40°の鋭角でわ
かれていって羽状脈系の葉脈になる。さらに細かい葉脈についてはほとんど確認できない。

2. 縄文時代（第44図1～13，図版15）

縄文時代前期から後期に属する資料が出土した。出土範囲は緩斜面を望む調査地の東半分が多く、とく
に第5トレンチの西部からは前期の土器群がややまとまって出土した。全体の傾向としては縄文時代前期



第44図 SK007・013，第1トレンチ出土土器，縄文土器

の陥穴の分布とある程度呼応するかのようなのである。出土した土器片はいずれも小片だが、ある程度時期等が判明する資料を14点を図化した。なお縄文のみ、もしくは無文で帰属が判然としない資料が12点あった。

1～7は前期後葉の土器である。1・2は2本一組の沈線で文様が描かれた胴部片で、諸磯b式である。直接接合しないが、2と同一個体の小片が1点出土している。3～7は三角文を地文にもつ浮島式である。3～5は平縁で口唇上に竹管状工具による連続刺突を施す。浮島Ⅲ式と思われる。2・4がS I 006出土資料で、それ以外は第5トレンチからの出土である。なおほかに該期の資料としては、口縁端部にキザミを施したものなどがあつた。

8～10は中期後葉の加曾利E式である。8・9は口縁部片で、8は隆帯で区画された口縁部文様帯が、9は横位に巡る沈線がみえる。10は垂下する幅広の磨消懸垂帯を持つ胴部片である。8・10が第5トレンチ出土資料で、9はS I 002出土になる。ほかに中期と考えられる資料が3点あつた。

11～14は後期初頭から中葉に位置付けられる土器である。11～13は沈線で区画された文様帯を持つ胴部片で、称名寺Ⅱ式である。12・13には沈線区画内に施された円形刺突文がみえる。14は地文縄文上に垂下する沈線のみえる胴部片で、堀之内Ⅰ式であろう。11・12が第5トレンチ出土で、13はA調査区の一括して取上げた資料のひとつで、14はS I 026からの出土資料である。ほかに小片が3点あつた。

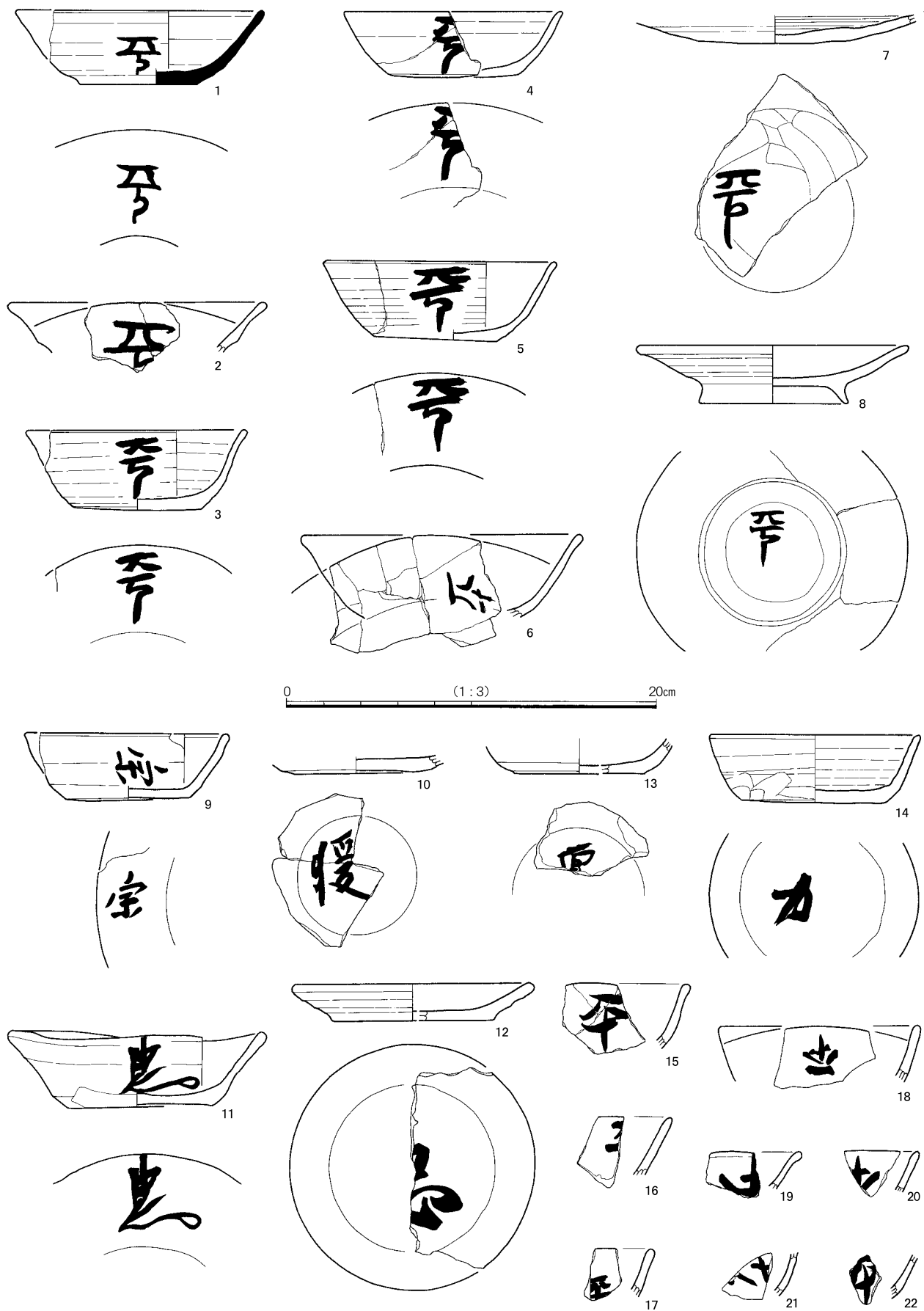
3. 墨書土器（第45・46図1～55，図版15，別表2）

今回報告する資料で、点数の多い2種類について字形から文字種を明快に判読できなかったために、それらについては、墨痕の構成要素を説明しておくことにする。なお図示した以外にも残画で資料自体が小さいものについては図化を省略し、一覧表に記載するだけにとどめた（56～66）。

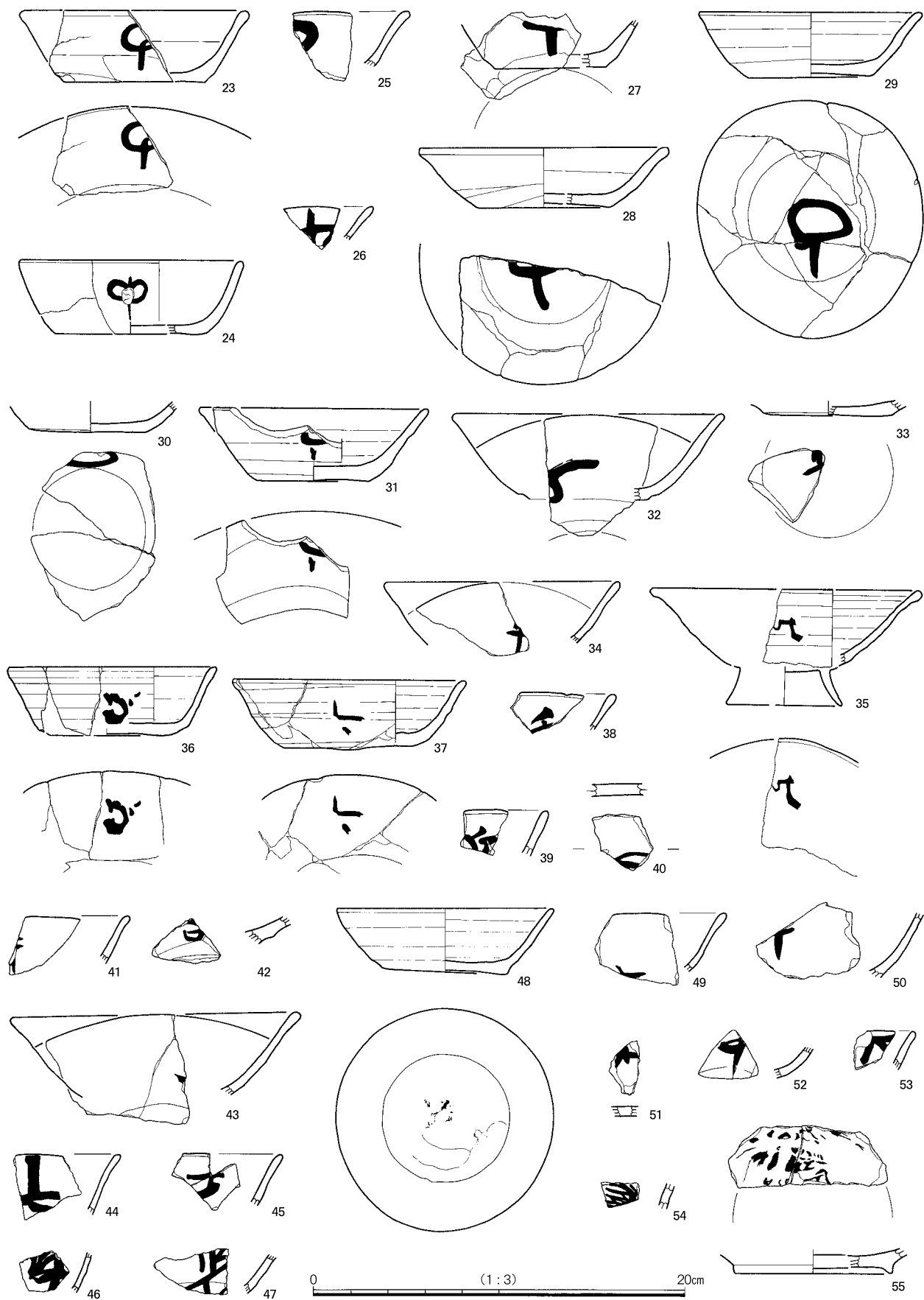
1～8は少ない画数ながら、1文字とみるか2文字とみるかで、もとよりその理解が異なってくるが、ここでは2文字を候補とした場合を中心に記述しておく。文字の上部を3では「大」のようにするが、他では左右の間隔をあけて「ハ」の字状にする。そして下半分は、たとえば「印」・「卯」などの「ふしづくり」を部首とする字形に参考になるものがある。ただし「印」の場合には右下に1画増えるようなので、むしろ「卯」のほうが近いかもしれない。そうすると「ふしづくり」を部首でみていくと、「節」などを候補にすれば、「たけかんむり」の崩しが問題になるが、1文字として理解することも可能になる。記載場所は杯類では体部外面に正位で記載し、皿では底部外面に記載している。1・2がS I 021出土で、3～8がS I 022出土となって、隣接する堅穴住居2軒から出土している。遺構ごとの字形をみると、S I 021出土資料では4画目が水平になるが、S I 022出土資料では右肩上がりになり、字形に微妙な変化を読み取ることができる（平川1991）。

9は体部側面に横位で「宗」と墨書している。旁である「示」の縦棒が突き抜ける。墨痕はやや不鮮明で、S K 013出土である。市川市内での「宗」の出土例は、下総国分遺跡第7地点6号住居跡から、土師器皿の底部外面に墨書したものが出土している（斉藤ほか1987）。10は皿の底部外面に「猿」1文字を大きく記載している。古代下総国内には郡名としてさしよ猿島郡（現在の古河市・坂東市付近）がある。市内北下遺跡では葛飾郡の「葛」1文字を底面に墨書したものがあつたので、これも郡名1字を記載した可能性がある。ただ「猿」は人名に多く登場する文字種なので、1字だけではにわかには判断できない。S I 022から出土した。

11・12はS I 026出土資料で、11は部首が「こころ」で、旁が角張った字形の「鬼」・「忠」・「思」などが候補となるが、旁が簡略な「忠」がもっとも相応しい。12は残画のためにそれだけでは上記の候補と重なるだけだが、同じ堅穴住居から出土したことを踏まえて、筆跡は異なるがこれも「忠」と釈読しておく。



第45図 墨書土器 (1)



第46図 墨書土器 (2)

なお県内では「延忠」・「忠寺」などが成田市山口遺跡から出土している（天野ほか1981）。

13は部首を「ツ」とする「營」などが候補になるであろうが、残画のために判読できない。14は底部外面に「力」1文字を記載したものである。

15～22は19がS I 026から出土したのをのぞいて、すべてS I 022出土資料である。一部残画のため不確かな部分もあるが、縦棒が上まで突き抜けていないので「平」としておく。似た字形としては「本」があり、その一部が残っている可能性もなくはないが、釈読できる文字種がすべて「平」なので、「平」と理解して差し支えないであろう。記載方向が正位・倒位・横位と、様々なのが興味深い。

23～31は残画も含めて、9点を数える。墨痕は「○」と「|」を組み合わせたと考えられるもので、ここでは記号としておく。24がS K 013から出土した以外は、すべてS I 026から出土したものである。23では「○」から「|」へつなげて書いている。24は墨書の中央に酸化鉄の塊がこびりついて墨書が途切れるが、これでは「○」は「∞」になって、その中心を縦棒が上下に貫く。これらがすべて一連のものとする、記載場所が体部外面と底部外面にわかる。いかにも記号的でそれ以上の理解はむずかしいが、あるいは「部」を丸めたもののなかに、29に似た字形のものがあるのでそうした例も参考にしておきたい。

以降は残画の資料なので、字形の一部がわかるものについて解説しておく。32は「丁」などを一つの候補にあげておきたい。S I 002の出土資料である。37は「六」の右半分のようにもみえるが、左半分が欠損しているわけではなく、それだけで完結している。S I 022出土である。38は「のぎへん」の一部が残る。49・50はS I 022出土資料で、「十」を字画の一部とする字形である。47はかなり複雑な字画の字形である。54は細かい線描が重なり、人面の髭等を表現した可能性がある。S I 027の出土資料である。55は皿の内面に墨書したものだが、内面が磨かれていて、磨かれて光沢がある部分にのっていた墨痕が飛んでしまった例である。墨痕の広がりから判断すると絵画的なものが描かれていたのかもしれない。S I 026から出土したものである。

第2節 石製品（第47図1～10、図版16）

1. 彫刻刀形石器（第47図1，図版16）

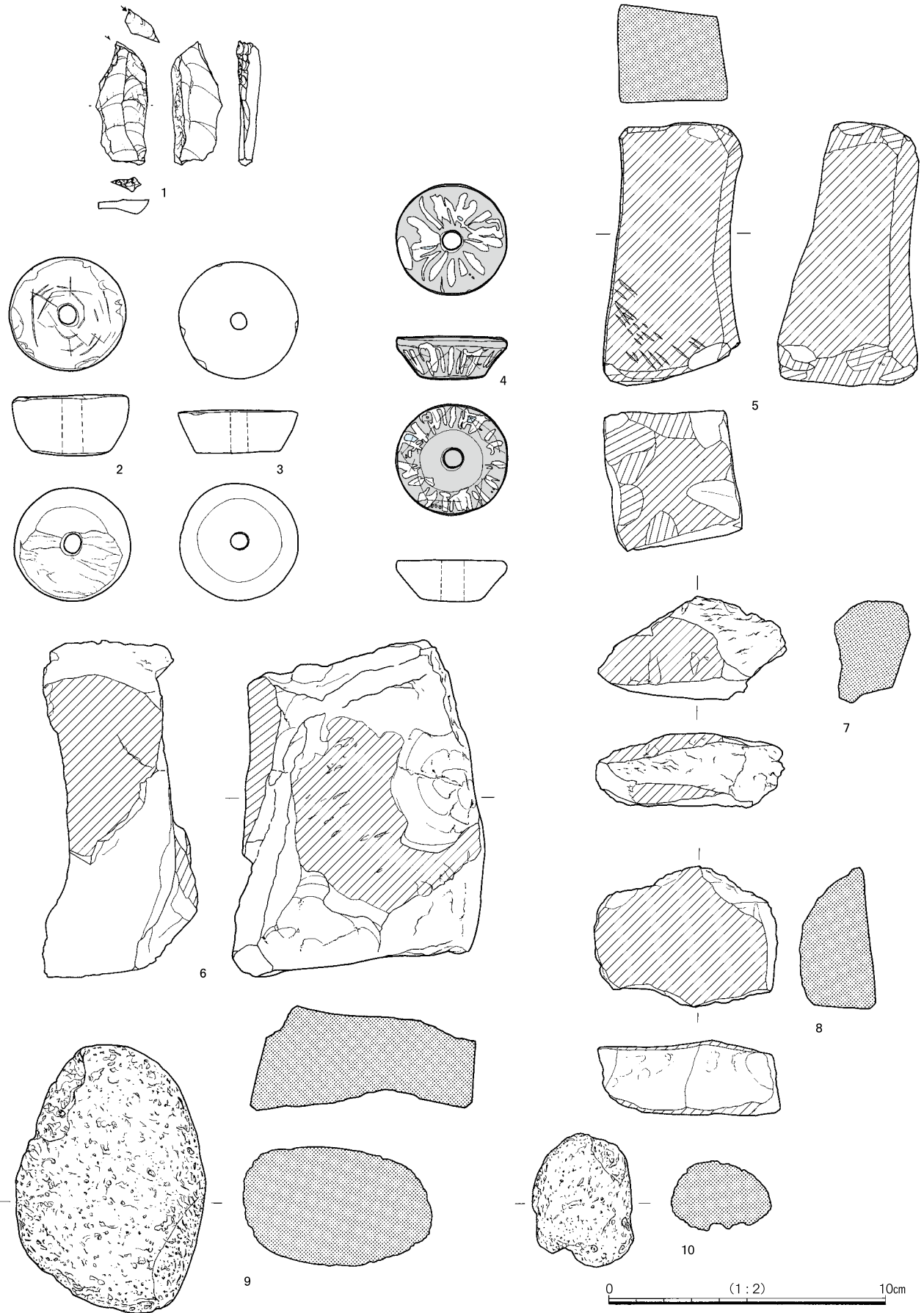
1は典型的な旧石器時代の彫刻刀形石器である。後世の遺構埋土中（S I 004）から出土した。

完形で大きさは、長さ4.4cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm、重量6.4gになる。2側縁に折れ面を有するチャート製の縦長剥片を素材とする。正面左側縁の上半部に腹面から背面に向かって急角度な調整加工を施したうえで、右肩に単一の彫刻刀面を作出し、彫刻刀面の大きさは、長さ1.4cm、幅0.7cmで打角は約80°になる。なお下端部にも二次加工が施しているが、その意図は定かではない。時期としては、技術形態学的に「砂川期」に属することは明らかで、本来の出土層準は立川ローム層上部にあるものと推定される。

これまで旧石器時代資料については、遺跡範囲南端の第29地点で石器が4点採集されているが（芝田2002）、第13地点では初出の資料になる。

2. 紡輪（第47図2～4，図版16）

3点出土し、いずれも竪穴住居から出土しており、2がS I 006、3がS I 023、4がS I 026から出土した。2は変成岩を素材とし、下半部の一部を欠損している。上面に蜘蛛の巣状の細い線刻が残る。側面には横方向の擦痕が無数にあり、おそらく成形時の痕跡と考えられる。重量は49.16gあり、欠損部分があるにもかかわらず重い。爪で簡単にキズがつくほどの硬度しかない。3は断面が台形で、完形である。滑石製



第47図 石製品

で、重量は44.19gある。4は断面は台形で斜面がやや抉れて山裾状になる。完形である。やはり滑石製で、重量は34.85gある。上面と側面の表面を1mm～2mmの幅で薄く、放射状にそいでいる。その上へさらに鋸歯状文を互い違いに重ねたような線刻を加えている。3・4は爪ではほとんどキズが付かないほどの硬度がある。

3. 砥石（第47図5～8，図版16）

小型の携帯用と考えられる定型的なもの（5）と、自然石の一部を素材としたもの（6～8）が出土した。5は細流砂岩を砥石として定型的に加工した方柱状の製品である。全長10cmにも満たない携帯用になるが、懸垂用の孔はない。小口も含めて6面すべてを砥面とする。砥面は研ぎ減りで曲面を形成し、小口部分には浅い溝状の研ぎ減りも確認できる。中砥程度であろうか。重量は297.55gである。S I 023から出土した。6は破碎した砂岩を素材とし、裏面と小口の1面以外を部分的に砥面としている。被熱痕跡があり、淡く赤化している。重量が625.43gあり、重量と形態からいえば携帯用というよりは置砥として使われたのであろう（川田 2004）。S I 021から出土した。やはり中砥程度であろう。7は破碎した頁岩の一部を砥面としたもので、2面の砥面を確認できる。硬質で石目は細かく、仕上砥になるであろう。重量70.88gで、S I 008から出土した。8は細流砂岩の自然礫の一面を砥面としたもので、S I 007の出土資料である。石目は粗くざらつき、荒砥になる。重量は101.88gになる。

4. 軽石（第47図9・10，図版16）

2点図示した。9は最大長9.6cm、重量82.43gになる、やや大きめの軽石である。面取して形を整えてあり、下側は表裏から面取りしたことで、刃先の断面が緩やかな曲線を描く蛤刃状になっている。加工痕跡はとくに確認できない。S I 021から出土した。10は全長4.8cm、重量9.87gの、小型の軽石である。定型的に加工した痕跡は残していない。S I 014出土した。なおS I 023からも小片が数点出土しているが、図示は省略した。

第3節 土製品（第48図1～7，図版16）

土製品は土錘・支脚が出土資料の大半になる。

1. 土錘（第48図1～3，図版16）

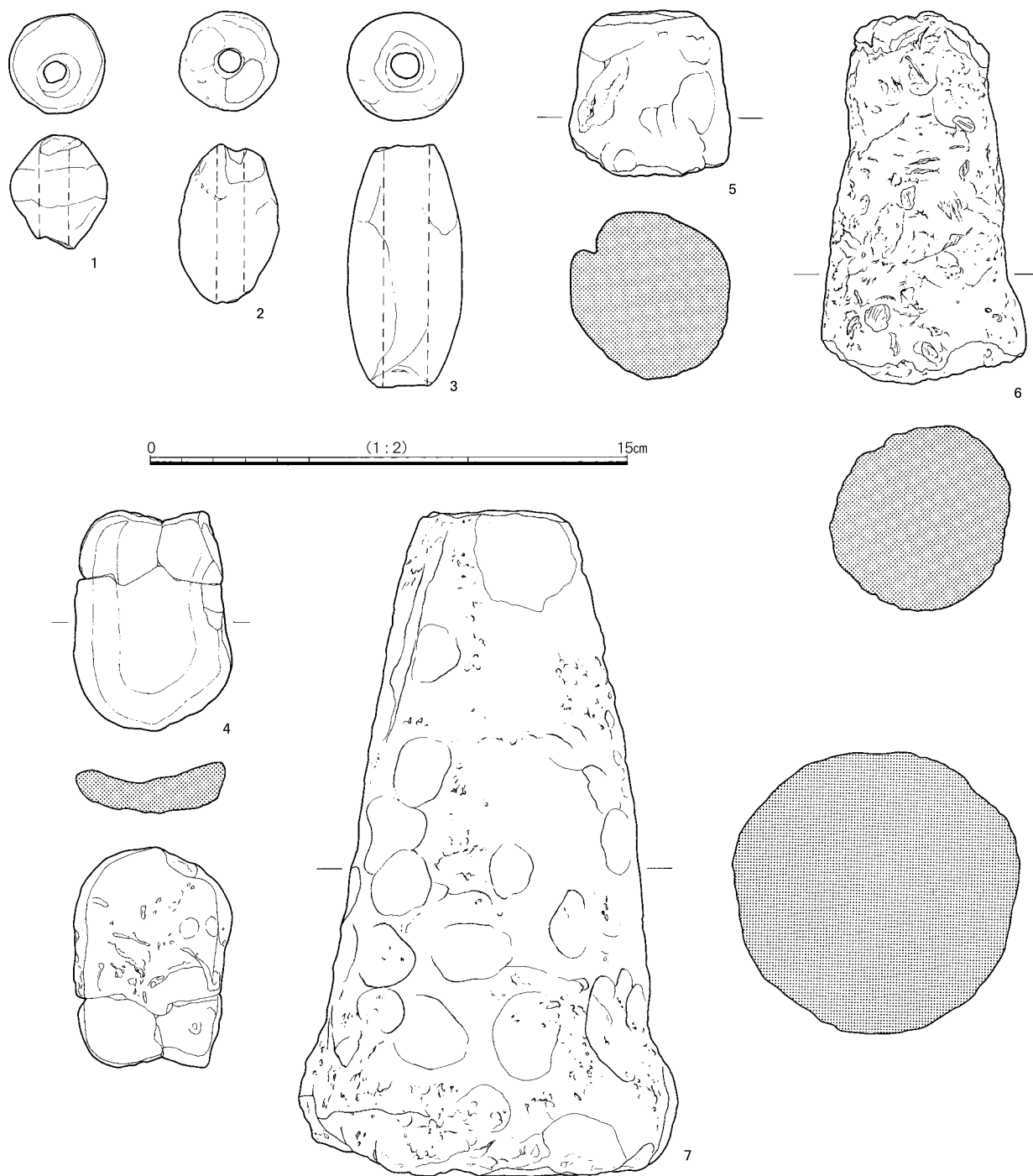
3点出土し、心棒のまわりに貼り付けた粘土を手捏で成形している。1は長さ3.5cm、重量22.47gの土玉である。孔径8mmで、両端部が引き出されて、軸方向に間延びしている。下総台地では平安時代まで使われ、おもに漁網の沈子に使用されたと考えられている（谷口 1991）。2は長さ5.1cm、重量35.38gで、紡錘形の小型な部類に属す。孔径は7mmである。1・2ともS I 026から出土した。3は長さ7.7cm、重量81.60gで、やはり紡錘形の小型な部類になる。両端部はきれいに整えられている。孔径は1.2cm程度である。S I 022の出土資料である。

2. 舌状土製品（第48図4，図版16）

板状の素材から7cm×5cmの大きさに成形したもので、図の右側の一部をやや欠損している。下端部はやや突出して、全体ではかなり丸みをおびた不正五角形になり、このことから舌状と表現した。短軸方向に緩やかにくぼみ、長軸方向には平坦である。上端部をのぞいては周縁をやや面取している。胎土には混和剤をほとんど含まず、肌理の細かい素地を使用し、やや粉っぽい印象をうける。上半部は被熱したのか、やや赤みをおびている。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）になる。S I 023の出土資料である。

3. 土製支脚（第48図5～7，図版16）

今回の調査では竪穴住居のカマドを10基近く調査したが、住居廃絶時のカマドの処理という問題や攪乱の有無という遺存状態の問題もあるが、出土した土製支脚は3点と少ない。5は上端部を残す資料で、S I 006から出土した。砂粒が非常に多く、白色針状物質も含むが、硬質に焼き締まっている。外面は白色系の皮膜がこびりついている。芯部は赤褐色で被熱痕跡が顕著である。6はS I 007出土資料で、上半分が遺存している。下端にいくにつれ、やや裾広がりになる形態と考えられる。上端部はクレーター状にく



第48図 土製品

ぼむ。胎土には細かい砂粒を多く含み、おそらく素地に練り込んだものであろう、禾本科植物と考えられる果実の圧痕が残る。やはり外面に指頭圧痕が残り、手捏で成形したことをうかがわせる。外面の色調は褐灰色(7.5YR5/1)だが、破面では明赤褐色(2.5YR5/6)で、被熱痕跡が顕著に残る。7は第5トレンチで遺構確認の精査を行っている際にカマド構築材とともに出土したもので、本調査の結果、S I 006に帰属することが明らかになったものである。完形で、重量は2,032gある。截頭円錐形をしており、下端部を象足状に成形したものである。外面に指頭圧痕が残り、手捏で成形したことを物語っている。被熱痕跡が顕著で、かなり脆弱になっている。色調は灰褐色(5YR5/2)になる。胎土には砂粒を多く含み、とくに白色砂粒の含有が目立つ。

第4節 瓦類(第49図1～8, 図版17, 第3表)

瓦類は総重量で約10kg出土した(第3表)。出土資料は丸・平瓦がしめ、軒瓦・文字瓦、熨斗瓦・隅切瓦等の道具瓦は確認できなかった。なおS I 021から直方体の一部を形成すると考えられるような小片(4.0cm×2.5cm×1.5cm)が1点あった。あるいは塼の可能性もあるが、資料が小さいこともあって確証がなく、図示はしていない。

これらの瓦類はS I 021・024からややまとまって出土しており、調査地全体ではD調査区に集中する傾向がある。今回の調査では瓦葺き建物を想定できるような建物遺構も確認していないので、これらの瓦類が調査地内に持ち込まれた理由については判然としない。ただ住居のカマド構築材の白色粘土が赤化した状態で部分的にこびりついたものがあり、一部の資料にはカマド構築材の一部として調査地内に持ち込まれた可能性がある。

1. 丸瓦(第49図1・2, 図版17, 第3表)

いずれも狭端部が残る資料では、行基丸瓦になる。灰色系で、硬質な焼き上がりのものが多い。成形にあたっては糸切り痕が残ることから、粘土角材から切り出した粘土板を素材としていることがわかり、粘土紐成形の例がないのは平瓦と共通する。凸面は最終的にヘラナデ等で平滑にして仕上げている。平瓦のように凸面に離れ砂を撒いた例は確認できなかった。1はS I 021出土資料で、広端面を残す。凹面の端面・側面に沿って幅広いヘラケズリで面取している。部分的に被熱痕跡を残す。2は特徴的な胎土のもので、胎土中に白色砂粒を非常に多く含む。S I 014出土資料で、ほかに同様のものはS I 003からも出土している。この種の胎土は北下遺跡軒丸瓦B類の6, 8弁の複弁系蓮華文を基本文様とする一群で確認できる胎土と共通するものである(今泉ほか 2011)。

2. 平瓦(第49図3～8, 図版17, 第3表)

いずれも粘土角材を素材とし、成形技法の違いから、桶巻作りと一枚作りの2種類がある。その分別については、桶巻作りの資料では凹面に成形時に使用した桶の杵板圧痕を一つの決め手とし、一枚作りでは布端が確認できるのを十分条件とした。杵板圧痕の痕跡がなかったり、布の撚れがないことなどは必要条件として成形技法を認定した。凸面の叩き目はほとんどが縄叩き目で、1点だけ斜格子叩き目の資料があった(4)。成形時の叩き締めの際に離型剤として離れ砂を撒く。

3・4は桶巻作りで、3は下総国分寺で大多数をしめる、凸面を縄叩き目で成形した資料になる。S I 021出土資料で、凹面には幅がやや不規則な杵板が連続された桶の痕跡を残す。4は斜格子叩き目の資料になる。格子目は1辺長が約5mmの菱形で、細い刻線が特徴である。縄叩き目同様、凸面に離れ砂を撒く。

S I 027から出土した。なお3・4とも、全体に赤化した砂が少しこびりつくものの、目立った被熱痕跡はとくに観察できない。カマドの構築材として使用したものであれば、おそらく袖等の芯に使用したものであろう。

5～8は一枚作りと考えられる一群で、凸面はすべて縄叩き目になる。5は端面が残り、凹面の布目は側縁までおよぶ。部分的に被熱痕跡が残る。6は凹面の側面近くに布端が出ている例になる。ただし布端



第49図 瓦類

の方向が側面とはやや斜になるので、桶巻作りの布の合わせ目が綴じられていない部分になる可能性もある。7は凸面全体が摩滅し、深い叩き目だけが残るので、砥石に転用されたものであろう。5～7はS I 024出土になる。8は2の丸瓦と同様で、胎土に白色砂粒を非常に多く含むのが特徴である。S I 014から出土した。

なお今回の出土資料については、第3表に遺構ごとの出土点数・総重量をまとめておいた。

第3表 瓦類出土集計表

種別	SI003	SI008	SI014	SI021	SI022	SI024	SI025	SI026	SI027	SI028	第5トレンチ	合計
丸瓦	0	0	3	3	0	1	0	5	0	1	0	13
	0	0	341	691	0	76	0	633	0	375	0	2,116
平瓦	1	6	3	12	1	7	1	0	2	0	1	34
	163	831	982	2,556	373	2,514	47	0	797	0	68	8,331

上段は出土点数，下段は総重量 (g)

第5節 金属製品 (第50図1～29, 図版18, 第4・5表)

種別では刀子がもっとも多く出土した。土中の環境にもよるのであろうが、保存状態が悪いものが多く、錆化の進行が著しい。

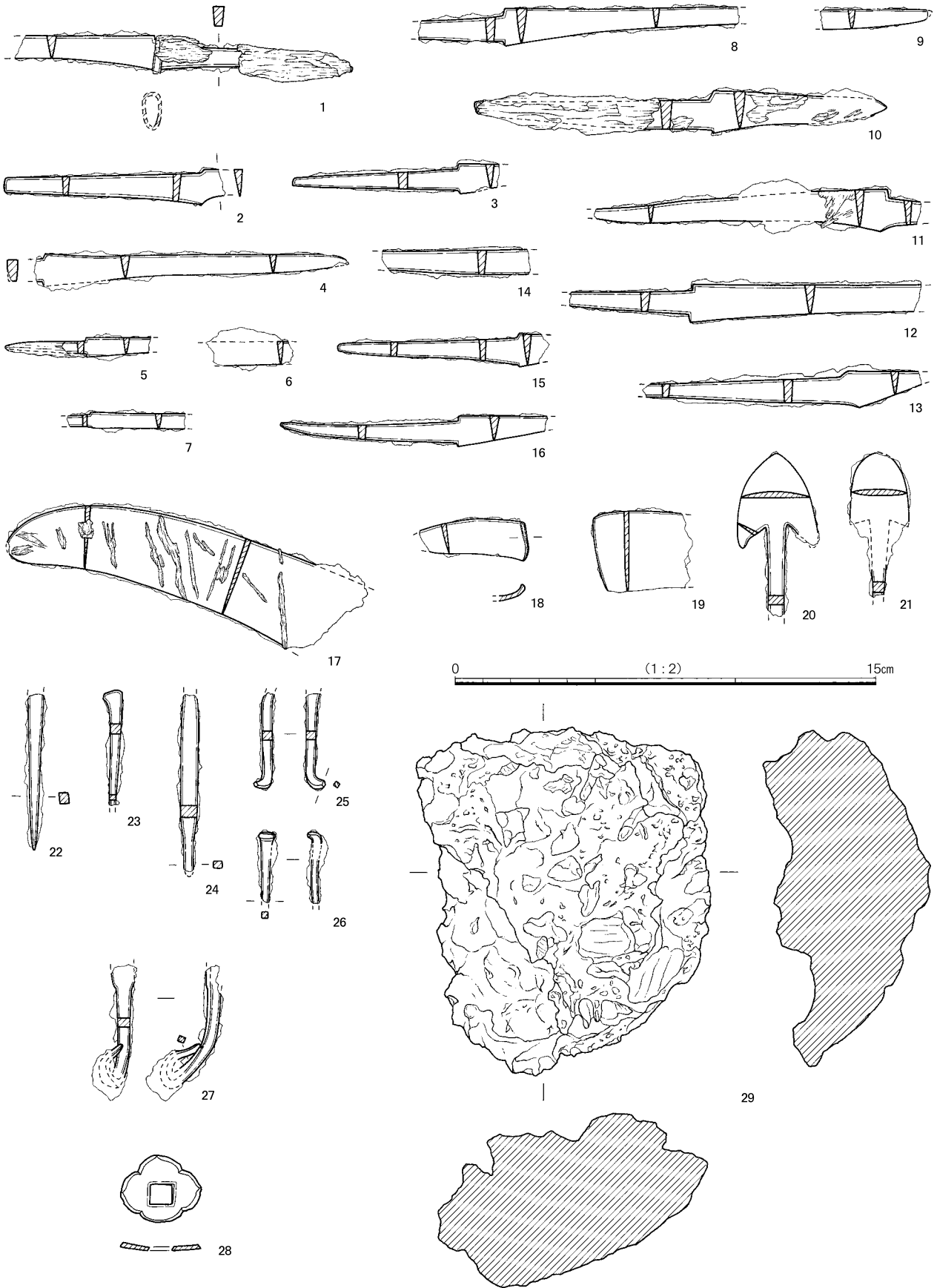
1. 刀子 (第50図1～13, 図版18, 第4表)

いずれも折損しており、全長の残るのは10の1点しかなかった。完形のものはないが、廃棄にあたって折り曲げたりした形跡を残しているものとくに確認できなかった。個々の計測値については第4表に掲載した。

刃部が残るものでは、10・13・16のように研ぎ減りが顕著なものがあり、とくに10は茎部の長さからいうと刀身が極端に短くなり、相当使い込んだことをうかがわせる。関の残るものでは、刃関・背関の両側にもち、刃部と背部にたいして垂直に切り込んだ直角関のもの (3～5・8・10・12・15・16) と、背関

第4表 刀子計測表

挿図番号	遺構番号	遺物番号	現存長 (mm)	刃部長 (mm)	刃部幅 (mm)	背幅 (厚) (mm)	関部幅 (mm)	茎長 (mm)	茎幅 (mm)	茎厚 (mm)	茎尻 (mm)	現存重量 (g)
1	SI003	36	120.3	50.0	7.8	3.5	[13.0]	70.8	7.0	2.3～4.0	1.8	16.9
2	SI002	44	78.8	8.3	9.3	2.7	12.6	70.5	7.0～9.7	1.8～2.8	5.2	7.0
3	SI007	36	73.3	14.0	8.5	3.0	11.0	59.3	6.0	3.0～3.5	2.5	6.6
4	SI011	5,15	111.4	107.8	8.4	3.2	11.5	3.6	7.5	4.0～[1.5]	-	9.4
5	SI011	14	52.3	23.3	5.7	2.4	7.0	29.0	4.3	2.4～2.6	-	2.8
6	SI011	14	31.1	31.1	8.0	2.3	-	-	-	-	-	4.0
7	SI011	16	41.6	33.2	5.2	2.4	5.5	8.4	4.2	1.4～1.7	-	2.0
8	SI021	58	114.4	84.0	12.3	4.0	13.0	30.4	8.5	2.7～3.6	-	12.4
9	SI021	66	38.6	38.6	6.6	2.7	-	-	-	-	-	1.8
10	SI021	80	146.6	61.5	12.7	4.2	14.8	85.1	10.2	2.5～4.3	-	23.2
11	SI022	193	116.4	102.0	6.5～12.8	2.0～3.6	15.5	14.4	9.0	1.5～2.7	-	15.4
12	SI022	172	125.5	81.5	10.7	3.9	13.8	44.0	7.7	2.0～3.5	-	17.5
13	SI022	163	99.1	21.1	8.5	2.7	13.7	78.0	4.9～8.8	2.3～3.3	-	9.9
14	SI024	33	53.1	53.1	8.7	1.7～3.3	-	-	-	-	-	6.3
15	SI015	87	75.2	10.7	11.4	3.0	11.5	64.5	5.0～7.2	2.3～2.8	-	7.7
16	SK013	4	94.8	32.3	8.7	3.5	10.8	62.5	5.0	2.0～3.0	1.3	7.9



第50図 金属製品

は直角で刃関を斜めに切り込んだ撫関のもの（1・2・11・13）とがある（北見 2003）。1では口金と思われる痕跡がわずかに残る。切先が残る4・10では、形状は先細になっている。茎尻の残るものでは、一文字尻になるものが大半をしめ、2・3・10・15が該当する。16は剣形の茎尻になるかもしれない。遺存している柄の素材はすべて木質で、1・5・10で確認できた。なお目釘穴を確認できた例はなく、もともとなかったであろう。

2. 鎌（第50図17～19，図版18）

17はもっとも遺存状態のよいものだが、柄の部分までは残っていない。薄板を素材にした曲刃の草刈鎌になる。幅は先にいくにしたがって、徐々に細くなっていく。先端にはやや丸みがある。刃部には木質が細くさばけて錆着している。S I 007出土資料である。18は薄板製の刃部が緩やかに湾曲するので、形式的には鎌に近いのでここで取りあげておく。刃部の先端は欠いているが、元部分はわずかに折り返している。刃部は先細りしながら、幅を狭めていく。S I 021から出土した。19もやはり薄板製の刃部を形成する資料で、幅が28.5mmある。端部は「コ」の字状に整えている。S I 015出土である。

3. 鉄鏃（第50図20・21，図版18）

20・21は刃部と棒状部の先端が残る鉄鏃である。刃部の大きさ・形態から広身鏃になり、刃部の形態はいずれも長三角形になる。刃部の横断面は20が片面だけが曲面になるが、21は両面が曲面になる。20の逆刺の深さは11.3mmある。20はS I 007，21はS I 015の出土である。

4. 棒状鉄製品（第50図22～27，図版18）

22～27は棒状の鉄製品で、釘・漁具もしくは鏃等の棒状部になる。22～26はS I 021の出土資料で、28はS K 013の出土資料になる。24などは鉄鏃の棒状部の可能性もあるが、細くなった部分に関はなく、その下半部に木質が残っている痕跡もない。27は端部を意識的に大きく折り曲げており、釣り針が錆化で変形してしまったものかもしれない。

5. その他の金属製品（第50図28，図版18）

28は厚さ1.4mmの薄板を素材とした銅製品で、周囲の輪郭を4弁の花弁状に整え、中央に方形（6.9mm×8.2mm）の穴をあけている。飾り金具の形状になるが、固定する穴は確認できない。S I 002の出土資料になるが、遺存状態にはさほど劣化しているようにはみえないので、あるいは住居に直接伴わない、新しい時期のものかもしれない。

6. 鉄滓（第50図29，図版18，第5表）

今回の調査では鍛冶遺構等は確認できなかったが、製鉄に関連する鉄滓は一定量出土している（第5表）。

29は123.5mm×106.0mmで、厚さ56mm，重量が819.2gになる、ほぼ完全な大型の椀形鍛冶滓である。上面は左寄りが三角形に1.5cmほどくぼむ。2cm×1.5cm大の木炭をかみこみ、それ以外にも小さい木炭の圧痕が残る。側面から下面にかけては比較的きれいな椀形で、下面の半分は比較的平坦だが、残りはかなり凹凸が激しい。一部コークス化し、鬆ができています。密度は高めである。なお金属学的調査は実施していない

遺構名	SI007				SI008	SI009	SI014	SI015	SI021				SI022	SI023	
遺物番号	74	112	115	121	56	8	63	85	1	23	35	61	122	14	104
個数	1	3	8	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
重量 (g)	56.73	89.70	224.97	54.32	42.49	10.97	10.51	6.10	27.32	7.67	5.18	3.15	8.08	4.85	7.32
総重量 (g)	425.72				42.49	10.97	10.51	6.10	43.32				8.08	12.17	

い。それ以外の鉄滓に関しては第5表を参考にされたい。

第6節 自然遺物 (第51～53図, 第6～10表)

S I 025のカマドの前面から、1 m×0.7mの範囲で貝類がまとまって出土した。これらはすべて土ごとサンプルとして一括採取し、以下の作業工程を経て分析した。

1. 分析方法

採取したすべてのサンプルを、9.52mm・4mm・2mm・1mmメッシュの試験フルイによる水洗分離を行い、乾燥後に選別を行った。

貝類 貝サンプル資料のうち、4mm以上のメッシュから検出したものを対象に、当財団で所有する貝類標本で同定した。巻貝類は殻口部下端の付いた殻軸をもって1個体とし、二枚貝類は殻頂部を左右別に同定・集計した上で、多い方を最少個体数とした。微小貝類は同定していない。なお、破損資料が多く、計測に耐える個体が少なかったため、計測値に加えて推定計測値も示した。

魚骨・鳥獣骨 貝サンプル資料のうち、1mm以上のメッシュで選別したものを対象としたが、魚骨・鳥獣骨はなかった。

2. 貝種組成

同定した貝類は海産二枚貝類4科5種である(第6表)。第7表には同定された貝種の個体数を示した。また第51図は貝種の構成比を示したものである。

圧倒的に多いのは8割強を占めるハマグリである。その他には、マガキ・シオフキ・オキシジミ・ウネナシトマヤガイがあり、いずれもハマグリとほぼ同様に潮間下部～水深20mの内湾の砂底に棲息する内湾種である。このうちウネナシトマヤガイの幼貝1点があったが、マガキに付着していたものが偶然持ち込まれたものと考えられる。

第6表 貝類種名一覧

綱	目	科	和名	学名	備考
二枚貝綱	ウグイスガイ目	イタボガキ科	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>	内湾などの比較的塩分の低い潮間帯の岩礁に棲息。湾奥干潟群集。
	マルスダレガイ目	バカガイ科	シオフキ	<i>Mactra quadrangularis</i>	内湾種。
		マルスダレガイ科	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>	内湾種。主体種。
			オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>	湾奥潮間帯の泥底に棲息。
		フナガタガイ科	ウネナシトマヤガイ	<i>Trapezium (Neotrapezium) liratum</i>	湾奥干潟群集。
計		4科	5種		

3. 計測値

第8表にはハマグリ・シオフキ・オキシジミの殻長計測値を示し、これをもとに第9表に各貝種の殻長計測値分布を示した。ハマグリについては第52図に殻長計測値分布をグラフで示した。主体種のハマグリのみは推定殻長計測値と推定殻長計測値分布をそれぞれ第10表と第53図に示した。推定殻長には左殻を用い、比較的残りの良い資料に関しては復縁を基準にし、その他のものに関しては主歯の大きさを目安に検討した。

ハマグリ：計測可能な個体が15個で、殻長平均値は42.05mm、25mm～45mmの個体が主体をなしている（第52図）。ピークは30mm～35mmでやや小型の貝が主体であるが、25mm以下の幼貝は混じらない。ある程度小型の貝の採取は避けていた可能性が考えられる。同様に推定殻長計測値分布においても比較的小型である、25mm～40mmの個体が主体をなし、ピークは30mm～40mmにあたる（第53図）。計測可能な個体がごく僅かではあったが、ある程度サンプル全体の様相を反映した結果となった。また約90.0mmの個体が1点あった。

シオフキ：計測可能な個体は3個であった。殻長平均値は42.26mmであり、大きな個体を選択的に採取していたものとみられる。

オキシジミ：計測可能な個体は2個であった。殻長平均値は43.29mmであり、シオフキと同様に大きな個体を選択的に採取していたものとみられる。

4. 小結

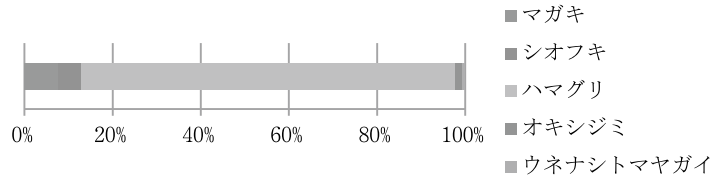
出土した貝類はハマグリを主体とし、若干数混在するマガキ・シオフキ・オキシジミもハマグリと同じ内湾種なので、これらは調査地周辺の干潟で行われたハマグリ漁の際に一緒に採取されたものと考えられる。殻長計測値分布から、いずれの貝種においても25mm以下の小型の貝および幼貝の採取は避けて、30mm～40mm前後の貝を中心に採取し、それ以上のものは量的には少ないが採取はできたようである。サンプル数が少なく通時的な比較検討はできないが、周辺遺跡との貝サンプルデータとの検討を今後の課題としたい。またハマグリに関しては特別大型のものが1個体あった。他とは異なり極端に遺存状態が悪く白色化（チョーク化）し、虫食い痕も見受けられるので、おそらく食用以外の目的で死貝（貝殻）を採集したものであったのではないだろうか。

第7表 貝種別集計表

貝種		9.52 mm	4 mm	合計
マガキ	右	2	1	3
	左	4	10	14
シオフキ	右	3	7	10
	左	3	5	8
ハマグリ	右	127	31	158
	左	115	34	149
オキシジミ	右	1	0	1
	左	2	1	3
ウネナシトマヤガイ	右	0	0	0
	左	0	1	1

国府台支台ではこれまでにいくつかの貝ブロックが調査によってみついている。台地南端の弘法寺では古墳時代の貝ブロックがみつかり（松本 1996・堀越 1997）、和洋学園キャンパス内からはSD11という溝からハマグリ・マガキなどの貝殻が大量に出土している（和洋学園 1996）。また市営総合運動場では堅穴住居や土坑からハマグリを主とする貝類が出土している（桑原ほか 1981）。なお『日本貝塚地名表』（酒詰 1959）記載の国府台貝塚は、現在、所在不明になっているとのことである（堀越 1997）。

第51図 貝種組成



第8表 貝類計測値 (mm)

No.	SI025		
	ハマグリ	シオフキ	オキシジミ
1	87.4	49.7	38.8
2	74.8	45.9	47.8
3	52.9	31.2	
4	50.1		
5	40.0		
6	38.3		
7	35.5		
8	35.0		
9	32.8		
10	32.9		
11	32.4		
12	31.2		
13	31.5		
14	27.6		
15	28.4		
試料数	15	3	2
平均	42.05	42.26	43.29
標準偏差	17.54	9.79	6.41
最小値	27.6	31.2	38.8
最大値	87.4	49.7	47.8

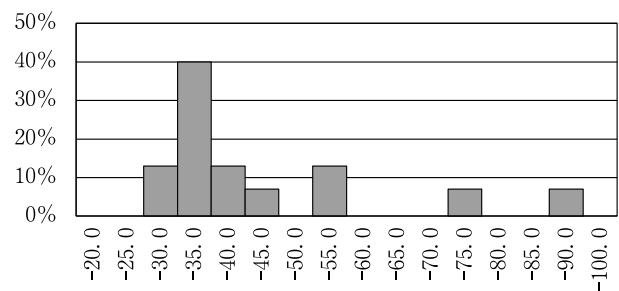
第9表 貝類計測値分布

殻長 (mm)	SI025		
	ハマグリ	シオフキ	オキシジミ
-20.0			
-25.0			
-30.0	13 %		
-35.0	40 %	33 %	
-40.0	13 %		50 %
-45.0	7 %		
-50.0		67 %	50 %
-55.0	13 %		
-60.0			
-65.0			
-70.0			
-75.0	7 %		
-80.0			
-85.0			
-90.0	7 %		
-100.0			
試料数	15	3	2
平均	42.05	42.26	43.29
標準偏差	17.54	9.79	6.41
最小値	27.6	31.2	38.8
最大値	87.4	49.7	47.8

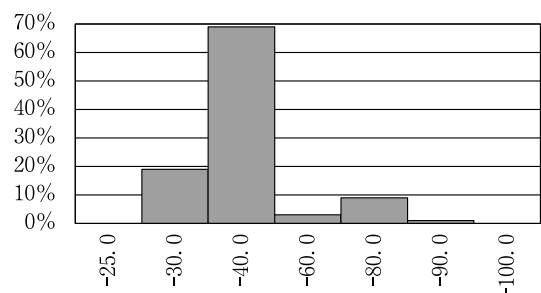
第10表 ハマグリ推定殻長計測値分布

殻長 (mm)	SI025 ハマグリ	
	割合 (%)	個数
-25.0	0 %	0
-30.0	19 %	22
-40.0	69 %	79
-60.0	3 %	3
-80.0	9 %	10
-90.0	1 %	1
-100.0	0 %	0
試料数	100%	115

第52図 ハマグリ殻長計測値分布 (mm)



第53図 ハマグリ推定殻長計測値分布 (mm)



注

- 1 池上 1985では胴部の高さにたいする幅の割合を胴張り指数とする。
- 2 松本ほか 1996では、時期不明として須和田遺跡出土の体部外面に同心円当て具痕のある新治窯産の須恵器甕を紹介し、8世紀前半頃かとする。
- 3 墨書土器の釈読に関しては、平川 南・武井紀子両氏の御教示による理解をもとに記述した。

参考文献

- 天野 努ほか 1981『公津原Ⅱ』千葉県教育委員会・(財)千葉県文化財センター
- 池上 悟 1985「古墳出土の須恵器—フラスコ形提瓶」『立正大学人文科学研究所年報』第23号 立正大学人文科学研究所
- 糸川道行 2009「奈良・平安時代における竪穴建物廃棄の祭祀—千葉県四街道市小屋ノ内遺跡出土土器群を中心として—」『研究連絡誌』第70号 (財)千葉県教育振興財団
- 今泉 潔ほか 2011『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書3—市川市北下遺跡(1)～(8)』(財)千葉県教育振興財団
- 上野猛ほか 1972『船田 東京都八王子市船田遺跡の第Ⅱ次調査』八王子市船田遺跡調査会
- 加藤貴之 2011「9～11世紀における下総国府編年」『平成12～18年度 市川市内遺跡発掘調査報告書』市川市教育委員会
- 川井正一 1988「外面に同心円文叩き目を有する須恵器について」『婆良岐考古』第10号 婆良岐考古同人会
- 川田壽文 2004「砥礪考—附 日本産砥石地名一覧表—」『白門考古論叢—稲生典太郎先生追悼考古学論集』中央考古会・中央大学考古学研究会
- 北見一弘 2003「刀子小考Ⅰ」『市原市文化財センター紀要』Ⅳ (財)市原市文化財センター
- 栗田則久 1990「外面同心円叩き須恵器」『佐原市古原三王遺跡—東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ(佐原地区2)』(財)千葉県文化財センター
- 桑原 護ほか 1981「市営総合運動場内遺跡」『昭和55年度埋蔵文化財調査報告』市川市教育委員会
- 斉藤忠昭ほか 1987「下総国分遺跡」『昭和61年度 市川市埋蔵文化財発掘調査報告』市川市教育委員会
- 酒井清治 1981「房総における須恵器生産の予察(Ⅰ)」『史館』第13号 史館同人
- 酒詰仲男 1959『日本貝塚地名表』土曜会 日本科学社
- 芝田英行 2002「旧石器時代」『千葉県市川市真間 国府台遺跡—第29地点発掘調査報告書—』国府台遺跡第29地点調査会
- 鈴木敏則 2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅—猿投窯・湖西窯編年の再構築』第1回東海土器研究会資料
- 高橋 透 2011「在地産土師器甕について」『平成16～20年度不特定遺跡発掘調査報告』市川市教育委員会
- 田中広明 1991「東国の在地産暗文土師器」『埼玉考古』第28号 埼玉考古学会
- 谷口 榮 1991「北部東京湾岸における土錘の様相」『竹橋門』東京国立近代美術館遺跡調査委員会
- 平川 南 1991「墨書土器とその字形」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 国立歴史民俗博物館
- 堀越正行 1997「古市川湾水系の貝塚所在遺跡名考証(1)」『市立市川考古博物館研究紀要』1 市立市川考古博物館
- 領塚正浩ほか 2008「古市川湾の海域環境と生息生物～市川砂州と大柏川下流域の自然貝層の調査成果から～」『市川市縄文貝塚データブック』市立市川考古博物館

第4章 結 語

第1節 遺構の変遷

今回報告した国府台遺跡第13地点（4）は、縄文時代陥穴3基と生活痕跡としては30軒からなる奈良・平安時代の竪穴住居を主体とする集落遺跡になる。

縄文時代に関しては土器は出土したものの散漫で、遺構が生活臭のない陥穴だけで構成されることからわかるように、もっぱら狩猟場として利用されたのであろう。陥穴の形状はいずれも両端部がオーバーハングして球状船首形になることから、前期を中心とした時期の所産と考えられ、縄文前期の破片資料が一定量出土していることとも呼応するのであろう。

その後、目立った土地利用の痕跡はなく、周辺一帯に集落が展開しはじめるのは下総国府編年1期の官衙成立の前夜からという（松田2001）。今回の調査資料は次の官衙成立期にあたる2期からと考えているが、後世の攪乱や調査上の制約等によって、部分的な調査成果に止まる場合が多かった。それでも土器等を中心に出土遺物は比較的豊富で、遺構の変遷をある程度跡づけることが可能と考えるので、そうした成果の一端を次に紹介しておきたい。

もっとも古く位置づけられるのが、ロクロ土師器を伴わず、前代からの系譜に連なる土師器の丸底杯を主体とする一群になる。S I 017出土土師器杯（105）は深みのある丸底で、形態的にはもっとも古くなり、北武蔵型土師器杯の小片も伴う。S I 004・S I 006・S I 023出土の土師器杯は、内面のミガキ調整は残るものの省略する傾向があり、器形もやや扁平気味になり、またS I 023出土の底部が高台よりも突出する高台付杯（189）も伴い、2 a期の資料と考えられる。土師器杯の口径をみると、S I 023出土資料のほうが口径が大きく、須恵器蓋（195）はかえりをもたないが、S I 004からは小片ながらもかえりをもつものがあるので、S I 004がやや先行するのであろう。出土した同心円文叩き目の須恵器甕（208・209）は、その盛行期にあたる資料と考えられる（川井1988）。土師器甕類では武蔵型の長胴甕を伴う。ただし武蔵国で出土する長胴甕では体部のヘラケズリ調整をほぼ縦方向に行うのにたいして、これらはやや斜めに削る場合が多いという相異がある（服部ほか1968）。

次の段階に位置づけられるのがS I 007出土資料で、須恵器杯（34）は静岡県伊場遺跡で天平年間前半の木簡と共伴した須恵器杯に近く（鈴木2001）、その年代観から2 b期とし、そのなかでも古相の段階に位置づけておきたい。やはり武蔵型長胴甕を伴うが、器高にたいする口縁部の立ち上がりが短くなってくる。なお共伴したフラスコ形提瓶（33）は生産地では7世紀代に生産が終了すると考えられているので、遺存状態がよいことなどから一定期間の伝世を想定しておきたい。またS I 007出土資料と遺構間接合資料が出土したS I 010も同時期と考えてよいだろう。出土土器から直接追求するのはむずかしいが、S I 010と似たような住居規模で、S I 010の西に隣接するS I 009も同時期に含めたい。

土師器杯類に箱形の製品が盛行する3 a期になると、器種構成が多様になる。今回の資料ではこの段階から盤類の出土を確認できる。S I 011・S I 015・S I 016・S I 019・S K013などの出土資料をあげられる。S I 003についても古い段階の土器群がこの段階に相当する。器種の多様性は、蓋・盤、そして高台付杯などが須恵器に共通する器種として登場する。盤類には103のように脚を具えたものものもある。土師器箱形杯のなかには内外面を赤色塗彩した一群（75・76）を散見するが、径高指数が30近くあり、後

出的な器形になる。占有率は低く、図化できなかつた破片資料でも量的には少ない。

甕類では武蔵型土師器甕の57・82は服部分類の2類に相当する(服部1996)。外面の調整も肩部周辺を横方向に削り、それ以下を縦方向に削るという、武蔵型の手法を踏襲する。なお82では口縁を「コ」の字状に整えるきざしがうかがえる。

土師器杯類に良好な資料は出土しなかつたが、S I 001・S I 002出土資料も当該期に含めて考えることができる。S I 001出土の武蔵型土師器甕(3)は、器高にたいする口縁部のしめる高さが異様に高いのが特徴である。

次の3 b期は皿類が出現する直前の、黒色処理した椀状の杯が加わる段階になる。今回の調査資料では、皿類の破片資料を伴わずに、住居規模の小さいS I 025・S I 027出土資料をあてておきたい。

土師器皿類の出現を画期とする4期になると、遺構数の増加に伴って資料数も増大する。図示できなかつた土師器皿の破片資料が出土した例も含めると、S I 008・S I 014・S I 021・S I 022・S I 024・S I 026をあげることができる。なかでもS I 021出土土師器杯のうち、90～92のように器高が4 cmを超え、口底径比も30を優に超える深みのある一群が一定量あり、皿も高台部を高く作るものがある。また灰釉陶器の高台付坏(84)はK-14でもやや古相の様相が残るものになり、これらのことから4期のなかでも、古い段階に位置づけておきたい。また土師器杯類に同様の傾向を看取できる、S I 008・S I 024出土資料もこれに含めておきたい。S I 021で出土した同心円文叩き目の須恵器甕(98A・98B)は、川井正一がその下限を9世紀初頭としており、その年代観とも大きな齟齬はないであろう(川井1988)。なお分布域としては、常総地域のなかではもっとも南西に位置することになる。

この段階になると須恵器杯類は減少傾向にあるが、S I 022のように土器の出土量が極端に多い場合には、一定の割合でその存在を確認できる。また須恵器甕については県内産あるいは千葉市域産の製品のしめる割合が高くなっていく。それにしたがえば断片的な資料ながら、県内産須恵器甕が出土したS I 018・S I 029もこの段階として差し支えないであろう。

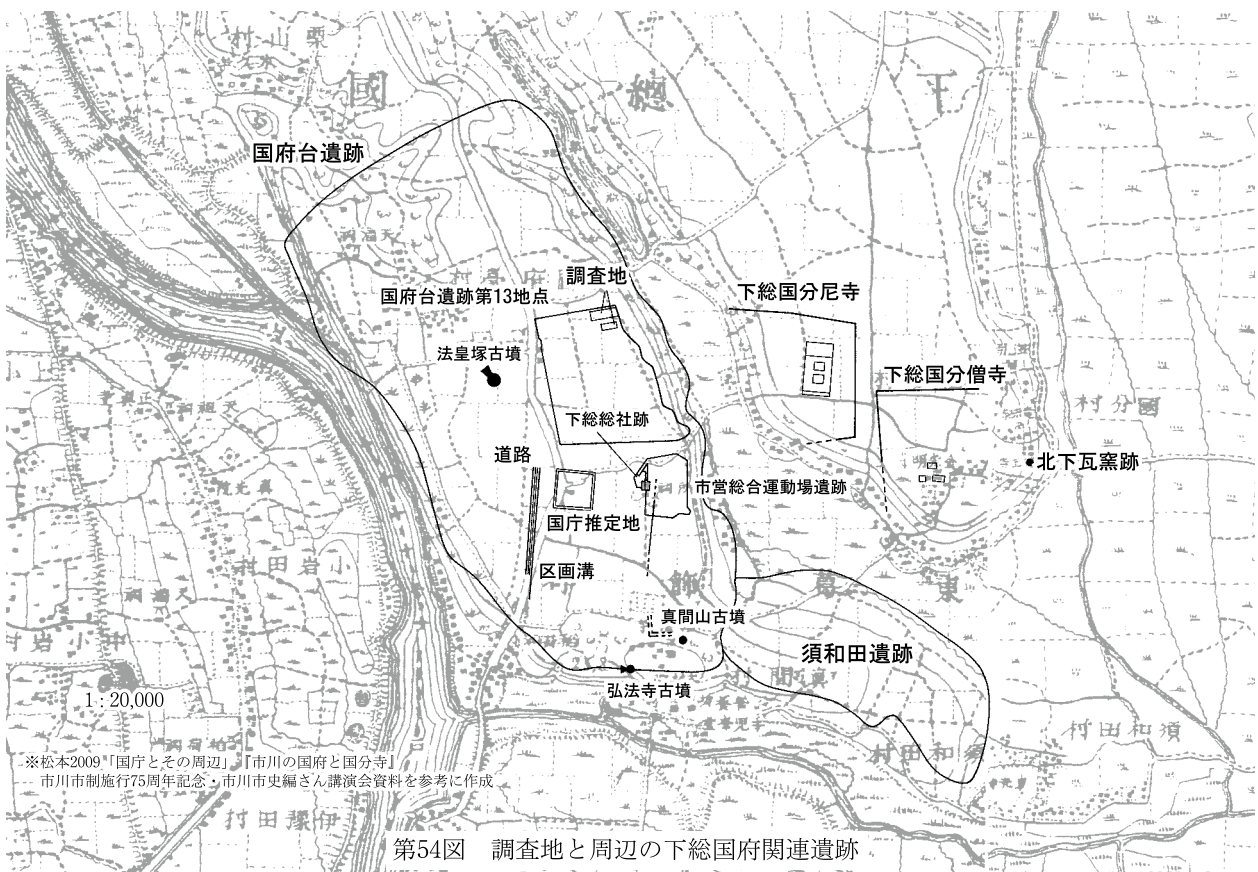
5期の段階については、今回良好な資料がなかつた。そして6 a期については明確な遺構としては確認できなかつたが、S I 003のおもに埋土上層から出土した土師器杯(16～18)・土師器足高高台杯(19・20)・土師器甕(22)などの一連の資料群がある。

このように今回の調査資料は、2期～4期までの遺構群で構成され、3 a期と4期でピークを迎える。こうした傾向は第3次の調査成果ともほぼ符合する。そして3 a期の遺構群は今回の調査地の範囲では北側に偏向する傾向があつて、4期になるとほぼ全域に拡散していくようになる。5期以降は明確な遺構は見当たらず、土器類の出土もほとんどなくなり、集落を形成していた形跡を確認できなくなる。国府台遺跡全体でもこの段階は、遺構数・土器量とも減少するといわれており(松田2001)、そうした趨勢を反映しているのであろうが、前段階の4期との落差があまりにも大きい。これを契機に集落の構成や選地などにも変化をもたらしたと考えるむきもあり(宮内1997)、その後の生活環境に大きな変化を及ぼすほどであった。しかしいっぽうで隣接する須和田遺跡ではこの時期でも遺構数に大きな変動はなく、土器類の出土量はむしろ増加するというから、こうした現象は拠点的に顕在化したもので、特殊な事情を想起させる。松田礼子はその要因を、『日本三大実録』の貞観17(875)年5月10日条にみえる俘囚の叛乱に代表されるような政情不安にもとめようとする(松田2001)。その当否はともかく、そうした事象も考慮に入れて、調査成果の分析を重ねながらその経緯について注意をはらっていく必要がある。

第2節 国府集落としての国府台遺跡

国府台遺跡の国府という地名は古代の国府ゆかりの地に全国的にみられ、古代の国府の位置を推定する上で有力な情報を提供してくれている。国府は令制国の中心地で、中枢施設は中央から派遣された国司が政務を執った国庁となり、その周辺には実務的官衙群である曹司などが配置され、それらを国衙と呼んでいる（山中2004）。そしてその周囲には集落を含む館・宿舍・学校などの国衙関連の諸施設が営まれ、その範囲を国府と呼称している。そしてそこに展開する、大半が農業生産以外の目的で構成された居住空間を、一般の営農集落とは区別して国府集落と呼んでいる（荒井 1993・荒井 1995a）。上総国府（稲荷台遺跡）・下総国府（須和田遺跡）・武蔵国府などの国府域からは「京」・「右京」などの墨書土器が出土している。地上に明確な線引きはなかったにしても、その範囲を「京」と呼ぶような、周辺とは区別された観念的な空間であった可能性がある（山中 2004・山路 2010）。

現在、下総国府の国庁は具体的な位置までは特定できていないが、周辺の調査成果から絞り込まれつつある。たとえば和洋女子大構内で見つかった、側溝を伴う幅15m以上の南北に延びる道路遺構（寺村ほか 1997）は駅路に想定され、その東側溝は西辺を限る区画溝を兼ねると考えられている。それによれば国府の中枢施設はその東に存在したことになる。しかしそこから約200m東で、かつて調査が行われた市営総合運動場遺跡では、掘立柱建物の柱掘方はほとんどが円形で、官衙域を構成するような掘立柱建物群の構成でもなかった（桑原ほか 1981）。そこから絞り込んでいくと先の区画溝と市営総合運動場のあいだの地区にはかつて瓦窯を想定させるほどの瓦が大量に出土した地点があり（滝口 1954）、今ではその周辺が、微地形も考慮にいれて、国庁の所在地として有力視されている（山路 1998・松本 2010）。武蔵国府でも瓦・埴類の散布が国庁を推定する上で有力な手がかりとなって、その所在を突き止めているので、下総国府の場合もその蓋然性は高いといえよう。



かつて国府域を歴史地理学的な観点も含めて「方八町」という広さの国府域を想定することがあった。今でこそその空間構成は調査例に照らして否定的にみられているものの、武蔵国府では「方八町」という範囲を目安にその内外で遺構・遺物の様相が異なるともいわれており（荒井 1993）、空間的な範囲を想定する場合にある程度その有効性を評価することがある。以前、石井則孝は下総国府の国府域を6町四方に想定したことがある（石井 1974）。当然、それよりは広くなるにしても、今回報告した国府台遺跡第13地点（4）も含めた一角は、推定国府域から北へ約400mの地点に位置し、地理的にも国府集落を構成する一角になることに異論はないであろう。松田はこの病院敷地内を東北地区として、遺構群の密度が高い一角と評価している（松田 2001）。

その遺構密度が一般の農村集落と比較した場合、どの程度異なるのか比較してみたい。ただ遺跡の存続期間の長短やその盛期、そして集落の性格等によってその内容は大きく変わるので一概にはいえない側面もあるが、比較する一つの目安として一般集落の例を2例あげておく。400年にわたって集落が営まれた匝瑳市飯塚遺跡群柳台遺跡では約100m²/軒になる（宮内 1998）。約200年の間に155軒の竪穴住居が営まれた八千代市村上込の内遺跡群では（天野 1998）、空闲地も含めた場合には約400m²/軒にもなるが、群別の専有面積で少なく見積もっても120m²/軒～180m²/軒になり、いずれも100m²/軒は確実に超える。台地上に大きく広がった平坦面に竪穴住居が点在するという景観を復原でき、遺構どうしの重複も少ない。これが農村集落におけるひとつの典型的な分布密度であろう。

いっぽう、今回の調査成果を同様の観点からみていくと60m²/軒になり、3次調査の調査成果では37m²/軒になって、さらに高密度になる。また市教委による国府台遺跡13地点の調査成果でも13m²/軒～50m²/軒になって、竪穴住居の高密度な分布状況はかわらない。ただ第2次調査の調査成果だけは171m²/軒になって密度はかなり低くなって、空闲地が目立つようになる。これは調査地の一部が中世の台地整形区画によって大きく削平されているのが影響していると考えられる。

これを他の国府集落と比較してみると、武蔵国府では国府集落の縁辺部をのぞいた例では、その密度は42m²/軒～50m²/軒（調査面積約6,000m²）になる（荒井 1995b）。相模国府でも7世紀後半の竪穴住居をのぞけば32m²/軒（調査面積約28,000m²）になって（明石 1995）、やはり高密度な分布状況になる。しかしこのような数字を持ち出すまでもなく、「ある範囲内であればどこを掘ってもほぼ竪穴住居址が調査できる」（荒井 1993）という言葉に、国府集落の密度の高さが端的に言いあらわされているといえよう。国府台遺跡第13地点の調査成果と照らし合わせても、実感として納得できるものである。したがって国府台遺跡第13地点の分布密度は、他の国府集落のそれと大差ないと考えて差し支えないであろう。

国府集落における高密度な竪穴住居の分布は何を意味するのであろうか。国衙には、中央政府が地方に派遣した、国司四等官と下級書記官である史生が勤務し、その他に国博士・国医師・国師といった専門職員などがいた。また一般民衆から徴発した徭丁には、事務関係に従事する書生や、国府の需要を賄う工房には鍛冶・紡織・文房具製作などに従事する技術者、そして雑役に従事する多数の非常勤の補助職員などがいた。下総国の等級は大国だから、総勢530人前後の人々が国司の下で働いていたことになる。900年前後の下総国総人口は12万人前後に推定されているので（鬼頭 2000）、その人数は下総国総人口のおよそ0.4%に相当する。下総国と同じ大国の武蔵国は、平安時代の人口の伸び率が下総国よりも高いので差し引かなければならないが、最盛期には1,000軒程度の竪穴住居が国府域にあったとも考えられており（荒井 1993）、下総国の場合もさらに多くの人数が国府域内に居住していたことは想像に難くない。こうした人々が集住

することで構成された集落が国府集落の実態になるわけである。なお今回の出土資料では、S I 022から出土した「猿」1文字の墨書土器(S 10)が「猿島郡」を指すのであれば、居住者の本貫地との関連を指摘できる資料になる可能性がある。

第3次調査のS I 007・S I 008からは製鉄関連遺物がまとまって出土しており、製鉄関連の工房群と考えられる(安井 2011)。第13地点-3でも小札・鋸等が出土し、工房群とする評価もある(松本ほか 1999)。今回の調査成果では羽口等の出土はなく、製鉄に関する直接的な痕跡は希薄だが、一定量の鉄滓が出土しており、周辺でそうした作業が行われたのであろう。刀子も比較的多く出土しており、その用途までは限定できないにしても、木工のような物品製作に使用した可能性がある。また一帯で紡錘車の出土が多いことも指摘されており(松田 2001)、紡織を手がけた一角もあったようである。いずれにしても生産工房の直接的な痕跡までは確認できていないものの、周辺一帯に生産部門を中心とした工房群が展開していたことがうかがえる。第3次調査では圈脚円面硯が2点出土しているので、一部には文書行政に関わる非生産部門の従事者も居住していた可能性があり、重層的な土地利用を想定すべきかもしれない。

出土遺物では下総国府の場合、土器類を中心に国府域としての独自の編年を構築できるほど、その特性が明らかになってきている(松本ほか 1996・松田 2001・松本 2011など)。国厨(国府厨)から国府域内の労働者が給食の提供を受けた場合に、竪穴住居出土資料であっても食器構成等が本貫地とは異なることによって、その違いが際立ってくるのであろう。今回の土器類の出土資料では、盤類と蓋が多いという傾向を追究できた。

かつて岡田茂弘は下総国府の景観を「国府台から須和田の台地にかけて、下総国府関係施設が点在し、その間に竪穴住居群が存在する景観を推定することが妥当であろう。」(岡田 1989)と想定した。その景観復原は今も当を得たものと思うが、その後、調査資料が蓄積されていくなかでより具体的な景観が描けつつある。しかし国府集落というフィルターを通して見たときに、土地利用の実態や竪穴住居の機能など、その実態はまだまだ不明な点が多い。今後、こうした調査資料を蓄積していくなかで、全体像を見渡しながら、そこに生活した人々に目を注ぐような検証作業も必要であろう。

参考文献

- 明石 新 1995「相模国府域の様相—国府域内の集落の分析をとおして—」『考古論叢 神奈河』第4集 神奈川県考古学会
- 天野 努 1998「村上込の内遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3 (奈良・平安時代)』千葉県
- 荒井健治 1993「国府(集落)“域”存在の可能性について」『東京考古』11 東京考古談話会
- 荒井健治 1995a「武蔵国庁周辺に広がる集落」『国史学』第156号 国史学会
- 荒井健治 1995b「国庁周辺に広がる集落遺構の性格について—武蔵国庁周辺の状況をもって—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第63集 国立歴史民俗博物館
- 石井則孝 1974「下総国分僧・尼寺の伽藍と下総国府の位置関係について」『史館』第3号 史館同人
- 川井正一 1988「外面に同心円文叩き目を有する須恵器について」『婆良岐考古』第10号 婆良岐考古同人会
- 鬼頭 宏 2000『人口から読む日本の歴史』講談社学術文庫1430 講談社
- 桑原 護ほか 1981「1. 市営総合運動場内遺跡」『昭和55年度埋蔵文化財発掘調査報告書』市川市教育委員会
- 鈴木敏則 2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅—猿投窯・湖西窯編年の再構築』第1回東海土器研究会資料
- 高橋 透 2011「在地産土器甕について」『平成16～20年度不特定遺跡発掘調査報告』市川市教育委員会
- 滝口 宏 1954「下総国分二寺」『学術研究』第2号 早稲田大学教育学部
- 寺村光晴ほか 1997『下総国府台I—和洋学園国府台キャンパス内遺跡第1次調査概報—』和洋学園

- 服部敬史ほか 1968 「土師器の編年に関する試論」『八王子市中田遺跡（資料篇Ⅲ）』八王子市中田遺跡調査会・八王子文化協会
- 服部敬史 1996 「八王子市船田遺跡の平安時代集落（4）」、『八王子の歴史と文化』第8号 八王子市教育委員会
- 松田礼子 2001 「下総国府の土器編年」『下総国府跡—国府台遺跡緊急確認調査報告書』市川市教育委員会
- 松本太郎ほか 1996 「市川市出土土器の産地と計量結果」『市川出土遺物の分析—古代の鉄・土器について—』平成7年度市川司埋蔵文化財調査・研究報告 市川市教育委員会
- 松本太郎ほか 1999 「国府台遺跡」『平成10年度市川市内遺跡発掘調査報告—国府台遺跡第38地点ほか』市川市教育委員会
- 松本太郎 2010 「古代の国府台を発掘する」『市川よみうり』連載・市川市民アカデミー 3月13日付け
- 松本太郎 2011 「房総地域出土土器の計量分析—下総国府成立期の様相—」『土曜考古』第34号 土曜考古学研究会
- 宮内勝巳 1997 「下総西部の土器編年について—下総国府・国分寺を中心にして—」『古代末期の葛飾郡』崙書房出版株式会社
- 宮内勝巳 1998 「飯塚遺跡群」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県
- 安井健一 2011 『市川市国府台遺跡第13地点（3）—地域活力基盤創造交付金委託埋蔵文化財調査報告書』（財）千葉県教育振興財団 文化財センター
- 山中敏史 2004 「国府の空間的構成」『古代の官衙遺跡 II 遺物・遺跡編』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
- 山路直充 1998 「下総国府関連遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県
- 山路直充 2010 「「京」墨書土器と国府域」『平成21年度千葉県遺跡調査研究発表会要旨』（財）千葉県教育振興財団

別 表

別表1 出土土器（奈良・平安時代）観察表

挿図 番号	遺構 番号	種 器 別 種	計測値 (cm)			底部切り離し		胎 土	外 面 色 調		備 考
			口 径	底 径	器 高	底面調整	下端調整		内 面 色 調		
1	SI001	須恵器 杯	(12.9)	(7.5)	3.9	不明	白色系砂粒多く、白色針状物質を含む。	褐灰色 (7.5YR5/1) 赤灰色 (2.5YR4/1)		底部外縁周囲を擦って平滑。 南比企産。	
2	SI001	須恵器 高台付盤	---	(14.4)	[2.1]	不明	白色砂粒多く、雲母を含む。	黄灰色 (2.5Y6/1) 黄灰色 (2.5Y6/1)		湖西産。	
3	SI001	土師器 甕	(22.2)	---	[21.6]	---	砂粒多く、雲母・白色針状物質を含む。	灰褐色 (5YR5/2) 灰赤色 (10R5/2)		全体に被熱で赤変。 体部下半に黒色の付着物がこびりつく。	
4	SI001	土師器 甕	(22.2)	---	[8.6]	---	黒色砂粒を多く含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3) にぶい褐色 (7.5YR5/3)		口縁部の一部が被熱で赤化。	
5	SI002	須恵器 盤	(20.8)	---	[1.8]	---	砂粒を少し含み、雲母を含む。	灰白色 (2.5Y7/1) 灰黄褐色 (10YR6/2)		新治産。	
6	SI002	須恵器 盤	(14.0)	---	[2.8]	---	白色系砂粒を多く含む。	褐灰色 (10YR4/1) 褐灰色 (7.5YR5/1)		内面は部分的にいぶされ、鈍い銀色に発色。 東海産。	
7	SI002	須恵器 杯	(11.9)	7.0	3.8	不明	白色系砂粒多く、黒色斑文を含む。	褐灰色 (10YR5/1) 褐灰色 (10YR5/1)		東海（東部か？）産。	
8	SI002	須恵器 杯	(13.1)	8.8	3.5	不明	砂粒多く、白色小礫・雲母・赤色スコリアを含む。	灰黄褐色 (10YR5/2) 灰黄褐色 (10YR5/2)		常陸産。	
9	SI002	須恵器 杯	(12.8)	(8.0)	3.6	回転糸切り	砂粒を少し含み、白色小礫・雲母を含む。	灰黄褐色 (10YR6/2) 灰黄褐色 (10YR6/2)		新治産。	
10	SI002	土師器 蓋	17.8	---	4.0	---	砂粒を少し含む。	にぶい橙色 (5YR6/4) にぶい橙色 (5YR6/4)		外面は部分的に煤ける。	
11	SI002	須恵器 瓶	---	(17.0)	[7.4]	不明	砂粒を少し含み、黒色斑文を含む。	褐灰色 (10YR6/1) 褐灰色 (10YR6/1)		底部内面にはガラス状皮膜になった降灰が部分的にこびりつく。	
12	SI003	須恵器 杯	12.6	7.0	4.2	不明	白色砂粒を少し含み、黒色スコリアを含む。	灰色 (5Y6/1) 灰色 (5Y6/1)		東金子産。	
13	SI003	土師器 杯	(11.1)	6.0	3.7	不明	砂粒少なく、雲母・白色針状物質を含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3) にぶい赤褐色 (5YR5/3)		墨書：体部外面 残面 墨痕：不鮮明 墨書土器No36	
14	SI003	土師器 杯	11.4	7.5	3.9	不明	砂粒少なく、雲母、赤・黒スコリア含む。	にぶい赤褐色 (2.5YR5/4) にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)			
15	SI003	土師器 杯	(11.8)	7.2	4.1	回転糸切り	砂粒少なく、雲母、赤・黒スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR5/2) 灰褐色 (7.5YR5/2)			
16	SI003	土師器 杯	11.6	6.7	3.5	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (5YR6/4) にぶい橙色 (5YR6/4)		墨書：底部外面 残面 墨痕：かすれて不鮮明 墨書土器No48	
17	SI003	土師器 杯	12.3	5.7	3.6	回転糸切り	砂粒多く、赤色スコリア・白色針状物質を含む。	にぶい橙色 (5YR6/4) にぶい橙色 (5YR6/4)			
18	SI003	土師器 杯	(12.3)	(6.0)	2.8	回転糸切り	白色系砂粒多く、赤・黒色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (2.5YR5/4) にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)			
19	SI003	土師器 高台付杯	14.6	---	[3.7]	不明	砂粒多く、雲母、赤・黒色スコリアを含む。	にぶい橙色 (5YR6/3) にぶい橙色 (5YR6/3)		高台部欠損	
20	SI003	土師器 高台付杯	(14.0)	---	[4.0]	---	砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (7.5YR6/3) にぶい褐色 (7.5YR6/3)		墨書：体部外面 残面 墨痕：かなり薄い 墨書土器No35	
21	SI003	土師器 甕	(15.6)	---	[6.3]	---	白色系砂粒多く、雲母・黒色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3) にぶい赤褐色 (5YR5/3)		被熱痕跡は確認できない。	
22	SI003	土師器 甕	(19.0)	---	[5.6]	---	砂粒・長石粒を多く含み、雲母を含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3) にぶい褐色 (5YR6/3)		被熱痕跡は確認できない。	
23	SI003	土師器 甕	---	(11.6)	[4.4]	---	砂粒多く、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3) にぶい褐色 (7.5YR6/3)		被熱痕跡は確認できない。	
24	SI003	須恵器 甕	---	---	[11.7]	---	砂粒非常に多く、雲母・長石粒を含む。	褐灰色 (10YR5/1) 黄灰色 (2.5Y5/1)		体部外面：平行叩き目 体部内面：当て具痕は不明瞭 常陸産か？	
25	SI006	土師器 杯	(13.3)	---	[3.3]	---	砂粒多く、雲母を含む。	にぶい褐色 (7.5YR5/3) にぶい赤褐色 (5YR5/3)		全体に摩滅が著しく、調整痕跡を残さない。	
26	SI006	土師器 杯	(20.3)	---	[11.9]	---	砂粒多く、雲母・白色針状物質を含む。	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)		被熱痕跡は確認できない。 粘土紐接合痕が2cmおきに確認できる。	
27	SI004	土師器 杯	(11.4)	---	[2.5]	---	砂粒少なく、雲母を含む。	にぶい赤褐色 (2.5YR5/3) 灰赤色 (2.5YR5/2)		内面はなでつけ器面にやや光沢あり。	
28	SI004	土師器 杯	(11.6)	---	3.3	---	砂粒少なく、雲母を含む。	灰褐色 (7.5YR5/2) 灰褐色 (5YR5/2)		内面はなでつけて、器面にはやや光沢あり。 焼き上がりは硬質。	
29	SI004	土師器 杯	(13.7)	---	3.9	---	器面がざらつくほど砂粒が多く、雲母を含む。	にぶい褐色 (5YR6/4) 灰褐色 (5YR5/2)		器面は全体に摩滅し、調整痕跡は不明瞭。	
30	SI004	土師器 杯	(13.8)	---	3.5	---	砂粒を多く含み、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3) 褐灰色 (7.5YR4/1)		内面：粗いミガキ調整	
31	SI004	土師器 甕	(24.3)	---	[6.8]	---	砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR5/2) 灰褐色 (5YR5/2)		被熱痕跡は顕著ではないが、外面に炭素が斑点状にこびりつく。	
32	SI004	土師器 杯	---	---	[13.6]	---	砂粒非常に多く、雲母を含む。	灰褐色 (7.5YR5/2) 褐灰色 (10YR5/1)		内外面にハケ目調整痕跡を残すが、外面は被熱で器面が荒れてほとんど不明瞭。	

挿図 番号	遺構 番号	種 別 種 類	計 測 値 (cm) ()は推定値、[]は現存値			底面切り離し		胎 土	外 面 色 調		備 考
			口 径	底 径	器 高	底面調整	下端調整		内 面 色 調		
33	SI007	須恵器	---	---	[18.6]	---	---	砂粒少なく、黒色斑文を含む。	褐灰色 (10YR6/1)	肩部に自然釉がガラス質の皮膜状に残る。	
		フラスコ形提瓶	頸部の一部を欠損			---	---		黄灰色 (2.5Y5/1)		
34	SI007	須恵器	---	8.2	[3.5]	---	回転ヘラ切り	砂粒少なく、黒色斑文を含む。	黄灰色 (2.5Y6/1)		
		杯	体部下半 70 %			回転ヘラ	無し		褐灰色 (10YR6/1)		
35	SI007	土師器	19.3	---	[29.4]	---	---	白色砂粒を多く含み、雲母を含む。	灰褐色 (5YR5/2)	外面：肩部から下に炭化物が皮膜状にこびりつく。	
		甃	70 %			---	---		褐灰色 (7.5YR4/1)		
36	SI007	土師器	20.6	4.9	35.0	---	---	白色系砂粒を非常に多く含み、白色針状物質を含む。	褐灰色 (7.5YR4/1)	外面：体部下半に炭化物が皮膜状にこびりつく。 内面：底面を除いてやや焼ける。	
		甃	90 %			---	---		灰褐色 (5YR5/2)		
37	SI007	土師器	---	4.5	[29.0]	---	---	粗い砂粒を非常に多く含み、赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2)	顕著な被熱痕跡は確認できないが、下半部がやや焼ける。	
		甃	体部 60 %			---	---		褐灰色 (10YR4/1)		
38	SI007	土師器	21.2	---	[9.6]	---	---	砂粒非常に多く、小礫・雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR5/2)	被熱で一部赤変。	
		甃	体部上半 70 %			---	---		にぶい赤褐色 (5YR5/3)		
39	SI007	土師器	(19.8)	---	[7.1]	---	---	砂粒多く、雲母、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	線刻：口縁部内面 正位の「大」、焼成後線刻	
		甃	口縁部 25 %			---	---		にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)		
40	SI007	土師器	---	(4.0)	[11.3]	---	---	砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	褐灰色 (5YR5/1)	わずかに被熱痕跡を残す。	
		甃	体部下半 60 %			---	---		褐灰色 (7.5YR5/1)		
41	SI007	土師器	---	(7.6)	[4.5]	---	---	白色砂粒を少し含み、雲母・白色針状物質を含む。	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	被熱痕跡は確認できない。	
		甃	底部 45 %			---	---		灰褐色 (7.5YR5/2)		
42	SI007	土師器	20.6	---	[20.9]	---	---	砂粒多く、小礫・雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2)	被熱のためか、体部外面がかなり剥落。	
		甃	体部上半 15 %			---	---		褐灰色 (5YR4/1)		
43	SI007	土師器	(21.8)	8.4	30.5	---	---	粗い砂粒を非常に多く含み、赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR5/2)	単孔式甃。外面：部分的に赤化。 内面：ヘラナア後に指頭でナデて平滑。	
		甃	50 %			---	---		にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)		
44	SI007	須恵器	---	---	[18.0]	---	---	白色砂粒非常に多く、長石を含む。	褐灰色 (10YR5/1)		
		甃	体部上半 30 %			---	---		灰色 (N4)		
45	SI008	土師器	12.8	(7.4)	3.7	---	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (5YR6/3)	刻書：底部外面。残画筆跡が用筆と共通し、字の可能性ある。工具はやや幅の広いものを使用。	
		杯	45 %			回転ヘラ	回転ヘラ		にぶい赤褐色 (5YR5/3)		
46	SI008	土師器	(14.4)	(7.6)	[4.2]	---	---	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR5/2)		
		杯	25 %			---	手持ちヘラ		褐灰色 (10YR5/1)		
47	SI008	土師器	(15.6)	(8.8)	5.7	---	---	砂粒少なく、雲母・白色針状物質を含む。	灰褐色 (7.5YR5/2)		
		杯	15 %			手持ちヘラ	手持ちヘラ		灰褐色 (5YR5/2)		
48	SI009	須恵器	---	---	[12.2]	---	---	黒色斑文を含む。	黄灰色 (2.5Y6/1)		
		長頸瓶	頸部 70 %			---	---		黄灰色 (2.5Y6/1)		
49	SI011	須恵器	12.4	7.8	3.4	---	回転糸切り	砂粒・小礫を少し含む。	灰黄褐色 (10YR6/2)	三義産？	
		杯	90 %			無し	無し		灰黄褐色 (10YR6/2)		
50	SI011	土師器	11.4	7.8	3.7	---	不明	砂粒少なく、黒・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2)	墨書：底部外面。 「力」 墨痕：淡い 墨書土器No.14	
		杯	90 %			手持ちヘラ	手持ちヘラ		にぶい赤褐色 (5YR5/3)		
51	SI011	土師器	11.6	7.5	4.4	---	静止糸切り	砂粒・小礫を少し含み、赤色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)	上面観はかなり歪。	
		杯	90 %			回転ヘラ	回転ヘラ		灰赤色 (2.5YR5/2)		
52	SI011	土師器	(12.4)	6.0	4.1	---	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2)		
		杯	45 %			回転ヘラ	回転ヘラ		にぶい赤褐色 (5YR5/3)		
53	SI011	土師器	12.0	7.8	3.7	---	静止糸切り	砂粒を少し含み、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (5YR6/4)	体部に「V」字状の欠損部あり。	
		杯	90 %			回転ヘラ	無し		にぶい褐色 (5YR6/3)		
54	SI011	土師器	(10.6)	(6.0)	3.5	---	---	砂粒を少し含む。	灰黄褐色 (10YR5/2)		
		杯	20 %			---	回転ヘラ		褐灰色 (7.5YR5/1)		
55	SI011	土師器	10.9	6.0	5.2	---	回転糸切り	砂粒少なく、雲母を非常に多く含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	内外面：粗いミガキ調整で器面を平滑に整える。	
		高台付杯	85 %			回転ヘラ	回転ヘラ		灰褐色 (5YR5/2)		
56	SI011	土師器	12.4	---	3.8	---	---	砂粒多く、小礫・雲母を含む。	灰褐色 (7.5YR5/2)		
		甃	95 %			---	---		灰褐色 (5YR5/2)		
57	SI011	土師器	(21.7)	(5.7)	28.4	---	---	細かい黒色系砂粒を非常に多く含み、赤色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	体部外面：部分的に煤付着。 体部最大径：(23.6cm)	
		甃	20 %			---	---		にぶい褐色 (2.5YR6/4)		
58	SI014	須恵器	13.0	6.2	4.0	---	不明	粗い白色系砂粒を多く含む。	褐灰色 (10YR6/1)	内面：焼け歪みか、器面にかなり凹凸あり。 県内産。	
		杯	50 %			手持ちヘラ	手持ちヘラ		褐灰色 (10YR6/1)		
59	SI014	土師器	11.3	7.4	3.7	---	回転糸切り	砂粒多く、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (7.5YR7/3)		
		杯	100 %			回転ヘラ	回転ヘラ		にぶい褐色 (7.5YR6/3)		
60	SI014	土師器	(12.2)	(6.0)	3.8	---	---	砂粒少なく、小礫・雲母・赤色スコリアを含む。	褐灰色 (10YR5/1)		
		杯	15 %			手持ちヘラ	手持ちヘラ		灰褐色 (5YR5/2)		
61	SI014	土師器	12.1	6.0	3.4	---	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3)		
		杯	30 %			回転ヘラ	回転ヘラ		にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)		
62	SI014	土師器	(12.6)	6.4	3.5	---	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (5YR6/4)		
		杯	35 %			回転ヘラ	回転ヘラ		にぶい褐色 (5YR6/3)		
63	SI014	土師器	13.5	7.1	4.7	---	---	白色系砂粒多く、雲母、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (5YR6/3)	内面：丁寧なミガキ調整。	
		杯	90 %			回転ヘラ	回転ヘラ		にぶい褐色 (5YR6/3)		
64	SI014	土師器	15.4	9.0	4.5	---	不明	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	内面：丁寧なミガキ調整後に黒色処理。	
		杯	45 %			手持ちヘラ	無し		灰色 (N4)		
65	SI014	土師器	(17.0)	(8.0)	2.8	---	---	細かい砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	内面：ミガキ調整後に黒色処理。	
		高台付皿	40 %			---	---		灰色 (N4)		

挿図 番号	遺構 番号	種 別 種	計 測 値 (cm) ()は推定値、[]は現存値			底部切り離し		胎 土	外 面 色 調		備 考
			口 径	底 径	器 高	底面調整	下端調整		内 面 色 調		
66	SI014	土師器 高台付皿	15.0	5.7	2.9	---	---	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (7.5YR6/3) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	内面：丁寧なミガキ調整で器面が平滑。	
67	SI014	土師器 皿	15.8	7.2	2.6	---	---	砂粒多く、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	内外面：摩滅し、調整痕跡は不明。器面の半分が赤変するが、被熱のためかどうか不明。	
68	SI014	土師器 皿	(15.2)	(7.6)	1.6	---	---	砂粒少なく、雲母を含む。	にぶい褐色 (7.5YR6/3) にぶい褐色 (5YR6/3)	内面：ミガキ調整で器面が平滑。	
69	SI014	須恵器 甕	(26.4)	---	[8.9]	---	---	砂粒少なく、雲母・白色針状物質を含む。	黄灰色 (2.5Y5/1) 褐灰色 (10YR5/1)	外面：平行叩き目。 内面：円礫等による当て具痕。	
70	SI015	須恵器 杯	---	(9.0)	[4.0]	---	回転ヘラ切り	砂粒少なく、黒色斑文を含む。	灰白色 (5Y7/1) 灰白色 (5Y7/1)	湖西産。	
71	SI015	須恵器 杯	(14.0)	(9.4)	3.7	---	不明	砂粒を含み、雲母・黒色スコリアを非常に多く含む。	褐灰色 (10YR5/1) 褐灰色 (10YR6/1)	新治産。	
72	SI015	須恵器 杯	(13.8)	7.9	3.9	---	回転ヘラ切り	砂粒多く、雲母、長石、黒・赤色スコリアを含む。	褐灰色 (10YR6/1) 褐灰色 (10YR6/1)	新治産。	
73	SI015	土師器 杯	(13.6)	(7.0)	3.5	---	木葉痕 手持ちヘラ	砂粒少なく、雲母、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (5YR6/3) にぶい褐色 (2.5YR6/4)	非ロクロ成形。 内面：粗いミガキ調整 底部外面：木葉庄痕	
74	SI015	土師器 杯	(15.0)	(9.8)	[5.8]	---	---	白色砂粒を少し含み、赤色スコリアを含む。	赤褐色 (10R5/4) 赤褐色 (10R5/4)	非ロクロ成形で、平底に近い丸底。内外面：ミガキ調整で器面には鈍い光沢あり。	
75	SI015	土師器 杯	(12.8)	(7.5)	3.8	---	---	白色砂粒を少し含み、黒・赤色スコリアを含む。	灰赤色 (2.5YR5/2) 赤褐色 (10R5/4)	内面：赤色塗彩。 底部外面：粗いミガキ調整	
76	SI015	土師器 杯	(12.0)	(9.2)	3.3	---	不明	白色砂粒を非常に多く含み、小礫・黒色スコリアを含む。	灰赤色 (10R5/2) 赤灰色 (10R5/1)	内外面：赤色塗彩。 底部外面：粗いミガキ調整。	
77	SI015	土師器 杯	(14.0)	(7.8)	3.9	---	不明	砂粒少なく、赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (7.5YR6/3) 灰褐色 (7.5YR6/2)		
78	SI015	須恵器 蓋	(14.0)	---	3.7	---	---	砂粒少なく、黒色斑文を含む。	灰白色 (2.5Y7/1) 灰色 (5Y6/1)	湖西産。	
79	SI015	須恵器 小型壺	(7.4)	---	[5.9]	---	---	砂粒少なく、雲母・黒色スコリアを多く含む。	褐灰色 (10YR6/1) 褐灰色 (10YR5/1)	常陸産か？	
80	SI015	須恵器 コップ型杯	(6.0)	(6.0)	4.2	---	---	白色砂粒を多く含み、黒色斑文を含む。	褐灰色 (10YR6/1) 黄灰色 (2.5Y6/1)	底面に緑色の灰釉がガラス状皮膜となって付着。	
81	SI015	土師器 甕	(23.5)	---	[11.5]	---	---	砂粒非常に多く、赤色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (2.5YR5/3) にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)	被熱痕跡を確認できない。	
82	SI015	土師器 甕	(19.6)	---	[8.4]	---	---	砂粒多く、雲母を含む。	灰褐色 (5YR5/2) 灰赤色 (2.5YR5/2)	被熱痕跡を確認できない。	
83	SI015	土師器 甕	(25.8)	---	[19.8]	---	---	砂粒・小礫を含み、雲母を含む。	灰褐色 (5YR5/2) 褐灰色 (5YR5/1)	被熱痕跡は顕著ではないが、内面はやや煤ける。	
84	SI021	灰釉陶器 高台付杯	(14.0)	(7.2)	3.8	---	---	砂粒少なく、黒色斑文を含む。	灰白色 (10YR7/1) 灰色 (5Y6/1)	施釉：内面全体。	
85	SI021	須恵器 杯	(12.8)	(6.2)	4.1	---	回転糸切り	白色系砂粒多い。	黄灰色 (2.5Y6/1) 黄灰色 (2.5Y6/1)	墨書：底部外面。 部首「ふしつくり」墨痕：かなり淡い 南北産。墨書土器No11	
86	SI021	土師器 杯	12.4	6.3	3.6	---	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2) 灰褐色 (5YR5/2)	内面：なでつけて、器面が平滑。	
87	SI021	土師器 杯	11.7	6.8	3.5	---	回転糸切り	砂粒少なく、雲母、黒・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR5/2) 灰色 (N4)	内面：炭素吸着。	
88	SI021	土師器 杯	(12.5)	(6.2)	3.7	---	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2) 灰褐色 (5YR5/2)	全体にやや煤ける。	
89	SI021	土師器 杯	(12.0)	(6.0)	3.9	---	回転糸切り	砂粒少なく、赤色スコリアを多く含む。	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	胎土は肌理細かく、やや粉っぽい。	
90	SI021	土師器 杯	(12.7)	6.0	4.2	---	回転糸切り	砂粒少なく、赤色スコリアを多く含む。	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/4)	胎土は肌理細かく、やや粉っぽい。	
91	SI021	土師器 杯	(12.9)	6.8	4.9	---	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・黒色スコリアを含む。	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/3)	底部外面：板目状圧痕が残る。	
92	SI021	土師器 杯	(14.0)	(7.4)	4.4	---	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・白色針状物質を含む。	にぶい褐色 (5YR6/3) 灰褐色 (5YR5/2)		
93	SI021	土師器 皿	13.0	7.1	2.5	---	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (5YR6/3) にぶい褐色 (5YR6/3)	内面：粗いミガキ調整でロクロ目がほとんど残らない。	
94	SI021	土師器 皿	(13.2)	6.8	2.6	---	---	砂粒多く、白色針状物質を含む。	灰赤色 (2.5YR5/2) にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)		
95	SI021	灰釉陶器 瓶	---	7.6	[10.2]	---	---	砂粒少なく、黒色斑文を含む。	灰色 (5Y6/1) 黄灰色 (2.5Y6/1)	上部に貫入の入ったガラス状の釉垂れが残る。	
96	SI021	須恵器 甕	---	---	---	---	---	砂粒少なく、黒色斑文を含む。	褐灰色 (10YR6/1) 褐灰色 (10YR6/1)	外面：平行叩き目。 内面：木理を残す当て具痕。 横・縦断面にほとんど曲率がない。	
97	SI021	須恵器 甕	---	---	---	---	---	砂粒少なく、白色針状物質を含む。	灰黄褐色 (10YR6/2) 褐灰色 (10YR6/1)	外面：平行叩き目。	
98A	SI021	須恵器 甕	---	---	---	---	---	白色系砂粒多く、長石・雲母を含む。	灰黄褐色 (10YR6/2) 灰黄褐色 (10YR6/2)	外面：同心円文叩き目。 内面：板状当て具痕。	

挿図 番号	遺構 番号	種 別 種	計 測 値 (cm) ()は推定値, []は現存値			底部切り離し		胎 土	外 面 色 調		備 考
			口 径	底 径	器 高	底面調整	下端調整		内 面 色 調		
98B	SI021	須恵器	---	---	---	---	---	白色系砂粒多く、長石・雲母を含む。	灰黄褐色 (10YR6/2)	外面：同心円文吹き目。 内面：板状当て具痕。	
		甕	---			---	---		灰黄褐色 (10YR6/2)		
99	SI021	土師器 杯	(6.7)	[1.6]	---	回転ヘラ	回転ヘラ	砂粒多く、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR5/2) 灰褐色 (5YR5/2)	線刻：円弧と直行する線の組み合わせ。	
100	SI016	土師器 盤	(20.0)	---	[2.4]	---	---	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (5YR6/4) にぶい赤褐色 (5YR5/3)		
101	SI016	須恵器	(13.2)	7.9	5.5	回転糸切り		砂粒少なく、雲母・長石を含む。	褐灰色 (10YR6/1) 褐灰色 (10YR5/1)	内面：上半部が黒く煤ける。 新治産。	
		高台付杯	70%			---	---				
102	SI016	土師器	14.0	---	4.1	---	---	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3) 灰色 (N4)	内面：全体に煤けて黒い。	
		甕	95%			---	---				
103	SI016	須恵器	---	---	[6.0]	---	---	白色系砂粒を少し含み、雲母を多く含む。	灰色 (N5) 灰色 (N4)	透し孔のある脚部のみ遺存。 本来透し孔は4か所。 新治産。	
		高盤	---			---	---				
104	SI016	土師器	(19.8)	---	[6.8]	---	---	砂粒非常に多く、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR5/2) にぶい橙色 (5YR6/3)		
		甕	体部上半 10%			---	---				
105	SI017	土師器 杯	(15.8)	---	[4.8]	---	---	砂粒を少し含み、棒状カーボン物質を含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3) 灰褐色 (5YR5/2)	内外面：摩滅が著しい。	
		杯	10%			---	---				
106	SI018	須恵器	---	(14.8)	[8.8]	---	---	白色系砂粒多く、雲母・赤色スコリアを含む。	灰色 (N4) 赤灰色 (2.5YR4/1)	体部下半の資料のため、叩き目は不明。 県内産須恵器。	
		甕	体部下半 30%			---	---				
107	SI019	土師器 杯	(11.0)	---	[3.5]	---	回転ヘラ	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (5YR6/4) にぶい橙色 (5YR6/4)		
		杯	15%			---	回転ヘラ				
108	SI024	土師器 杯	12.4	7.5	4.6	回転糸切り	手持ちヘラ 手持ちヘラ	白色砂粒を非常に多く含み、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2) 赤褐色 (10R5/3)	底面：径1.3cmの焼成後の穿孔あり。	
		杯	100%			手持ちヘラ	手持ちヘラ				
109	SI024	土師器 杯	13.4	5.6	4.1	回転糸切り	手持ちヘラ 手持ちヘラ	白色砂粒少し含み、黒色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2) 灰褐色 (5YR5/2)		
		杯	75%			手持ちヘラ	手持ちヘラ				
110	SI024	土師器 杯	12.9	7.2	4.2	回転糸切り	回転ヘラ 回転ヘラ	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2) 灰褐色 (5YR5/2)		
		杯	95%			回転ヘラ	回転ヘラ				
111	SI024	土師器 杯	(13.7)	7.5	4.1	回転糸切り	手持ちヘラ 無し	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	褐灰色 (7.5YR5/1) 赤灰色 (2.5YR5/1)		
		杯	45%			手持ちヘラ	無し				
112	SI024	土師器 鉢	14.6	---	[8.9]	---	---	砂粒少なく、白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰赤色 (10R6/2) 灰赤色 (2.5YR5/2)	ロクロ成形。 内面：横方向の比較的丁寧なミガキ調整。 外面：被熱した痕跡が残る。	
		鉢	体部 70%			---	---				
113	SI024	土師器 甕	---	9.6	[1.4]	回転糸切り	---	砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	赤灰色 (10R5/1) 灰褐色 (5YR5/2)	ロクロ成形。 被熱痕跡が顕著で、断面が一部赤化。	
		甕	底部 100%			---	---				
114	SI024	土師器 甕	---	9.5	[1.5]	回転糸切り	手持ちヘラ 手持ちヘラ	砂粒少なく、雲母を含む。	灰赤色 (2.5YR5/2) 赤灰色 (10R5/1)	ロクロ成形。	
		甕	底部 50%			手持ちヘラ	手持ちヘラ				
115	SI024	土師器 甕	---	(9.8)	[0.9]	静止糸切り	手持ちヘラ 手持ちヘラ	砂粒少なく、雲母、黒・赤色スコリアを含む。	赤灰色 (10R5/1) 灰褐色 (7.5YR6/2)	ロクロ成形が付着。 内外面：煤が付着。	
		甕	底部 80%			手持ちヘラ	手持ちヘラ				
116	SI024	須恵器	---	---	---	---	---	砂粒少なく、赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR6/2) 灰褐色 (7.5YR5/2)	外面：平行吹き目。 内面：ナデ	
		甕	---			---	---				
117	SI025	土師器 杯	13.8	7.8	5.5	回転ヘラ切り	回転ヘラ 回転ヘラ	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	赤灰色 (7.5R5/1) 暗赤灰色 (10R4/1)	内外面：器面が平滑で鈍い光沢あり。	
		杯	80%			回転ヘラ	回転ヘラ				
118	SI025	灰釉陶器 長頸瓶	(8.3)	---	[10.1]	---	---	白色砂粒を非常に多く含む。	灰白色 (5Y7/1) 黄灰色 (2.5Y6/1)		
		長頸瓶	頸部 70%			---	---				
119	SI025	灰釉陶器 長頸瓶	---	13.2	[14.2]	---	---	白色砂粒を非常に多く含み、黒色斑文を含む。	赤灰色 (10R5/1) 灰色 (N6)	底部内面：降灰した自然釉が白色化して釉着。 外面：自然釉がかなり鈍い光沢を發する。	
		長頸瓶	体部下半 60%			---	---				
120	SI025	須恵器	---	---	---	---	---	白色砂粒少し含む。	灰色 (N5) 灰色 (N6)	外面：叩き締め後、カキ目を施す。 内面：同心円状当て具痕。	
		甕	---			---	---				
121	SI022	須恵器 杯	13.4	6.6	3.9	回転ヘラ切り	手持ちヘラ 手持ちヘラ	砂粒多く、小礫・雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR6/2) 灰褐色 (7.5YR6/2)	新治産。	
		杯	80%			手持ちヘラ	手持ちヘラ				
122	SI022	須恵器 杯	(14.4)	(6.4)	4.0	---	---	砂粒少なく、雲母・長石を含む。	黄灰色 (2.5Y6/1) 黄灰色 (2.5Y6/1)	新治産。	
		杯	15%			---	手持ちヘラ				
123	SI022	須恵器 杯	(12.3)	6.8	4.2	回転ヘラ切り	手持ちヘラ 手持ちヘラ	白色砂粒を多く含む。	褐灰色 (10YR6/1) 褐灰色 (10YR6/1)	底部内面：部分的に擦っている。 新治産。	
		杯	40%			手持ちヘラ	手持ちヘラ				
124	SI022	須恵器 杯	13.6	5.7	4.7	回転ヘラ切り	手持ちヘラ 手持ちヘラ	白色の小礫が多く、雲母・黒色スコリアを含む。	褐灰色 (10YR6/1) 褐灰色 (10YR6/1)	千葉市城産。	
		杯	60%			手持ちヘラ	手持ちヘラ				
125	SI022	須恵器 杯	(12.1)	(6.2)	3.6	回転ヘラ切り	無し 無し	小礫を少し含む。	黄灰色 (2.5Y5/1) 黄灰色 (2.5Y5/1)	新治産。	
		杯	45%			無し	無し				
126	SI022	須恵器 杯	(13.8)	6.7	4.2	回転ヘラ切り	手持ちヘラ 回転ヘラ	白色砂粒を含み、白色系小礫・黒色スコリアを含む。	黄灰色 (2.5Y6/1) 褐灰色 (10YR6/1)	三和産？	
		杯	55%			手持ちヘラ	回転ヘラ				
127	SI022	須恵器 杯	12.4	6.9	3.6	回転ヘラ切り	手持ちヘラ 手持ちヘラ	白色系砂粒多く、白色針状物質を含む。	灰色 (N5) 灰色 (N5)	器面全体がいぶされ、鈍い銀色を發色。 南北企産。	
		杯	65%			手持ちヘラ	手持ちヘラ				
128	SI022	須恵器 杯	(12.8)	6.8	4.0	回転ヘラ切り	無し 無し	白色系砂粒多く、黒色スコリアを含む。	褐灰色 (7.5YR5/1) 灰色 (N5)	県内産。	
		杯	50%			無し	無し				
129	SI022	須恵器 杯	(14.6)	(8.1)	4.7	---	---	白色砂粒を多く含み、白色針状物質・赤色スコリアを含む。	褐灰色 (7.5YR5/1) 灰色 (N5)	県内産。	
		杯	25%			手持ちヘラ	無し				
130	SI022	土師器 杯	(11.0)	6.0	4.1	回転糸切り	手持ちヘラ 手持ちヘラ	砂粒少なく、雲母を含む。	灰黄褐色 (10YR6/2) 灰褐色 (7.5YR6/2)		
		杯	50%			手持ちヘラ	手持ちヘラ				

挿図 番号	遺構 番号	種 別 種	計測値 (cm) ()は推定値、[]は現存値			底部切り離し		胎 土	外面色調		備 考
			口径	底径	器高	底面調整	下端調整		内面色調		
131	SI022	土師器 杯	11.3	6.2	4.1	回転糸切り	細かい砂粒を少し含み、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3) 灰褐色 (5YR5/2)	口縁部の内側を中心に油煙墨が付着。		
132	SI022	土師器 杯	11.5	6.6	4.1	---	砂粒を少し含み、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (7.5YR6/3) 灰黄褐色 (10YR6/2)	口縁端部の内外に油煙墨が付着。		
133	SI022	土師器 杯	11.6	6.4	4.2	不明	砂粒を少し含み、雲母、白色針状物質、黒・赤色スコリアを含む。	赤灰色 (10R5/1) 褐灰色 (7.5YR5/1)			
134	SI022	土師器 杯	(12.1)	(7.0)	4.0	---	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	赤灰色 (10R6/1) 灰黄褐色 (10YR6/2)			
135	SI022	土師器 杯	(12.2)	7.0	4.5	回転糸切り	砂粒少なく、雲母、白色針状物質、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (7.5YR6/3) にぶい褐色 (7.5YR6/3)			
136	SI022	土師器 杯	11.6	6.9	4.4	---	砂粒を少し含み、雲母、黒・赤色スコリアを含む。	灰黄褐色 (10YR6/2) 灰褐色 (7.5YR6/2)	墨書：体部外面。 正位の部首「ふしづくり」 墨痕：比較的鮮明 墨書土器No.20		
137	SI022	土師器 杯	11.8	6.8	3.9	回転糸切り	白色砂粒を少し含み、雲母・赤色スコリアを含む。	褐灰色 (7.5YR5/1) 褐灰色 (7.5YR5/1)			
138	SI022	土師器 杯	12.3	6.6	4.3	---	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	褐灰色 (10YR6/1) 灰褐色 (7.5YR6/2)	墨書：体部外面。 正位の部首「ふしづくり」 墨痕：鮮明 墨書土器No.5		
139	SI022	土師器 杯	12.3	6.8	3.8	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (7.5YR5/3) にぶい褐色 (7.5YR6/3)	墨書：体部外面 残画 墨痕：やや不鮮明 墨書土器No.37		
140	SI022	土師器 杯	(12.7)	(7.6)	3.7	回転糸切り	砂粒少なく、黒・赤色スコリアを含む。	褐灰色 (7.5YR6/1) 褐灰色 (5YR5/1)	内面の底部近くに赤色顔料付着。		
141	SI022	土師器 杯	(11.7)	(7.0)	3.6	回転糸切り	白色砂粒を少し含み、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (2.5YR6/4) にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)	墨書：体部外面 正位の部首「ふしづくり」の残画 墨痕：鮮明 墨書土器No.4		
142	SI022	土師器 杯	12.0	6.7	3.7	回転糸切り	白色を少し含み、雲母・白色針状物質・黒色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR6/2) 褐灰色 (7.5YR5/1)			
143	SI022	土師器 杯	(12.0)	(6.8)	3.7	不明	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR6/2) 褐灰色 (5YR5/1)			
144	SI022	土師器 杯	11.4	6.2	4.0	不明	白色砂粒を非常に多く含み、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (5YR6/3) 灰褐色 (5YR6/2)	波板状のヘラケズリ。		
145	SI022	土師器 杯	(11.2)	(6.0)	3.7	---	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (5YR6/3) にぶい褐色 (5YR6/3)			
146	SI022	土師器 杯	(12.0)	(6.8)	3.8	不明	砂粒多く、雲母、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (5YR6/3) 灰褐色 (7.5YR5/2)			
147	SI022	土師器 杯	(12.2)	6.0	3.9	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3) にぶい赤褐色 (5YR5/3)	墨書：体部外面 正位の残画 墨痕：やや淡い 墨書土器No.31		
148	SI022	土師器 杯	(12.5)	6.0	4.5	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR6/2) 灰褐色 (5YR5/2)			
149	SI022	土師器 杯	12.4	7.2	4.2	回転糸切り	砂粒非常に多く、小礫・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (5YR6/4) にぶい褐色 (5YR6/3)			
150	SI022	土師器 杯	12.3	6.4	4.2	回転糸切り	砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (5YR6/3) にぶい褐色 (5YR6/3)			
151	SI022	土師器 杯	(12.8)	6.5	4.3	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR6/2) 褐灰色 (5YR5/1)	内面：丁寧なミガキ調整だが、ロクロ目は残る。		
152	SI022	土師器 杯	(11.8)	6.6	4.0	不明	砂粒少なく、雲母、黒・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR6/2) 灰褐色 (5YR5/2)			
153	SI022	土師器 杯	(16.0)	(9.2)	4.3	---	砂粒少なく、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (7.5YR7/3) 灰色 (N4)	内面：丁寧なミガキ調整後に黒色処理。		
154	SI022	土師器 杯	15.3	7.1	4.0	不明	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (7.5YR6/3) 灰色 (N4)	内面：丁寧なミガキ調整後に黒色処理。		
155	SI022	土師器 杯	14.8	7.7	4.4	静止糸切り	砂粒少なく、雲母、白色針状物質、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3) 灰褐色 (5YR5/2)	内面：丁寧なミガキ調整後に部分的に炭素吸着。		
156	SI022	土師器 杯	15.3	7.3	4.7	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3) 灰褐色 (7.5YR5/2)	内面：丁寧なミガキ調整で器面は平滑。底部外縁：一定方向の擦痕があり、砥面の可能性がある。		
157	SI022	土師器 杯	15.1	6.4	4.5	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・白色針状物質を含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3) にぶい赤褐色 (5YR5/3)	内面：丁寧なミガキ調整で、一部、炭素吸着。		
158	SI022	土師器 杯	(12.4)	(6.6)	3.7	---	砂粒非常に多く、赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (7.5YR6/3) にぶい褐色 (5YR6/3)			
159	SI022	土師器 杯	(12.8)	5.6	3.8	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (2.5YR6/3) 褐灰色 (5YR5/1)			
160	SI022	土師器 杯	12.3	5.8	3.7	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR6/2) 褐灰色 (7.5YR5/1)			
161	SI022	土師器 杯	(12.2)	5.6	3.7	不明	砂粒少なく、雲母、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (5YR6/3) にぶい褐色 (5YR6/3)			
162	SI022	土師器 杯	12.4	6.4	3.7	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2) 灰褐色 (7.5YR5/2)			
163	SI022	土師器 杯	(12.2)	(6.0)	3.5	不明	白色砂粒を少し含む。	灰褐色 (2.5YR5/2) 灰褐色 (2.5YR5/2)	内外面：赤色塗彩。 部分的に被熱で赤化。		

挿図 番号	遺構 番号	種 別 種	計測値 (cm) ()は推定値, []は現存値			底部切り離し		胎 土	外面色調		備 考
			口径	底径	器高	底面調整	下端調整		内面色調		
164	SI022	土師器 杯	11.4	5.6	3.6	回転ヘラ切り	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (5YR6/4)		
165	SI022	土師器 杯	(12.0)	(6.0)	3.4	不明	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい橙色 (5YR6/4)		
166	SI022	土師器 杯	12.9	7.0	3.7	回転糸切り	細かい砂粒多く、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (5YR6/3)	褐灰色 (5YR5/1)		
167	SI022	土師器 杯	(13.2)	7.3	3.4	回転糸切り	黒色系砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (5YR6/3)	にぶい橙色 (5YR6/3)		
168	SI022	土師器 杯	12.2	7.0	3.7	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR5/2)	灰褐色 (7.5YR5/2)		
169	SI022	土師器 杯	13.4	6.8	3.8	---	砂粒多く、雲母、白色針状物質、黒・赤色スコリアを含む。	褐灰色 (5YR4/1)	褐灰色 (5YR5/1)	上面観はかなり歪。 最大径：14.0cm 最小径：13.0cm	
170	SI022	土師器 高台付杯	(15.0)	(7.6)	5.1	---	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・黒色スコリアを含む。	灰赤色 (2.5YR5/2)	灰色 (N4)	内面：丁寧なミガキ調整後に黒色処理。	
171	SI022	土師器 皿	(13.2)	(5.4)	2.0	---	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2)	赤灰色 (2.5YR5/1)		
172	SI022	土師器 皿	(13.2)	6.4	2.0	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	にぶい褐色 (7.5YR7/3)		
173	SI022	土師器 皿	(13.7)	(6.3)	1.8	---	砂粒少なく、雲母、白色針状物質、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	灰赤色 (10R5/2)		
174	SI022	土師器 皿	(15.2)	(9.8)	1.8	---	砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (2.5YR6/4)	にぶい褐色 (2.5YR6/4)	胎土は上総型杯に似てやや粉っぽい。	
175	SI022	土師器 皿	13.2	5.6	2.2	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2)	灰色 (N4)	内面：丁寧なミガキ調整後に黒色処理。	
176	SI022	土師器 皿	13.5	5.5	2.4	不明	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)	褐灰色 (7.5YR5/1)	内面：丁寧なミガキ調整後に炭素吸着。	
177	SI022	土師器 皿	---	(5.7)	[1.7]	不明	砂粒少なく、雲母・白色針状物質を含む。	灰褐色 (5YR5/2)	赤灰色 (10R5/1)	内面：平滑に研磨。	
178	SI022	土師器 高台付皿	14.0	7.3	3.3	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR6/2)	灰褐色 (5YR5/2)	内面：ミガキ調整。	
179	SI022	土師器 高台付皿	14.4	8.0	3.1	---	砂粒少なく、雲母、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (5YR6/3)	にぶい褐色 (5YR6/3)	墨書：底部外面。部首「ふしづくり」墨痕：やや不鮮明。墨書土器No8 内面：やや粗いミガキ調整	
180	SI022	土師器 高台付皿	(14.0)	6.8	2.4	回転糸切り	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (2.5YR6/3)	にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)	内面：丁寧なミガキ調整。	
181	SI022	須恵器 甕	(43.0)	---	[10.1]	---	白色砂粒を少し含む。	灰色 (N5)	灰色 (N5)	南比企産？	
182	SI022	須恵器 甕	---	---	---	---	白色砂粒を含み、黒色斑文を含む。	灰色 (N5)	灰色 (N5)	外面：平行叩き目。内面：当て具痕。静岡産。	
183	SI022	須恵器 甕	(37.6)	---	[10.2]	---	白色砂粒多く、黒色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2)	灰褐色 (5YR5/2)	外面：平行叩き目。千葉市城産。	
184	SI022	須恵器 甕	---	---	---	---	白色砂粒を含み、白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰色 (N5)	灰色 (N4)	外面：平行叩き目。底部に近い資料。千葉市城産。	
185	SI022	土師器 甕	(20.0)	(8.8)	(32.7)	---	小礫を非常に多く含み、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2)	灰赤色 (2.5YR5/2)	被熱痕跡は顕著ではない。最大径：22.8cm。同一個体の図上復原資料。	
186	SI022	土師器 甕	(21.6)	---	[8.6]	---	白色砂粒多く、黒・赤色スコリアを含む。	灰赤色 (2.5YR5/2)	灰赤色 (2.5YR5/2)	被熱痕跡は顕著ではない。	
187	SI022	土師器 甕	(20.3)	---	[10.8]	---	白色砂粒多く、黒色スコリアを含む。	灰赤色 (2.5YR5/2)	灰赤色 (2.5YR5/2)	被熱痕跡は顕著ではない。	
188	SI022	土師器 台付甕	---	10.7	[5.7]	---	砂粒を少し含み、雲母を含む。	褐灰色 (5YR5/1)	褐灰色 (5YR5/1)	被熱痕跡が顕著で、一部器面が荒れる。	
189	SI023	須恵器 高台付杯	---	10.3	[2.1]	不明	砂粒少なく、白色砂粒・黒色斑文を含む。	灰色 (5Y6/1)	黄灰色 (2.5Y6/1)	湖西産。	
190	SI023	須恵器 杯	(13.8)	(9.6)	3.8	不明	白色砂粒を含み、白色針状物質を含む。	褐灰色 (10YR5/1)	褐灰色 (10YR5/1)	底部外面：線刻が部分的に残る。底面全体を擦って平滑にする。湖西産。	
191	SI023	土師器 杯	12.2	---	3.6	---	砂粒やや多く、黒色粒を含む。	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	上面観が歪。 最大径：12.5cm 最小径：11.8cm	
192	SI023	土師器 杯	(14.0)	---	[3.2]	---	砂粒少なく、雲母を含む。	にぶい褐色 (2.5YR6/4)	黄褐色 (2.5Y5/4)		
193	SI023	土師器 杯	13.9	---	4.3	---	砂粒多く、赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (5YR6/3)	にぶい褐色 (2.5YR6/4)	内面：ナデで平滑。	
194	SI023	土師器 杯	16.0	---	[4.1]	---	砂粒少なく、雲母、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (5YR6/3)	にぶい褐色 (2.5YR6/4)	内面：丁寧なミガキ調整で、器面にやや光沢あり。	
195	SI023	須恵器 蓋	14.7	---	3.1	---	白色系砂粒・長石粒非常に多く、白色針状物質を含む。	灰褐色 (7.5YR5/1)	赤灰色 (10R5/1)	つまみの取り付け位置が中心からずれる。	
196	SI023	土師器 鉢	(17.8)	---	8.6	---	細かい砂粒非常に多く、雲母・白色針状物質を含む。	灰褐色 (7.5YR5/2)	にぶい褐色 (5YR6/3)	非クロ成形。全体に被熱し、とくに外面は荒れる。	

挿図 番号	遺構 番号	種 別 種	計測値 (cm) ()は推定値、[]は現存値			底部切り離し		胎 土	外 面 色 調		備 考
			口 径	底 径	器 高	底面調整	下端調整		内 面 色 調		
197	SI023	土師器 高杯	---	---	---	---	---	砂粒多く、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (7.5YR6/3) にぶい橙色 (5YR6/3)	脚部の一部が遺存。 脚部径は推定で7cm。	
198	SI023	土師器 甕	---	7.3	[29.3]	---	---	砂粒多く、赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2) にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)	被熱痕跡が顕著で、体部下半にはカマド構築材がこびりつく。	
199	SI023	土師器 甕	22.8	---	[15.7]	---	---	細かい砂粒多く、赤色スコリアを多く含む。	灰褐色 (5YR5/2) 灰褐色 (5YR5/2)	内面：部分的に煤ける。	
200	SI023	土師器 甕	(22.8)	---	[13.6]	---	---	砂粒多く、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2) 褐灰色 (5YR5/1)	内面：口縁部周辺に炭化物が皮膜状に付着。	
201	SI023	土師器 甕	(23.2)	---	[6.4]	---	---	白色砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2) にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)		
202	SI023	土師器 甕	(23.0)	---	[5.7]	---	---	砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰赤色 (2.5YR5/2) 灰赤色 (2.5YR5/2)		
203	SI023	土師器 甕	20.8	---	[5.5]	---	---	砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR6/2) 灰褐色 (5YR6/2)	外面：被熱で器面が荒れ、痘痕状に剥落。	
204	SI023	土師器 甕	---	7.4	[10.3]	---	---	砂粒多く、雲母を含む。	赤灰色 (7.5R5/1) 赤灰色 (10R5/1)	外面：被熱で黒く煤け、器面が荒れる。	
205	SI023	土師器 甕	(22.4)	---	[24.4]	---	---	白色系砂粒多く、雲母・白色針状物質を含む。	褐灰色 (5YR5/1) 褐灰色 (7.5YR5/1)	下半部は被熱で器面がやや荒れる。	
206	SI023	土師器 甕	(22.8)	---	[18.5]	---	---	砂粒非常に多く、小礫も含み、器面がざらついている。	灰褐色 (7.5YR6/2) 褐灰色 (7.5YR5/1)	被熱で器面がやや荒れ、一部赤化。	
207	SI023	須恵器 甕	---	---	---	---	---	砂粒多く、赤色スコリアを含む。	褐灰色 (10YR5/1) 赤灰色 (10R5/1)	外面：叩き締め後、等間隔のカキ目を施す。 内面：同心円状当て具痕。	
208	SI023	須恵器 甕	---	---	---	---	---	白色砂粒多く、雲母・長石・黒色スコリアを含む。	黄灰色 (2.5Y6/1) 褐灰色 (10YR5/1)	外面：同心円文叩き目。 内面：ナデ。	
209	SI023	須恵器 甕	---	---	---	---	---	白色砂粒多く、雲母・長石を含む。	黄灰色 (2.5Y6/1) 褐灰色 (10YR5/1)	外面：同心円文叩き目。 内面：ナデ。	
210	SI026	土師器 杯	(12.8)	(8.4)	4.2	回転系切り	回転系切り	細かい砂粒多く、雲母、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (7.5YR7/3) 灰褐色 (5YR6/2)		
211	SI026	土師器 杯	11.7	6.7	4.0	不明	不明	砂粒多く、赤色スコリアを含む。	明褐灰色 (7.5YR7/2) 灰褐色 (7.5YR6/2)		
212	SI026	土師器 杯	12.0	6.6	4.1	不明	不明	白色系砂粒多く、雲母・赤色スコリアを含む。	灰赤色 (2.5YR5/1) 灰色 (N5)		
213	SI026	土師器 杯	12.5	6.2	4.0	回転系切り	回転系切り	白色系砂粒多く、雲母、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (5YR6/3) 灰褐色 (7.5YR6/2)		
214	SI026	土師器 杯	(13.0)	7.1	3.9	回転系切り	回転系切り	白色砂粒多く、雲母・赤色スコリアを含む。	灰色 (N5) 灰色 (N4)		
215	SI026	土師器 杯	11.9	6.6	3.5	回転系切り	回転系切り	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR6/2) 灰褐色 (7.5YR6/2)	墨書：底部外面 記号：墨痕：やや不鮮明 墨書土器実測No29	
216	SI026	土師器 杯	13.4	7.2	4.2	回転系切り	回転系切り	白色系砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (5YR6/3) にぶい橙色 (5YR6/3)	墨書：体部外面 正位の「忠」墨痕：不鮮明 墨書土器実測No11	
217	SI026	土師器 杯	14.0	7.0	3.8	回転系切り	回転系切り	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR6/2) 灰褐色 (5YR6/2)	内面：粗いミガキ調整。	
218	SI026	土師器 杯	(13.3)	6.6	4.2	回転系切り	回転系切り	白色系砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰赤色 (10R5/2) にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)	底部内面：丁寧なミガキ調整。 体部内面：ヘラナデ 口縁端部に帯状に炭素吸着。	
219	SI026	土師器 杯	(12.2)	(6.4)	4.2	回転系切り	回転系切り	砂粒少なく、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (5YR6/3) 灰褐色 (5YR6/2)	胎土は上総型杯に似てやや粉っぽい。	
220	SI026	土師器 杯	(12.0)	6.6	4.1	回転系切り	回転系切り	砂粒少なく、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (7.5YR6/3) にぶい橙色 (5YR6/3)	胎土は肌理が細かく、やや粉っぽい。	
221	SI026	土師器 杯	(13.2)	(7.8)	4.2	回転系切り	回転系切り	白色系砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい赤褐色 (5YR5/3) にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)	胎土は肌理が細かく、やや粉っぽい。	
222	SI026	土師器 杯	12.9	7.2	3.5	回転系切り	回転系切り	白色系砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	褐灰色 (5YR5/1) 灰褐色 (5YR5/2)		
223	SI026	土師器 杯	(13.3)	(7.1)	3.2	不明	不明	砂粒多く、雲母・白色針状物質をふくむ。	灰褐色 (5YR6/2) 灰褐色 (7.5YR6/2)	墨書：底部外面 記号：墨痕：比較的鮮明 墨書土器No28	
224	SI026	土師器 杯	12.9	6.6	3.5	回転系切り	回転系切り	白色砂粒多く、雲母・白色針状物質を含む。	灰褐色 (5YR6/2) 灰褐色 (5YR5/2)		
225	SI026	土師器 杯	(13.8)	6.9	3.5	回転系切り	回転系切り	白色砂粒多く、雲母・白色針状物質を含む。	灰褐色 (5YR6/2) 灰色 (N5)		
226	SI026	土師器 杯	(13.4)	(7.2)	4.3	不明	不明	白色砂粒多く、雲母・白色針状物質を含む。	褐灰色 (7.5YR5/1) 赤灰色 (2.5YR5/1)		
227	SI026	土師器 杯	(11.9)	(7.5)	3.8	不明	不明	白色系砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (7.5YR6/3) 灰褐色 (5YR6/2)	墨書：体部外面 記号：墨痕：かなり不鮮明 墨書土器No23	
228	SI026	土師器 杯	12.4	5.0	4.9	不明	不明	砂粒多く、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR6/2) 灰赤色 (2.5YR5/2)	口縁端部に1か所、油煙墨の付着あり。	
229	SI026	土師器 皿	13.4	6.4	2.3	回転系切り	回転系切り	砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2) 灰褐色 (5YR5/2)	内面：粗いミガキ調整。	

挿図 番号	遺構 番号	種 別 種	計測値 (cm) ()は推定値、[]は現存値			底部切り離し		胎 土	外 面 色 調		備 考
			口 径	底 径	器 高	底面調整	下端調整		内 面 色 調		
230	SI026	土師器	(13.2)	7.2	2.4	回転糸切り		砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (2.5YR6/3)		
		皿	60%			無し	無し		にぶい橙色 (5YR6/3)		
231	SI026	土師器	(13.7)	(8.1)	2.2	回転糸切り		砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (2.5YR6/3)		
		皿	40%			無し	無し		灰褐色 (5YR6/2)		
232	SI026	土師器	(12.6)	(8.7)	2.0	回転糸切り		砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (5YR6/3)	墨書：底部外面「忠」の残画 墨痕：比較的鮮明 墨書土器実測No.12	
		皿	40%			無し	無し		灰褐色 (5YR6/2)		
233	SI026	土師器	(12.3)	7.6	2.3	回転糸切り		砂粒少なく、白色針状物質、黒・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR6/2)	内面：粗いミガキ調整。	
		皿	45%			回転ヘラ	無し		灰褐色 (5YR5/2)		
234	SI026	土師器	(12.1)	(5.6)	1.7	---		白色砂粒を含み、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (5YR6/3)		
		皿	20%			回転ヘラ	回転ヘラ		にぶい橙色 (5YR6/3)		
235	SI026	緑釉陶器	---	---	[3.3]	---		砂粒をほとんど含まない。	灰オリーブ色 (7.5Y5/3)	内面：陰刻花文。	
		碗	---			---	---		灰オリーブ色 (7.5Y5/3)		
236	SI026	土師器	(25.4)	---	[8.7]	---		白色砂粒を少し含み、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	褐灰色 (5YR5/1)	被熱痕跡は顕著ではない。	
		甕	口縁部 25%			---	---		灰褐色 (5YR5/2)		
237	SI026	須恵器	(21.8)	(12.4)	15.3	不明		白色砂粒を非常に多く含み、白色針状物質を含む。	褐灰色 (5YR5/1)	外面：平行叩き目。 底面：周縁が輪状に盛り上がる。 千葉市域産。	
		鉢	35%			無し	手持ちヘラ		灰色 (N5)		
238	SI027	土師器	(13.9)	6.7	4.9	回転糸切り		砂粒多く、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR6/2)	底面：えぐるような回転ヘラケズリで、糸切り痕跡を消す。	
		杯	40%			回転ヘラ	回転ヘラ		灰褐色 (5YR5/2)		
239	SI027	土師器	(14.0)	7.0	4.5	---		砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	褐灰色 (10YR5/1)	内面：比較的丁寧なミガキ調整で、炭素吸着。	
		杯	45%			手持ちヘラ	無し		灰色 (N4)		
240	SI027	土師器	(14.9)	---	[5.3]	---		砂粒少なく、雲母・白色針状物質を含む。	灰褐色 (5YR5/2)	大きさ・形態からクロロ成形の可能性あり。 被熱により部分的に赤化。	
		甕	口縁部 40%			---	---		灰赤色 (2.5YR5/2)		
241	SI027	土師器	(13.9)	---	[4.2]	---		砂粒少なく、雲母・白色針状物質を含む。	灰褐色 (5YR5/2)	大きさ・形態からクロロ成形の可能性あり。 被熱痕跡が顕著で部分的に赤化し、内面に炭化物も付着。	
		甕	口縁部 30%			---	---		灰赤色 (10R5/2)		
242	SI027	須恵器	---	---	---	---		砂粒少なく、黒色斑文を含む。	褐灰色 (5YR6/1)	ほとんど曲率がない破片資料。 外面：平行叩き目。 内面：わずかに当て具痕が残る。	
		甕	---			---	---		褐灰色 (10YR6/1)		
243	SI030	土師器	---	4.8	[9.9]	---		細かい砂粒多く、雲母・赤色スコリアを含む。	褐灰色 (7.5YR5/1)	全体に被熱で器面が荒れる。	
		甕	体部下半 20%			---	---		褐灰色 (5YR5/1)		
244	SK007	土師器	---	(10.4)	[1.0]	回転糸切り		白色砂粒多く、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR5/2)	クロロ成形。 硬質で、被熱痕跡はない。	
		甕	底部 30%			---	---		灰褐色 (5YR5/2)		
245	SK013	須恵器	(12.1)	6.4	3.6	回転糸切り		砂粒少なく、白色針状物質、黒・赤色スコリアを含む。	褐灰色 (7.5YR5/1)	口縁部：降灰釉付着。 南比企産。	
		杯	30%			無し	無し		灰色 (N5)		
246	SK013	土師器	(11.0)	(7.8)	4.3	不明		砂粒多く、赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2)	内面：赤色塗彩。	
		杯	40%			手持ちヘラ	無し		灰赤色 (2.5YR5/2)		
247	SK013	土師器	12.1	7.2	4.1	不明		白色系砂粒多く、雲母・赤色スコリアを含む。	灰赤色 (2.5YR5/2)		
		杯	60%			手持ちヘラ	手持ちヘラ		褐灰色 (5YR5/1)		
248	SK013	土師器	(11.9)	(8.0)	4.0	回転糸切り		砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR6/2)	墨書：体部外面 記号 墨痕：かなり不鮮明 墨書土器No.24 墨痕に酸化鉄の付着物が重なる。	
		杯	30%			回転ヘラ	回転ヘラ		灰褐色 (7.5YR5/1)		
249	SK013	土師器	11.4	6.3	3.9	回転糸切り		砂粒多く、雲母、白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (5YR6/3)		
		杯	85%			手持ちヘラ	手持ちヘラ		にぶい赤褐色 (5YR5/3)		
250	SK013	土師器	10.9	6.6	3.6	回転糸切り		砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色 (5YR6/3)	墨書：体部外面 横位の「宗」 墨痕：やや不鮮明 上面観はかなり歪。墨書土器No.9	
		杯	80%			回転ヘラ	回転ヘラ		にぶい橙色 (5YR6/3)		
251	SK013	土師器	12.4	7.2	3.9	回転糸切り		砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (5YR5/2)		
		杯	55%			回転ヘラ	回転ヘラ		灰褐色 (7.5YR5/2)		
252	SK013	須恵器	---	---	---	---		細かい砂粒多く、雲母・白色針状物質を含む。	赤灰色 (7.5R5/1)	外面：平行叩き目。 千葉市域産。	
		甕	---			---	---		褐灰色 (7.5YR5/1)		
253	SK013	須恵器	---	8.8	[7.1]	---		白色系砂粒を少し含む。	赤灰色 (10R5/1)	武蔵産。	
		瓶	体部下半 15%			---	---		褐灰色 (10YR5/1)		
254	第1トレンチ	土師器	---	(12.6)	[1.6]	木葉痕		小礫を非常に多く含み、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR6/2)	常総型甕。 底部外面：木葉圧痕。	
		甕	底部 45%			---	---		褐灰色 (10YR5/1)		

別表2 墨書土器観察表

挿図 番号	遺構 番号	種 別 器 種	計測値 (cm) ()は推定値、[]は現存値			底部切り離し		胎 土	外 面 色 調		備 考
			口 径	底 径	器 高	底面調整	下端調整		内 面 色 調		
1	SI021	須恵器	(12.8)	(6.2)	4.1	回転糸切り		白色系砂粒多い。	黄灰色 (2.5Y6/1)	墨書：体部外面 正位の部首「ふしづくり」 墨痕：かなり淡い 土器No.85	
		杯	75%			無し	無し		黄灰色 (2.5Y6/1)		
2	SI021	土師器	(13.7)	---	[2.7]	---		砂粒を少し含み、白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰褐色 (7.5YR6/2)	墨書：体部外面 正位の部首「ふしづくり」の残画 墨痕：鮮明	
		杯	5%			---	---		にぶい褐色 (7.5YR6/3)		
3	SI022	土師器	11.6	6.9	4.4	不明		砂粒を少し含み、雲母、黒・赤色スコリアを含む。	灰黄褐色 (10YR6/2)	墨書：体部外面 正位の部首「ふしづくり」 墨痕：比較的鮮明 土器No.136	
		杯	90%			手持ちヘラ	無し		灰褐色 (7.5YR6/2)		
4	SI022	土師器	(11.7)	(7.0)	3.6	回転糸切り		白色砂粒を少し含み、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色 (2.5YR6/4)	墨書：体部外面 正位の部首「ふしづくり」の残画 墨痕：鮮明 土器No.141	
		杯	30%			手持ちヘラ	無し		にぶい褐色 (2.5YR6/4)		
5	SI022	土師器	12.3	6.6	4.3	不明		砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	褐灰色 (10YR6/1)	墨書：体部外面 正位の部首「ふしづくり」 墨痕：鮮明 土器No.138	
		杯	80%			手持ちヘラ	無し		灰褐色 (7.5YR6/2)		

挿図番号	遺構番号	種別 器種	計測値(cm) ()は推定値, []は現存値			底部切り離し		胎土	外面色調		備考
			口径	底径	器高	底面調整	下端調整		内面色調		
6	SI022	土師器	(15.0)	---	[4.4]	---		白色系砂粒を含み、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(7.5YR6/3)	墨書：体部外面 横位の部首「ふしづくり」の残画 墨痕：やや不鮮明 内面：丁寧なミガキ調整後に黒色処理	
		杯	10%			---	---		灰色(N4)		
7	SI022	土師器	---	(8.2)	[1.5]	回転糸切り		砂粒を含み、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(7.5YR6/3)	墨書：底部外面 部首「ふしづくり」 墨痕：鮮明	
		皿	底部60%			手持ちヘラ	無し		にぶい褐色(7.5YR7/3)		
8	SI022	土師器	14.4	8.0	3.1	---		砂粒少なく、雲母、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(5YR6/3)	墨書：底部外面 部首「ふしづくり」 墨痕：やや不鮮明 土器No179 内面：やや粗いミガキ調整	
		高台付杯	85%			---	---		にぶい褐色(5YR6/3)		
9	SK013	土師器	10.9	6.6	3.6	回転糸切り		砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(5YR6/3)	墨書：体部外面 横位の「宗」 墨痕：やや不鮮明 上面観はかなり歪である。土器No250	
		杯	80%			回転ヘラ	回転ヘラ		にぶい褐色(5YR6/3)		
10	SI022	土師器	---	(6.6)	[0.9]	回転糸切り		砂粒を含み、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(7.5YR6/3)	墨書：底部外面 「殺」 墨痕：比較的鮮明	
		杯	底部55%			回転ヘラ	回転ヘラ		にぶい褐色(7.5YR6/3)		
11	SI026	土師器	13.4	7.2	4.2	回転糸切り		白色系砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(5YR6/3)	墨書：体部外面 正位の「志」 墨痕：不鮮明 土器No216	
		杯	100%			回転ヘラ	手持ちヘラ		にぶい褐色(5YR6/3)		
12	SI026	土師器	(12.6)	(8.7)	2.0	回転糸切り		砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(5YR6/3)	墨書：底部外面 「志」の残画 墨痕：比較的鮮明 土器No232	
		皿	40%			無し	無し		灰褐色(5YR6/2)		
13	SI022	土師器	---	(7.0)	[2.0]	不明		細かい砂粒を少し含み、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(5YR6/3)	墨書：底部外面 部首を「ツ」とする「營」などの残画 墨痕：比較的鮮明	
		杯	底部20%			手持ちヘラ	無し		にぶい褐色(5YR6/3)		
14	SI011	土師器	11.4	7.8	3.7	不明		砂粒少なく、黒・赤色スコリアを含む。	灰褐色(5YR5/2)	墨書：底部外面 「力」 墨痕：淡い 土器No50	
		杯	90%			手持ちヘラ	手持ちヘラ		にぶい赤褐色(5YR5/3)		
15	SI022	土師器	---	---	[3.8]	---		砂粒を含み、雲母を含む。	にぶい褐色(7.5YR6/3)	墨書：体部外面 正位の「平」 墨痕：比較的鮮明	
		杯	---			---	---		灰褐色(5YR6/2)		
16	SI022	土師器	---	---	---	---		白色砂粒を含む。	褐色(7.5YR5/1)	墨書：体部外面 正位の「平」の残画か 墨痕：比較的鮮明	
		杯	---			---	---		赤灰色(10R5/1)		
17	SI022	土師器	---	---	---	---		砂粒多く、雲母、赤・黒色スコリアを含む。	にぶい褐色(7.5YR6/3)	墨書：体部外面 正位の「平」の残画 墨痕：比較的鮮明	
		杯	---			---	---		にぶい褐色(7.5YR6/3)		
18	SI022	土師器	(10.3)	---	[3.0]	---		白色砂粒を少し含み、雲母を含む。	にぶい褐色(5YR6/4)	墨書：体部外面 倒位の「平」 墨痕：鮮明	
		杯	---			---	---		にぶい褐色(7.5YR6/3)		
19	SI026	土師器	---	---	---	---		砂粒を少し含み、赤色スコリアを含む。	明褐色(7.5YR7/2)	墨書：体部外面 残画 墨痕：かなり不鮮明	
		杯	---			---	---		明褐色(7.5YR7/2)		
20	SI022	土師器	---	---	---	---		砂粒を少し含み、雲母・赤色スコリアを含む。	灰黄褐色(10YR6/2)	墨書：体部外面 倒位の「平」の残画か 墨痕：比較的鮮明	
		杯	---			---	---		にぶい褐色(7.5YR6/3)		
21	SI022	土師器	---	---	---	---		砂粒を少し含み、雲母を含む。	にぶい褐色(5YR6/3)	墨書：体部外面 横位の「平」の残画か 墨痕：やや淡い	
		杯	---			---	---		にぶい褐色(5YR5/1)		
22	SI022	土師器	---	---	---	---		砂粒を少し含む。	褐色(7.5YR5/1)	墨書：体部外面 正位の「平」の残画 墨痕：鮮明	
		杯	---			---	---		褐色(5YR5/1)		
23	SI026	土師器	(11.9)	(7.5)	3.8	---		白色系砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(7.5YR6/3)	墨書：体部外面 記号 墨痕：かなり不鮮明 土器No227	
		杯	15%			回転ヘラ	回転ヘラ		灰褐色(5YR6/2)		
24	SK013	土師器	(11.9)	(8.0)	4.0	回転糸切り		砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	灰褐色(5YR6/2)	墨書：体部外面 記号 墨痕：かなり不鮮明 土器No248 墨痕に酸化鉄の付着物が重なる。	
		杯	30%			回転ヘラ	回転ヘラ		褐色(7.5YR5/1)		
25	SI026	土師器	---	---	---	---		砂粒少なく、雲母・白色針状物質を含む。	灰褐色(7.5YR6/2)	墨書：体部外面 正位の残画 墨痕：やや不鮮明	
		杯	最大長3.8			---	---		灰褐色(7.5YR6/2)		
26	SI026	土師器	---	---	---	---		砂粒少なく、赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(7.5YR6/3)	墨書：体部外面 正位の残画 墨痕：やや不鮮明	
		杯	---			---	---		灰褐色(7.5YR6/2)		
27	SI026	土師器	---	(6.0)	[2.4]	---		砂粒多く、雲母・白色針状物質を含む。	灰褐色(5YR6/2)	墨書：体部外面 「十」を一部とする残画 墨痕：やや不鮮明	
		杯	---			---	---		灰黄褐色(10YR6/2)		
28	SI026	土師器	(13.3)	(7.1)	3.2	不明		砂粒多く、雲母・白色針状物質をふくむ。	灰褐色(5YR6/2)	墨書：底部外面 記号 墨痕：比較的鮮明 土器No.223	
		杯	40%			回転ヘラ	回転ヘラ		灰褐色(7.5YR6/2)		
29	SI026	土師器	11.9	6.6	3.5	回転糸切り		砂粒少なく、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰褐色(7.5YR6/2)	墨書：体部外面 記号 墨痕：やや不鮮明 土器No215	
		杯	95%			回転ヘラ	回転ヘラ		灰褐色(7.5YR6/2)		
30	SI026	土師器	---	6.1	---	---		砂粒多く、赤色スコリアを含む。	にぶい黄褐色(10YR7/2)	墨書：体部外面 残画 墨痕：かなり不鮮明	
		杯	底部70%			手持ちヘラ	無し		灰白色(10YR7/1)		
31	SI022	土師器	(12.2)	6.0	3.9	回転ヘラ切り		砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい赤褐色(5YR5/3)	墨書：体部外面 正位の残画 墨痕：やや淡い 土器No.147	
		杯	60%			回転ヘラ	回転ヘラ		にぶい赤褐色(5YR5/3)		
32	SI002	土師器	(14.2)	(6.2)	4.6	---		砂粒多く、雲母を含む。	にぶい黄褐色(10YR7/3)	墨書：体部外面 正位の「丁」の残画か 墨痕：やや淡い 内面：粗いミガキ調整後に黒色処理	
		杯	10%			---	---		灰色(N4)		
33	SI022	土師器	---	(7.0)	---	回転糸切り		砂粒少なく、雲母を含む。	にぶい褐色(5YR6/3)	墨書：底部外面 残画 墨痕：比較的鮮明	
		皿	---			手持ちヘラ	無し		にぶい赤褐色(5YR5/3)		
34	SI022	土師器	(12.4)	---	---	---		砂粒を少し含み、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(7.5YR7/4)	墨書：体部外面 「十」を一部とする正位の残画 墨痕：やや不鮮明	
		杯	---			---	---		にぶい褐色(7.5YR6/3)		
35	SI003	土師器	(14.0)	---	[4.0]	---		砂粒多く、雲母・白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(7.5YR6/3)	墨書：体部外面 残画 墨痕：かなり淡い 土器No.20	
		杯	杯部25%			---	---		にぶい褐色(7.5YR6/3)		
36	SI003	土師器	(11.1)	6.0	3.7	不明		砂粒少なく、雲母・白色針状物質を含む。	にぶい赤褐色(5YR5/3)	墨書：体部外面 残画 墨痕：不鮮明 土器No.13	
		杯	40%			回転ヘラ	無し		にぶい赤褐色(5YR5/3)		
37	SI022	土師器	12.3	6.8	3.8	回転ヘラ切り		砂粒少なく、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(7.5YR5/3)	墨書：体部外面 残画 墨痕：やや不鮮明 土器No.139	
		杯	100%			回転ヘラ	回転ヘラ		にぶい褐色(7.5YR6/3)		

挿図 番号	遺構 番号	種別 器種	計測値(cm) ()は推定値, []は現存値			底部切り離し		胎土	外面色調		備考
			口径	底径	器高	底面調整	下端調整		内面色調		
38	SI027	土師器 杯	---	---	---	---	---	白色系砂粒を含み、黒・赤色スコリアを含む。	にぶい橙色(5YR6/3) 灰褐色(5YR6/2)	墨書：体部外面 正位の「干」を一部とする残画 墨痕：比較的鮮明	
39	SI024	土師器 杯	---	---	---	---	---	砂粒を少し含み、赤色スコリアを含む。	灰褐色(7.5YR6/2) 灰色(N4)	墨書：体部外面 残画 墨痕：比較的鮮明 内面：黒色処理	
40	SI021	土師器 杯	---	---	---	回転糸切り	---	砂粒を少し含み、赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(7.5YR6/3) にぶい褐色(7.5YR6/3)	墨書：底部外面 残画 墨痕：やや不鮮明	
41	SI002	土師器 杯	---	---	---	---	---	砂粒少なく、赤色スコリアを含む。	にぶい橙色(5YR6/4) にぶい褐色(5YR6/3)	墨書：体部外面 正位の「？」残画 墨痕：比較的鮮明	
42	SI008	土師器 杯	---	---	---	---	---	砂粒少なく、雲母・白色針状物質を含む。	灰褐色(5YR5/2) 灰褐色(7.5YR5/1)	墨書：体部外面 「口」を部分とする正位の残画 墨痕：やや不鮮明	
43	SI008	土師器 杯	(15.2)	---	[4.4]	---	---	白色系砂粒を多く含み、白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(7.5YR6/3) にぶい赤褐色(5YR5/3)	墨書：体部外面 残画 墨痕：非常に不鮮明	
44	SI026	土師器 杯	---	---	---	---	---	白色砂粒多く、赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(5YR6/3) にぶい褐色(2.5YR6/3)	墨書：体部外面 正位の残画 墨痕：かなり不鮮明	
45	SI026	土師器 杯	---	---	---	---	---	白色砂粒多く、赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(7.5YR6/3) 灰褐色(5YR6/2)	墨書：体部外面 正位の残画 墨痕：不鮮明	
46	SI026	土師器 杯	---	---	---	---	---	砂粒を少し含む。	灰褐色(7.5YR6/2) 明褐色(7.5YR7/1)	墨書：体部外面 残画 墨痕：やや不鮮明	
47	SI026	土師器 杯	---	---	---	---	---	砂粒多く、白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰褐色(5YR6/2) 明褐色(5YR7/2)	墨書：体部外面 正位の残画 墨痕：やや不鮮明	
48	SI003	土師器 杯	11.6	6.7	3.5	回転糸切り	---	砂粒少なく雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(5YR6/4) にぶい褐色(5YR6/4)	墨書：底部外面 残画 墨痕：かすけて不鮮明 土器No16	
49	SI022	土師器 杯	---	---	---	---	---	白色砂粒を含み、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(5YR6/3) にぶい褐色(5YR6/3)	墨書：体部外面 「十」を一部とする正位の残画 墨痕：やや不鮮明	
50	SI022	土師器 杯	---	---	---	---	---	砂粒を少し含み、雲母、白色針状物質を含む。	にぶい褐色(2.5YR6/4) にぶい褐色(5YR6/3)	墨書：体部外面 「十」を一部とする正位の残画 墨痕：やや不鮮明 内面：粗いミガキ調整	
51	SI022	土師器 杯	---	---	---	---	---	白色系砂粒を多く含み、赤色スコリアを含む。	灰褐色(7.5YR6/2) 灰褐色(7.5YR5/2)	墨書：底部外面 残画 墨痕：やや不鮮明	
52	SI022	土師器 杯	---	---	---	---	---	白色系砂粒を含み、赤色スコリアを含む。	灰褐色(7.5YR6/2) にぶい褐色(7.5YR6/3)	墨書：体部外面 正位の残画 墨痕：比較的鮮明	
53	SI022	土師器 杯	---	---	---	---	---	白色系砂粒を少し含み、赤色スコリアを含む。	灰褐色(7.5YR5/2) 灰褐色(7.5YR6/2)	墨書：体部外面 正位の「平」の残画か 墨痕：鮮明	
54	SI027	土師器 杯	---	---	---	---	---	砂粒少ない。	褐色(10YR5/1) 灰赤色(2.5YR6/2)	墨書：体部外面 人面の髭もしくは髪の部分か 墨痕：鮮明	
55	SI026	土師器 皿	---	(8.6)	[1.3]	回転糸切り	---	白色砂粒を少し含み、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(7.5YR6/3) 灰褐色(5YR6/2)	墨書：内面 文字か戯画か不明 墨痕：やや不鮮明 底面周囲は高台気味につくる。土器No 25	
(56)	SI008	土師器 杯	---	---	---	---	---	砂粒非常に多く、白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(5YR6/3) にぶい褐色(5YR6/3)	墨書：体部外面 残画 墨痕：比較的鮮明	
(57)	SI008	土師器 杯	---	---	---	---	---	砂粒多く、白色針状物質を含む。	にぶい褐色(5YR6/3) 灰褐色(5YR6/2)	墨書：体部外面 残画 墨痕：やや不鮮明	
(58)	SI021	土師器 杯	---	---	---	---	---	白色系砂粒を多く不kじゅむ。	にぶい褐色(5YR6/3) にぶい褐色(5YR6/3)	墨書：体部外面 残画 墨痕：かなり淡い	
(59)	SI021	土師器 杯	---	---	---	---	---	白色砂粒を少し含む。	灰黄褐色(10YR6/2) 灰色(N4)	墨書：体部外面 残画 墨痕：比較的鮮明 内面：入念なミガキ調整後に黒色処理	
(60)	SI022	土師器 杯	---	---	---	---	---	白色砂粒を少し含み、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(7.5YR6/3) 灰色(N4)	墨書：体部外面 残画 墨痕：不鮮明 内面：ミガキ調整後に黒色処理	
(61)	SI022	土師器 皿	(8.9)	---	---	---	---	白色系砂粒を含み、白色針状物質・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(5YR6/4) にぶい褐色(7.5YR6/3)	墨書：底部外面 残画 墨痕：比較的鮮明	
(62)	SI022	土師器 杯	---	---	---	---	---	砂粒を少し含み、白色針状物質・赤色スコリアを含む。	灰褐色(7.5YR5/2) にぶい褐色(5YR6/3)	墨書：体部外面 残画 墨痕：鮮明	
(63)	SI022	土師器 杯	---	---	---	---	---	砂粒を少し含み、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(7.5YR7/3) にぶい褐色(5YR6/3)	墨書：体部外面 残画 墨痕：やや不鮮明	
(64)	SI022	土師器 杯	---	---	---	---	---	白色砂粒を少し含み、雲母・赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(5YR6/3) にぶい赤褐色(5YR5/3)	墨書：体部外面 残画 墨痕：かなり不鮮明	
(65)	SI026	土師器 杯	---	---	---	---	---	砂粒を少し含み、赤色スコリアをやや多く含む。	にぶい黄褐色(10YR7/2) 明褐色(7.5YR7/1)	墨書：体部外面 残画 墨痕：やや不鮮明	
(66)	SI026	土師器 杯	---	---	---	---	---	砂粒を少し含み、赤色スコリアを含む。	にぶい褐色(7.5YR6/3) 灰褐色(7.5YR6/2)	墨書：体部外面 残画 墨痕：やや不鮮明	

写真図版



調査地周辺の航空写真 (1947年在日極東米軍撮影)



1 北半部調査前近景 (西南から)

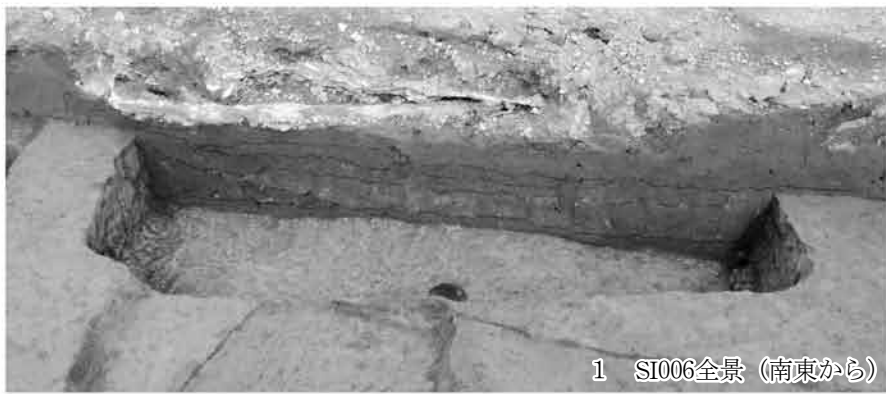


2 A調査区確認調査近景 (西から)



3 D調査区調査前近景 (北東から)





1 SI006全景 (南東から)



2 SI008・SI010全景 (南から)



3 SI004全景 (北から)



4 SI004カマド全景 (西から)



5 SI005全景 (北西から)



1 SI009全景 (南から)



2 SI010・SI008全景 (南から)



3 SI007全景 (東から)



4 SI007カマド全景 (南から)



5 SI007遺物出土状況 (北西から)



1 SI014全景 (東から)



2 SI015全景 (東から)



3 SI011・SI012全景 (西から)

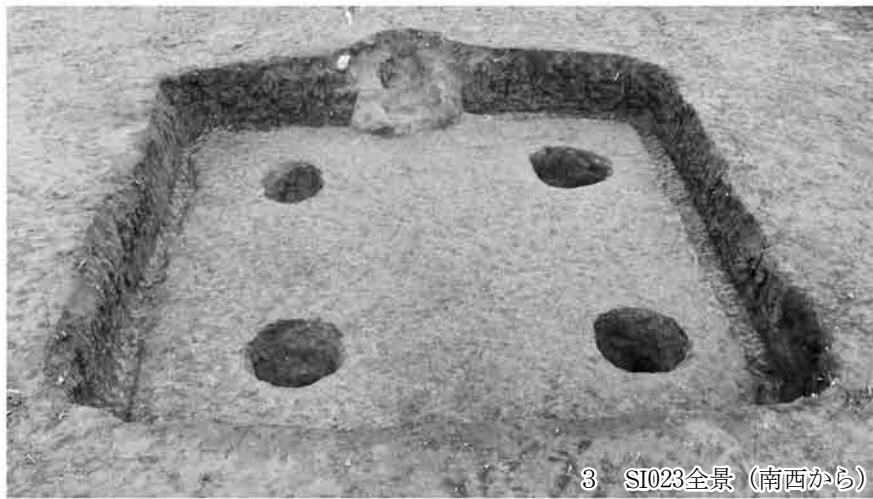
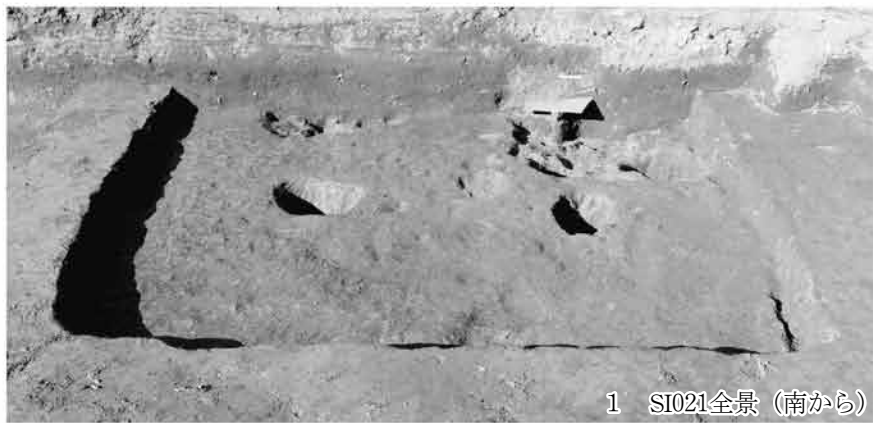


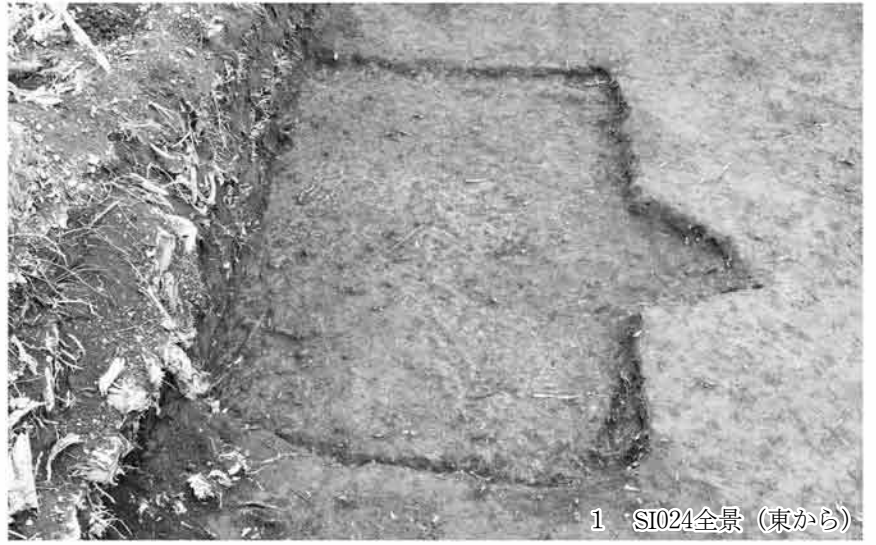
4 SI011カマド全景 (南から)

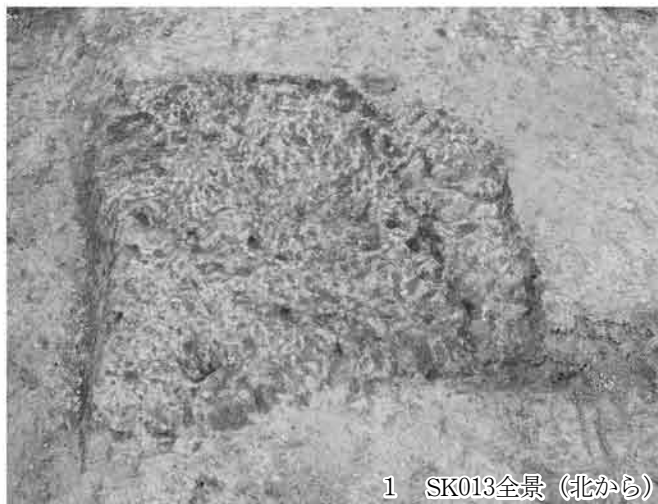


5 SI011遺物出土状況 (北西から)

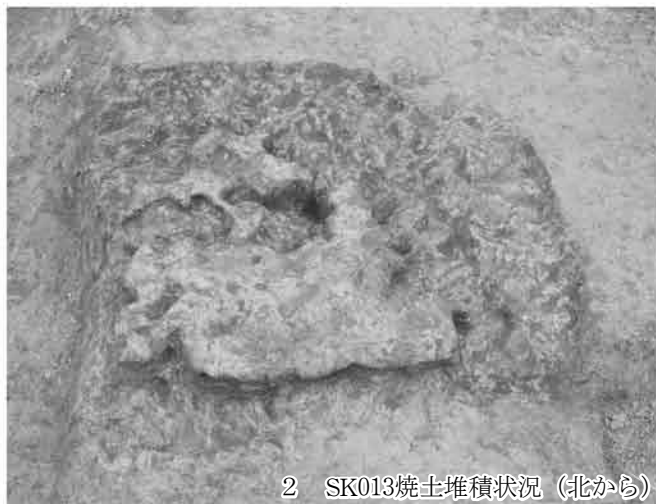








1 SK013全景 (北から)



2 SK013焼土堆積状況 (北から)



3 SK001全景 (北から)



4 SK003全景 (西から)



5 SK006全景 (南西から)



6 SK007全景 (南から)



7 SK010全景 (北から)



8 SK012全景 (北西から)



9 SK002全景 (南から)



10 SK005全景 (南西から)



11 SK009全景 (北東から)



10



29



49



12



33



52



13



53



14



48



55



16



51



43



17



50



19



35



36

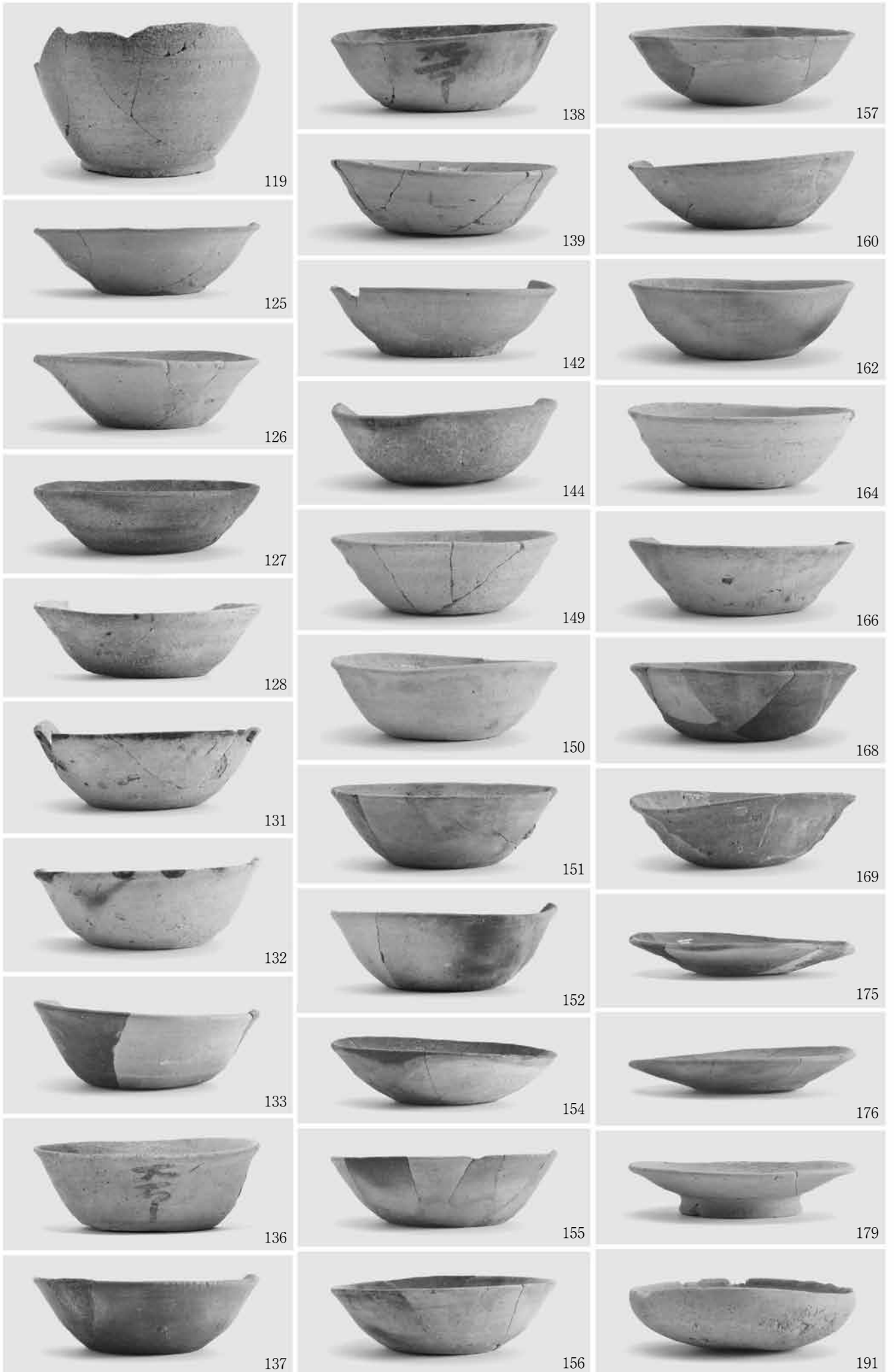


37

奈良・平安時代の土器（1）

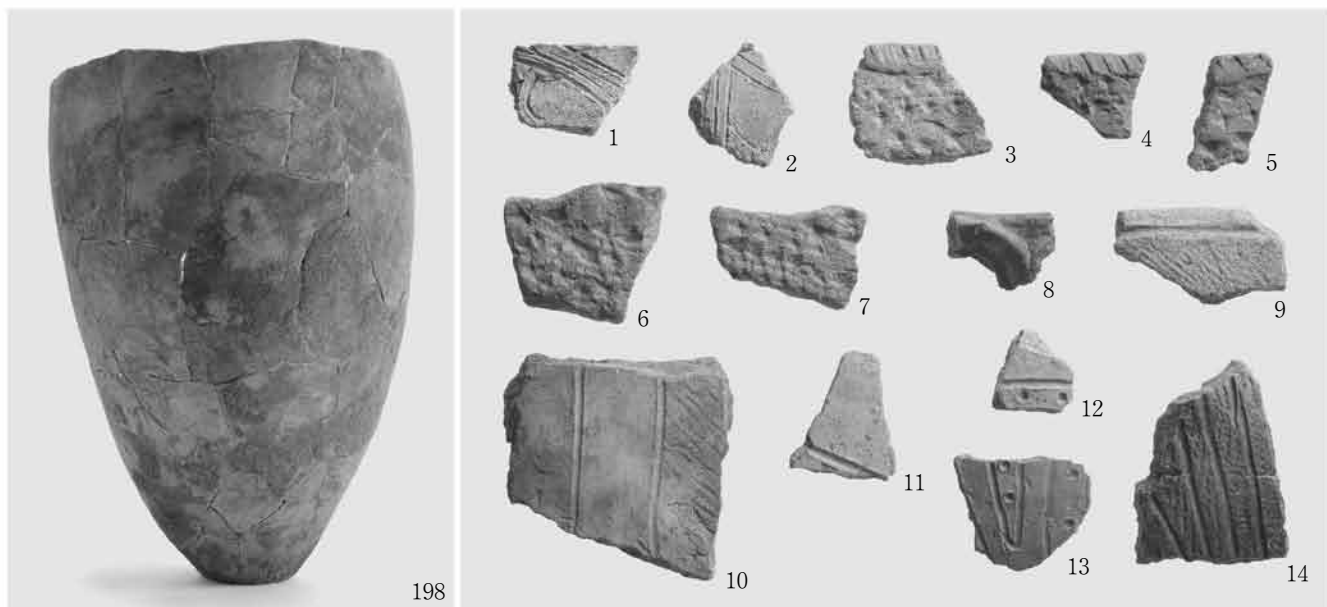


奈良・平安時代の土器（2）

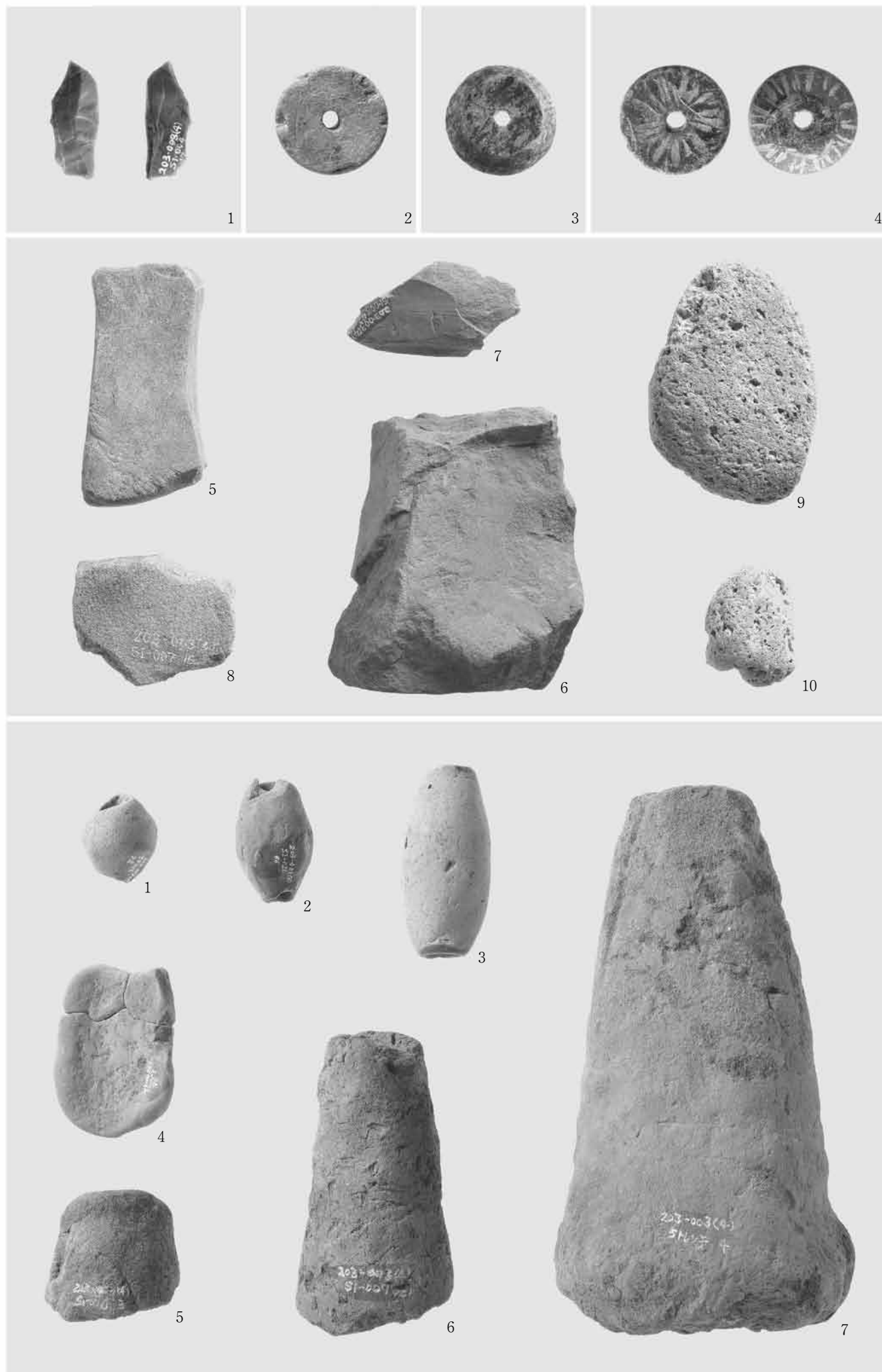


奈良・平安時代の土器（3）

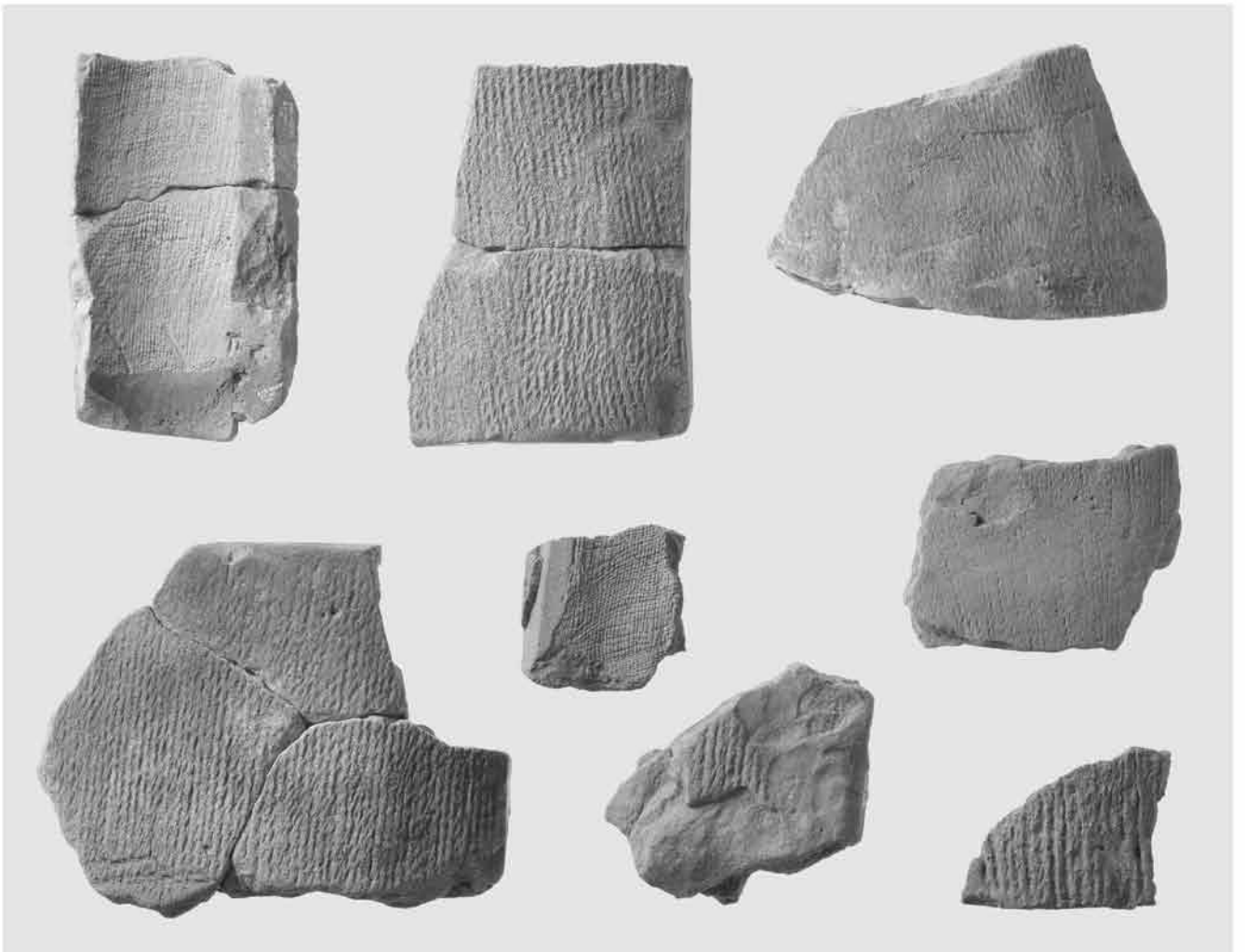
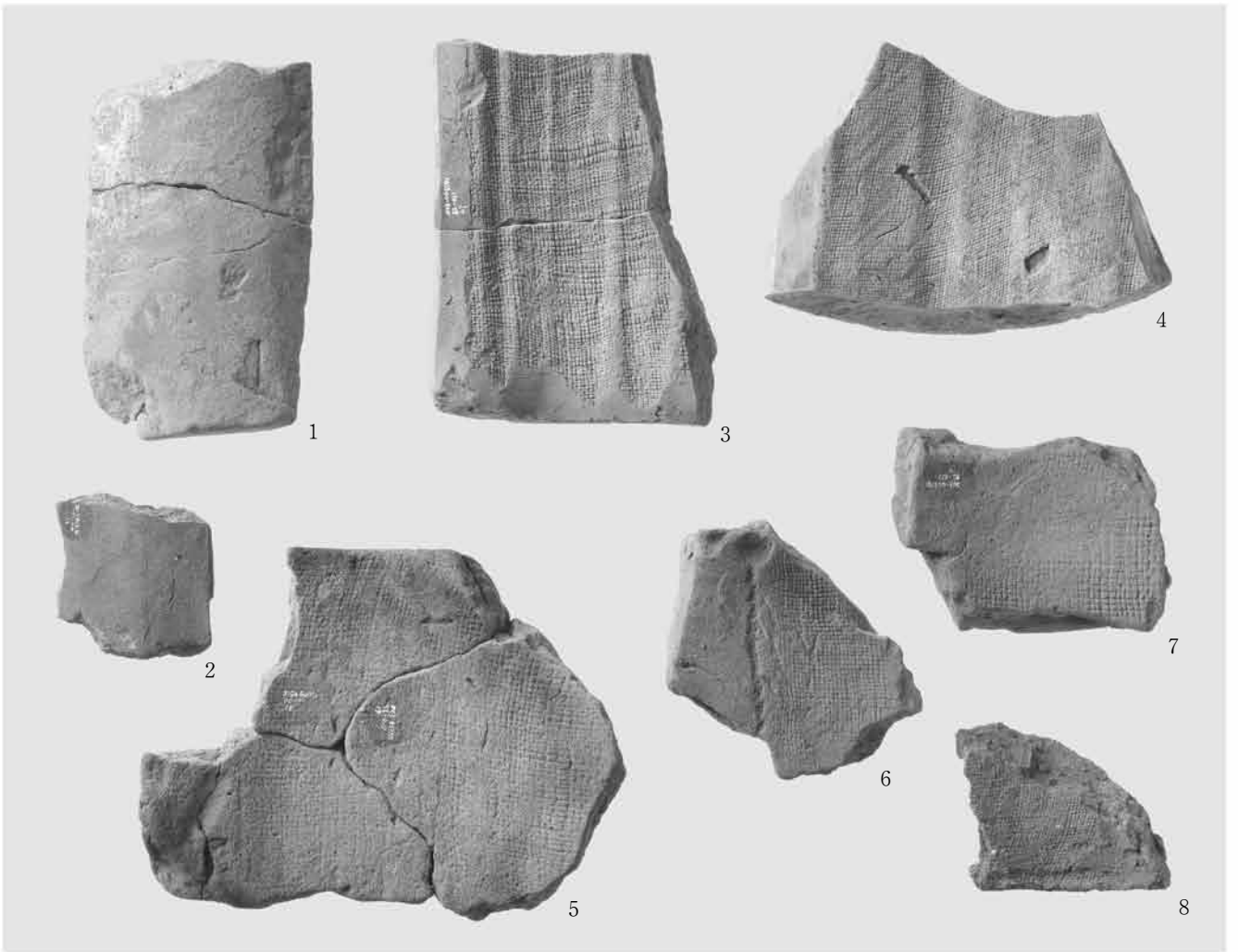


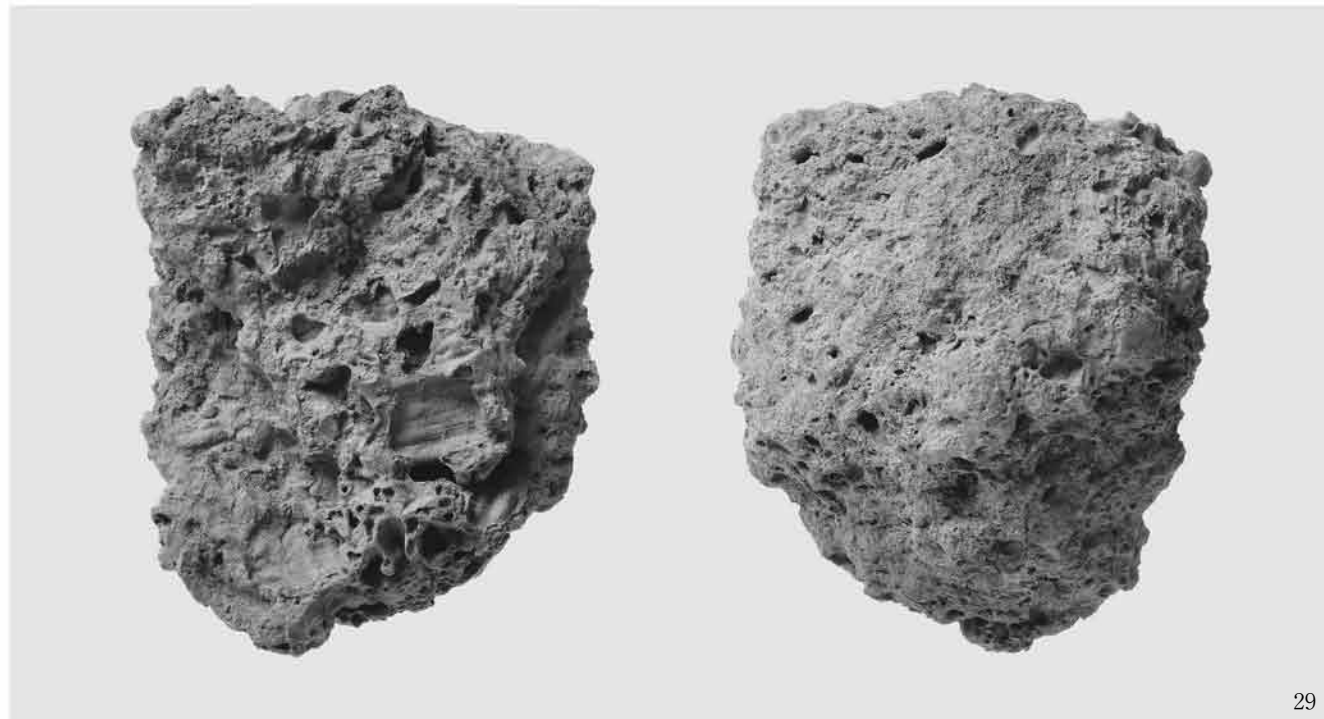
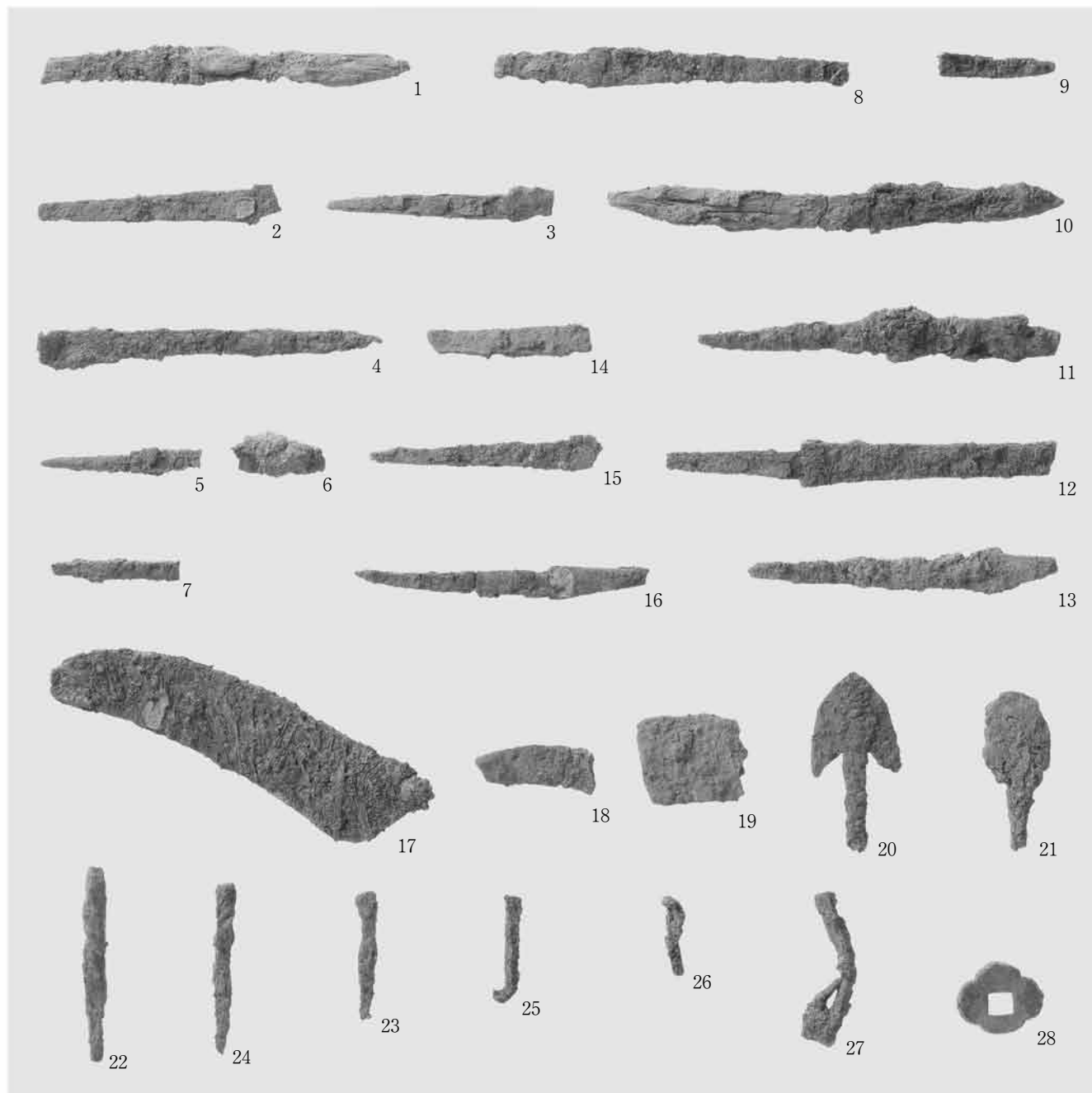


奈良・平安時代の土器 (5), 墨書土器, 線刻土器



石製品・土製品





報 告 書 抄 録

ふりがな	いちかわしこうのだいせいせきだい13ちてん（4）							
書名	市川市国府台遺跡第13地点（4）							
副書名	独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院埋蔵文化財調査報告書							
巻次	2							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第702集							
編著者名	今泉 潔							
編集機関	公益財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043-424-4848							
発行年月日	西暦2013年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
こくふだいせいせきだい 国府台遺跡第 13地点（4）	ちばけんいちかわしこくふだいきよふ 千葉県市川市国府台国分 1丁目7番地の1の一部	12203	003(4)	35度 44分 52秒	139度 54分 24秒	20110901 ～ 20120214	2,598 m ²	独立行政法人 国立国際医療 研究センター 国府台病院建 て替えに伴う 埋蔵文化財調 査
				(世界測地系)				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
国府台遺跡第 13地点（4）	集落跡	縄文時代 奈良・平安時代	陥穴 3基 竪穴住居 30軒 土坑 10基	縄文土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・墨書土器・土製品（土錘・支脚）・瓦類（丸瓦・平瓦）・石製品（彫刻刀型石器・紡輪・砥石・軽石）・金属製品（刀子・鎌・鉄鏃・棒状鉄製品・鉄滓）			SI022からは大量の土器群が出土し、土器集積遺構のような状況であった。また墨書土器は判読はできなかつたが、偏を「ふしづくり」とするものがまとまって出土した。	
要約	<p>国府台遺跡第13地点（4）は推定下総国庁域の北北東約400mの地点に位置する。調査地は前身施設等によってかなり攪乱を受けており、遺構の遺存状態は必ずしもよくなかつた。しかし遺構密度は高く、奈良・平安時代の国府集落の一部を構成する竪穴住居30軒を調査した。下総国府編年の2期～6期（7世紀末～10世紀前半）に相当し、国府そして郡衙所在地として、官衙成立期から国府縁辺地帯に集落が営まれ、それが一定期間、選地していたことがわかつた。</p> <p>出土土器では、8世紀代では盤類や蓋が比較的多く出土し、金属製品のなかでは刀子が一定量出土していることなどは、一般の営農集落とは様相がやや異なるといえるだろう。また墨書土器のなかに「猿」1文字を底面に墨書したものが1点あつた。人名の可能性もあるが、地名では「猿島郡」の1字ともとれるので、そういう意味では興味深い資料になる。</p> <p>なお縄文時代の陥穴については、前期を中心とした時期に一带がもっぱら狩猟場として使われていたことをうかがわせる。</p>							

千葉県教育振興財団調査報告第702集

市川市国府台遺跡第13地点(4)

—独立行政法人 国立国際医療研究センター国府台病院埋蔵文化財調査報告書2—

平成25年3月25日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 独立行政法人 国立国際医療研究センター
国 府 台 病 院
市川市国府台1丁目7番-1

公益財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809-2

印 刷 三 陽 メ デ ィ ア 株 式 会 社
千葉県中央区浜野町1397
